

KODANSHA

Illustration / VOFAN



余物語  
アマリモノガタリ

西尾維新  
NISIOISIN

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

余<sup>アマリモノ</sup>物<sup>ガタリ</sup>語

西尾維新

NISIOISIN



BOOK & BOX DESIGN VEIA

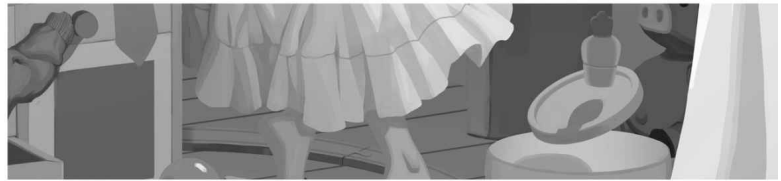
ILLUSTRATION VOFAN



第四話 よつぎバディ



第五話 よつぎシャドウ



BOOKBOX DESIGN V E I A

ILLUSTRATION VOFAN



第四話

よつぎバディ



ONO NOKIYOTS UGI

斧乃木余接<sup>おののきよつぎ</sup>とも、思えば長い付き合いになった。初めてあのキュートな死体人形と対面したときには、まさかこんな複雑な関係になるだなんて、まるで思いもしなかった……、『関係』と言ったものの、しかし、あの付喪神<sup>つくもがみ</sup>との関係性を、ぴったり表現する言葉というのは、少なくとも僕の語彙<sup>ごい</sup>の中には見当たらない。

友達同士？ 敵同士？ 監視する者とされる者？

加害者？ 被害者？ 第三者？ 理解者？

パートナー？ 同居人？ 利害関係者？

敵対的証人？ 弁護士？ 死刑執行人？

どれもあからさまなまでにその通りであるようでいて、事実、実際にそんな風に言挙げ<sup>ことあ</sup>することもあるけれど、しかしそれを口に出した瞬間に、てんでの外れな方向にスライドしていくようだった。

無表情で棒読みで。

何を考えているのかさっぱりわからない。

何を考え、何を感じ、何をしているのか、極めて不可解だ。



戦場ヶ原せんじょう ほんひたぎは恋人だ。

羽川翼はねかわ つばさは恩人で、八九寺真宵はちくじ まよいは友人だ。

神原駿河かんばるは後輩で、千石撫子せんごく なでこは旧知だ。

老倉育おいくら そだちは幼馴染で、食飼命日子はむかいめ にこは親友だ。

忍野忍おしの のぶは相棒で、忍野扇おつぎは分身だ。

阿良々木火憐あららぎ かれんは家族で、阿良々木月火つきひも家族だ。

じゃあ、斧乃木余接は何なんだろう？

僕と彼女の間には何がある？

とは言えそんな風に、これみよがしに思い悩むことこそ、はなはだ時間の無駄である……、時間稼ぎと言ってもいい。いくら僕がかつて、ほんの二週間ほど不老不死だったことがあると言っても、どうして僕と斧乃木余接との関係に、しつくりくる名前をつけなければならぬのか？ 名前なんて、識別して、呼びやすくするためにつけるものだ。

元吸血鬼と式神ゾンビなんて関係が、他のどこにも存在しない以上、僕と彼女との関係性は、『僕達』でいい。

長い付き合いが、長いお別れになるまでは。

「私は三歳になる自分の娘を虐待しているの。どうしても、可愛<sup>かわい</sup>いって思えなくて、ちゃんと育てられないの。お願いします、どうか助けてくれないかしら？ 阿良々木くん」

家住准教授<sup>いえすみ</sup>からそんな風に相談を持ちかけられたときの率直な感想は、何を隠そう、『助けて欲しいのはこっちだ』だった――少なくとも、『人はひとりで勝手に助かるだけですよ』なんて、気取った返答を戻すことはできなかった。

曲直瀬<sup>まなせ</sup>大学の校舎内。

スイスドイツ語の授業を担当する家住准教授の研究室にメールで呼び出されたときは、てっきり、先日受けた前期試験に関する手厳しい指導があるのだと思った――有体<sup>ありてい</sup>に言えば、大学生活初となるいいけな夏休みを前にして、追試のお知らせか何かを受け取るのだと思っていた。ほら、僕は出来のいい学生ではないので。

昔から学徒であることが苦手なのだ。

学習機能が備っていない。

恋人の戦場ヶ原ひたぎと今度こそ蟹<sup>かに</sup>を食べに行こうとしていた北海道旅行も、ことによるとあえなくご破算かもしれないと、それなりに覚悟を決めて、気を引き締めて、考えてみれば入学し

てから初めて、研究室という部屋におずおず足を踏み入れたわけだが……、うーん、高校における職員室に呼び出されたみたいなものだと思っていたけれど、どちらかというと、ここは進路指導室みたいだった。その辺の微妙なニュアンスについては、高校時代、呼び出されのプロフェッショナルだった僕は詳しい。

お呼ばれの阿良々木である。

逆に言えば、お呼ばれの阿良々木が詳しいのは、高校の職員室や進路指導室や存在しないはずの謎の教室や女子更衣室であつて、決して児童虐待ではないのだが……。

女子更衣室というのは冗談だ。念のため。

強いて言うならば、それが本当だったら、その相談は、文字通り、児童相談所に持ちかけるべき相談である――なぜ家住准教授は、いち学生である僕に、ゼロ学生と言つてもいい僕に、そんなプライバシーを告白する？　大学生になったところで、精神的にはまだまだ児童と言つてもいい阿良々木くんなのに……、恋人と赤ちゃんプレイに興じていることを、こちらからも告白したほうがいいのだろうか？

赤ちゃんプレイは冗談ではない。念のため。

「ああ」

と、混乱する僕を、氣遣うように家住准教授。

「表現が強烈だったわね。その辺りの日本語のニュアンスはどうも苦手で……、言い直すわ。私は三歳になる自分の娘を、どうしても可愛いと思えなくって、虐待し<sup>、</sup>そう<sup>、</sup>になってしまつたの」  
助けて、阿良々木くん。

そう言つた——そう言われても。

授業選択の際に参考にした手引き書によると、家住准教授のフルネームは家住羽衣<sup>はごろも</sup>、スイス生まれスイス育ちというプロフィールである——正直言つて、大学で新しく友達になつた食飼命日子に合わせる形で取つた授業だったので、無知蒙昧<sup>もつまい</sup>の輩である僕は受講して初めて知つたのだけれど、スイスでは四つの言語が同時に話されているそうだ。

四つ？ 本当？

もちろん、そのうちのひとつに日本語は計上されていない……、結婚をきっかけに日本に移り住んだという家住准教授にとって、日本語はあくまで外国語なのである。

まあ、言い直されたことでニュアンスは変わったが……、感想は変わらないな。  
感じも想いも揺るぎない。

助けて欲しいのはこつちだ。

いや、夏休みは彼女と遊びたいので単位をくださいという意味では、もちろんなく。

三歳の娘……？

娘がいることさえ初めて知つた。

正直、そんな風にはまったく見えない。いかにもインテリジェンスな、若き大学教師という印象しか持っていなかった――あえて言うなら、名前に『羽』が入っているから、きつといい人なんだろうと、ぼんやり、そんな適当なことを思っていたくらいで（いい加減にしろ、僕よ）、まして『お母さん』だとは思っていなかった。

お母さん……。

まあ、それは僕の偏見なのだろう。『お母さんらしさ』なんて、まして母性なんて、押しつけがましい旧態依然だ……。僕の母親を思い出せ。ただ、僕は高校時代に、いい加減で自堕落な、大人になりきれていないような大人と接する機会がかなり多かった。その経験を踏まえて言うと、家住准教授は、『ちゃんとした人』には見えていた。

僕を呼び出すメールの文面も丁寧なものだったし、学生相手にコーヒーも出してくれたし……。少なくとも、実の娘を虐待する人には見えない。

人は見かけによらないという奴か？

家庭内で暴力を振るう夫が、外では評判のいいお父さんだなんて話は、嫌になるほど、本当に嫌になるほどよく聞くけれど……。

「もっと詳細に説明したほうがいいかしら？　微に入り細を穿とうかしら？　阿良々木くんは専門家らしいから、これだけでも伝わるかと思ったけれど……。私も、進んで話したいことじゃないから」

「せー専門家？」

ぎくり、とした。

その用語は、まさしく僕が今想起した、いい加減で自堕落な、大人になりきれていないような大人に当てはまっていたものである……。決して積極的にではないけれど、僕は彼ら彼女らの仕事を、高校生の頃に手伝ったりしていた。

いや、過去形ではない、大学生になってからも手伝った。それがバレたってことか？　だとすると、それはあまり望ましいことではない——と焦ったけれど、家住准教授が言ったのは、そういう意味での『専門家』ではなかったらしい。

つまり、僕はもつと焦るべきだった。

「阿良々木くんは児童虐待の専門家だって……。そう老倉さんに聞いたんだけど、間違いないわよね？」

ともすれば、僕が自分の影の中に、金髪のロリ奴隷を住まわせていることがバレたのかと心底戦慄したけれど、そうではなく……、家住准教授は、僕の愛すべき幼馴染、僕の大好きなラブリー老倉育ちゃんから、僕の高校時代の課外活動をお聞きになったらしい。

その時点で、間違い探しくらい間違いがあるのだが……。

現在軽く絶交されているので、ここのところあの凶悪児とはすっかり顔を合わせていないのだけれど、どうやら他の授業で、老倉は家住准教授と接点を持っているらしい……、スイスイタリア語か、スイスドイツ語か、はたまたロマンシユ語か。あいつは、ロリ奴隷を始めとする怪異のことを一切知らないので、かなり歪ゆがんだ、明らかかつ大らかに事実に反する形で、いつも通り、会う人全員に万遍なくそうするのと同じように、家住准教授に僕の悪口を言っただけに過ぎないと思うけれど——しかし、それでようやく、ほんの少しだけ、腑に落ちた。あくまでほんの少しだが……。

児童虐待の専門家。

そんな冠をかぶらされるのははなはだ不本意ではあるけれど、確かに僕は昔から、そんな現場に立ち会うことが多かった……、特に、高校三年生の頃は、目白押しだったと言わざるを得な

い。

ほうぼうをたらい回しに育児放棄された羽川翼。母親との関係をしくじったファザコンの戦場ヶ原ひたぎ。父親に内緒で、離婚した母親に会いに行く途中で、永遠に道に迷った八九寺真宵。死別した母親の『遺産』を、今も追いつける——負いつける神原駿河。可愛がられ、甘やかされ尽くした千石撫子。もちろん、僕を蛇蝎だかつのごとく嫌うことを生きがいとする、家住准教授の情報源こと老倉育にしたって、健全に瑕疵かしなく育成されたとは言にくい。

他にもまあ、いろいろあった。

あり過ぎた。

かく言う僕自身、両親と常に良好な付き合いを維持していたわけではない——どころか、一時は本気で険悪だった。

今だからこそ意地を張らずに認めることができるけれど、もしもふたりの妹がいなければ、高校卒業を待たずに、僕は家を出ていたかもしれないくらいである……、そんな不良息子の僕が、今現在は実家暮らしの大学生だというのだから、世の中は誠に複雑怪奇だ。

閑話休題、確かに、そういう意味じゃあ、僕をして児童虐待の専門家と表現するのは、それなりに的を射ている。痛いところを深々と突かれたという感じた。ただ、それを踏まえた上で、やっぱり家住准教授は相談相手を間違っていると、僕は指摘せざるを得ない。



なるほど僕は、数々の児童虐待の現場に立ち会ってきたかもしれないけれど、別にそれらをばったばったと解決してきたわけではないのだ——かき回しこそすれ、むしろ解決できたケースなんて、ひとつもない。

怪傑ゼロならぬ解決ゼロだ。

なんて、ほら、こんな面白くないことも平気で言えちゃうくらいのゼロである……、ゼロ学生なのだ。そもそも、家住准教授の情報源ことマイルスイートハート、老倉のケースこそ、僕がもつとも解決できなかった家庭環境なのだ。

まったく、やってくれるぜ、あの幼馴染。

あることないこと、僕に関する都市伝説を言い触らすことを生業にしゃがって……、先生に悪口を吹き込むなよ。お前のそういうところがだな——まあいいや、マイルスイートハートへの不満は、今夜にでも下宿を訪ねて、お好み焼きでも食べながら、本人にぶつけよう。絶交されてるけれど。

今は目の前の准教授である。

うーん、これは大変だ。

そりゃまあ、百歩譲って、十九歳にしてはまあまあ経験豊富なほうかもしれないけれど、けれど僕自身が（今もそうであるように）子供だったから、常に、僕は虐待される子供の側から、無惨な現場にかかわってきた。

先日の紅孔雀<sup>べいこうじゃく</sup>ちゃんの事件だつて然<sup>しか</sup>り。

なのに、まさか、虐待する親から相談を受けることになるうとは……、なんて言うか、正直、直視することを避けてきたところでもある。これまでのところ、僕は虐待する親を、要するに加害者を、概念としてしか捉<sup>とら</sup>えてこなかった——けれどそれは、母親を『お母さん』としてしか捉えない考えかたと五十歩百歩である。

概念ではなく、人間だ。怪異でもない。

生きた人間だ。とんでもないことに。

老倉のケースにしたってひたぎや羽川のケースにしたって、あくまでも、人間が人間を虐待したのだという真相に、僕はそろそろ向き合うべき局面なのかもしれない。

既にひとつわかったことがある。

早くも学んだ。

こうして、じかに親と対面してしまうと、意外となじる言葉や、断罪する台詞<sup>せりふ</sup>が出てこない——そりゃあ、虐待という強めの言葉にどろりとした悪感情は湧<sup>わ</sup>くけれど、それをうまく表現することができない。

パフォーマーとして恥<sup>は</sup>ずべきだ。

咄<sup>とつ</sup>嗟<sup>さ</sup>に対応できていない。まだ詳細がわからないからというのもあるけれど、やはり他人の家庭<sup>くちばし</sup>に嘴<sup>くちばし</sup>を挟むというのは難しい。紅孔雀ちゃんの場合は、あれはもう、迷っている余裕なんて

なかったし、選択の余地もなかったし、そんな風に反射的に動いたことで、結果としてぎりぎり間に合ったという感じだった——僕が介入したところか、神さまの介入まであつてのぎりぎりである。

現実問題として、相手が大学教師で、僕が彼女の授業を三カ月にわたって受講した学生だから、という力関係もあるだろう……、正常性バイアスと言うんだっけ、『何かのつぴきならない事情があるのかもしれない』とか『大袈裟に、自虐的に言っているだけなのかも』とか、勝手に勘案して、平常心を保とうとしていることは否定できない。

ヘアスタイルも服装も、なんなら研究室の中も清潔で、そんな邪悪な人には見えないのも確かなのだ……。理性的な振る舞いからして、とても世紀の大悪人とは思えない。それとも、これは単純に僕が、子供ぶっていても、大人になったってことか？ 高校三年生の頃の僕なら、三歳の娘を虐待なんてフレーズを聞いた時点で、テーブルを蹴って退室していただろうか？

三歳の娘、か……。

ふいに自省する。

僕には、それこそ高校三年生以前の昔から、それが現実であれ幻であれ、目の前のことしか見えなくなる悪い癖があるけれど（極悪だ）、対面している大学教師のことだけ考えるのではなく、その『三歳の娘』のことも考慮しなければ。

虐待する親が概念ではないよう、虐待される娘だって、概念ではない——強固に実在する。

専門家——怪異の専門家のひとりがスローガンとした『人はひとりで勝手に助かるだけ』という言葉は、しかし、助けるべき対象がふたりいるときには、どう適用すべきなのだろう？

「阿良々木くんは、あれ……、どう思う？」

「……？ あれ、とは？」

ちよつと（ちよつとどころじゃなかったかもしれない）生まれた気まずい沈黙を埋めるように投げかけられた、家住准教授からの曖昧な質問を聞き返すと、

「虐待された子供は、自分の子供を虐待する親になるっていう説について、どう思う？」  
と、彼女はつけ足した。

ああ……『あれ』ね。

「まあ、私もあまり、幸福な家庭には育っていないし、本当のことを言うと、家族から逃げたために、結婚して日本に来たところもあるから……、そんな風に糾弾されても即答では否定しづらいんだけど、でも、幸せな少女時代じゃなかったことだけが私の特色みたいに言われても困るし……、私の人生が、未だあの両親の影響下にあると思うと気分が悪いし……、無茶苦茶にむしゃくしゃするし……、一方で、勝手なことに疲れたときにはそんな理論に寄り添いたくもなくて、これは、私が私の至らなさを、未熟にも親のせいに行っているだけなのかしら？」

難しい問いだ。

その説自体は、もちろん僕も聞いたことがある……、今から思えば、父親から暴力を浴びせられたことをきっかけに猫に魅<sup>み</sup>せられた委員長が、あんなに真面目で良心的な人権派だったにもかかわらず、体罰肯定派だったことは興味深い。

よくよく考えてみれば、僕は名前に『羽』の一文字が入っているからという理由で、家住羽衣准教授のことをきつといい人なのだろうなんて決めつけたけれど、羽川を殴った親の名字も、当然ながら、羽川なんだよな……。

本音としては、『虐待を受けて育ったとしても、自分の子供を虐待しない親だってたくさんいる』という正論を、ぴしゃりと返したいところなのだけれど、僕は実際にそういう人物に会って、じかに話を聞いたことがあるわけでもないし……、概念としての『立派な人』をモデルケースに持ち出すのは、当事者を目の前にしたこのシチュエーションに限っては、フェアじゃない気がした。

だって、『ちゃんとしている人もいるのになんでお前はちゃんとできないの?』とか、それは僕が言われて死にたくなつた言葉とニアリーイコールじゃないか。

「まあ……、自身の親との関係がつつがない親なら、子育てにも相応に協力してもらえないでしょうから、協力を仰げない親よりは、単純にアドバンテージがあるんじゃないですか?」

「さすが専門家」

苦し紛れに捻<sup>ひね</sup>り出した、僕からの理屈めいた回答に、しかし、家住准教授はそう頷<sup>うなづ</sup>いた——いや、だから、専門家じゃないんですけれどね。

いいところ、半可通だ。

「手がかかる子供に、手が足りない……、特に私、別居中だし」

「別居中……？」

「ちよつと、旦那とうまくいってなくて……、没交渉かな。それも私が、子供を可愛がれないことが原因と言えば原因なのだけれど」

子は銚<sup>かすがい</sup>と云うが、逆もあるのか。まあ、あるよな、そりゃあ……、ただ、その『別居中』というキーワードから、ふたつの疑問が生じた。

ひとつは国籍の問題だ。

伺っていると、どうやらスイス生まれ、スイス国籍らしい家住准教授は、日本国籍の日本人と結婚することで、在留資格を獲得したっばいのだけれど……、もしも別居中の旦那さんと、正式に離婚するなんて話になった場合、その辺の事情はどうなるのだろうか？

離婚しても在留資格はそのまま保有できるものなのか……、離婚時の姓名というのは、維持しようと思えば続けて維持できるというのは聞いたことがある。

いや、別居中という言葉だけで、すぐに離婚に結びつけてしまうのは僕の脳がお子様だからで、夫婦にはいろいろあるのかもしれないけれど……、単身赴任でも別居だもんな？

関係性を保持するために距離を置くことも必要なときもあるだろう、ただいま絶交中の、僕と老倉のように。

ただ、<sup>おくへい</sup>屋上屋を架すように仮説に仮説を重ねると、もしも家住准教授が離婚……、なんてことになって、国籍やら在留資格やらの事情がどうあれ、スイスに帰らなければならぬということになれば、絶縁したつもりの両親と、再会するなんて展開もありうるのだろうか？

だから家住准教授は、僕に相談を持ちかけているのでは……、というのは、<sup>げす</sup>下衆の解せない勘繰りに過ぎないはずだ。

<sup>ゝゝゝゝゝゝ</sup>両親に会いたくないから、離婚を避けるため、自分の抱える虐待問題を解決しようとしているだなんて——せめてそこは、三歳の娘を案じてという動機であってほしい。

いや、まあそれはいい。そこはいい。

犯罪行為を働く自分を、より大それた犯罪に手を染める前に止めてほしいという心理は、社会派推理小説を紐解くまでもなく、一般的なそれだ——怪盗が差し出す予告状にしたって、あれはクレプトマニアの患者が警察に助けを求めているという解釈が可能である。

やめるべきで、やめたくてもやめられないことっていうのはある。僕も金髪の口リ奴隷の肋骨で遊ぶのをやめるのにはそれなりに苦勞した——恋人との別れ話に発展したことで、どうにかやめられた。やめられたけれど、やめたくてやめたわけじゃない——やめるしかない抜き差しならぬ状況に追い込まれたからやめたのだ。

同じ心理が——同じにするのも不謹慎だが——今、大学教師の中で働いていたからと言って、それを僕が責めるのも筋違いであろう。

授業中と同じような、真面目で、凛とした表情のままそんな相談を持ちかけてくるので、いまいち内心を読めないところもあるんだけど……、でも、家住准教授が、真剣に助けを求めていることだけは間違いないと信じよう。

ただ、それは中長期的な視点なのだ。

もうひとつ、つまり『別居中』なる単語から生じる疑問のふたつめは、もっと短期的な視点である——目の前のことしか見えなかった僕ならではの視点であるとも言えるが、事情は何にしても、とにかく、旦那さんと別居しているという家住准教授。

じゃあ、今。

現在、このとき、この瞬間、家住准教授の『三歳の娘』は、いったいどこでどうしているんだ？

旦那さんが家で面倒を見ているわけじゃないのだとすれば……、ベビーシッター……？ いやいや、雇ってないよな、さっきの話じゃ。協力者がいなくて手が足りないって言っていたんだから……、じゃあ、保育園か？ 果たして、虐待を半ば認めてしまっているような家住准教授が、頭抜けて大変だと聞く手順を踏んで、保育園に我が子を預けたりするものだろうか？



「それなのよ。具体的に、私が頼みたかったことは。一を聞いて十を知るとはこのことね。私は専門家に相談を持ちかけてるんだって実感があるわ。阿良々木くんを紹介してくれた老倉さんの目に、狂いはなかったわ」

あいつの目には狂気しか宿ってないと若輩の身ながら教えてあげたかったが、詐欺師に匹敵する不吉な予感に、僕は黙らざるを得ない。

「近頃の私は、試験の採点で忙しくってね。実は私、ここ三日ほど、マンションに帰ってないの」

「みつ——三日ほど」

「だから部屋で檻おりに閉じ込めているあの子が、今どんなことになっているのか、皆目見当がつかないの……。鍵を預けるから、阿良々木くん、行って様子を見てきてくれないかしら？」

具体的と言うより。

それは得体の知れない頼みごとだった。

「ふうん。なるほどなー。つまり鬼のお兄ちゃん、略して鬼いちゃんは、落第した前期試験の単位をもらうのと引き替えに、夏休みの間、准教授のベビーシッターを引き受けることになったわけだ」

「そんなゆるい企画じゃなかったことくらい伝わっただろ」

茶化していい企画でもない。

企画でさえない。

と言うか、なぜ斧乃木ちゃんが、僕の自家用車、フォルクスワーゲンのニュービートル、その後部座席で優雅に寝転がっているのが、ここ一番の謎<sup>なぞ</sup>だった——曲直瀬大学付近の月極駐車場から、教えてもらった家住准教授のマンションへと飛ばす途中で、いきなり「スピード違反は駄目だよ、鬼のお兄ちゃん」なんて、当たり前みたいに話しかけてきたけれど。

そしてなぜ、いつものドレープスカートではなく、身体のラインが浮き立つマキシ丈ワンピースで、しゃらくさい衣装に身を包んでいるのだ……、僕のクルマにドレスコードはないぞ？

「鬼いちゃんの妹に無理矢理着替えさせられたんだよ。あいつ、僕のことを着せ替え人形か何かだと思っていやがる。あの分じゃ次に何を着せられるかわからなかったから、ゆうべは緊急避難

的に這<sup>ほ</sup>う這<sup>ほ</sup>うの体で、このクルマに逃げ込んで一夜を過ごしたってわけさ」

「僕のクルマをパニックルームに使うなよ」

「親に買ってもらったクルマでしょ。甘やかされやがって」

例によつての無表情の棒読みでそう言つて、ぐろりと寝返りを打つ斧乃木ちゃん――運転席に背を向けた姿勢だが、しかし、バックミラーで確認する限り、肩甲骨がはっきり見えるくらい、とんでもなく背中が開いたワンピースである。

僕の（ちっちゃいほうの）妹は、童女の人形に何を着せているんだ。斧乃木ちゃんの露出度を上げるな。

覗く肉は死肉だぞ？

とにかく、斧乃木ちゃんは、僕が自宅から大学に出発するときには既に、後部座席に転がっていたらしかった――人形なので、しかも死体人形なので、気配を消すことにかけては一流である。

その後、一日中クルマの中で過ごしていたわけだ……、季節も季節だし、生きた人間だったら、熱中症になっているところだ。その気になれば例の必殺技で、自力で帰ることもできただろうが、斧乃木ちゃんはごろ寝を選んだらしかった。

たまにはそういう日もあるだろう。

言わせてもらえば、実兄の僕だって月火と同室で、ずっと過ごしていたら、いずれはそんな気分にくっとなる。

しかし、逆に言えば、斧乃木ちゃんも阿良々木家に居候するようになって随分になるけれど、クルマに家出するくらいまで馴染んだわけか……、浸っているような状況でもないけれど、ちょっと感慨深い。

「甘やかされて、ね……、ま、甘やかされているかどうかはともかく、恵まれているよ、僕は」  
「そうだね。ちよつと何回か死んで、地獄に落ちた程度の人生だもんね」

動く自動車の中、ベストポジションを探しているのか、もぞもぞと寝返りを打ち続ける斧乃木ちゃん。新規のファッションも相まって、陸に打ち上げられた魚のようだ。

死体なのに活いきがいい。

「少なくとも、僕は虐待されてはこなかった」

「そうだねー。子供を愛さない親なんていないもんねー」

なにせ棒読みで無表情なので、家住准教授以上に真意の知れない斧乃木ちゃんなのだけれど、さすがにまさか、それを本気で言っではないだろう。

正しくは『子供を愛せない親だっている』だ——その時点でもう正しくないけれど、棒読みで言おうとどうしようと、『子供を愛さない親なんていない』はあまりに優しくない。

愛されない子供にも、愛せない親にも。

「まあ、鬼のお兄ちゃんがかつて戦場ヶ原ひたぎから受けていた毒舌や暴力の数々は、デートDVと言っているものだったと思うけれどね……、あれも、もしかすると、かつてあの名ばかりヒロインが『お母さん』から受けた悪影響の残滓<sup>ざんし</sup>だったのかと思うと、笑うよね」

「笑うか」

一生無表情でいろ。

見たぞ、続終物語のアニメ版……、お前、胸中ではあんなむかつく顔で僕に話しかけていたのかよ。

「鬼のお兄ちゃんはギャグで処理していたけれど、神原駿河の自室の散らかりっぷりとか、心の闇じゃん。そりや忍野扇とつるむようになるよね。臥煙<sup>がえんとおえ</sup>遠江は、いったいひとり娘をどんな風に育てたんだろうね」

「虐待していたとは思わないけれど、でも、鏡の世界でお会いした限りじゃあ、あんまり子育てが得意そうな人じゃなかったな……」

「虐待の定義にもよるんだろうけどね」

「定議論かよ。聞きたくもないな」

「撫公<sup>なでこう</sup>の両親なんて、もしも『あなたがたのしたことは虐待だ』って責められたら、すぐく心外だと思っただよね。自分達は愛娘<sup>まなむすめ</sup>に全力で愛情を注いでいただけだって、声高に主張するだろう。今になってようやく、高校に進学しないなら働けと、引きこもっちゃった娘の尻を蹴飛ばし

てるけど、それだって、虐待と言えば虐待でしょ？　十五歳の女の子を放逐しようとしているんだから」

むう……。

って言うか、千石家、今、そんなことになっているんだ……、老倉との『いつもの奴』とはまったく違う種類の絶縁をしまっている妹の友達が、心配でならない。僕にはもう、心配する資格がないにしても。

「心配するのに資格なんていらないでしょ。さあ、今から撫公の家に行こう」

「かき回そうとするな、人間関係を。撫公って言うのもやめろ」

「鬼のお兄ちゃんこそ、僕と撫公の関係に口を挟むなよ。殺されたいのか」

「殺されたくないよ。なぜそこまで……、今から行くのは家住准教授の家なんだよ。マンションの333号室。ちゃんと話聞いてた？」

とは言え、こんな風にぶーたれつつも、話し相手ができたことはありがたかった……、でないとパニックで、それこそスピード違反のあまり、交通事故――を、起こしはしないにしても、おまわりさんに止められて、結果、より到着が遅れていたかもしれない。

「血縁じゃない童女を後部座席に乗せてるだけでも、十分、おまわりさんに止められる案件なんだけどね……、窓を開けて『助けてー！』とか、叫んでみよっかな」

「ここにきて小悪魔キャラか。キャラ変するな」

「キャラがぶれるのが僕のキャラだよ、忘れちゃった？　でも、自ら出頭して、おまわりさんに事情を話すっていうのは、ありなんじゃないの？」

「な、なぜだ。僕には後ろめたいことなど、ひとつもないぞ。その肩甲骨を翼のようにもぎ取りたいなんて、たと思つたとしても、それは内心の自由だろう」

「テレビに出られないタイプの猟奇殺人鬼の発想じゃない。翼のようにもぎ取りたいって、何気に猫のお姉ちゃんへの暗い情念も混在しているし。そうじゃなくって、同じ羽でも、羽衣のほう。鬼いちゃんの案件じゃなくて、准教授の案件」

「僕に案件などないがな。ん？　何？」

「自宅に娘を監禁して、三日帰ってないとか、もう十分に通報レベルの出来事ですよ。何を言われるがままに粛々とクルマを走らせて、様子を見に行こうとしているのさ。前回のトランジスタスレンダーの件ときも叱ったけれど、鬼のお兄ちゃん、いい加減、警察に任せるってことを覚えなよ。気持ちはわかるけれど、警察は鬼いちゃんの敵じゃないんだよ？」

「どんな気持ちに理解を示してくれてるんだよ。警察を敵視したことなんかないわ。本当に犯罪者扱いをするな。いや、それ以外の点については、斧乃木ちゃん、お説<sup>せつ</sup>ごもつともじゃあるし、僕も実際、そうする寸前までいったんだけど」

「本当？　僕に殺されたくないからって嘘<sup>うそ</sup>ついてない？」

「ついてない……、なんでそんなちよくちよく僕を殺したがるんだよ、きみは」

「寸前までいったのに、通報しなかった理由を述べよ。でないと、愛車が廃車になるよ。鬼のお兄ちゃんごと」

バックシートに寝そべったまま起き上がろうともせずに、恐いこと言ってるなあ……、スクラップにされてたまるか。まあでも、これこそ、ちょうどいい相談相手か。

専門家、だもんな。児童虐待の専門家ではなく……。

「家住准教授が、会話の流れの中で、気になることを言っていたんだよ。それがなかったら、僕だってとくに通報している。年甲斐もなく、目上の人物に対して礼儀も弁え<sup>わきま</sup>ず、罵声<sup>ののしり</sup>を浴びせたりついでにね。現代には携帯電話っていう、便利なアイテムがあるんだから」

「その便利って言うのは、僕より便利って意味？」

「いくら百年使われた死体の付喪神だからと言って、道具としてのライバル心を携帯電話にむき出しにするな」

「どっちのほうが使えろ道具か、はつきりさせてから話を進めてよ。死体人形？ 携帯電話？ どっち？」

「なんて二択だ……、死体人形だよ」

「よろしい。今日のところは勘弁しておいてあげよう。運がよかったね、死なずに済んで。そして気になることは？」



「おかしいこと——かな。詳しく聞いてみると、なんでも、家住准教授は、最初から自分の娘が、可愛く思えなかったわけじゃあなかったそう。むしろ、世界一可愛い、宝物みたいな娘を授かったと思っていたくらいで——ただ、ある日突然、急に可愛く思えなくなっただって」  
自分の子だと。

思えなくなっただって。

「まるで、違う子供と取り替えられたみたい——って、家住准教授は言っていた。なあ、斧乃木ちゃん。斧乃木余接ちゃん。これって、どこかで聞いたことのある話だと思わねえ？ どこかで聞いたことのある、怪異譚だ」と

どこかで。

身近などこかで。

「……その子の」

斧乃木ちゃんは少し黙ってから、「その子の名前は、なんていうの？」と、訊いてきた。

どうやら少なからず専門家のアンテナに反応するところがあつたらしいと思いつつ、僕は、

「家住唯々恵」

と。

教えてもらっていた名前を発音した——『受け容れられない現実には嫌だと言いつ返せる子に育ってほしい』という想いを込められた、少なくとも、これは人の名前である。

どこかで聞いたことのある怪異譚。

どこかも何も、それは阿良々木家で聞いたことのある怪異譚なのだ――むろん、細部は違し、もつと言え、ぜんぜん違。共通点を探すほうが難しいくらいである――だけど、それでもほのかに似ているのだ。

僕の妹。斧乃木余接の現在の所有者。

阿良々木月火のケースと、酷似している。

「あー、あー、あー。あつたねー、そんな初期設定も。今思い出したよ、阿良々木月火のこと。すっかり忘れていた」

「とぼけるな。きみが末妹まつまいの上半身を木こっ端微塵ばみじんにぶっ飛ばしたことを、僕は忘れたわけでも許したわけでもないんだぞ？」

初期設定ではなく、今も生きている設定である。

元々斧乃木ちゃんは、その怪異譚に絡んで、ご主人様である影縫余弦かげぬいよづると共に、僕達の町を訪れたのである――そんな出会いを思えば、こうして一緒にドライブしている現在、信じられないと言つより、もはや奇跡だ。

運命的な仲直りがあつたわけでもなく、単にずるずる、なし崩し的な協力態勢が築かれていただけで、今も斧乃木ちゃんは、隙については僕を殺そうとしてくるけれど……、居候とか言つて、実際は僕と忍との監視役だしな。

まあ、思えば忍との和解も、そんな感じだったか——と、僕は、今は空っぽの、助手席のチャイルドシートを横目に見る。

ともかく、阿良々木月火である。

彼女の正体は不死鳥だ——胎内の生命に宿つたホトトギスである。違和感なく、人間社会に溶け込む不死身の怪異……、だからこそ、影縫余弦と斧乃木余接の目に止まつた。

退治すべき悪として。

僕のちっちゃいほうの妹は、巨悪だった。

「月火ちゃんの場合は、家庭内に完全に溶け込むと言うか……、胎児と同化するタイプのホトトギスだから、僕も十四年間、何の疑問も抱かずに接してきたけれど、そ、う、じ、ゃ、な、い、怪、異、つ、て、い、う、の、も、い、る、ん、だ、ろ、う、?」

「しでの鳥は、同化すると言うより、乗っ取ると言ったほうがより正確なんだけね……、まあ、その辺をどう解釈するかは、鬼のお兄ちゃんに任せるよ。お気に召すまま」

斧乃木ちゃんとしても、当時の争いをここで蒸し返すつもりはないようで、寝転んだまま肩を竦める——ちょうど僕（バックミラー）に背を向けているタイミングだったので、肩甲骨の動き

が挑発的だった。

「肩甲骨なのに不健康とは、これいかに、だぜ」

「やかましい」

棒読みで乱暴に突っ込まれた。

「だけど、敏感だね」

「肩甲骨が？」

「肩甲骨の話は鬼のお兄ちゃんしかしていない」

「すまんすまん、鎖骨、じゃなくて、粗忽そこつだったぜ。そんな僕の何が敏感なんだ？」

「准教授の漏らしたたった一言から、『取り替えっ子』の可能性に思い至る辺りが、敏感だと褒ほめ称たたえているんだよ。殺さなくてもいい気分になってきた。命拾たいしたね」

「……………」

付喪神かと思っていたけれど、僕は死神に取り憑かれているのかしら？

あと、『取り替えっ子』って。

もつと格好いい正式名称、あるだろ。

「まあ、それだけ鬼のお兄ちゃんにとって、阿良々木月火のことが気ばかりになっていたということなのかな。去年の夏休み、先延ばしにした問題を——忘れても、許してもいなかったのかな」

「そういうわけじゃ……ないんだが」

そういうわけなのか？

まるで羽川翼の家庭問題から逃げ出した過去を埋め合わせるように、僕が紅孔雀ちゃんの事件にのめり込んでいったことは記憶に新しいが、今度は月火の埋め合わせを、唯々恵ちゃんでおこなおうとしているのか？ だから警察に連絡せず、こうして脇目も振らずに独自にクルマを走らせているんじゃないか――

「いや、だとすれば、正しい判断だったと思うよ。真面目な話。鬼のお兄ちゃん風に言うなら、だいたいこう大腿骨くらい真面目な話」

「大腿骨の話はまだしていない。それはとっておきなんだ」

「とっておきに真面目な話だよ。それこそじついで、尊敬すべき単位をくれる准教授を庇かばっための正常性バイアスなんじゃないかと思う人も百億人くらいはいるだろうけれど」

「その計算だと、火星人も含んでいるな。単位のためにそこまでするほど、僕が真面目な奴に見えるのか」

「なにせ、鬼のお兄ちゃんだって、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの元眷族けんぞくだ――鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼とまではいかないにしても、低血にして温血にして紙血の吸血鬼くらいの勘は、備えていると思う」

「低血にして温血にして紙血の吸血鬼って。最後、血になってんじゃないか」

「怪異の王ならぬ怪異の奴隷だったことのある鬼のお兄ちゃんが引つかかったというのなら、きちんと調査すべきだ」

虐待する親なんて冤罪<sup>えんざい</sup>を、まさか恩師におつかぶせるべきじゃないからね——と、斧乃木ちゃん<sup>きのみちゃん</sup>はまとめた。

恩師ってほどに、世話になっているわけではないのだが……、ちゃんと話したのは今日が最初だし、もちろん、このミッションを滞りなく達成したからと言って、それで単位をもらえるということもなかろう。

「順当に行けば、鬼いちゃんは訪ねた恩師のマンションで、干涸<sup>ひか</sup>らびた幼童の死体の第一発見者になるだけだけど、まあ、それも人生経験だろう」

「地獄に落ちたときよりトラウマになる」

「死体人形を抱えて死体を発見に向かう展開か。心躍るね。いよいよ鬼のお兄ちゃんが、三歳の娘にまでその魔手を伸ばし始めたのだとしたら、温かく見守るつもりだったけれど」

「すぐ殺せ。そのときこそがそのときだ」

「そういうことなら、力になるよ。乗りかかった船だ、僕も同行しよう」

悪態をつく割に、何気に協力的なんだよなあ……、その辺りがいわゆる、道具としての矜持<sup>きようぢ</sup>って奴なのだろうか。

斧乃木ちゃんと、あまりなあなあで仲良くしていると、またぞろ扇ちゃん辺りからとやく皮肉られそうでもあるけれど、逆に言くと、じゃあいったい、僕は何をもって斧乃木ちゃんと『正式に』和解すればいいのかという話でもある……、被害者は加害者を、一生恨まなくちゃならないなんて法もないだろう。

虐待された子が、永遠に、虐待した親に縛られなくちゃならない宿命を、背負う必要がないように……。

絶え間なく誰かを恨むつても、エネルギーを消費するのだ。

「昔はあったらしいけれどね、そういう法も。前にお姉ちゃんが教えてくれたよ。敵討ちかたきうに関する法令で……、なんだっけな、親を殺された子は、その敵をぶつ殺すまで、地元に戻ってきちゃいけないとか、そういうの」

「無茶苦茶な法律だな……、影縫さんは好きそうだけど。いや、でも、当時はそれが当たり前だと思われていたわけか。だとすると、今、僕達が当たり前だと思っている法律も、未来から見たら、無茶苦茶理不尽なルールなのかもしれないな」

「どうだろう。当時でも思っている人は、無茶苦茶理不尽なルールだっと思ってたんじゃない？ だからちよつとずつでも、是正されていくわけでしょ。体制は、たまたま今の体制になったわけじゃないよ……、圧迫されていた人々の不断の努力で、覆してきたのさ」

家族制度もしかり、と斧乃木ちゃん。

その辺、一家言あるらしい。

まあ、詳しく聞いたことはないし、聞いたら嫌な気分になること間違いなしの受け合いだけれど、斧乃木ちゃんは百年間、『道具』として使われた経歴を持つ死体人形だからな。

「さておき、確かに、もしも『取り替えっ子』現象が起こったからこそ、准教授が我が子を可愛いと思えなくなったと仮定するなら、たとえ虐待していたとしても、一等罪が減じられることにはなるだろうね。完全に冤罪とは言えなくとも。我が子じゃないんだから、扶養義務はない」

「だからって虐待していいわけじゃないけどな」

虐待してしまいそうになる、なんてばかりしていたけれど、檻の中に閉じ込めて三日間放置というのは、明らかに未遂じゃあない……、やってしまっている。

未遂どころか未必の故意で、殺害を目論<sup>もくろ</sup>んでいると判断されてもおかしくないレベルである。

だが、その理由が怪異現象であるなら。

「神隠しのバリエーションなんだっけ？ 小さい子供が行方不明になって、しばらく探し回っていると、まるっきりの別人になって帰ってくるとか、そういうのは……」

「『取り替えっ子』には様々なパターンがあるので一概には言えないけれど、ほら、子供は七歳までは神様のものと言ったりするからね。神様の都合で取っ替え引っ替えされるのも致し方なしだ——もつとも、古めかしい怪談を引き合いに出さなくても、余所<sup>よそ</sup>様の<sup>そ</sup>子供を育てる母親なんて、自然界じゃああるあるだよ」



月火のことを言っている、わけではなさそうだ——月火の場合は怪談だし。

現実のホトトギスやらカッコウやらの托卵たくらんはわかりやすい代表例として……、逆に昆虫界では、サムライアリみたいに、余所の巣から蟻ありを攫さらってきて、自分達の下で、奴隷もととして育て上げるなんて生態もある。

「人間界でもあるでしょ。余裕で」

キツイことを言ってくる斧乃木ちゃん。

童女を見た目でそういうことを言われるときっとする——ハンドル操作を誤ったらどうしてくれるんだ。

「不埒ふらちな妄想をするもんじゃないよ、鬼のお兄ちゃん。僕は里親制度のことを言ったんだ」

「言っていないだろ。その逃げかたはズルいぞ」

「しかし、敏感と言うなら、その『取り替えっ子』に、即座に気付いたのだとするなら、准教授の勘も、なかなかどうして、大したものだね。鬼のお兄ちゃんのところみたいに、気付かずに妖怪変化を育ててしまうケースも多いんだけど……」

「言葉もないね」

阿良々木家の場合、余所の子を家に招くことに、抵抗のない両親だったというのもあるかもしれない……、老倉育も、その中のひとりだった。

ふうむ。

僕の両親は、してみると博愛主義って感じだけれど——それが幼少期の僕にしてみれば、不満だったのかもしれない——、家住准教授が我が子の入れ替わりに気付いたのだとすれば、それは……。

「母の愛って奴なのかね。正直、僕にはよくわからない言葉なんだけれど」

「ママにおねだりしてクルマを買ってもらっておいでよく言うよね。それともおねだりした相手はパパ？」

「両方だ。あわよくば二台買ってもらおうと画策していた」

「鬼のお兄ちゃんを取り替えられたほうがいいね。せめて脳だけでも。セカンドカーを欲するな。……そう言えば、対抗するわけじゃないけれど、僕も准教授の話で、気になった点があるんだ」

「ん？」

「旦那さん、事情はどうあれ別居中なんでしょう？ たぶん、あまり円満じゃない形で」  
うん。

ちゃんと確認したわけではないけれど、そうだと思う。唯々恵ちゃんのことの可愛く思えなくなったことが別居の理由なのだとしたら——

「そこだよ。旦那さん——『お父さん』のほうは、どう思っていたんだろうね？ 同じように、可愛く思えなく……、自分の子だと思えなくなったのかな。つまり、その准教授は、どうして可

愛く思えない我が子を、旦那に押しつけようとはせずに、自分で育てているのかってクエスチョンなんだ」

鋭い疑問だ。

旦那さんのほうの見解については、あの場で思いついて、訊いておくべきだったか……、やはり僕にはいまだに目の前のことしか見えていない。第三者の意見って奴をもうちよつと勘案しないと、第三者委員会に入ることとはできないだろう……。

押しつけるという言いかたはよくないけれども、自分じゃあ感情的にも能力的にも、幼子を育てられないと判断したなら、別居する相手方に委ねるといふ手はあつたはずだ。実際、夫婦間で、話し合いがなかったわけはないだろうが――子は鎚。

「世間体って奴もあつたのかな。日本の離婚調停じゃあ、子供は母親が引き取ることのほうが多いんだろ？」

戦場ヶ原家のように、母親の素行に明白で漆黒な問題があつた場合はもちろん別だが……、『子供はお母さんと一緒に暮らすべき』という考えかたは、まだまだ根強い。

「そうだね。それはお父さんにとつてもお母さんにとつても、いいことじゃないよね。対策としては、母の日と父の日を同日にするとところから始めてみるのはどうだろう」

「くだらないアイディアを出すなと一刀両断しかけたけれど、でも、案外そういうところだったりしてな……」

「授乳する能力を有するのは母親だから、赤ちゃんがお母さんに懐くのは本能的に当然で、だから子供はお母さんが育てるべき——なんて持論を展開する」メンターもいるよ」

「その持論を更に展開すると、本能的に多様な子孫を残すために、不倫が肯定されてしまわないか……？」

あと、乳離れについてはどう考慮されているのだろう……、赤ちゃん期のみの話だよな、それ？

「僕がそうだったように、お母さんのおっぱいなんて、さすがに十歳を過ぎる頃には興味をなくすだろう」

「堂に入り過ぎだよ、鬼のお兄ちゃん」

「その頃になると、そろそろふたりの妹が育ち盛りだったし」

「しでの鳥も、とんでもない家庭に転生しちゃったもんだよね」

場合によっては——つまり、僕の考え過ぎで、怪異なんてなんの関係もなかった場合——、家准教授の旦那さんに連絡を取って、唯々恵ちゃんを保護してもらったほうがいい。

仮に僕が今回、役割を果たしたとしても、結局そんなのは、その場凌ぎに過ぎないのだから——分不相応だった直江津高校で学んだことがあるとすれば、それは『その場凌ぎには限度がある』、だ。

と、そこで僕はブレーキを踏む。

教えてもらった住所通り。

「着いたぜ、ナイスバディ。ここが、家住准教授のマンションだ」

「ふむ。リノベーションしたばかりのご様子で、ひとまず地獄には見えないね。……ナイスバディって、いい身体って意味？ いい相棒って意味？」

そう言つて、斧乃木ちゃんはとうとう到着まで寝そべっていた後部座席で、エアートラックスの動きで跳ね上がった――足首までびっちり張り付くマキシ丈ワンプに着替えても、死体人形最大の売りである機動力は、まったく衰えていないらしい。

「行くよ、鬼のお兄ちゃん。僕の肩甲骨についてきな」

「同行してくれるのはありがたいけれど、主導権まで握るな、ナイスバディ」  
頼まれたからってだけじゃない。

主導権も肩甲骨も、僕がこの手で握り締める。

そう言えば、紅孔雀ちゃんを救出するためにあれこれちょこまか動いている最中にも、僕は斧乃木ちゃんと、よそ様のマンションへの侵入を試みたことがあった——あのときは忍も同行してくれていたけれど、今回はまだ日も高く、また長いので、太陽の苦手な吸血鬼幼女は『一回休み』である。

そして今回は、僕は玄関から、斧乃木ちゃんはベランダからという風に、手分けしての挟み撃ち作戦を採用したけれど、今回は家主からきちんと鍵を預かっているので、そこで細かく策を弄<sup>ろう</sup>する必要はない。

必要はないし、時間もない。

堂々で行こう。

普通に最短距離で正面突破だ——オートロックを解除して、エレベーターに乗って、家住准教授のお住まいである、三階の333号室まで。

「……考えてみたら、鬼のお兄ちゃんのような危険人物を幼い我が子に引き合わせるというだけでも、もう十分に虐待の要件を満たしているよね」

「僕はそこまでの危険人物じゃないよ。見たまえ、この柔和な笑顔を」

ただまあ、仮に僕じゃなくとも、留守中の自宅に、大して接点のない学生をお遣いにやるという判断は、なかなか正常な精神状態で下せるものではなからう……。

このままでは虐待をしてしまうかもしれない、もしかしたら既に虐待をしているのかもしれないという心理的ストレスは、インテリジェンスに見えたあの准教授の内面で、きっと暴風雨のよう渦巻いていたのだ——同情の余地はともかく、考察の余地はある。

僕はインターホンを押すことなく、預かりものの鍵を鍵穴に差し込み（ワンドアツーロック）、扉を開けた——内側でドアチェーンが施されていて、わずか十センチしか開かないということもなし。

檻の中の三歳の娘が、ドアチェーンで戸締まりするとも思えなかったが、ものの弾みというところはある……、僕の人生はこれまで、そんなことばっかりだったし。

ものの弾みで生きたり死んだりしてきた。

最悪、斧乃木ちゃんの『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』を発動させれば、この世に開かない扉なんて

ないのだけれど、できれば破壊工作はおこないたくない——なので障害なくドアが開いただけでも僕はほっとしたし、そして、他人の家に一歩足を踏み入れただけでも、もつとほっとした。

珍しく勘が当たった、と思ったのだ。

当たるものと言えば嫌な予感ばかりで、勘が当たることなんてついぞなかった僕だけれど、斧乃木ちゃんの買いかぶりがどんぴしゃだったのか……、いや、もしも『取り替えっ子』現象なん

てのが起きていたなら、それは断然嫌な予感のほうに計上すべき『大当たり』かもしれないけれど。

いずれにせよ、そうだったのだと、まあ、フライング気味に確信した……、というのは要するに、異臭がしなかったからである。

もちろん、他人の家だ。三日間、換気がされていなかったということもあって、独特の匂いはある——だけどそれは異臭というほどではないし、まして室内全体が耐えがたい悪臭を放っているなんて印象はない。

これはとても重要なことだ。

いつぞや、扇ちゃんに手厳しく指摘されたことである……、人間という生き物は、生き物であるがゆえに、死ねば臭うのだ。もしも当たり前の……、か弱く、保護すべき存在であるところの三歳児が、三日間も放置されていたなら、こんな『他人の家』の香りで済むわけがない。

生きていようと、死んでいようと。

「真夏にクルマの中に放置された死体人形みたいなものだね。まあ、僕は防腐処理されているから無味無臭だけれど。僕なりのデオドラントだね」

「デオドラントって……、そう言えば斧乃木ちゃん、ブーツも履き替えたんだね。あの蒸れてるの、好きだったのに」



家主の許可を受けているとは言え、やはりこうして室内まで来てしまうと不法侵入感はぬぐえず、あまり他の住人に見られたくはなかったので、僕はさっさと扉を閉めた――泥棒ではないので靴は脱ぐわけだが、斧乃木ちゃんはマキシ丈ワンピ合わせのサンダルだった。

通気性がよさそうで、蒸れそうもない。残念ながら。

「靴フエチにならないで。鬼いちゃんはシンデレラの王子さまか」

「シンデレラの王子様を靴フエチって言うな」

斧乃木ちゃんはポーチでサンダルを脱いで、

「これも阿良々木月火からの支給品だ。撫公の前髪を切断したり、あいつ、他人のアイデンティティを平気で破壊するよね」

と言った。

「あれで意外と、他人に尽くすのが好きだったりするんだよ」

「理解のあるお兄ちゃんだね。結構結構」

僕が先導する形で、廊下に踏み入る。

僕は靴下、斧乃木ちゃんは裸足なわけだが、玄関脇にスリッパは……、用意されていない。来客の多い家ではないらしい。

まあ、子供を虐待している家が、人を家に招くほど社交的なわけがないよな……、関係性はそうやって断たれ、家庭内暴力からの逃げ道は失われていくものなのかもしれない。

「虐待性があつたかどうかはさておき、家庭内暴力つて言うなら、鬼のお兄ちゃんはその連中には引けを取らないよね。妹ふたりと、いつも殴り合つてたじゃない。基本ぼこぼこにされる側だったとは言え、あれもきつと昨今のコンプライアンスには抵触するよね」

吸血鬼化したあとは、取っ組み合いの数を減らした——なんてのは、言い訳にはならないか。あれを普通で、どこの兄妹だつてそんなもんだと思つていたのだから、見識を狭める密室環境というのは恐ろしい。

密室——3LDKつてところか？

大学の研究室で受けた印象と同じで、整理された清潔な部屋だと感じる……、それに、廊下の時点で既に広い。

やっぱり国立大学の准教授つて、いいお給料がもらえるものなんだろうか……、いや、そうじゃないな。単純にファミリー向けのマンションつてことなんだろう。別居中の旦那さんと共働きなら、払えない家賃ではあるまい——ここで三人で生活していて、出ていったのは旦那さんの側つて事情か？

引つ越したばかりではなからうし……、まあ、そんなシャーロック・ホームズばりの推理ごつこは後回しだ。

あれこれ想像力を働かせるよりも先に、問題の檻を探す……、リビング、ダイニング、キッチン、個室が三つ。順番に見ていけばいいんだけど、普通に考えれば、三つの個室のどれかだ

よな？

まともな神経をしていれば、共用スペースに、三歳児を閉じ込めた檻を飾りたくはないはず——『見たくないもの』として、完全に隔離したいと思うはずだ。

現在の家住准教授がまともな神経をしているかどうか……、最低限の理性は保っていると信じるしかない。

「……ちえっ」

威勢よく乗り込んできたものの、玄関を開けたところでちよつと弛緩<sup>しかん</sup>してしまったこともあって、やっぱり怖じ気づいてしまうな。いつまでたってもこんな風にビビり続けるんだったら、修羅場なんて、いくらくぐっても無意味だ。

ただ、斧乃木ちゃんが言うところの『取り替えっ子』現象が起こったという当てずっぽうの推理が、僕の正常性バイアス——どころか、現実逃避型の希望的観測ではない可能性が俄然高くなつたことで、緩んだ反面、今更ながら、危機感が高まってきたことも事実なのだ。

怪異現象に対して、今の僕は無防備に等しい。怪異の奴隷だった経歴なんて、今は昔だ——もしも、檻に閉じ込められた『取り替えっ子』が、凶暴極まる妖怪変化、手に負えない魑魅魍魎<sup>ちみもつりょう</sup>だったらどうする？

ただの偶然とは言え、怪異の専門家である斧乃木ちゃんが同行してくれる運びになったのは、そういう意味でも幸運で、心強かった……、まあ、斧乃木ちゃんは厳密には、不死身の怪異を専

門とする専門家であつて、つまり『取り替えっ子』そのものに詳しいわけではないのだろうけれど――本当にただの偶然なのか？

いや、何も斧乃木ちゃんがすべてを察した上で、僕のクルマに潜んでくれていたとはさすがに思わない……。死体人形がニュービートルをキャンピングカー代わりにしていた理由は、あくまでも月火から避難するためである。

けれども――そう、月火だ。

このペアリングによるアドベンチャーが、単なる偶発的な出来事ではなく、阿良々木月火の計らいの結果だと考えると、ちよつと恐い。

月火に自覚はない。

自覚はないが――それでもあいつは、僕の妹であるのと同じくらい、不死鳥なのである。

「……ままよ、ってところか」

僕は廊下をまつすぐに歩み、リビングをスルーして、そして一番近いドアを開けた。どの扉が正解かなんて考え始めたら迷つてしまいそうだったので――三つの扉、モンティ・ホール問題――、さつさと行動したかった……。僕はくじ運のいいほうではなかったので、外れだった。

そこは（おそらく）家住准教授の寝室だった……。インテリ女史のベッドルームで戯れる趣味はなかったので、軽く四隅を一瞥して、<sup>いちへつ</sup>檻がないことを確認したら、すぐに隣室へと移動する。

第二の扉。

そこが正解だった——たぶん、だ。

そう思ったのは、扉が開いて、中に三歳児が閉じ込められた檻があったからじゃない……、施錠されていたからだ。

押しても引いても、ドアが動かない。

その時点で不穏極まる……、普通、一般家屋の中で施錠できる空間なんて、風呂とトイレくらいだよな？ 反抗期の子供でもない限り、私室に鍵を装着したりはしない……、しかもこれ、外側からしかかからないタイプの鍵じゃないのか？

檻以前に、家住准教授は、三歳の娘を部屋にも閉じ込めているのか……？ 『見たくないもの』として隔離するため？ それはもう、虐待を通り越して——まるで、我が子を怖がっているかのようにじゃないか。

怪異のごとく。

二重密室……、玄関の鍵も合わせれば、三重密室か？ むろん、この中に檻があるとして、なのだけれど……。

「このドアの鍵は、インテリのセンセイから預かってないの？ 鬼のお兄ちゃん」

「残念ながら。すっかり失念していたのか、それとも言い出せなかったのか……」

「あっそ」

斧乃木ちゃんが、無表情でそう頷いたかと思うと、ドアを裸足で蹴飛ばした——『例<sup>アン</sup>外<sup>リミテッド</sup>のほうが多い規則』<sup>・ルールブック</sup>というほどのものではない、通常モードのキックである。ここが、銀行の金庫室や、軍の施設じゃないのであれば、それで十分だった——第二の扉は、蝶<sup>ちようつがい</sup>番ごと内側へと倒れた。

「さすが『小回りの利く戦車』」

「その通り名で呼ばれるのは、ワーターロー以来だよ」

「従軍経験があるの？」

そして。

そして内部はというと、子供部屋だった……、推測するに、ならば一番奥の第三の部屋は、別居中の旦那さんの私室なのだろう。

愛情溢れる両親<sup>あふ</sup>によつて、ファンシーに飾り付けられた子供部屋——正確に言えば、その名残、残骸のようなベビールームだった。

だって、三歳児の部屋だとするなら、天井に吊<sup>つる</sup>されたモビールはもう不要だろう？ まして、その真下のベビーベッドなんて……、観察するに、対象年齢満一歳って感じの部屋だ……、柔らかそうな玩具、パステルカラーの壁紙、ファンシーの名残、愛情の残骸。

遮光カーテンはぴっちり閉じられている。

そして肝心の檻は？

あった。

なければよかったのに、あっさりあった。

その点に関して、華麗なとんでん返しはなしだった——ベビーベッドのすぐ横に、たぶん犬用のそれなのだろう、いかにも頑丈そうなケージが設置されていた。

組み立てるのが大変そうな、大がかりな檻である……、これくらいになると、専用の工具が必要なのでは？ 檻そのものも恐いが、そこに費やされた労力も恐い……、ここまでするか、みたいな気持ちになる。わざわざこのレベルの檻を設置したんだ、と思ってしまう。ドアに取り付けられていた鍵もそうだけれど……、凝りに凝った死刑装置でも見ているかのようである。

まあ……、ここまでするとところまで家住准教授の精神は追い詰められていたと解釈するのが、もつとも好意的な解釈ということになるのだろう。

それだって、いち学生である僕にこんな相談を持ちかけてきた時点で、わかっていたことではある——なので、本格ミステリーチックなどんでん返しはなしだった。

檻ゑんに関しては。

どんでん返しがあつたのは、檻の中身だった——家住准教授の説明によれば、その檻には、彼女の三歳の娘、家住唯々恵ちゃんが、三日間に亘りわた監禁されているはずだった。

僕の推理によれば、その娘は唯々恵ちゃんではなく、『取り替えっ子』、人ならぬ怪異であるはずだった——けれど。

三重密室の最奥さいおくに、嚴重に閉じ込められていたのは、そのどちらでもなかった。

「……人形？」

僕はしんぞく呟く。見たものを、見たまんまに。



檻の中には、人形……、のようで、ひとまずは人形に見えるものが、ごろんと横たわっていた。

「人形だね。ドールだ」

と、斧乃木ちゃんの同意。

そのもの死体人形である斧乃木ちゃんが言うのだから、その見立てに間違いあるまい。人形が人形を人形と言った。

しかし、人形は人形でも、お店で売っているような商品ではない、手作り感のある——だからと言って温かみなんて微塵も感じられない、誤解を恐れずに言えば、不気味な人形だった。

呪いの人形かと思った。

膨らました風船をねじって、犬猫の形状にする大道芸があるだろう？ あれと同じことを、毛布みたいなぶ厚めの布でやって、人間の形を作ったという感じだった。

人間の形——もうちょっと詳しく言えば、赤子の形、だろうか。なまじっか、そのねじりかたの出来が秀逸であるだけに、香り立つ不気味さが倍増している。

ただし、この人形の製作者は、ぬいぐるみ作りの腕はとびきりでも、絵心はなかったらしい……、人形の顔部分にマジックペンで描かれている目鼻は、それともおふざけのつもりなのか、『へへのへのもへじ』だった。髪の毛も、ぐりぐりと乱暴に描かれている……、頭部をべったり塗り潰されていると言ったほうが、描写としては正確か。

人形作り……、手折正弦？  
ておりただつる

いや、あの男がこの件に関わっているはずもない。檻の中に人形を閉じ込めるといふ行為は、あの男の『正義感』にまったくそぐわないそれである。あの男が閉じ込めるのは、人形ではない。

落ち着け。動転している場合じゃない。

考えないと駄目な局面に来た。

「考えるまでもなく、センセイの作品に決まってるでしょ？」

斧乃木ちゃんが言った。

つまらなそうに。

「ハンドメイドだ」

まさか他人の家庭に入り込んだ『取り替えっ子』との異能バトルを期待していたわけでもあるまいが……、『小回りの利く戦車』は、既に興味を檻の中の呪いの人形から、室内の検分へと移している。

得意なんだったな。調査、分析。

「鬼のお兄ちゃんも気付いたと思うけれど、このベビールーム、対象年齢は一歳か、よくて二歳って感じだよな」

「ああ——だから、その辺りまでは、家住准教授も、我が子に愛情を感じていたってことなんだろう？ それ以降は、可愛いとも、自分の子とも思えなくなつて——」

「死んだんじゃないの？」

淡々と、斧乃木ちゃん。

室内をあつちこつち動き回りながら。

「二歳かそこらでさ、その子。病気が事故か、事件か何かで」

「え？ いや、でも、死んだって……」

「子供が死んだって話に耐えられない優しい鬼いちゃんなら、別の可能性も提示しようかな。そうだね、娘さんは別居中だという旦那さんのほうに、現在は引き取られているというのはどうだろう。ともかく……、生きていようと死んでいようと、一年以上前の段階で、センセイの手元から、家住唯々恵は離れている」

断言した。

素人の僕じゃあとても見つけれない痕跡を、斧乃木ちゃんはもう、この部屋から——あるいは廊下や、家住准教授の寝室の時点から——複数、発見しているようだ。

「うん。少なくともふたりの人間が、この密閉空間で生活していた気配はないよ。たとえばどういう形であれ。ゴミ箱と冷蔵庫の中身でも覗かせてもらえれば、もっと確実なことを百個は言えるけど……、まあ、そこまでしなくてもいいでしょ」

「……………」

「なににせよ、感動的だよね。僕は好きだよ。子供を失った母親が、その代償として、お手製の赤ちゃん人形を抱え続けるってお涙頂戴ちやうだいのストーリーは。たとえどれだけありきたりで、いかにありふれていようともね」

確かに泣ける。少なくとも笑えない。

僕は遅まきながら、斧乃木ちゃんを真似るように、ベビールームの内装をぐるりと見渡す——ファンシーの名残、愛情の残骸。そして……、一周して、呪いの人形。

だとすれば。

とんだデザイナーズベビーだ。

「我が子を失ったから、代わりに我が子を手作りして——だけど、それは結局我が子じゃないから、可愛く思えなくて、当然、自分の子供だとも思えなかったって？」

「だって、自分の子供じゃないんだもんね。布の塊だ」

「無茶苦茶だ」

「その通り。無茶苦茶筋が通っている」

斧乃木ちゃんはいくまで棒読みである。

ファッションはブレても、そこはブレない——とことん人形である。その点、『へのもへじ』のほうが、よっぽど愛嬌あいぎょうがあるくらいだ。

「鬼のお兄ちゃんに相談を持ちかけたこともね。僕の知る限り、この国の法律じゃあ、人形を虐待し、監禁することが、重罪ってことはないもんね——露見しても、楽になるだけだ」

「楽になる……、家住准教授本人は、このことに自覚的なのか？　つまり、ええっと、なんて言ったらいいか……、このぬいぐるみを、唯々恵ちゃんだと心から信じているのか？　それとも、偽りの人形だとわかっていて、我が子じゃないことも承知していて、それでもやめられずにいるだけなのか？」

だから、僕という学生の手を借りてでも、やめようとしたのか——僕に協力を要請したのは、僕が児童虐待の専門家だからじゃあなく、これと言って利害関係のない、都合のいい第三者だったから？

接点がなかったからこそ？

「利害関係はなくとも力関係はあるでしょ。恩師と教え子なら、言うことを聞かせやすいと言うか……、「コントロールはしやすいものね」

「……………」

僕がここでこうして棒立ちになるところまで、大学教師の思う壺だって言うのか？　まあ、そんなことでショックを受けるほど、僕も純真無垢じゃない。利用されるのも、いいように使われるのも、慣れっこだ。

奴隷だった経験を持つ十九歳である。

だけど、せめてそれなら、結果として誰かが幸せになって欲しいものだ……。『やってられないから、全部しっちゃかめっちゃかになってしまえ』なんて企みに、荷担するのだけは御免だった。

「会ったこともないインテリのセンセイをフォローしておく、たぶん無意識の企みだと思うよ。彼女も苦しんでいる。愛する我が子を、虐待せずにはいられない母親のように」

「……それは当てこすりという奴ですか、斧乃木さん？」

「そのつもりだったけど、うまくできた？ まあ、怪異の専門家として言わせてもらえるなら、鬼のお兄ちゃんの恩師にはカウンセリングを受けることを勧めるよ。表向き正気を保っているように見えても、ほとんど限界ぎりぎりなのかもしれない。このハンドメイドのぬいぐるみを我が子だと信じているのかどうかという問いに答えるなら、心から信じて、かつ、心から疑っているんだろう」

信じて、疑う。

まさしく人間の特技だな。

怪異の出番はないってわけだ……。元吸血鬼も、死体の付喪神も、お呼びじゃない。だったらおいとまするでしょう、斧乃木ちゃんの言う通り、冷蔵庫やゴミ箱なんて、調べるまでもない。おそらく旦那さんのベッドルームだと思われる、第三の部屋についても。

「…………ん？」

と。

振られたような気持ちで踵<sup>きびす</sup>を返そうとしたそのとき、僕は余計なことに気付いた——気付いてしまった。

僕の駄目なところだ。ここが一番駄目だ。

怖い物見たさだったのだろうか、檻の中のぬいぐるみを、最後の最後に、もう一度視認してしまつて——そのバランスの悪さを不自然に感じた。

ごろんと無造作に、檻の中に放り込まれているだけのようにも見えるのだけれど、ちよつと半身つぱいと言うか……、あのずんぐりむっくりな形状だと、あんな妙なポーズでは安定しないんじゃないだろうか？

重心の問題か？　ぬいぐるみの中身に、ダンベルでも入れているんだろうか……、ただの布の塊にするより、そのほうが、重さはリアルになるかもしれないけれど……、いや、だったらぬいぐるみ全体が、もうちよつと歪<sup>いひよう</sup>なフォルムになるはずだ。

それとも、正面からは見えない背中側に、つつかえ棒があるんだろうか？

「どうしたの？　鬼のお兄ちゃん。行こうよ。殺されたいの？」

「ん。ちよつと……」

またも僕の殺害を目論む斧乃木ちゃんを制して、僕はおっかなびつくり、檻へと近付く……、ケージは部屋のすみっこ、壁際ぴつたり配置されているので、回り込むより、真上から覗き込

んだほうが早い。

シンプルな門錠<sup>かんぬき</sup>を開けて、ぬいぐるみを取り出して確認するのが一番スピーディかもしれないけれど、直<sup>じか</sup>に触るのが恐いと言う以前に、僕に触る資格があるとも思えなかった。

あれに触っていいのは、家住准教授だけだろう——そんな考えと共に、僕はケージを俯瞰<sup>ふかん</sup>したわけだが。

「……ねえ、斧乃木ちゃん。念のために確認させてほしいんだけど……、赤ちゃんの人形を檻に閉じ込めて虐待するのは、まあそりゃ、犯罪じゃないとして」

「なんだよ。思わせぶりだな。僕は殺すと言ったら本当に殺すよ？」

「そう。その『殺す』って奴だ」

「？」

「赤ちゃんの人形を背中から刺し殺すのだって、この国では犯罪じゃないよな？」  
見れば。

ハンドメイドのぬいぐるみが倒れないよう、不自然なポーズを背後からつつかえ棒のように支えていたのは、深々と突き刺さった、調理器具の果物ナイフだった。



ぬいぐるみを虐待するのと、ぬいぐるみを刺し殺すのとの間には大差なんてない、なんならまったく同じであると、ニヒルにそう言える感受性が欲しかった。

だけど、僕が知るところ、果物ナイフは果物以外の物体を刺すための道具ではないし、人形、それも、我が子の代わりの人形を刺殺するための凶器ではないはずである。

これじゃあ、三重密室の意味が変わってくる——監禁事件のはずが、密室殺人事件になってしまっじゃないか。

もちろん、人の形をしようと、人形は人形だ……、たとえ突き刺しても、悲鳴を上げることはないし、流血することもない……、『人形を殺す』という表現自体、数学的に真ではない。

人形は死なない。生きていないんだから。

死体人形でもない限り、刺そうと切ろうと、皮を剥むこうと、死んだりはしない。

だからこそ異常なのだ、生きてもいない、死にもしない人形を、しかも背中から刺すという行為は——この行為が大差ないのは虐待ではなく、肩甲骨をもぐレベルの、テレビに出せない凶悪犯罪のほうである。

まあ、言うまでもなく、密室殺人事件だと捉えたところで、犯人は家住准教授で決まりだろう……、ぬいぐるみを刺して、檻に放り込んで、門錠を下ろす。部屋を出て、廊下側から鍵を掛ける。そして靴を履いて外に出て、玄関を施錠する——現象においては謎はない。謎めいているのはその胸中だ。

矛盾している……、虐待の末に殺してしまった、なら、まだわかる。そりゃあ気持ち悪いが、理解できないわけじゃない……、エスカレートして、それとも、未必の故意で、いつときの昂り<sup>たかぶ</sup>で、か弱い命は、たやすく死んでしまう。

檻に閉じ込めて、三日間放置して、栄養失調やら何やらで、幼児が命を落とす——抵抗はあるが、矛盾はない。

だけど、刺してから檻に閉じ込める？ 我が子だと思い込んでいるぬいぐるみを……、いったいその順序に、背反する組み合わせに、どういう意味がある？

背中から刺すという行為には明確な殺意がある分、ますますこんがらがってくる。

家住准教授は、なにゆえに、どうしてこんなことを——僕という『第一発見者』がこんな風に、嵐のように混乱することまで、彼女の思惑通りなのだろうか？

折り込み済み？

たとえこのぬいぐるみを、本当に我が子だと思い込んでいるにしても、だったら僕がこれを目撃してしまうまずさは、彼女が一番よくわかっているだろうに。

それとも、理解しようとするほうが、間違っているのだろうか。確かに、どうしても知りたいのなら、本人に訊くしかないことでもある。

どちらかと言えば、どうしても知りたくないような心理描写だし、できれば、もう関わり合いになりたくないくらいだ……。夏休み明けの後期では、スイスドイツ語の授業には一回も出席すまいと、断固として決意したい。

……ただ、そもいかない。

果物ナイフについてはノーコメントを貫いた斧乃木ちゃんと一緒に、今度こそ退室しつつ、僕はそう嘆息する。

浅ましくも単位がそこまで欲しいわけではなく、准教授から預けられた鍵を、それだけはさすがに返さないわけにはいかないからだ……。それに際してカウンセリングを勧めるのは、十歳近く年上の大人に対して、いくらなんでも出過ぎた真似だとは思うけれど、たとえどんな裏があつたとしても、たとえどんな闇があつたとしても、助けを求められた身としては、見たものを見たまんま、報告しなければ。

一緒に信じてあげることとはできそうもない、少なくとも、あの刺し傷を見たあとじゃあ……。ただ、念のために、鍵を返すときには、第三者に立ち会ってもらったほうがよさそうだな。

一対一で会うのは避けるのが賢明だ。お互いに危険である……。あの清潔な研究室のどこかに、果物ナイフがないとも限らない。

加害者を生まないためにも、僕は被害者になつてはならない。

斧乃木ちゃんにそこまで同行してもらつたわけにはいかないのは当然として、責任論で言うなら、その立ち会つてもらつた第三者とは間違いなく老倉育であるべきなのけど……、あのスィートハートとは今、絶交しているからな……、ええと、じゃあ、他に頼れる誰か……、この時間でもまだ帰宅せずに大学に残っている、できれば家住准教授のことを知っている奴……。

そんなことをあれこれ考えながら、僕は童女を後部座席に積んだニュービートルで曲直瀬大学にとんぼ返りしたわけだが、結論から言うと、これらの考察は、肩甲骨でも大腿骨でもない、まるっきりの無駄骨だった。

骨抜きと言つてもいい。

骨折り損——とは言うまいが。

ほんの数時間前、僕が面会した大学教師、一児の母である家住羽衣准教授は、あれこれ頭を悩ましながら、僕が再び研究室を訪ねたとき、姿を消していたのである。

忽然と。

消していた——消えていた。

翌日も、翌々日も、その明日も、その明後日も。

彼女は職場に現れなかった——僕に自宅の鍵を預けたまま、檻に我が子を閉じ込めたまま、その所在をくらました。

まるで、神隠しに遭ったかのごとく。

だとすれば、彼女は何と取り替えられた？

待ちに待った夏休みに突入！ いえい！

さあ、みんなで何して遊ぼうか？

……という展開には、もちろんならない。展開にはならないし、気分にもならない——なるものか、なつてたまるか。ただただ、厄介なことになった。『どうしてこんなことになった』は、今や僕の口癖のようなものだが、今回は特にそう思う。何一つ、ミスらしいミスはしていないはずなのに——それとも、教員からの呼び出しに応じるべきではなかったとでもいうのか？

その教員が、僕と話した直後に行方知れずになるなんて、わかるものか……、僕が失<sup>しつ</sup>踪者の最後に会った人物になるなんて、わかるものか。それに関しては嫌な予感さえしていない。ひよつとすると自己紹介がまだだったかもしれないけれど、僕は元吸血鬼であつて、予言者じゃないのだ。今頃どこを放浪しているかわからない中年アロハのように、未来を見透かしたようなことはとても言えないし、言いたくもない。

大学教員が試験終了直後に失踪したのだ。当然学内は大騒ぎになるし、大事にもなる……、当たり前なことだが、僕も各所から事情を聞かれることになった。まあ、その辺は適当に凌いでおいた……、適当な誤魔化しは僕の十八番と言つていいし、333号室内のベビールームの様子

を、本人の許可なく誰かれなく吹聴するほど、僕も無神経ではない。第一、僕にだってよくわからないものを、どう吹聴しろというのだ？

試験の採点は、研究室に属す助手なのか、それとも教授なのかが代わりにおこなったようで、答案は無事に手元に戻ってきた——人間がひとり失踪したくらいでは、今時の学術機関は滞らないらしい。特定の誰かにしかできない仕事なんてないというわけか。ちなみに僕はC評定で単位を取得していた。今一番どうでもいいことだが。

神隠しとか、『取り替えっ子』とか、そういう怪異現象を抜きにして、状況を現実的に解釈するならば……、いち学生の僕に自宅の様子を見に行かせた家住准教授が、その後、冷静さを欠いた、動転の表れとしか言えないその行為を遅まきながら後悔し……、『我が子』の虐待が表沙汰になり、大騒ぎになることを恐れた彼女は、自分の決断で『逃亡』したというのが、もつとも順当な推理ということになるのだろう。

ハンドメイドの人形を虐待することは罪ではないし、その人形を背中から刺すことも罪ではない——だから、それが僕に知られ、僕がその情報をたとえ口さがなく世間に言い触らしたとしても、何も、身も世もなく逃げることはないのだけれど、それは所詮法律の上での話でしかないし、斧乃木ちゃんの言っていた通り、家住准教授がどこまで自覚的だったのかは不明である。

日によって、自覚症状があったり、無自覚だったりのグラデーションだったかもしれない——なので、依頼内容も、逃亡劇も、どちらもが論理的に破綻していたところで、無理に整合性を取る

うとするべきではないのだろう。

これは推理小説じゃないのだ。まして犯人当てでも。

国家から委託されていた極秘の研究内容に目をつけられた准教授が、特務機関に誘拐されたんじゃないかというような、荒唐無稽な陰謀論が学内では囁かれてもいたけれど、普通に想像すると、家住准教授はきつと、すべての思い出を捨てて、生まれ故郷であるスイスにでも帰ったのだろう……。関係の悪いご両親と別れるために日本に来たということだったが、向こうにいても、会わずに済む方法はあるはずだ。

わだかまりを捨て、関係を修復したなんてハッピーエンドだって、無理矢理イメージすることもできる。

人間の想像力は無限だ、よくも悪くも。

悪くも——そんな必要もないのに、あっちこっちから逃げ回るみたいになっている家住准教授の姿を想像すると、むしろすつきりはしない……。否、結局のところ、どう解釈しようと、彼女の思い立った失踪に関して、僕が直接的な原因となっていることを思うと、まあ……。凹む。

べこべこに凹む。

理屈ではわかっている。『児童虐待の専門家』である僕がああの依頼を断っていれば、家住准教授は、素直に言うことを聞く他の学生に接触し、その後、似たり寄ったりの展開に収束していっ



ただけだ……、何のかんの言つて、『三歳の娘』への虐待行為まで含めて、すべては彼女の独り芝居でしかないのだから。

展開の主導権は最初から最後まで彼女の手にはしか握られていない。

でも、理屈は理屈だ。感情とは違う。

そんなわけで、大学生活最初の夏休みは、華やかどころかしよっぱい出だしとなった……、地獄のようなとは言わないにしても、計画することを計画していた、ひたぎとの北海道旅行も、まともや延期となった。

打ち合わせはしたのだけれど、さすが目端の利く彼女は、僕の潜在的なテンションの低さを見逃さなかったわけだ。

まあ、元々蟹のシーズン……、冬に行こうって約束だったしな。

そうになると、放って置かれたら夏休み中、家住准教授のことで、自宅でうじうじ思い悩み続けることもできたのだけれど、僕の人付き合いのセンスも昔よりは高まっていて、なかなかひとりきりにしておいてはもらえなかった。

嬉しいねえ。

その日の朝、携帯電話にメールが届いた。

女子高生の友達、日傘<sup>ひがさ</sup>ちゃんからだった。

『阿☆良☆々☆木☆セ☆ン☆パ☆イ☆本☆日☆午☆後☆一☆時☆か☆ら☆直☆江☆津☆高☆校☆  
体☆育☆館☆に☆て☆女☆バ☆ス☆で☆先☆輩☆後☆輩☆大☆交☆流☆会☆や☆る☆ん☆で☆ゲ☆  
ス☆ト☆に☆来☆て☆く☆れ☆た☆ら☆も☆て☆も☆て☆す☆よ☆！☆ま☆ず☆は☆る☆が☆  
☆ー☆の☆家☆に☆集☆合☆D☆A☆！☆今☆す☆ぐ☆G☆O☆G☆O☆！☆☆☆☆』

読みづらい。

名前が名前だから、文面にも流星雨を降らせてみせたのかもしれないけれど、そもそも打ちづらいただろ、このメール。

なんとか解読してみる……、ふうむ……、先輩後輩大交流会……？ 崩壊寸前だった直江津高校

女子バスケットボール部も、数カ月がかりで、ようやくそこまで立ち直ってきたわけだ。

僕も微力ながら協力したので、それは素直に嬉しいニュースだったし、僕がその会に出席することで、かの部活動がより全盛期のありかたに、わずかなりとも近付くのであれば、喜んで母校を訪ねよう。

いや、もてもてに期待しているわけではないし、本音を言えば、あの母校には一歩たりとも近付きたくないのだけれど……。

それでも気分転換にはなるだろう。

任務でしくじったからというわけじゃないが、今は人の役に立っている感覚が欲しい——そう、解読とさえい

命日子に頼んでおいた『あれ』は、どうなったかな？　その後、続報がないけれど……、忘れていたのかもな、あいつのことだから。

まあ、駄目元だ。

駄目なら駄目でいい。駄目なほうがいいくらいである。

まずは神原家に集合ということだったので（ちゃんと内諾は取っているのだろうか？　親友の家を勝手に待ち合わせ場所に指定する癖が、日傘ちゃんにはある）、僕が着替えて、出掛けるために階下に降りる。

と、玄関そばで月火と遭遇した。

和装の妹、阿良々木月火である……、ころころ髪型を変えるちっちゃいほうの妹の現在のヘアスタイルは、前髪まで含めて一括りにしたポニーテールである。

おでこが可愛い、むかつくほど。

「あらあら、お兄ちゃんってば、ちょうどいいところに。私の大切なぬいぐるみ、知らない？」

「ぬいぐるみ——」

斧乃木ちゃんのことか。

どうやら童女は、着せ替え人形扱いに辟易して、またもやシスタールームから避難したらしい……、だとすれば、再びニュービートルの後部座席でごろ寝しているのかもしれないけれど、いくら相手が最愛の妹でも、それをぺらぺら教えるわけにはいかないな。

斧乃木ちゃんには随分迷惑をかけてしまったし、せめて妹の魔の手からくらいは守ってあげたい……。結局あのあと、家住准教授の件に関して、あの子とはぜんぜん話していないのだけれど、人形の斧乃木ちゃんは、人形が背中から刺されている姿を見て、彼女なりに思うところがあつたのかもしれない。

まあ、でも、家住准教授の件について話していないだけで、テレビドラマとかハーゲンダッツの新作アイスとかの話は普通にしているので、斧乃木ちゃんはあの出来事を、単に『済んだこと』として処理しただけという線も強い。

いずれにしても答はひとつである。

「悪いが、知らないな。僕はなんでもは知らないんだ、知ってることだけ」

「誰の台詞だっけ、それ？　なんか聞いたことあるな」

お前は去年の夏、あれだけ慕っていた羽川のことを忘れたのか……。さっぱり人生で、実に羨ましいな。

僕の落ち込みを半分わけてやりたいぜ。

「まあいいや、あんなぬいぐるみ。そろそろ新しいの買おうと」

「さっぱりし過ぎだろ」

「で、お兄ちゃん。おめかしして、どこにお出かけ？」

「おつと。地元で有名なファッションアドバイザーの月火ちゃんには、僕がおめかししているように見えるか？」

「うん。女子高生にちやほやされようとしているように見える」  
鋭いんだよな。

褒め言葉として受け取っておこう。

「日傘ちゃんに会うんだよ」

「あー。あの人。なぜかうちに、週三で遊びに来る」  
面識はあるのだ。

なにせ週三で遊びに来るから。

「ちなみにあの人、下の名前、星の雨って書いてなんて読むの？　せいう？　ほしあめ？」

「どっちもなんだって。安倍晴明<sup>あべのせいめい</sup>が、明るい晴れと書いて、せいめいと読んだりするあきと読んだりするのとおんなじだ」

「そ、そんなのありなの……？」

「お前こそどこにお出かけた？　その着物、外出用の奴だろ？　火憐ちゃんとパトロールか？」

「ファイヤーシスターズは解散して久しいんだよ、お兄ちゃん。私にとっては過去のヒット作なの。火憐ちゃんは火憐ちゃんで高校のお友達とハイキングだし、月火ちゃんは月火ちゃんで、中学のお友達とハイキングなの」

ハイキングって。

今、中高生の間でブームなのか？

若者のブームに追いつけなくなってるぜ。

火憐の場合はあれかな、またハードな山登りかな……。しかし月火は、あまりアウトドア派じゃないはずなのだが？

「うん。なんかね、隣の山奥に死体が埋まってるって噂を聞いたから、みんなで見に行こうって話になって。ザ・ボディごっこ」

「……ザ・ボディごっこ？」

「うん。月火ちゃん、原作派だから」  
気取ってんなあ。

まあ、ファイヤースターズの正義の味方ごっこよりはいくらか健全かもしれない……。山奥の死体どころか、虐待児の死体を発見しかねない冒険をしたばかりの兄としては、いささか窘めにくい。

僕の場合、同行者まで死体だったが……。もっとも、月火も斧乃木ちゃんを探していたところを見ると、ぬいぐるみを抱えてハイキングに行くつもりだったのかもしれないけれど。

それも鋭さと言うか。

宝飾具を装備して、宝探しに行くみたいなものだな。

いずれにしても、大学生にもなってあんまり、妹の素行にぎゃーぎゃー口を出すのもな……、  
そういう不謹慎な噂話に振り回されるのも、また青春だろう。

中学校と高校で分断されたことで、べったりずぶずぶの関係だったふたりの妹が、いい具合の  
距離感になっているのも、好ましい傾向だし。

「だけど、本当に死体があったら、ちゃんと通報しろよ？」

「当たり前じゃん。月火ちゃんを誰だと思っているんだい？」

「月火ちゃんだろ。そりゃ」

ふむ。

しかし三人の子供がそれぞれにお出かけとか、阿良々木家は平和である——最低限、誰ひとり、  
檻に閉じ込められてはいない。

「月火ちゃん。僕達は本当に恵まれているよな」

「んー？ なにそれ？」

「着るものにも食べるものにも寝るところにも、不自由してなくてさ。もっと親に感謝したほう  
がいいのかもしれない」

「急にどうした。母の日になるたびに、どこかに姿を消していたあのお兄ちゃんが」

「今年はどこにもいかなかっただろ。約束通り」

「父の日にはいなかったじゃん。影も形も」

「父の日までは約束していない」

まだ父親に対しては、そこまで素直になれない僕なのさ。

まあ、父母の日に関しては、斧乃木ちゃんとも、既に話したテーマなので、ここでは繰り返さないとして。

「まー、お前も屋上から飛び降りたり不良グループに拉致<sup>らち</sup>られたり、いろいろあったけど」

「あったねー」

「家が平和つてのは、ありがたい話だよな」

僕も春休みが地獄だったたりゴールデンウィークが悪夢だったりしたけれど、基本それらはすべて、家の外での出来事だ。

家庭が地獄だったり、家族が悪夢だったりしたわけではない……、どんなに親子関係、兄妹関係が悪化したときでも、少なくとも、命の危機を感じたことはない。

夕食のテーブルに、僕の席は、いつもあった。

戦場ヶ原ひたぎが母親に強いられた親孝行や、羽川翼が廊下で寝起きしていた事実は、やはり未だ、僕の中でうまく消化できない……、どれだけ寄り添うようなことを言っただって、あるいは厳しく怒鳴りつけたところで、本当の意味で、僕が彼女達の苦しみを理解することはできないだろう。



死にそうになる事件に遭遇しても、僕の場合、それはやっぱり、一時的なアクシデントだった——いわば期間限定の悲劇だ。

保護者から保護されないというような、先の見えない永遠じゃなかった。

「そうだね、家庭内に問題があったら、私も火憐ちゃんも、外に悪事を探しにいかなくてもよかったわけだもんね。阿良々木家が有している問題なんて、せいぜい、兄が妹を性的な目で見るくらいだもんね」

「問題が大き過ぎる。見てない。侮蔑ぶべつの目で見ている」

「感謝しなきゃね。まあ、親は親で子育ての喜びを覚えているはずだから、お互いさまだとも言えますが」

「言っちゃ駄目だろ。子供サイドから」

「次に生まれ変わったときは、パパとママの母親になって、大切に育ててあげると誓うよ！」  
「こんがらがってるな。」

「お前が生まれ変わりとか言っていると、結構な真実味を帯びてしまうのだが……、結構と言っても鶏ではなく、ホトトギスである。」

「しでの鳥。」

「そして——フェニックス。」

「それを言うなら月火ちゃん、次に生まれ変わっても、私はパパとママの娘になりたい、とかじゃねーのかよ？」

「確かに！ 私、阿良々木家に生まれてよかったって、本当に思うよ！ パパとママの娘に、お兄ちゃんと火憐ちゃんの妹に生まれてとっても幸せ！ 生んでくれて頼んだわけじゃないけどね！」

「一言多いな」

「欲を言うなら、お兄ちゃんのお姉ちゃんに生まれない！ 弟くんなお兄ちゃんをめっちゃいいめたい！」

「二言多いな」

お前に虐待されるのだけは御免だよ。

母校には体育会系ならではの徒歩（ランニング？）に付き合うとして、最初の集合場所である神原の日本家屋までは自動車かおくで向かうことにした非体育会系の僕だったが（運転できるようになった自分を後輩に見せたいという欲があるのかもしれない）、意外なことに、後部座席に斧乃木ちゃんは乗っていなかった。

ここに避難したわけじゃなかったのか……？　じゃあ、ひよつとして、千石のところに遊びに行っただろうか……。東に西に、なんとも活動的な死体である。

まあいい、どのみち、女バスの交流会に、童女を連れて行くわけにはいかないのだし……。で、タイムスケジュール通りに物事が進めば、神原駿河、日傘星雨という、直江津高校在籍の後輩ふたりと合流するはずだったのだが、

「やあやあ、お久し振りですねえ、阿良々木先輩——ご機嫌いかがですか？　僕です、駿河先輩の大ファンである、二年生の忍野扇ですよ」

神原家の巨大な門扉もんびで僕を出迎えてくれた後輩は、BMXにまたがった忍野扇、男子高校生バ—ジョンだった——神原家は神原駿河のテリトリーなので、男の子版らしい。

その辺を自己紹介しながら現れてくれるあたり、相変わらずだ。

如才なくて何より。

「……女子高生ふたりは？」

「パーティに向けての買い出しに手間取っているようでして、僕がお留守番を任されたのです。駿河先輩からの信任の厚いこの僕がね。阿良々木先輩のお相手をするよう、申し付けられているに決まっているじゃありませんか」

神原が扇ちゃん——もとい、扇くんに、留守番を任せるとは思えないけれど、まあ、決まっているのなら仕方ない。

決まっているのだもの。

「僕も駿河先輩に野暮用がありましたので、ちょうどよかったのです。ご安心ください、のこの交流会についていったりはしませんから。どうです？　これからおふたりの帰りを待ちがてら、僕と阿良々木先輩とのコンビで、駿河先輩の部屋でも片付けませんか？」

「女子の留守中に男子二名が部屋をいじり回しちゃ、さすがに駄目だろ……」

「あー、阿良々木先輩ってば、何を駿河先輩のこと、女子として意識してんですかー。僕の駿河先輩を、そういう目で見てるわけですかー？」

「……………」

男子版の忍野扇が、絡みづらい。いや、女子のときでもこんな感じだったかな？ いずれにしても、僕は男子高校生時代、男子高校生同士の会話というのにあまり参加できなかったほうなので、新鮮だった。

阿良々木暦が忍野扇相手に堅くなつてどうするんだつて感じたが。

「つて、かくいう僕は隠れ日傘先輩派だったりするんですけどねー。取り合いっこなしですよ？」

「あれだけ駿河先輩駿河先輩懐いておいて、隠れ過ぎだろ。取り合いっこつて……」

「はっはー。それとも、推しを『取り替えっ子』します？」

「……はは」

油断ならねえなあ。

あくまで『扇くん』は神原の心の闇であるわけだけど、やつぱり同一人物である『扇ちゃん』は僕の心の闇なので、これくらいの見透かしはしてくるわけか。

忍野メメの姪——忍野メメの甥おいだしな。

「いえいえ、僕は何も知りませんよ。あなたが知っているんです、阿良々木先輩」

「だったらよかったんだけどな。月火ちゃんにも言ったけれど、僕は知ってることしか知らないよ」

「でしたら、ご存知でいらっしやる事情を、この忠実な後輩に愚痴るといふのは如何いかです？ た  
ただおとなしく、反論も許されずに聞くしかない力関係を利用して」

「僕ってそんなぐいぐいパワープレイをする先輩だったっけ？」

おとなしく聞くタイプじゃなかうに。

反論しかないじゃないか。

ただまあ、このまま神原の家の前で、無為に時間を潰すくらいなら、お喋りのテーマに児童虐待と准教授失踪を持つてくるのは、なしよりはありかもしれない。

まかり間違つて神原や日傘ちゃんに愚痴るでもなく愚痴つて、せつかくの先輩後輩交流会に水を差してしまうようなことがあつてはならないし……、『王様の耳はロバの耳』じゃあないが、扇ちゃん……、扇くん相手に口を滑らせておくと、気持ちも楽になるかもしれない。

そういう言い訳を用意した上で、僕はできるだけ手短にまとめて、扇くん的心情を吐露した——こんなもん、究極的には独り言みたいなものなのだけれど、まあ、忍野扇相手に口が軽くなるのは、いわば阿良々木暦の伝統芸である。

「へえー。三重密室ですかあ。嬉しくなっちゃいますねえ。昨今、密室トリックって言葉自体、あんまり聞かなくなっちゃいましたもんねえ」

「そこで無邪気に嬉しがられても困るね。それぞれ密室ではあっても、トリックなんて、どの扉にもなかったし」

僕はあの日以来、ズボンのポケットの中に入れっぱなしにしてある、家住准教授のマンションの鍵を意識しつつ、そう肩を竦める――返却前に失踪されてしまったので、だからと言って捨てるわけにもいかず、ずっと持ち歩いているのだ。

それがよくないのかな。

「第二の扉なんて、斧乃木ちゃんが蹴破っちゃったし」

「ですねえ。夢のないことを言ってしまうと、密室殺人事件のような不可能犯罪をプロデュースするのは、知能犯のすることではないのでしょうか。大学教師ほど知的な職業もなかなかありませんのに」

にたにた笑いながら、扇くん。

虐待だの失踪だの、重いワードが満載の話を聞いても、ぜんぜん揺るがない――性別がどうあれ、この子はこうでなくっちゃな。

「で、どう思う？ 扇くん」

「どうと言われますと？」

「矛盾について。我が子に見立てた布人形を、果物ナイフで背中から刺して檻に閉じ込めるって、行為の是非について」

「是非で言うならもちろん非ですが、矛盾で言うなら盾でしょうね」

「盾？」

「保身ですよ。防衛です。参考までに述べると、矛は怨恨えんこんや殺意に基づく攻撃性ですね」

「……背中から無抵抗の人形を刺しているのに、保身？」

「ええ。殺される前に殺せという、臆病者の犯罪です」

知能犯のすることじゃないと言ったかと思うと、臆病者の犯罪とか……、家住准教授へのバツシングが激しいな。

僕の深層心理か？

でも、扇くんは扇ちゃんと違って、存在としては神原よりはずなのだが……、しかし、神原の裏面と言えば……。

「やだなあ、阿良々木先輩ったら。僕は別に、家住准教授を非難してはいませんよ」

「え？」

「だって、証拠はないじゃないですか——家住准教授が、無抵抗の人形を背中から刺した犯人だなんて、決めつけることはできません」

推定無罪の原則ですよ——と、扇くん。

その原則は、僕も法治国家の住人として、もちろん知っているけれど……、えっと、あれ？

確かに、証拠はない。言われてみれば。

鑑識が入って、果物ナイフの指紋を調べたわけでもなく、もっと言えば、本人に事情聴取をしたわけでもない……、僕が勝手にそう思ったただけだ。



僕が知っている――

「犯罪捜査はおこなわれておらず、強いて言うなら、おこなわれたのは印象操作ですよねえ」

「……………」

待て待て。これはきちんと考えないと。

人権にかかわる……、僕の迂闊<sup>うかつ</sup>な発言が、扇<sup>あき</sup>くんに揚げ足を取られるのはいつものことと言えるけれど、それが冤罪の温床になってしまったとなると、猛省が必要になる。

そうだ。

矛盾だ。

我が子に模した虐待用の人形を、けれど背中から刺すという行為に整合性がないと、僕はあのベビールームで大層な居心地の悪さを感じたわけだけれど、その点を分断して解釈すれば、矛と盾は、衝突しない。

自宅で『三歳の娘』を檻に閉じ込めているという『事実』については、これは依頼の際、本人が訥々<sup>とつとつ</sup>と告白している……、だから僕は、檻の中の人形に刺さっている刃物を見たとき、それもまた家住准教授の仕業であると、迷いなく受け取めた。

「ですが、そんなの、勝手に違和感を感じただけのことですよ――人間が『おかしいな』とか『これ、どうやっているんだろう?』とか、『どうしてこんなことに……』とか、そんな風に感

じるときは、大抵、複数人が多方面から野放図に関わっているときなんですよ。だから理解を超えてくる」

複数人——複数犯。

いや、そう言っていると、まるで共犯者がいたように聞こえてしまうけれど、そうではなく、意思疎通のない個々による、完全な分業体制が敷かれていたとするなら……。

仕事内容を細かいセグメントに分割し、大人数に、ばらばらに担当させて、全体像を誰にも把握させないことで、機密を保持する——余所から見ても何をやっているかわからないどころか、本人達すらも、自分がいったい何をやっているかわからないようなシステム。

シンプルに言うなら。

唯々恵ちゃんを『閉じ込めた犯人』と、唯々恵ちゃんを『背中から刺した犯人』が、まるっきりの別人である可能性を、僕はまったく検討していなかった。

虐待する行為と、殺害する行為。

ほぼ隣り合うようなパズルのピースは、しかし別段、組み合わせなくてよかったのだ。

「……………」

だけど……、当然、別の疑問も生まれるよな。

まずは、児童虐待犯の他に児童殺害犯がいるという発想を採用するとして、じゃあそれはどこの誰なんだって疑問だ。

そして、その誰かは、どうやって、犯行を成し遂げたのか――である。それこそ、古きよき時代のミステリーの三重密室、不可能犯罪。

犯行現場が家住准教授の自宅だったからということ成り立っていた理屈の大半が崩壊し、犯人像も、動機も、トリックも不可解になる。

「そうでもありませんがね」

「どういうことだい、扇くん」

「そんな典型的な助手役みたいな台詞、阿良々木先輩には似合いませんよ。僕は何も知らないんですから、どうぞ要点は、ご自身の脳細胞でお考えくださいな。灰色の脳細胞でね」

白々しいぜ。

しかしまあ、確かにこの子に、頼り切りになるわけにもいかない――僕にお似合いの『初歩だよ、扇くん』という台詞を言わせてもらうために、想像力の翼を隅々まで広げよう。

動機は、まあいったん置く。僕は動機の女王じゃない。家住准教授の場合、虐待にしろ殺害にしろ、『自分の娘だから』という、本来ならば保護する理由になるはずの『だから』が、逆説的に動機へと接続されるのだとしても……、他に犯人がいたとなると、人が人を殺す理由は、無限のヴァリエーションに富むはずだ。

「どうでしょうね。人が人を殺す理由は、大抵は、恋愛か、怨恨か、金銭か、戦争ですがね。事故を含めても、たった五パターンですよ、片手で数えられます」

扇くんのほうが助手役に回ってくれたようだが、嫌な助手役だな……、茶々を入れるばかりで、ぜんぜん探偵役に賛同してくれない。

絶対語り部になってほしくない。

「三歳児を殺す理由となると、変態性欲を動機に含めるべきなのかもしれませんが。まして、人形となりますとねえ」

なんのこれしき。

とにかく動機は一回置いて……、密室トリックは？

檻の門錠はどうにでもなるのだ。あれにピッキング技術は必要ない。だけど、ベビールームの鍵と、玄関の鍵を開けられるのは、家主である家住准教授だけなのだから――

「それも、どうでしょうね。だって、事実として、第一の扉は阿良々木先輩が解錠しましたし、

第二の扉に関しては斧乃木ちゃんが、見事突破してくれたわけでしょう？」

慇懃無礼な助手の、容赦なき突っ込みは止まらない――いやいや、ここは言い返せるぞ？　だ

って、第二の扉なんて、まさしく突破で、破城槌はじょうつちでぶっ壊したようなものである。

見事と言うより、見なかったことにしたい破壊だった。

第一の扉でも、開けられたのは僕が家主から鍵を預けられていたからであって、それがなければ、密室への侵入は不可能だった――それとも犯人は、合鍵を持っていたとでもいうのか？

家住准教授のキーホルダーから、一時的に自宅の鍵を拝借して、「コピーを取って……、あるいは、マンションの管理会社から、マスターキーを盗み出し……」。

「あれ？　そこまでしなくてもいい……のか？」

合鍵じゃなかったとしたら？

なかったとしたら——第二の扉の密室性も、また、いったん置いた動機の問題も、恐ろしいことに、一挙に解決する。解決するのだが……。

「ど、どど、どういいうどういいうことですすか、そ、そそ、そこまでしなくてもなくてもなくてもいって、ててて」

「今更助手ぶるな」

動揺し過ぎだろ、その助手。動転し過ぎてDJみたいになってる。

なんでちゃんとできないんだ。

いや、ちゃんとできていないのは、僕だった——こんな推理は、その場でできていなければならなかった。

僕は言う。

合鍵じゃなくて、持ち主にきちんとした所有権のある、つまり正当な鍵だったなら。

「別居中の旦那さんが、あのマンションから出ていくにあたって、鍵を置いていったとは限らないよな？」

鍵を置いていったとは限らないなんて、まるで駄洒落だじゃれみたいになってしまったことについては、どうか見逃していただきたい——時には僕だつて動転はする。

元々僕が自分勝手に、友人が少なく、周囲と対立しがちで、とにかく誰か他の人間と協力して何かするという行為が苦手なので、そういう当たり前の発想に思い至らなかったというのもあるけれど、あの犯行現場が夫婦の共同作業だという可能性を完全に見落としていたことは、恥ずかしいくらいの盲点だった。

吸血鬼や死体人形や神様、それに心の闇とは、それなりにバディを組んだりもするけれど……、ただし、共同作業という言いかたは、比喻としては適切でも、やはり語弊がある。

虐待したのが母親。殺害したのが父親。

その工程がバラバラだから、現場はあれほど不可思議に見えたのだ——家住准教授の留守中に、旦那さんが帰ってきて、そして妻のハンドメイド作品を、背中から刺したのだとすれば、

動機は『自分の娘だから』。

別居の原因にもなった妻のその行為が、見ているのも不快だったから——なのか、それとも、旦那さんもまた、人形を『我が子』だと思い込んだ上で、刺したのか。

極論、『檻に閉じ込められていて可哀想』だから、憐憫れんぴんの情からとどめをさしたなんて説も成り立つ……、背中から刺したのは、『へのへのもへじ』の、目を見て殺せなかったから？

動機のヴァリエーションは無限大。

いや、いやいや、これもやっぱり決めつけに過ぎない。想像力の翼がはばたき過ぎた、会ったこともない旦那さんを、名前も知らない旦那さんを、こんな風にくどくど疑うなんて、人としてやっていいことじゃない。内心の自由は、少女や童女や幼女に対して行使すべきものであって、不法侵入や殺人を疑うときに、使いたくはない。

「一応はまだ自宅ですから、不法侵入ではありませんし、人形ですから、殺人でもありませんがね」

と、扇くん。

「でも、証拠はなくとも根拠がないわけではありませんよ？ 人形の出来不出来について、阿良々木先輩は語ってらっしゃいましたが、バルーンアートのごときフォーム作りと、落書きさながらの『へのへのもへじ』の落差……、これは、准教授が裁縫が得意で、絵画が苦手だったからと見てもよいですが、それぞれを別人が担当したから、と考えることもできますよね？」

「……………」

共同作業——分業。

ハンドメイド。

「だとすれば、それにはどういう事情があったのか。僭越せんえつながら申し上げますと、阿良々木先輩、捜査はいちからやり直したほうがいいんじゃないですか？ 准教授失踪の意味合いも、そうになると、多少変わってくるかもしれませんねえ」

「……………」

変わってくる、とは思えない。

分断し、切り放して考えると言うなら、その失踪に関しても、わけて考えるべきだ……、扇くんは、その失踪にさえ旦那さんが関わっているんじゃないかと僕を煽っているのかもしれないけれど、たとえ万が一そうだったとしても、それを調べるのは警察の仕事である。

元より僕に捜査権はない。

怪異現象——『取り替えっ子』現象がかかわっているのならば、そりゃあ経験者として、岡目おかめ八目はちめの言葉を挟むのもやぶさかじゃあないけれど、そうでないなら、弁えない探偵ごっこそれが、不法行為となりかねない。

斧乃木ちゃんに苦言を呈された通り、僕も憶えようじゃないか、警察に頼ることを。

なんてことを言いながら、しかし一時間後、僕は女バスの先輩後輩交流会の会場である直江津高校の体育館そばではなく、家住准教授の自宅マンションの駐車場に、ニュービートルを停めていた。



神原と日傘ちゃんが買い出しから戻ってくるのを待たず、扇くんに伝言を頼んで、ハンドルを目一杯切り、ぐるんとUターンし、そのまんま住家を再訪したのである。

こんな不義理を平気の平左で働くから、僕は大学でもなかなか友達ができないのだけれど、しかし女子高生にちやほやされるのはまた今度だ。

なにせ、ことは急を要する。

いや、知的好奇心に囚われ、衝動的に推理ゲームに乗り出した名探偵気取りというわけでは、断じてない……。むしろ僕は真逆で、殺人事件があつたなんて現場は、迂回してでも避けるタイプだ。理解を示すみたいなのを言ったけれど、死体が埋まっているなんて噂を聞いて、友達とハイキングに行く月火の気持ちなど、正直、理解不能である。

何をやっているんだ、あいつは。

たとえ殺人でも、犯罪でもなくつても、児童虐待行為のみならず、夫婦間の確執まで見え隠れしてきたマンションの一室を、あえて再訪した理由は、知的好奇心なんぞとは違って、あえて言うなら、扇ちゃん……。扇くんの言うところの盾である。

つまり保身だ。

扇くんと三重密室に関して話しているときに思い出した。と言うか、気付いた。簡単に開けられる檻の鍵ではなく、旦那さんが鍵を持っているかもしれない玄関の鍵でもなく、ベビールームの鍵、第二の扉のことだ。

第二の扉の施錠に関しても、かつてあの家に住んでいたであろう旦那さんなら、鍵のありかを知っていてもおかしくないわけで、つまり密室性は失われているわけだが……、そこまで考えたときに、はたと気付いたのだ。

見事に突破——破城槌。

斧乃木ちゃんがキック一発で壊してみせたわけだけれど、あれ、ひよっとして、やばくないか？

やばいなんてものじゃない。

鍵を預けられたから、今回は紅孔雀ちゃんのとくと違って不法侵入じゃないと高をくくっていたけれど、室内を破壊していいとまでは言われていないのに——檻の中の背中を刺された人形を見たことで、思っていた以上に混乱していたのだろう、後始末を完全に忘れていた。

人形を虐待する行為も、人形を殺害する行為も、どちらも犯罪ではないけれど、他人の家の室内の扉に対する破壊行為は、まごうことない。

斧乃木ちゃん……！

あの子、壊すことに躊躇ちゅうちよがないと言うか、余接だけに余念がないと言うか……、おとなしい顔して（どころか無表情で）結構平気であれこれクラッシュさせるんだよ……、紅孔雀ちゃんるときも、そう言えばマンションの窓とか、秒で割ってたよ。

そういう機能の道具だからと、本人は恬<sup>てん</sup>として恥じることなく、むしろ誇らしく答えることだろうが、その後片付けは、いつつも僕だぜ。

魔王を倒すのは勇者でも、戦いで破壊された世界を復興させるのは普通の人間、みたいな——いや、そんな教訓を得られるような話じゃぜんぜんなく、これは単にしつけがなってないだけのことである。なにせ、斧乃木ちゃんの本来の持ち主は、あの暴力陰陽師だから……、今の所有者である月火にしたって、お世辞にも整理整頓が生き甲斐というタイプではない。

なにせよ、考え足らずだった。

なまじ酷いベビールームだったから、破壊されたドアも馴染んでいたけれど、愛情の残骸みたいな部屋でも、リアルにドアまで残骸にしていいいなんて法はない。

今はまだ、問題化も事件化もしていないみたいだけれど、家住准教授の失踪が長引けば、いつかはあの部屋に、誰かしら、第三者が這<sup>はい</sup>入ることになるだろう——管理会社かもしれないし、それこそ、警察かもしれない。

行方不明とは言え、あくまで職場に姿を現さず、連絡も取れなくなっているというだけのこと、行方不明者届が出されているわけでもない——行方不明者届を出すべき、両親を含めた親族はおそらく全員スイス住まいだ——、現在のところ当局は動いていないようだけれど、それだけ限度はあるわけで。

家賃の振り込みが滞れば、いつかマンションは引き払わねばならないわけで——その際、あのベビールームが目撃されることになれば、そのときこそ一大スキャンダルだ。まず間違いなく、失踪と結びつけられるだろうし、そのとき、あの破壊された扉はどんな風に見られることやら……。

小心者が気を回し過ぎているのかもしれないし、実際、そうだろう——あのくらいの破壊で司法の手が伸びるのであれば、斧乃木ちゃんなんて、とつくの昔に逮捕されている（あの子は、阿良々木家の玄関も、木っ端微塵にしたことがある。僕の妹ごと）。

たぶん、斧乃木ちゃんの後始末は、普段は専門家の元締めである権力者、臥煙伊豆湖<sup>いずこ</sup>さんがおこなっているのだと思われる——そういう裏工作がことのほか得意なのだ、あの『なんでも知ってるおねーさん』は。

破壊工作に対する裏工作。

ただ、おねーさんと現在関わりを断っている僕としては、その高確率を当てにすることはできない……、気付いてしまった以上、僕が自分でなんとかしなければ。

気付かなければ放っておいたのだが……、女子高生と遊んで気分転換をするはずが、犯罪を隠蔽するために走り回るようになるうとは、まあまあのアップダウンだぜ。

家賃が銀行口座からの引き落としなら、本人がいなくとも、すぐに支払いが滞ったりはしないだろうが（預金残高にもよるだろうが）、しかし、打てる手は早く打っておいたほうがいい——

持てあましていた玄関の鍵を、処分せずにポケットに入れ続けていたことが幸いしたとも言える……、いつそこいつを捨てていれば、隠蔽を企てる余地もなく、諦めもついたのであるかもしれないけれど。実際の犯罪も、こういってもいいような失念から、露見していくんだろっな……。

うまくいかないねえ、人生。

でも、気付いたのが斧乃木ちゃんが留守のタイミングでよかった……、監視下にある元吸血鬼の、こんな勝手な独断専行、またぞろ殺されかねない。斧乃木ちゃんの不始末を始末しようとしているのに、僕が斧乃木ちゃんに始末されてしまうんじゃ、さすがに納得できない。

というわけで、道中のホームセンターで購入した修繕用の大工道具を携えて、家住家の再訪なのである。

破壊された扉をぱつと直せば、ひよっとしたら女バスの交流会の、二次会にだったら間に合うかもしれないなんて甘い算段もあったが、その目論見は外れた。

あんまり言うとな僕が、その会に出席したくてしたくてたまらない奴みたいになっちゃってしまっけど、元々僕は社交的な性格ではないので、どんな趣旨であっても、パーティとかは苦手だ……、ファイヤーシスターズの解散パーティにしたって、散々渋りつつ参加した面倒臭い奴こそが僕である。

あのときは女子中学生のパーティだったか……、まあ、僕の社交性については大学在学中になんとかするとして、とにかく、交流会への出席は、すっぱりと諦めるしかなさそうだった。

ベビールームの扉が、ちよつとやそつとじゃ直らないくらい、手の施しようがないほど破損していたから——ではない。

そうだったとしても、究極、僕には裏技がある。かつて伝説の吸血鬼だった忍野忍、旧キスシヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの『物質創造能力』に頼り、扉を一から、完全に再建してもらうという裏技が……、夜を待たねばならないという条件はあるが、だったら

いつそのこと昼間は交流会に出席して（やっぱり出席したがってる？）、夜にもう一度、改めてこの部屋を訪れればいいだけのことだ。

代償（ドーナツ）は支払うことになるけれど……、しかし、その深謀遠慮は無用だった。第二の扉の壊れ具合は、できれば自力で解決したいという僕の独立心に適うものだった……、斧乃木ちゃんが、裸足で蹴っていたのがよかったのかもしれない。いつものブーツだったら、まして『例外的ほうが多い規則』アンリミテッド・ルールブックだったら、扉そのものにぼっかり穴が開いていただろうが、うっすら足跡が残っていた程度で、蝶番本体もほぼ無事で、ねじが数本、折れていた程度の破損である。

これなら僕の技量のDIYでなんとかなるというレベルだった——ではなぜ、僕はうきうきと女子高生にちやほやされに行けないのか？

そう込み入った事情ではないが、大切なことなので、順を追って説明しよう——事情ではなく異常と言うべき展開について。

鍵を預けられているとは言え、後ろめたいことが一切ない、というわけではないので、僕は防犯カメラを嫌うように、マンションの裏口からこそ這入って（より怪しい）、三階の333号室まではエレベーターを使わずに、階段を昇った——なにせ家主が行方不明だし、誘拐犯が証拠隠滅に来たと思われる。誘拐をしていないと言うだけで、事実は非常にそれに近いわけだが、近いからこそ困るのだ……、どんどん挙動不審になっていく。

まあ、カメラを完全に避けることなど、完全に吸血鬼化しない限り不可能なので（すれば鏡に映らなくなるから、ミラーレスのカメラでない限りは安全だ。たぶんミラーレスでも大丈夫）、どこかでは開き直らねばならないわけだが……、それとは別に、他の用心も必要だった。

別居中の旦那さんが『児童殺人犯』なんじゃないかという可能性に思い至ってしまった以上、必ずしも333号室が無人とは限らないという用心も、僕は働かせなくてはならない……、そこまで警戒するとキリがないと言われるかもしれないけれど、ベビールームで、僕が舞い戻ってきた旦那さんと鉢合わせという事態は、可能性としては成立しうる。

ひでえ修羅場だ。

実在の彼女とさえ、そんな愁嘆場は経験したことがないのに、なぜそんな間男みたいな目に遭わねばならないのか……、しかし、ドア破壊犯（の一味）である僕がこうして凱旋<sup>がいせん</sup>してきたのだから、旦那さんとて、二度目の帰宅をしても不思議じゃない。真犯人は現場に戻る——だ。

それに、普通に『父、帰る』ってことも……、旦那さんが『児童殺人犯』だなんてのは、現時点ではあくまで僕（と、扇くん）の勝手な推測だけれど、そうじゃなくても、行方不明になった妻を心配して、家に戻っている可能性は考えられよう。その場合、お互いさまじゃなくなる。僕が一方的に、不法侵入で破壊的な犯罪者だ。

虐待された子供が閉じ込められていると想像しながら玄関を開けるときも緊迫したけれど、その父親がいるかもしれないと想像しながら開ける玄関も、なかなかスリリングだった。



なので熟慮の末、一応、僕はインターホンを鳴らした……、返事はなし。ノーリアクション。ひと安心、してもいいのか？

いや、まだ安心よりも用心だ。

なぜなら僕には実はもうひとつ、配慮しなければならない展開があるのだった。それは問題の中枢である、『行方不明になった家住准教授』が、自宅に引きこもっているだけという展開である——どこかに失踪したわけでも、スイスに帰国したわけでもなく、職場や友人との連絡を絶つたその上で、マンションから一歩も出ずに、居留守を使っているのだとすれば？

見落としがちな古典的なトリックのように見えて、実は現代社会だからこそ成り立つ居留守だ。どんな生活必需品でも、ネット通販で届けてもらうことが可能だから……、まあ、限度はあるだろうが、それでも一週間くらいなら、人間は外出なしでも余裕で過ごせる。

大学関係者や友人がひっきりなしで訪ねてきても、ずっと、頑なに居留守を貫けるだけの心の強さがあれば、という前提だが……、僕なんか、交流会をドタキャンしただけでも、この罪悪感なのである。

そうそう、いつぞや、僕が失踪するくらいのつもりで体育倉庫に閉じこもったときでも（詳しい事情は聞かないでほしい）、羽川からのメール一通で、他愛なくほだされてしまったものな……、なので、たとえ家住准教授がどういう気持ちで姿を消したのだとしても、自宅に隠れているという線は、非常に薄いと思う。

まだ旦那さんとこんにちはする危険性のほうが明白に高いとは思いつつも、しかし室内で数日ぶりに家住准教授と再会してしまったパターンも、きちんとシミュレーションしておかないと、おたおた慌てふためいてしまう……、『鍵を返しに来ました』ってところか？

それともさつきみたいに名探偵気取りで、『やはりここでしたか……』みたいな台詞のひとつでもほざけばいいのだろうか。

わかっていましたよ、みたいな顔で。

何にせよ、押したインターホンに返事はなかったのだ——ここからは来訪客ではなく、修理屋さんに徹さねば。

勝手知ったる他人の家、とまでは言わないにしても、どうあれ二度目の来訪なので、3LDKの廊下を歩いていて道に迷ったりはしない——迷子の神様を呼び出すまでもない——すぐにベビールームへと辿り着く。

付け加えておくと、リビングからも、途中の第一の扉……、つまり家住准教授の寝室らしい部屋からも、人の気配は感じられなかった——大学教師の引きこもり説は、まあほぼ消えたと言っているだろう。それよりも、僕が先日、第一の扉を開けっ放しにして帰ってしまったらしい不用心さを反省しよう。

第二の扉は開けっ放しどころじゃなかったが……、けれど、その破壊の程度が、手作業で原状回復が可能な程度だったことは、既に述べた通りだ。

そのことをただ喜ぼう。

と、まったく思えなかったのは、壊れていたのが、問題のベビールームの扉だけではなかったからである。

「……は？」

大問題の扉が壊れていた――ベビールームの隅っこに置かれた、ケージの扉である。先日、この遮光カーテンが閉めっぱなしの部屋で見るときは、ちゃんと門の刺さっていた檻の扉が――そちらはおよそ回復不可能な壊れかたをしている。

モンスターを閉じ込めるためのケージがあったとして、その鉄柵が内側から、無理矢理左右にこじ開けられたみたい……、さながら飴細工みたいな歪ゆがみかたをしている。扉が壊れていると言うよりは、扉がどろどろに溶けているかのような――しかし、言うまでもなく、その檻の内部にモンスターはいない。

そして。

果物ナイフで背中を刺された虐待人形も、檻の中からいなくなっていた。彼女の作り主と同じく、行方不明に――

ん。んん。んんん？

どういう事態なんだ、これは？

僕はいったん、道具箱をベビールームの床に置いた……、これが間違いだったのかもしれない、少しでも賢明な人間なら、すかさず踵を返している状況である。

だが少なからず愚かである僕は、検証せずにはいられなかった。考えなしに、考えることを選択してしまった――まあまあ、せめて落ち着こう。

その場にとどまってしまう僕の悪癖はいずれ直すとして……、室内の様子だけを淡々と描写すれば、まるであの人形が、まるで自分の意志をもって、檻の中から脱走したように見えてしまうかもしれないけれど、まだそうと決まったわけじゃない。

焦るな。

僕はたまたま縁があつて、自律的に動く人形、それも死体人形という極端な実例を知っているから、そんな第一印象を持ってしまうだけであつて……、常識に従う限り、人形は脱獄しない。みんなもよく知っている通りだ。

だから、この数日間に、誰かがこのケージを破壊したとするなら、それは閉じ込められた人形ではなく、その間に部屋を訪れた人間の仕業だと推測するべきだ。

内側からこじ開けられたように見えても、それは見えるだけかもしれないじゃないか。

居留守ではなかったようだが、失踪後、家住准教授が一時帰宅したという仮説はいくらでも立てられるし、だったらそのときに、ハンドメイドの、ある意味思い入れの深い人形を持っていたのかもしれない——同じような仮説は、旦那さんの場合でも容易に立てられる。

妻が『可愛がつて』いる人形を、刺してしまったことを後悔して……、えっと、修理のために持っていたとか？

妻の失踪を受けて、証拠隠滅のために持っていたなんて推理だって成立する、今ちょうど僕が、そのために家住家を訪れたように、だ。

……でも、どうだ？

家住夫妻でなくっても、とにかく人間が、あの不気味な人形を持ち去ったとして、だ……、どこの誰が、そのために、鉄製のケージをひん曲げるみたいな暴挙を働くというのだ？

第二の扉を蹴破った式神にして破壊神の斧乃木ちゃんとて、このケージを開けるときには、普通に門を外すだろう……、たとえ門錠なんて古代の錠前は生まれてこのかた見たことがないという幼稚園児だって、開けられるシンプルな仕組みだ。

そう、幼稚園入園以前の、三歳児でもない限りは……。

そもそも、動物用のケージである。そんなじよそこの玩具じゃない。どういう力がどういう角度で加われれば、鉄の棒があんなふざけたねじれかたをするんだ？

僕の腕力では、少なくとも無理だ。吸血鬼時代ならもちろん、鉄がダイヤでも物の数ではないけれど、今の僕の腕力では……。

実際のところ、どうなんだ？

どれだけ清純な振りをしたところで、僕はタイムトラベルをしたこともあれば、パラレルワールドを滅ぼしたことも、救ったこともあるすこぶるつきだ……。人形の脱獄事件で人事不省になるほど取り乱すのも、筋が通らない。

けれど……。『実例』である死体人形の斧乃木ちゃんだつて、付喪神になるためには、百年使われる必要があったわけだろう？　そして、彼女がああして自由闊達に動くために、影縫余弦や手折正弦は、『地面を歩けない』なんて、わけのわからない呪いを背負わされている——それだけの時間と代償があつての、死体人形だ。

先週はただのぬいぐるみだったぬいぐるみが、週明けに再訪したら力業で脱獄していたとか……。そんなたやすいものなのか？

「……いや」

ただのぬいぐるみ、じゃないか。

手作りで、我が子代わりで。

痛めつけられ。

背中を刺されたぬいぐるみだ——期間こそ短くとも、込められた情念は、生半可じゃない。逆に、それで足りないなら、どれくらいの情念が必要なのかってくらいの情念だ。

あえて言うなら、僕が部屋を訪れたことが、引き金になってしまった可能性はある……、怪異経験豊富な僕が、少なからず、影響を与えてしまった可能性。その昔、『よくないもの』の吹きだまり化していた北白蛇神社が、蛇切縄きたしろへびに対してそういう役割を果たしていたように——僕が歩く吹きだまりになっていたのかも。

すこぶるつきのマッチポンプ。

そういうことがないよう、臥煙さんが、旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの影響力を、完全に封じ込めてくれているはずなのだが、上手の手から水が漏れるということもあるだろう。

だとすれば、責任を感じないわけにはいかない……、家住准教授の失踪のきっかけどころか、虐待人形の脱獄のきっかけを作ってしまったとなると、冗談でなく、斧乃木ちゃんにぶつ殺されても文句は言えない。

あの子はいつでも冗談じゃないのだ。

いつでも怪談だ。

だが、だからと言って、この事態はもう隠蔽し切れない……。殺されるのを覚悟で、斧乃木ちゃんに報告するしかない。第二の扉と違って、このぐにやぐにやに歪んだ檻を、元通りに直すためには本当に忍を呼び出すしかないし、けれど、あのロリ奴隷の影響力に漏れがあったのだとすると、安易に吸血鬼パワーに頼るわけにはいかない。

これは参ったぜ……。

どのみち、僕のせいであろうとなかろうと、脱獄したぬいぐるみを捜索しないわけにはいかないし、そうになると、斧乃木ちゃんというプロの助力は不可欠だ——そう思いつつ、一応はそれらしく手がかりを求め、先日そうしたのと同じように、ケージに近付き、真上から中を俯瞰してみる。

どんな方向から見たところで、空っぽのケージの中に、隠れるスペースなんてないのだが……。果物ナイフもなくなっているな。

刺さったままで逃げたのだろうか？

だとしたら逃亡犯は重傷を負っていることになる……。と、考えていいのか、それとも布の塊に、感情移入し過ぎか。

でも、感情が移入されたからこそ、あの人形は——名付けて唯々恵ちゃん人形は、檻から逃げたんじゃないのか？

「ん……。でも、逃げたって、どうに？」



自然に、疑問点が口をついた。

むろん、それを斧乃木ちゃんと共に探さなければという話なのだけれど——まあ、児童相談所に駆け込んだということはあるまい——、僕が言いたいのは、それ以前の話だ。

僕が玄関から這入ってきた。鍵を使って、鍵を開けて。

逆に言うと、施錠はされていたのである——もしも唯々恵ちゃん人形が正面から、つまりあの玄関から出ていったのだとすると、鍵は開いていないとおかしくないか？

旦那さんと違って、ぬいぐるみが鍵を持っていたとは思えない……、虐待されていない、生きた子供であっても、三歳児に鍵を預ける親が、そうそういるとも思えない。

あらゆる方面から多角的に検討するため、それでも唯々恵ちゃん人形が鍵を持っていたと仮定しても、だ……、門錠の開けかたがわからなかった『彼女』が、デインプル錠の閉めかたを心得ているはずがなからう。

つまり、大雑把に考えて、唯々恵ちゃん人形は玄関からは出ていっておらず……、どこかの窓から、ガラスを割って脱出？　でも、入室したときの、先日と変わらない空気感からして、そんな換気がなされているようには、とても……。

「……檻からは出たけれど」

もしかして、唯々恵ちゃん人形。

まだ、この家の中にいる？

信じられないことに、僕はケージのねじ曲がったフレームを見ても、唯々恵ちゃん人形の脱獄が、つい今さっきおこなわれたばかりであるという推理を働かせていなかった―ひよつとすると、まだ唯々恵ちゃん人形は在宅中かもしか、更に言えば、このベビールームの中に潜んでいるのかもとか、ぜんぜん想像していなかった。

だが、空っぽの檻の中には確かに隠れる場所はなかったけれど、ステージが家全体ということになると、三歳児サイズのぬいぐるみなんて、隠れたい放題である。

俄然<sup>がぜん</sup>緊張してきた。

果物ナイフも一緒に消失していることも考えると、加速度的に―檻を不可逆的に破壊できる人形が刃物を携えているなんて、それはもう、十分以上に脅威だ。

脅威であり、恐怖だ。

家の中で居留守を使っていたのは、家住准教授ではなく、唯々恵ちゃん人形だったとか……、檻から出たはいいけれど、玄関の開けかたがわからずに、その後も閉じ込められ続けていた、とか？ 三歳児のサイズじゃあ、サムターンまで手が届かないし……、鉄の棒を力尽くで曲げられ

るのだ、窓ガラスを割るくらいの力はあるに違いないが、ただし、三歳児がガラスという物質を理解できるかどうかは、また別である。

たとえば、成犬は三歳児並みの知力を持つというけれど、窓ガラスにがんがんぶつかっていつたりもするそうだ……、鏡像自己認知、とはまた違う概念だろうけれど、唯々恵ちゃん人形が透明なガラスを『壊す』なんて発想を持てなかったとしても不思議じゃない。透明で見えない空気を、壊そうと思えないのと同じで……、くそ、意味もなくきよろきよろしてしまうぜ。

人形が逃亡したことに驚いていたが、舌の根も乾かないうちに、今度は僕が逃亡する算段を練ることになろうとは……、ただ、もしも臆病な僕の考え過ぎでなく、まだこの家住宅内部に唯々恵ちゃん人形がいるのだとすれば、それはある意味、封鎖に成功している状況であるとも言える。

専門家が言うところの結界だ。

僕が逃亡する際に玄関を開ければ、その結界が解かれてしまうことになる……、そりゃあ、開けた扉をすぐに閉めて、がっちり施錠すればたぶんことなきを得られるわけだが、必ずしもその保証はない……、僕が飛び出そうとするタイミングは、脱獄者にこれ幸いと便乗されるかもしれない。

それよりは今ここで、責任を感じている僕が、密室ならぬ結界の決着をつけられれば……、もしもとつくに脱出済みなら、こんなの、独り相撲もいいところだが。

怪力で鉄の檻をこじ開けられるぬいぐるみが、するりと壁を通り抜けられたとしても、非難を浴びるほどのダブルスタンダードではない。

それを重々承知の上で、自分にできることを、僕はしなくてはならない……。今ここで、唯々恵ちゃん人形を家から逃がしてしまえば、どこに行ってしまうかわからないのだから――否、本当は思い当たっている。

失踪中の『母親』を、あるいは別居中の『父親』を、虐待された『三歳の娘』は訪ねるんじゃないかと、思い当たっている――想定外のスーパーパワーを携えて、だ。

だから、止めなければ。

まだここにいるなら、逃がせない。

リーダーみたいに怪異を探知するスキルが、僕にあれば……。忍だったらきつとできるんだけど……。しかし、万遍なくきよろし尽くした限り、どうやらこのベビールームにはないみたいだ。抜け目なく天井も見たが、モビールにぶら下がっているということもなかった。

リビングや准教授の寝室も、来るときにそこまで入念に見たわけじゃないけれど、でもやっぱり、一番怪しいのは、第三の部屋か？ 別居中の旦那さんの部屋――まだ未見である部屋に、勇気をふるって、いよいよ這入るときが来たようだ。案外、ベビーベッドですやすや寝ていたりしてと、そちらにも目をやってみたけれど、もちろん、ケージと同じく空っぽだった。

いや、厳密には同じではないか。

檻は掛け値なく空っぽだったけれど、ベビーベッドはベッドなので、内側には毛布が敷かれて――毛布？

「!!  
ぐっ  
——!」

直感したときにはもう遅かった。

ベビーベッドから飛び出した毛布が、僕の首元に巻きついた――鉄をも曲げる、強烈な力で。

布の塊布の塊と、取りようによつては人形の人形としてのありかたを軽んじるような言いかたをしてきてしまったけれど、僕はその報いを受けることになったわけだ――バルーンアートのように形作られていた唯々恵ちゃん人形が、自らほどけて、ベビーベッドに潜んでいるなんて、発想の転換でも何でもなかったというのに。

僕の配慮に欠ける発言、それに至らなさについては後日たつぷり、この本と同じくらいの厚さの反省文を書くとして、しかし、この事態を経験したことによつて、阿良々木暦が先に書くべきは警告文である。

毛布で首を、さんざ絞められたから、その遺恨を込めて言っているんじゃない……、だって、三歳児の形から、恣意的に平べったい毛布の形に戻る能力があるのなら、わざわざケージをひん曲げて脱獄する必要はないだろう？

隙間をすり抜ければいいだけのことだ。

ほどけて、薄っぺらくなつて。

なのにそうしなかったのは、そのときにはそれができなかったからと解釈するのが、もっとも妥当である……。脱出後、言うならその『毛布化』の能力を獲得した。

学習したと言っべきなのか、それとも――成長したと言っべきなのか、二歳児のように。

その成長速度、その伸びしろ。

怪異として危険度がS過ぎる――二重に『元』<sup>は</sup>とは言え、怪異の王の眷族を、こうも鮮やかに嵌めてくれただけでも、見所ばかりだ。

玄関の開けかたを教えてくれる奴がこのこやってくるのを、罨を張ってずっと待っていたと解釈するのは、さすがに深読みだとは思うが――緊張していたつもりでいて、僕には危機感がまるで足りていなかった。

なので僕は、ここで首の骨を折られていても、ぜんぜん不思議じゃなかったし、報いとしては至極適切とさえ言えただろう――こうしてみつともなく敗者の弁を述べられているのは、望外の幸運でしかない。

そんな幸運を、僕は今、あろうことかあるまいことが、ケージの中でかみ締めている――そう、最初に唯々恵ちゃん人形が監禁されていた、あのケージだ。

僕は今、監禁されている。

時代がかった魔法の毛布に首根っこをつかまれたまま、檻の中に放り込まれた――それも学習したのか、失神寸前の僕を解放した毛布は、今度は鉄柵のこじ開けた部分にぐるぐるに巻き付いて、ぐにやりと元の形へと戻した。

偶然なのか意図的なのか、その際、門錠の横棒も、まとめて巻き込んで絡ませるように歪めてくれた——なので、僕は檻から出られなくなった。

閉じ込められたのだ。

獲物の無力化に難なく成功した毛布は、もう僕に目をくれることなく、そのままひらひらと、ベビールームから出て行った。

その後、廊下の向こうから聞こえてきた音から判断して、毛布は玄関を開けて、外に出て行ってしまったようだ……。恐れていた事態は、あっさりと現実化した。

空飛ぶ毛布になれるなら、身長の問題は難なくクリアされるわけで、どうやら結果は、施錠だけの結果だったらしい……。サムターンの回しかたがわからずに閉じ込められているところに、証拠隠滅にやってきた僕が、封印を解いてしまったわけだ。

あっちゃあ。

中に這入ったら、ちゃんと鍵をかけ、なんならドアチェーンも施しておくべきだったんだな……。いや、あの学習速度からして、僕が来なくともどうせ遠からず、唯々恵ちゃん人形は家を飛び出していただろう。

それにしても……。虐待人形の家出か。

こうなってみると気持ちはよくわかるというか、こんな狭い檻に閉じ込められたら、逃げ出しかくもなるよなあ？



このあと、考えなくちゃならないことの膨大さにうんざりするが、僕も、まずはこのケージから脱獄しなければ……、門棒は歪んで結ばれて動かないし、鉄柵をねじ曲げるなんて芸当は（今の）僕にはできないし、やれやれ、僕自身が密室トリックを考案しなくちゃならないとはね。血湧き肉躍るぜ。

監禁されるのは一年ぶりだ。

去年の夏、付き合い始めたばかりの戦場ヶ原ひたぎに、廃ビルに閉じ込められたことがある——あのときは一応、彼女が食べ物や飲み物を用意してくれたけれど、今回はそれが期待できない。

毛布は逃げ出し、家主は失踪中だ。

うっかりすると命からがら助かったみたいな雰囲気もあるけれど、このまま三日もすれば、僕は飢えて死ぬ。

虐待された人間の気持ちは、虐待されたことのない人間には永遠にわからないなんて、それこそ知ったようなことを言いがちだけれど、まさか僕が、唯々恵ちゃん人形と同じ経験をする事になるうとは……。

それも意図的か？ 意図返しかな？

だとすれば、復讐する相手が違うとしか言いようがないし、だからと言って、復讐すべき相手への復讐を、許すわけにもいかない。

脱獄王にならなければ。

幸い、素案がふたつある。

案①……忍を叩き起こす。まだ日は高いが、正確には吸血鬼ではなく、吸血鬼のなれの果てである幼女は、交渉次第では、昼間の活動も可能だ。

案②……神原・扇くんラインに電話する。幸い、文明の利器である携帯電話は奪われてもいないし、破壊されてもいない——扇くんには既にこのマンションのことを話しているわけだし、怪異事情に通じた（今もコンビで、なにやら怪しげな活動をしているらしい）あの二名に助けを求めれば、脱獄のみならず、その後の唯々恵ちゃん人形の搜索にも手を貸してくれるだろう。

どちらも悪くないが、案①、案②、どちらにも共通するデメリットとして、『超格好悪い』という難点が挙げられる……。動物用のケージに閉じ込められたこの姿を彼女達に見られれば、ご主人様としても先輩としても、二度と敬意を払われることはなからう。

生涯見下される。

あるいは見放される。

お前のくだらん見栄など知らんと言われるだろうが、そのくだらん見栄がなければ、逃がしてしまった唯々恵ちゃん人形をなんとしても捕まえなければという使命感も消えてしまう。

大切なお昼寝の最中、あるいは大切な先輩後輩大交流会の最中の彼女達を呼び出すのであれば、せめてケージからの脱出くらいは、自力でおこなわなければ。

まったく、泣きたくなるぜ。

地獄や悪夢を経験し、タイムトラベルし、パラレルワールドを滅ぼしたり救ったりしたこの僕が、今、動物用の檻からどうやって出ようかと、四苦八苦しているだなんて……、だがまあ、所詮は鳥獣の檻だ。人間さまの知恵の前には無力である——鳥獣どころか、毛布によって閉じ込められた人間さまだが、まあ、僕だって何の勝算もないのに、このゆとりのない環境で、見栄っ張りなことは言い出さない。実際のところ、忍にはもつとみつともないところを見られまくっているわけだし……。

果たしてこういった天の配剤か、このベビールームには現在、日曜大工の工具がたっぷり詰まったお道具箱があるのだった。きつとどこかの間抜けが、証拠隠滅のために扉を修繕しようと、持ち込んだものだろう。

その間抜けがこれからやろうとしていることは、そんな目的の真逆である——工具を使って、扉を破壊する。人の生活を豊かにするために開発された技術が、後世で戦争兵器に使われる現実と己の現状を引き比べて、深く考察することもできそうだが、まあそれはそれとして。

鉄柵の隙間からお道具箱に手を伸ばしたが、残念、届かなかった——足は、膝までしか通らない。太ももは、太いから太ももと言う。なので、僕は少し頭を使って、ズボンを脱ぐことにした。

その分、太ももがスリムになると考えたわけではなく、投げ縄にするためだ――まずはズボンを檻の外に出し、鉄柵の隙間から通した両手で左右の裾すそを持って、ズボンを道具箱に向けてはためかす。

三度目のチャレンジで、道具箱はうまく股の部分に引っかかってくれた――あとは引き寄せるだけである。

他人の家で、パンツ丸出しで何をやっているんだと思っただけ負けである……、さりとて、やり遂げたと感じるにはまだ早い。

本懐はここからだ。

さあ、セール中で二千九百八十円だったお道具箱の中には……、やった、糸鋸いとのこがあった！ これだ！ と、僕はひとり喝采かつさいをあげたが、残念ながらこれではなかった――やり始めて気付いたが、鉄柵を糸鋸で切断するのには、おそらく五年はかかる。

一本切れば通れるというわけじゃないし、こんなの、本物の脱獄王の手法である。

ならばドライバーを駆使して、この檻を根本的に解体しようか……、それも組立説明書がなければ、簡単じゃなさそうだが……、と考えたところで、閃ひらめいた。

道具箱の底に金槌かなづちがあったのだ。

DIY。

デストロイ・イット・ユアセルフ。

五分後、僕は密室からの脱出トリックを成功させた——日中に忍を起こしたり、神原や扇くんを電話で呼び出すよりも、結果的には短時間での脱獄である。

計算すると、僕はたったの半時間すらも、ここに閉じ込められていなかったわけだが、それでも、この解放感である。

喜びを歌にしたいくらいだ。

そうになると、今の唯々恵ちゃん人形が、どんなテンションなのか……、そうそう解放感に浸ってはいられない。

逃げた毛布を追わなければ。

まだそう遠くには行っていないはずだ——<sup>すが</sup>縋るようにそう思って、玄関から飛び出した僕だったけれど、毛布の姿も、人形の姿も、どこにも見当たらない。

さてはエレベーターの使いかたまで、もう覚えてしまったのか？ それとも非常階段から——いや、空飛ぶ毛布なんだから、その辺の手続きはオールカットできるわけか。玄関前の廊下は空に面しているの、そこから飛び出してしまえば、唯々恵ちゃん人形は、もう自由だ。

往生際悪く、手すりから身を乗り出すようにして目を凝らしてみるも、風に舞う毛布は見えない……、発見できたときのために一応用意しておいた『布団が吹っ飛んだ！』というフレーズの出番は、どうやらなさそうだ。

それでも、絶望せずに行動しなきゃ——焦燥感にせき立てられるように、僕は階段を駆け下りる。昇ってきたときのような、防犯カメラを警戒しての行為ではなく、エレベーターを待っていないらなかつた短気のなせる業だ。三階から駐車場に向けてダイブしなかつただけ、まだ理性的だったと言える。

そして、目的地を定めないまま、ニュービートルに飛び乗——ろうとして、

「うわおっ」

となる。

こんな絶望しているにもかかわらず、漏れたのは愁嘆ではなく、感嘆の声音だった——僕の愛車のタイヤが、四輪ともパンクしていたのである。

させられていたのである、と言うべきか……、分厚いゴムが力尽くで引き裂かれ、ホイールのリムがぼぼむき出しになっていた。

空飛ぶ毛布を追って、とにかくどこかに行こうとしたが、これでは僕はどこにも行けない——やってくれるじゃないか、唯々恵ちゃん人形。

不用意にも、携帯電話を奪わずに僕を監禁した十五分後には、的確に足を奪うこの判断力——なぜこのニュービートルが僕のクルマだと判断できたのかは今のところ不明だが、あの三歳児、めきめき成長してやがる。

こいつは将来が楽しみだ。

思っていたよりも原始的なストロングスタイルだった。

唯々恵ちゃん人形は僕のニュービートルを、これと特定してパンクさせたわけではなく、駐車場の自動車、すべてのタイヤをパンクさせていた——手当たり次第のローラー作戦である。

確認はしていないが、たぶん駐輪場に停められている自転車のタイヤも、同じように切り裂いているんじゃないだろうか？

知能犯のやり口ではない。

しかしそれでも、破壊部位をタイヤに限っている辺りからは、やはりひしひし成長を感じられる——唯々恵ちゃん人形はやけになって、ヒステリックに暴れ回っているわけじゃない。

雑ではあるが、方向性もある。

しかしまあ、自動車のタイヤのゴムを切り裂くなんて、たぶん鉄柵をねじ曲げるよりも力が必要だと思うんだけど……、学習能力が高いだけじゃなく、単純なパワーまで成長しているというのか？

それとも、合理的に刃物を使ったとか——果物ナイフはどこへ行った？　今頃、毛布にくるまって運ばれているのだろうか……、凶悪犯がする刃物の運びかただ。

そんなわけで、ニュービートルを破壊された僕が返す刀で、すかさず隣のクルマの電気系統を直結し、初っぱなからフルスロットルでアクセルを踏み込むという、おなじみの展開はなしだ。クルマ泥棒にならずに済んだ……、が、これはもう、証拠隠滅とか、ちまちましたことは言っていられないな。

臥煙さんに助けを求めずして、收拾できる状況ではなくなった——動く人形、空飛ぶ毛布という誤魔化しようなない怪異が登場した挙句、家庭内という密室ではない、青天の駐車場で、大型マンションの居住者全員を巻き込む規模の破壊行為がおこなわれてしまったのだから。

今のところ、まだ騒ぎにはなっていないけれど、目撃者もいるかもしれないし、忍の物質創造スキルですべてのクルマのタイヤを直してもらおうにも、元々がどんなタイヤだったかわからない……、ちなみにニュービートルのタイヤだけ直してもらうのも、まあ、たぶん無理だ。もろに太陽の下なのでね。今年の夏は特に暑いし、夜になるまで、我が愛車は、ここに乗り捨てておくしかない……。唯一の救いがあるとすれば、人的被害が出ていないことくらいだ。まだ。

人的被害か……。

僕が首を絞められ、檻に放り込まれたことは、まあその内には数えないとして……、虐待を受けた子供は虐待する親になる、なんて言説を、他ならぬ家住准教授が仰っていたけれど、人間に虐待され、人間に背中を刺された人形は、いったいどんな人形になるんだろう？



ただ逃げただけなのか、それとも、『虐待する親』『殺害する親』の元へ、復讐へ向かったのか――どちらにしても、とりあえず、僕もこの場を離れたほうがいい。

普段見かけぬあの大学生こそがタイや破壊犯などという、謎の力自慢だと誤解されてもたまらない……。で、これからどうしよう？

室内、あるいは日陰に移動して、忍を呼び出す？ 神原や扇くんにヘルプの電話をかける？ 檻を脱出する前は、当然そのつもりだったけれど、しかし唯々恵ちゃん人形に完全に逃亡され、大事なクルマを壊されたことで、僕はちよつと冷静になつて、考えが変わつた。

別段、受けた被害の大きさに茫然自失ぼうぜんになつたあまり、やる気をなくしたわけではない……。むしろなんとかしなければという気持ちは高まつた。

高まつたからこそ、忍よりも、神原・扇くんペアよりも、助けを求めるのに適切な相手がいると思つたのだ……。高校時代は忍に頼り過ぎた末に、僕は地獄に落ちてしまつたわけだし、バトル展開が待ち受けていそうなきほど、あの少女を引つ張り出すべきではない。

神原だつて扇くんだつて、怪異に関わりを持つ、あるいは怪異そのものだというだけで、その道のプロではない……。命の危険が伴う任務に巻き込むのは本意じゃない。先輩後輩大交流会だつて、今でこそそこまで持つて来られたが、年度始めの頃には、ほとんど刃傷沙汰だつたのだ……。邪魔したくない。神原には神原の時代と、戦いがある。

だから僕は、独断専行を咎められ、殺されるリスクを承知の上で、ここはもう一度、プロフェッショナルに頼るべきである。

目には目、歯には歯。

人形には人形で、怪異には専門家。

斧乃木ちゃんはあくまで不死身の怪異を専門とする専門家だけれど、しかし唯々恵ちゃん人形は『取り替えっ子』とは最早もはや言いづらい——あの毛布を、唯々恵ちゃんの生まれ変わりのようなものだと考えれば、ぎりぎり童女の専門領域に含まれるんじゃないか？

殺されるリスクを差し引いても、正直、プロに借りを作るのはあまり賢くないので、専門家は仕事を頼みづらいところもあるのだけれど、しかしながら、どのみち駐車場の惨状の始末をつけるために、斧乃木ちゃんには絶縁中の臥煙さんに橋渡しをしてもらわなくてはならないと思ったことで、踏ん切りがついた。

では次の問題です。

斧乃木ちゃんは、いったい今、どこにいますのでしょうか？

後部座席に乗っていないなくて助かったと思っていたけれど、こうなると、永住してほしかったくらいだ。仕事中でなければ、もうそろそろ月火の部屋に戻っているのかな？ だったら僕も、ここから、公共の交通機関を利用して帰宅すれば——いや、それとも、それとも。

ちつき当てずっぽうで考えた通り、今頃は仲良しの撫公、千石撫子の家だつたり？

撫公の家だった。僕的には、最悪の位置情報である――なぜなら阿良々木暦は千石家には近付けないのだから。

間違っても、あの詐欺師との約束を律儀に守っているわけではなく、これは自分との約束である――誓いと言ってもいい。

緊急事態なのだから誓いなんて言っただけ駄目なのも確かだが、これに関しては、僕の見栄という問題も超越している。

気持ちのデリケートさを差し引いても、現実的に、僕と千石が遭遇してしまっただけで、それでいい。つが再び神様になっちゃったりしたら、町民全員が困るだろう？ そんなことがないよう、斧乃木ちゃんも千石家に足繁く通っているというのもあるだろうし……、で、進退窮<sup>きわ</sup>まった僕がどうしたのかというのも、順番に語ろう。

ただし、時間がないのでテンポよく。

停留所にやってきたバスに乗り込んで、車内からまずは月火に、斧乃木ちゃんが部屋に戻っていないかどうかを確認してほしいとメールした……、彼女が死体探しのハイキングに出掛けていることを、すっかり忘れて。

ただし、かつてファイヤーシスターズの参謀を務めていただけあって、我が妹は、既に、紛失した自身のぬいぐるみの行方を突き止めていたのだ。

『な☆ん☆か☆ね☆ー☆今☆撫☆子☆ち☆や☆ん☆が☆持☆っ☆て☆る☆っ☆ぽ☆い☆前☆遊☆び☆に☆行☆っ☆た☆と☆き☆貸☆し☆て☆あ☆げ☆た☆の☆か☆も☆し☆ん☆な☆い☆☆☆☆☆』

……メールに流星雨を降らせるの、はやってるの？ だとすると、インフルエンサーは日傘ちゃんだが……、僕の新しい友達は、とんでもない影響力を持っている。なんて頼もしいんだ……、日傘ちゃんに助けを求めようかな。

そうはいかんか。

さしもの元参謀も、まさかぬいぐるみが自分の足で、大親友の家までジャンプして行ったとは思っていないようだ……、斧乃木ちゃんは千石に会いに行くと、長っ尻と言うか、なかなか帰ってこないんだよな。

他の仕事中のほうが、まだよかった。

どうしたものかとしばし思い悩んで、僕は非難を免れない手段を取ることにした……、斧乃木ちゃんのみならず、千石をも騙すことになる。

罪はあるが、害のない嘘だ。見逃してほしい。

僕は月火に、千石へメールを送るよう、兄という権力を行使して命令した——内容は以下の通り。

『☆これ☆か☆ら☆遊☆び☆に☆行☆く☆ね☆！☆☆☆☆☆』

長つ尻の斧乃木ちゃんが、唯一千石家から早期帰宅する理由があるとすれば、それは千石の親友である月火がやってきたときである——むろん、ハイキング中の月火が、今から千石家に遊びに行くことは不可能だし、そもそも傍若無人の体現者である月火が、アポイントを取ってから遊びに行くようなマナーを守るはずもないのだが、世にも珍しい大怪獣が来襲するという緊急速報に、反応せずにいられる奴がいるか？

そんな運びで。

「いいか、鬼のお兄ちゃん。この件を片付けたら、お前を殺す」

口調が変わってる。

そして僕の死刑がついに確定したが、ともあれ僕は、阿良々木家の僕の部屋で、斧乃木ちゃんとの合流に成功した——久し振りの成功体験である。死ぬけど。

「お前にはついていい嘘と駄目な嘘の区別がつかないのか？ つかないんだろ？ 去年の春休みに、ハートアンダーブレードを助けたときもそうだった、僕と戦ったときも、真宵姉さんを成仏させたときもそうだった——」

過去の悪事を次々と蒸し返される。

正座して聞くしかない。

「それにしても、撫公とツイスターゲームに興じている最中に、よりによって、こんな形で僕の期待を裏切ってくれるとは」

「ツイスターゲーム……、死体人形とツイスターゲームをしても、勝てそうにないけれど」  
本当に身体をツイストできるからな。

いや、この流れだと、ツイストさせられるのは、僕の身体かもしれない。

「僕を騙したことはまだいい。撫公を騙したことは絶対に許さない。万死に値する。高貴高齢者に血を吸わせて不死身化させたあと、殺し続けてやる」

高貴高齢者って……。

キャラ設定がだいぶ初期まで戻っている。

しかし、それよりも何よりも、千石との友情感が、僕から見れば羨望せんぼうの的だぜ。

羨望撫子だぜ。

「とは言え、阿良々木月火が来るって言うておいて来なかったというのは、とてもハッピーな気分になれる、嘘の中では最高の嘘だから、瞬殺だけは勘弁してやる。言え。そこまで僕に殺されたかった理由はなんだ」

いつも通りの無表情と棒読みも、今だけは、激怒の表れに感じる……、実際、激怒しているんだろうし。

斧乃木ちゃんが千石とどういう関係を築いているのか知らないが、ううむ、まさかここまで怒るとは……。

こんな恩着せがましいことは言いたくないけれど、僕だって、アイスクリームとか買ってあげたじゃないか。通算できみに五千円くらいはおごつてと思うよ？

「それともきみ達の友情は、五千円以上の価値があるのかい？」

「こいつ、貝木のお兄ちゃんとおんなじこと言ってるやがる」

最大限の罵倒を浴びたな。これは甘んじて受け容れよう。

即死はしなくなかったので、僕は家住准教授のマンションで体験した『怪異譚』を、ありのままに斧乃木ちゃんに開示した——それで許されるとは思わないけれど、本来ならば省略したい、動物用の檻に閉じ込められたみつともないくだりも、包み隠さず語った。

ざまあみると、せめて溜飲りゅういんを下げてくれれば……。

「……なるほど。そんな感じなんだ」

途中で僕を殺すことなく、最後まで聞いてくれた斧乃木ちゃんは、そう頷いた——激おこの雰囲気は、まだ消失していない。

「そんな感じって、どんな感じ？」

「阿良々木月火のお兄ちゃんって感じ」

それも最大限の罵倒かな？



いや、意外とマジらしい。

「しでの鳥に対する見方に、更なる新解釈を加えたほうがいいのかもしれないな。僕は憑依<sup>ひょうい</sup>ではなく同化、乗っ取りだと言ったけれど、血縁以上の相似を感じるよ。考えてみれば、不死鳥が吸血鬼と兄妹になった実例なんてないわけだし、イレギュラーが生じないほうが不自然か」

「……………」

僕<sup>つな</sup>のしでかしが月火の名誉回復に繋がった？ ならばこれもまた、まさかの展開だ——いや、斧乃木ちゃんがどう解釈したところで、結局のところ、影縫さんの思想に変化がない限り、不死鳥の安全は確保されないわけだが……、それでも、一歩前進した気がした。

僕は今日死ぬことが確定したけれど、ひよっとしたら月火は、生き延びられるかもしれない。

「鬼のお兄ちゃんならぬ不死鳥のお兄ちゃんってところかな。去年の夏、どうしてお姉ちゃんが阿良々木月火を見逃したのか不思議だったけれど、そういうところを見越してだったのかな」

「？ あの人に、そんな考えがあつたとは思いくいけど……、あのときは、僕が見苦しかったから見逃してくれただけで……」

「誰が反論していいって言った？」

言論の自由を、ぴしゃりと封じられた。

こえーこえー。

こりゃあ、怒りは当分解けないな……、僕こそ、変に考え過ぎず、素直に忍に助けを求めればよかった。

ただ、もうあとには引けない。

兄として、しでの鳥の新解釈というのも気になるところではあるけれど（いいことばかりとは限らない。結局、それが理由で、また妹が肅清対象になるかもしれないのだ）、今喫緊なのは、不死鳥よりも、虐待人形なのだ。

「頼むよ、斧乃木ちゃん。この通りだ。この通りの——体たらくだ。唯々恵ちゃん人形を逃がしてしまったのは、僕の責任だ——これ以上の被害は食い止めたい。空飛ぶ毛布が、失踪中の家住准教授や、別居中の旦那さんを狙っているとは、そりゃあ決めつけられないけれど、せめて先回りして、警告してあげるだけでも違うだろう？」

「優しくていい人だね、鬼のお兄ちゃんは」  
痛烈な皮肉である。

かつて羽川にそう言われたときには、うまく受け取れなかった台詞だ。

「いい大人になってもいい人のままだとは、驚きだよ」

「……いい大人ってほどじゃねえよ。まだたったの、大学一年生だ」

「百歳になっても、おんなじこと言ってそう。まだたったの百歳だって」

百年使われた付喪神に言われちゃあ、説得力が違ふ……、まあ、僕は享年十九歳であることがさつき決まってしまったので、百歳までは生きられないんだけど。

とんだ剣ヶ峰だ。

針の山か。

「いいよ。引き受けよう。その仕事。どう強引に解釈しようと、僕の専門分野とはとても言えなけれど、鬼のお兄ちゃん、略して鬼いちゃんの、代理の人形だから生まれ変わりで不死身であるという、よくわからない強引な自説を採用してあげるよ」

「あ……、そう？」

あそこまで怒ってるのに、協力してくれるとは意外だった……、死にゆく者への情けだろうか？ 冥土の土産？ 感情に左右されないプロの姿勢なのだとすれば、斧乃木ちゃんをパートナーに選んだ僕の子ヨイスに、間違いはなかったわけだが……、そんな単純なことでもないのだろう。

確かに、どう言い繕ってもこの件は斧乃木余接の専門分野ではないが——けれど意志の宿った人形同士、斧乃木ちゃんは唯々恵ちゃん人形を無視できないのかもしれない。

しかし、理由はどうあれ、こんな心強いことはない——ようやく、光明が見いだせた気がした。たとえその光明が、消えゆく蠟燭ろうそくの最後の光だったとしても。

「あ……、ありがとう。助かるよ、斧乃木ちゃん」

「ここで忍野のお兄ちゃんの台詞を引用すればスタイリッシュなのかもしれないけれど、鬼のお兄ちゃんは、ひとりでも助からないよね。救えないよ、あなたは」

「……はは。へへへ」

「笑ってるし。しかし、仕事となると、鬼のお兄ちゃんにはしかるべきギャランティーを支払ってもらわないとね」

その辺の手続きは、まさに忍野のときと同じか……、あの中年アロハに対しては、最大で五百万円の借金を背負ったものだが、大学生になってまで、そんなローンの返済に追われることになろうとは……、学割って、大学生でも適用されるのかなあ？ 僕の愛する老倉育は、奨学金という借金を背負いながら大学生生活を送っているわけだが、そんなところでも足並みが揃ってしまうとは、幼馴染の腐れ縁は、どこまでも続くらしい。

最悪、ニュービートルを売らなきゃいけないかもしれないと、ときどきしながら聞いていると、斧乃木ちゃんは、

「じゃ、五千円ね。よろしく」

と、お値段を発表した。

「え？ 五千円？ 何その価格破壊……、デフレーションでも起こったの？」

「友達料金だよ。鬼のお兄ちゃんとの友情にも、それくらいの価値はあるだろう……、僕が蹴り飛ばした扉の修繕に向かってくれたことに、感謝していいわけじゃない。安心して、分割払い

にしてあげる——日百円ずつ支払ってよ」

「……………」

怒りが解けたわけではないようだ。

ひとまず死刑の執行は、約五十日、延期されたらしかった。

そこからの斧乃木ちゃんの動きは非常に迅速だった——のんびり屋さんの僕に比べれば、格段の違いだった。

まったくもって。

優しくていい人だと、斧乃木ちゃんは皮肉ってくれたけれど、僕が本当に優しくていい人だったなら、家住准教授が失踪した時点で、本格的な捜索を開始している。

それこそ、小学生や女子中学生、女子高生が失踪したわけではなく、大学教師という『いい大人』がともあれ自らの意志で姿を消したのであれば、無闇に追うべきではないなんて判断したわけだけれど、賢明ぶったその判断は、やっぱり大人の判断でしかなかった。

子供がする大人の判断である。

しくじりまくった高校時代を反省するのは、そりゃあ必要なことだけれど、あの頃の向こう見ずなスタイルを全否定するのも、また違うのだろう。

今回は違った。

まあ、斧乃木ちゃんの監視だったり、忍との関係性だったり、あの頃と同じようにできない事情もあるのだが、今日に限っては、少しだけカムバックしよう。

やり直しじゃない。

新たなスタートのために。

「逃走した虐待人形が、『ご両親』を狙っているという鬼のお兄ちゃんのストレートな読みは、まあ正しいだろう。他にすることもないしね」

「……………」

「なので、先回りして保護するというプランには大いに賛成する。虐待人形の成長速度は警戒に値するけれど、生まれたての今ならまだ、抑え込めそうだしね」

「うん……、問題は、家住ご夫妻を、どうやって、唯々恵ちゃん人形より先に見つけるかだよな。失踪中と別居中……、それぞれがそれぞれに、行方不明だ」

「同じことは、虐待人形側にも言える。虐待人形にとってもご両親は蒸発中だ。ただし、虐待人形にとってご夫妻は、あろうことが、『生みの親』みたいなものだからね。帰巢本能みたいなサーチ力で、あっさり見つけてしまってもおかしくはない」

母をたずねて三千里、か？

まあ、標的をピンポイントで発見するスキルなんて、怪異としては大して物珍しくもない……、逆の例になるけれど、キスシヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの眷族だった頃、僕の居場所はいつには筒抜けだったわけだし。

「なに。向こうがサーチ力なら、こっちはリサーチ力だ」

「リサーチ？」

「得意なんだよ、僕は。調べ物。鬼のお兄ちゃんは僕を破壊魔みたいに言ってくれたけれど」  
根に持つなあ。

音を上げたくなるぜ。

正確には破壊神と言ったのだ。

「そりゃありサーチは『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』に並ぶ、斧乃木ちゃんの得意技だろうけれど、職場の同僚や友人が手を尽くしても見つけれない家住准教授を、僕達がどうやって……」

「鬼のお兄ちゃんと同じ感覚で、大人の失踪なんだから、まだ手を尽くしたっていうほど、みんながマジで探したとは思えないけれど……、仮に妻はそうでも、夫のほうは、そうでもないんじゃない？」

「ん」

「旦那は探せるでしょ。別居中ってだけで、いなくなっただけじゃないんだから。奥さんと没交渉になっただけでも、周囲との関係をすべて断つてはいないはず……、連絡だつて取れるはず」

そうか……。

ついつい、ふたりまとめて考えてしまっていたけれど、個々にアプローチするなら、家住准教授よりも、その旦那さんだな。スイスにルーツを持つ家住准教授と違って、彼の痕跡は、比較的探しやすいはずだ。



家住准教授がスイスに戻ったと仮定するなら、今危険なのは、彼女よりも旦那さんのほうかもしれないし……、空飛ぶ毛布も、さすがにスイスまで辿り着くのには、日数を要するんじゃないか？

「もつとも、鬼のお兄ちゃんが忍野扇から示唆された、虐待人形の背中を刺したのが旦那だったって推理については、僕は同意しかねているんだけどね」

おっと……、唯々恵ちゃん人形の背中の中のナイフに関しての、斧乃木ちゃんの初のコメントだな。

確かに、旦那さんがこの件にまったく関与していない可能性はある……、彼が唯々恵ちゃん人形の虐待にかかわっていないなら、唯々恵ちゃん人形に狙われる理由もないわけで、探してまで保護するのは、悲しいほど無意味だ。

「ぬいぐるみとしては、別居し、家から出ていったこと自体を、父親から『虐待された』と捉えたのかもしれないから、完全に無意味とは言えないよ」

「ええ……？ それを虐待とか言い出したら、きりがなくないか……？」

「きりはないんだよ。なんであるって思っの？」

「……………」

夫婦の別居なんて基本的人権の範囲内で、それをしたから虐待だと責めるのは、どう考えても行き過ぎだが……、僕がその夫婦間の子供だったとしたら、やはり文句の一つも言いたくなる

か。

物心つく前、分別つく前なら尚更だ。

「それに、失踪したセンセイが、別居中の旦那に匿われているって線もあるし。それはいくらなんでも高望みのし過ぎでも、居場所に心当たりはあるかもしれないでしょ？　たとえば『児童殺人犯』じゃなくても、もしも狙われてなくても、旦那を見つける意味はある」

「うん……、僕からは異論はないよ。でも、具体的にはどうする？　大学の関係者に訊けば、誰かひとりくらい、旦那さんの行方を知っている人もいるかな？　研究室のボスなんかだったら、結婚披露宴に招待されてるかも……」

披露宴を開いたかどうかはわからないけれど、その辺から当たってみるか——そのためには、まず、僕と違って教師陣と深い交流のある学生に協力してもらって……、そういうのは、命日子よりもひたぎのルートかなあ。

僕と違い、着実に交遊関係を広げつつあるあの恋人に。

「そんな迂回しなくとも、もっと手っ取り早い方法があるでしょ」

「？　と言うと？」

「第三の扉。まだ開けてない扉が、センセイの自宅にあったでしょ？　最奥のあの部屋は、たぶん、旦那さんが使っていた寝室兼書斎って読みじゃなかったっけ？」

ああ——そうか。そうだった。

そこを調べようと思った矢先に、僕はベビーベッドに潜んでいた毛布から、よもやの不意打ちを食らったんだった。

家を出る際に、荷物はある程度携えているだろうけれど、正式に引っ越したわけじゃないのであれば、旦那さんの行き先の、何らかの手がかりはあるのでは——実家の住所や、勤め先などがわかればしめたものだ。

仮にあの部屋から何も見つからなくっても、旦那さん宛の郵便物が、家の中のどこか、キャビネットにでも仕舞われている可能性は極めて高い。それこそ、冷蔵庫やゴミ箱の中まで漁れば、<sup>あさ</sup>本人の顔写真——とまでは言わなくとも、名前くらいは判明するのでは？

ただし、とは言え……。

「こんなこと言ってごめん、斧乃木ちゃん。ちょっと僕、あのマンションに戻りづらいんだけど……、そろそろ駐車場のクルマが全部パンクさせられていることに住人の誰かが気付いて、騒ぎになっているかもしれないし……」

最悪、あの大規模な『悪戯』<sup>いたずら</sup>が警察に通報されて、マンション全体が封鎖されてるんじゃないのか？ 指名手配されているとは思わないけれど、なにせナンバープレート付きのニュービートルを放置しているので、所有者の僕を特定するのはそんなに難しくない。

「気の回し過ぎだと思うし、その辺はちゃんと、臥煙さんに取りなしてもらえよう、はからっておくよ……、でも、鬼のお兄ちゃん、忘れてない？ 僕には、破壊と調査の他にも、もうひと

つ道具としての機能があるってこと」

「もうひとつ……？　な、なんだっけ？」

道具としてのアイデンティティにかかわるセンチティブな部分なので、万が一にも間違えられないと思うと、即答はできなかったけれど……、でも、斧乃木ちゃんの三つ目の機能と言えば、断トツであれだよな。

ひとつめと言っているかもしれない。

斧乃木ちゃんはこくりと頷いた。

「移動。高速移動。誰にも見られないよう、ここから『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』でダイレクトにジャンプ一番、ベランダから侵入すればいいでしょ」

「あっ——」

その手があつた——斧乃木ちゃんの爆発力を活用してのショートトリップ。

唯々恵ちゃん人形が空飛ぶ毛布なら、斧乃木ちゃんは空飛ぶ死体なのだから、それなら問題は解決する。

どんな見張りもかいくぐれる。

ちなみに、どうして僕からその発想が生まれなかったかと言うと、吸血鬼時代ならばいざ知らず、十九歳現在の、生身の身体で斧乃木ちゃん的高速移動に付き合えば、僕が無事では済まないからだ。

最低でも低体温症ないし低酸素症になる。

高度によっては凍えた上で窒息死してもおかしくない——斧乃木ちゃんがそんな乱暴な交通手段を平氣の平佐で取れるのは、あくまでも彼女が死体で人形だからなのだ。

だけど、こうなると四の五の言うてはいられない——真つ盛りの真夏だというのに、僕はできる限りの厚着をして、ワードローブの奥の奥から引っ張り出してきたスキー帽までかぶって、ぎゅつと斧乃木ちゃんにしがみついた。

熱烈なハグ。

なにせ、もうひとつ有力な死因として、手がすべったの墜落死というのもあるわけで……、手袋もはめているので、尚更だ。

低酸素症対策としては、できれば酸素ボンベが欲しいところだったが、僕は神原と違ってアスリートではない……、部屋に常備はされていない。買いに行くゆとりも借りに行くゆとりもないので、いつそわかりやすく、思い切って一分間、息を止める覚悟を決めた。

「ちよつとくらいなら吸血鬼化しても、見逃してあげるよ？　撫公を騙したことは許さないけど、その程度なら」

なかなか基準が読み切れないが、斧乃木ちゃんからのその申し出は、監視者としてのトラップかもしれないので、つつしんで辞退した……、そして、なかなか珍しい僕のお色直しを終えたところで、

「『アンリミテッド・ルールブック  
例外的なほうが多い規則』  
」  
発動である。

で、みたびマンションを訪れた僕が、3LDK最後の一室で、家住准教授の旦那さんの個人情報をどうにか入手し、息をつく暇もなく、続いて次は彼の下へとホップステップジャンプしたっと思う？ 知らないおじさんに、あなた、もしくはあなたの奥様が、空飛ぶ毛布に狙われていると、警告しに向かったって思う？

ところがどっこい、さにあらず。

僕というロードムービーは、そんなハリウッド流の台本風には書かれていない——断つておくが、僕はハリウッド映画が大好きだ。商業映画万歳。興業収入に貢献するのが生き甲斐なのだ。かくありたいと思っているのに、いつも『どうしてこんなことに』なのである。

どういうことか、まあ聞いてほしい。

順調だったのは、333号室のベランダに僕達が到着したところまでだ……、厳密には、その時点でも順調とは言えない。

予想通り、僕が息も絶え絶えだったから。

温度と酸素についての対策はそれなりに功を奏したが、高速移動に伴う空気抵抗に対して、僕はあまりに無防備だった……、全身を隈無くぶん殴られたみたいな気分で、体力の消耗が著し

い。

で、僕がそんな風にぐったりしている間に、斧乃木ちゃんがパンチで窓ガラスを割った……、やっぱりこの子の機能のひとつめは、移動ではなく破壊のようだ。

臥煙さんに後始末を任せると決めたことで、家屋のデストロイに躊躇がなくなっているのかもしれない……。いや、第二の扉を蹴破ったときから、彼女には躊躇なんて微塵もなかったか。

ただ、窓を割った部屋がリビングである辺り、まるっきりの考えなしでもないらしい……。家准教授の寝室も、根源であるベビールームも、調べられるならきちんと調べたいところだし。ガラスを撒き散らす前に。

だが、やはり一番優先される調査対象は、最奥の部屋だ——僕と斧乃木ちゃんは室内に、今度の今度こそ完全に不法侵入し（飛び散ったガラスで怪我をしないように、土足のままであることも付け加えておく）、そちらへと向かった。

そして、第三の扉を開けた。

第二の扉と違って鍵はかかってなかった、と言うか、第三の扉には鍵自体取り付けられてなかったもので、さすがの破壊神も、この扉を壊しはしなかった——そしていよいよ、その室内で僕達が発見したものは……。旦那さんの給与明細？ 住民票？ 年賀状の束？ 記念切手のコレクション？ 本棚に並んだ稀覯本？ 財宝のありかを示す地図？ SNSのアカウント？

断じて否。



そこで僕達が目にする事になったのは、手作り感あふれる、ハンドメイドのぬいぐるみだつた——ある意味では、つい先だって見たばかりで、特に目新しさはなく、延<sup>ひ</sup>いては驚きには値しないとも言える。

だが、まったく同じではないし、この畳みかけには、息を吞まざるを得ない——まず、檻の中ではなく、その人形が横たわっていたのは、寝台の上だった。

そして毛布製ではなく、上半身を掛け布団、下半身を敷き布団で作られていた……、バルーンアートでも、風船をふたつ使つて作られる作品があるけれど、まあ、あんな感じである。

つまり、その分、サイズがでかい。

三歳児のサイズではない。

ベッドの、むき出しになったマットレスの上にあおむけになっているのは、いわゆる大人のサイズ、それも平均的な成人男性のサイズだった。

顔は同じである。『へのへのもへじ』——そう、まるであの目見た唯々恵ちゃん人形と、『親子のようによく似ている』。

バルーンアートならぬ布団アートの作りかたも含めて、その造形には共通点が感じられる——『こゝろ』と『暗夜行路』をそれぞれに読んで、同じ作者が書いたんだなと感じるのと同じだ。

「本当に大学に合格してる？ 『こゝろ』と『暗夜行路』の作者は違うよ、鬼のお兄ちゃん」  
だっけ。

あんやこころと覚えてしまっていたぜ。

しかしながら、そういう意味では、相違点は他にもある。それに関しては、相違点でもあり、同時に共通点でもあると見做<sup>みな</sup>すべきかもしれないんだけど――果物ナイフ。

唯々恵ちゃん人形の発見に際して、背中に刺さっていたため、すぐには視認できなかった果物ナイフだが、今回はそれが、取り立ててわかりやすさを優先したわけでもあるまいに、顔面の中央に刺さっていた。

ぶつすりと、刺さっていた。

ブレードの部分がまったく見えない、どころか、柄の部分も、一センチほど刺さってしまったている……、『へへのへのもへじ』で言えば、ちようど『への』と『への』の間くらい、つまり、眉<sup>み</sup>間のあたりに、深々と。

果物ナイフのわずかな刃渡りでも、寝台まで縫い付けるように貫通しているんじゃないかと思うくらいの『深々』である……、あんな部位にあんな角度で刃物を突き刺されれば、吸血鬼でも一回死ぬ。

人形だったら？

ベッドの上の刺殺体。大の字に倒れ、微動だにしない……、そりやそうなのだが、うん、そりやそうなのだが……。

「成人男性の人形だと見做すなら——これは、鬼のお兄ちゃんが命名したところの唯々恵ちゃん人形の、お父さん人形つてところかな？」

ずばり、斧乃木ちゃんが言った。

お父さん人形。

僕だったら、その結論に辿り着く勇気をふるうまでに、最低でも三日は要するところだったが、やはりプロ、この程度の現場には慣れっこだということか。

「いやいや、結構ビビってるよ。はっきり言えば、気分が悪い。無表情でも無情ではない僕なので。トランジスタスレンダーを追いかけて、紅口家<sup>ベにぐち</sup>を調査したときも大概だったけれど、鬼いちゃんの頼みをきくと、こんなことばかりだね。さすが児童虐待の専門家、退屈しないよ」

「僕がこの人形を作ったわけじゃないぞ」

「じゃあ、誰が作ったんだろうね？」

「……………」

誰が……、唯々恵ちゃん人形と、作者が同じなのだとしたら……、筆頭の容疑者は、そりゃあ家住准教授ということになる。なると、どうなる？

どういう『気分が悪い』ことになる？

ベビールームの檻の中に閉じ込められた唯々恵ちゃん人形も、それはそれは不気味だったけれど、なんていうか、あれはまだぬいぐるみとして受け容れることができた……、つまり、そ

うサイズだった。

だけど、こちらの部屋で横たわるお父さん人形には、それとはまったく違う不気味さがあつた……、大きな理由としては、無視できないほどに巨大だからだ。

大きさがそのまま大きな理由だ。

等身大の人形なんて、何らかのイベントくらいでしか見ないから……、ぬいぐるみというより、ほとんどマネキンみたいだ。

しかもブティックにあるようなマネキンではなく、あれ……、交通事故の危険性を示すためのビデオで、自動車の運転席に乘せられる、ああいうマネキン。これから壁に勢いよくぶつかつて、シートベルトを締めていないこのマネキンはフロントガラスからぶっ飛ぶんだろつというような危うさを、ひしひしと感ずる。

「僕は殺人事件の現場検証みたいだつて思うけれどね、鬼のお兄ちゃん。あるじゃない、名探偵の謎解きシーンで、被害者をマネキンで代用して、一大トリックを再現するの」

なるほど、例としてはそちらのほうが適切か……、実際、お父さん人形はこれから交通事故に遭つわけではなく、既に顔面に、果物ナイフが突き刺さっているのだから。

過去の出来事である。

取り返しのつかない過去の。

改めて僕は、ベッドの人形を見る。本音を言えば薄目で見たいところだったが、勇気を奮ってまなじりを開き、しっかりと見る……。やはり、サイズは成人男性だろう。つまり、女性の人形には見えない。まあ、うちのおつきいほうの妹なんかは、これくらいの、ひよっとしたらこれ以上の身長かもしれないけれど、骨格的にも、男性をイメージして作られているように思える。ずんぐりむっくりな布製のぬいぐるみなのに、骨格がどうか論じるのも変だが……。くそう、高速飛行の後遺症なのか、考えがうまくまとまらない。思考には酸素が必要だ。それに、暑い。

もう厚着を続ける意味はないのだから、ジャケットは脱ぎ捨ててしまおう……。気付けば汗みずくである。その半分くらいは冷や汗なのだが……。そんなことにも頭が回らないとは、やはり酸素不足が原因か？

「果物ナイフは、虐待人形に刺さっていたものと同じものだね。同じ商品ってことじゃなくて、まったく同じ」

謙虚なことを言っていたけれど、斧乃木ちゃんは、それこそ現場検証のように、淡々と分析する――まあ、斧乃木ちゃんに酸素は必要ない。呼吸しているかどうかも怪しいくらいである。

だが、まったく同じ？ まったく？

唯々恵ちゃん人形に刺さっていた果物ナイフの行方については、空飛ぶ毛布にくるまれる形で、一緒に飛行していったのではなんて心配をしていたくらいで、僕はそこまで気に掛けていた

わけではないけれど……、隣の部屋にあったのか？

お父さん人形に刺さって？

「……間違いない？ 見る限り、量産品だぜ？」

「グリップに付着している指紋の位置が、この前みた果物ナイフと同じだ」

「お、斧乃木ちゃん、そんな解析ができるの!？」

きみの目はALSライトなの!？」

「うそぴょん。柄の端のところに、ロット番号が刻まれているんだよ。その数字が同じってこと」

うそぴょんじゃねえよ。

可愛さで乗り切ろうとするな。

ロット番号を覚えているだけでも十分すごいのに、指紋を肉眼で解析できるという振りが大き過ぎて、感心し損なってしまった。

道具を名乗るなら、誇大広告を打つな。

でも、ロット番号……？

「たぶんいいナイフだよ、あれ。メイドインスイスの。名匠の手による、シリアルナンバー入りの限定生産とか？」

マジかよ。量産品って言っちゃったのに。

指紋が見えないのは、吸血鬼化していない今では仕方ないとしても、自分の見る目のなさにがっかりする。

しかし、こんなよさげなマンションに住んでいる大学教師が、安物の果物ナイフを使っていると考えるよりは、しつくりくる……。スイスナイフって、それだけで有名なブランドだもんな。しかし、しつくりくるけれど、しつくりくるなりに、僕は難色を示したい。

「それっておかしくないか？ 斧乃木ちゃん。唯々恵ちゃん人形の背中に刺さっていた果物ナイフが、同時に、隣室のお父さん人形の顔面に突き刺さるなんて、不可能だろう？」

「ミクロ量子論では不可能ではない」

「小賢しいわ<sup>こざか</sup>」

「単なる推論でも不可能じゃないよ。別に僕達は、それぞれの人形に、ナイフが同時に刺さっているところを見たわけじゃないだろう？ 背中から抜いたナイフを、顔面に刺せばいいだけだ」

量子論が猟奇論みたいになっているけれど、まあ、どちらにしても、論理的にはそうだ——だけど、問題は、誰かがその抜き差し作業をしなくちゃいけないってことだ。

家主は行方不明だし、僕が、扇くんにそそのかされる形で唯々恵ちゃん人形の『殺人犯』だと疑っていた旦那さんは——

旦那さんは、お父さん人形？

いやいや、誰が犯人だったとしてもだ。

妻でも夫でも、他の誰かでも。

その『刺殺犯』は、檻の中の唯々恵ちゃん人形を刺して、一回帰って、刺された唯々恵ちゃん人形を僕達が目撃したあと、またやってきて、唯々恵ちゃん人形の背中から果物ナイフを抜き、隣の部屋のお父さん人形の顔面に突き刺し、そしてまた帰っていったということになる——おいおい。

いくら『犯人は現場に戻る』と言っても、そんな行ったり来たりをちよこまか繰り返して犯行をおこなう奴なんて——

「はっ！　ち、違うぞ斧乃木ちゃん！　確かに僕はこのマンションに三度も行ったり来たりしているが、犯人は僕じゃない！　信じてくれ！」

「疑ってない。この状況でふざけられる鬼いちゃんが、信じられないけど、僕は好きだよ」  
好意を表意されちまったぜ。

ふざけたわけではなかったが……、この状況では、一番怪しいのが僕であることは確かなのだから……、斧乃木ちゃんをからかうための、僕の悪戯という線だ。果物ナイフのロット番号を見落としていたあたりが、いかにも僕らしい手抜きである。

「僕は僕が犯人でないことを知っているけれど、これこそ、考えうる限りもっとも容疑者っぽい台詞だもんな」

「それを言い出したら、僕の悪戯という線もある。お兄ちゃんを嵌めるための」



「嵌めるため……？　好きなはずでは？」

「好きなところの百倍くらい、嫌いなところもあるんだよ。それはどうでもいいとして、でも、筆頭の容疑者は、僕でもなければ鬼のお兄ちゃんでもない。家主のセンセイや旦那でさえない」

「？　じゃあ誰」

「虐待人形でしょ。あつちはちよこまか動くんだから」

……ああ。

なるほど、それも分断か。

凶器が同じ果物ナイフだからと言って、唯々恵ちゃん人形の背中を刺した犯人が、お父さん人形の顔を刺した犯人と同一とは限らない——そして『被害者Ⅱ犯人』なんて構図は、三重密室以上に、ミステリーではスタンダードな手法である。

まあ、被害者が人形なので、死んだ振りでさえないというのは、新機軸ではあるけれど……、あの日、僕達が帰ったあとから今日までの間のどこかで、唯々恵ちゃん人形が自分の背中から果物ナイフを引き抜き、隣室のお父さん人形を『殺害』した？

「……唯々恵ちゃん人形とお父さん人形。製作者は間違はなく同じって見て、いいと思う？」

「そういう風には見えるね」

扇くんは、バルーンアートじみたぬいぐるみ作りと、『へへのへのもへじ』を描いた絵師は別人ではないかという仮説を立てていたけれど、まあ、製作者がひとりでもふたりでも、それ以上に

よる共同作業でも、ひとまずはいいとして……、唯々恵ちゃん人形がお父さん人形を作ったってわけじゃ、ないってことだ。

お父さん人形は元々この部屋にあった。

大の字で寝ていた。

そして刺された。

「復讐……？　って、ことに、なるのか？　ええと……」

怒濤の展開どとうについ失念しそうになるが、僕がここに来たのは、別居中の旦那さんを探すための、手がかり探しのためだ——唯々恵ちゃん人形に狙われているかもしれない彼を、はばかりながら、保護するため。

だが、それには及ばず、及びもつかず、復讐はとつくに成し遂げられていた？　隣の部屋で？　ぬいぐるみを相手に？

卑劣にも背中から刺された仕返しを、顔面という部位を、相手の目を見据えながら刺した——見据える目も、見据えられる目も、『へのへの』だが。

「あつ——それとも、ひょっとしてこれ、予行演習か？　父親に復讐するための——」

「その考えかたは、とても無能でキュートだけれど、鬼のお兄ちゃん」

斧乃木ちゃんは、無表情のまま腕を組んだ——そして畳みかけるように、無能でキュートな僕を尋問する。

「その父親って人物、この世にいるの？  
イが結婚してるって、本当？」

別居中の旦那なんて実在するの？

インテリのセンス

どこまでが本当で、どこからが嘘なのかわからないような、茫昧ぼうまいとした環境にはいたく（痛く？）慣れっこになっているはずの僕は、しかしながら、斧乃木ちゃんからの問いかけに、足下ががらりと崩れていくような感覚を味わっていた。

足下も、これまで積み上げてきたものも。

鏡の国に行った。パラレルワールドに行った——地獄にも行つたし、最近では天国なんて場所にも行つた。

だけど、まるで他人の妄想の中に迷い込んだようなこの気分は、これまで一度も体験したことのないトリップである——怪異現象とは、まったく種類の違う恐怖だ。

遅まきながら、僕はこの333号室第三の部屋の、室内全体の様子を確認する……、これまでどうしても脚光を浴びせざるを得ないベッドにしか注目していなかったけれど、そもそもそのために、酸素不足になりながらも、ここに飛来したことを忘れてはならない。

旦那さんの個人情報求めて。

旦那さん、夫、父親、お父さん——まだ本名も知らないどこかの誰かさん、匿名の人物を特定するために。

だが、ご立派な書き物机にも、その隣に配置された小さな本棚にも、備え付けのクローゼットにも、一隅にあるステレオセットからも……、そういう目で見ていくからかもしれないけれど、まるで個性が感じられない。明窓浄机にもほどがある。

個性と言うか、人間性と言うか。

まるでテレビドラマのセットでも見ているかのようだ……。生活感がない。まあ、別居中だというなら、ここで生活はしていないのだから、そんなものはなくて当然なのだけれど……。

部屋に這入った直後、交通事故テストや殺人事件の現場検証のような、シミュレーションっぽい印象を受けたのは、ひよつとして、そのためか？ ベッドの上の刺殺人形だけじゃなく、部屋全体が、そんなイメージを形作っていた……。そういう意味では、ベビールームとは、趣が違

う。

隣室では、愛情の残骸を感じた。

残骸だろうと、愛情は愛情だ。

だが、打って変わってこちらの部屋からは、そういうなにがしかは感じられず、古めかしささえ感じず——そう。

無情を感じる。

斧乃木ちゃんが言うところの。

僕の感想なんて、果たしてどこまでアテになるのかという話もあるが……、鍵がつけられていた第二の部屋と、そうではなかった第三の部屋。廊下側からドアを開ける以前に、既に違いは表出していて……、無情。

「『レ・ミゼラブル』なら、ミュージカルをロンドンで見たよ」と、斧乃木ちゃん。

今回、やけにイギリス感を出してくるけれど、もしかしてこの子、本当にワートルローの戦いに参加してるの？

百年前どころじゃないだろう。

「付け加えると、残骸感がないのは、この部屋は隅々まで掃除が行き届いているからだろう——ベビールームも整ってはいたけれど、埃<sup>ほこり</sup>っぽかった。散らかっていないのは、普段から放つてい

るからだと思われる——<sup>ひるがえ</sup>翻<sup>ひるがえ</sup>って、こちらの部屋は、定期的に掃除されている印象だ」

人が住んでいないと、家はすぐに傷むと聞くけれど……、傷まないように気遣われている寝室と、そうではないベビールーム？

生活感はなくとも清潔感はあると？

第一の部屋——つまり、家住准教授の部屋からは、どちらに似た印象も受けなかった。廊下やリビングと同じ、『他人の家』の延長線上である。

「ハウスキーパーを雇っているのかな？ 個人情報なんて出てきそうにない。本棚の蔵書も、まるで本屋さんでビジネス書ランキングを見ているかのようで、この部屋の主が、いったい何をしている人かもわからないよ」

何をしている人か、何をしていない人か。

いる人か、いない人か。

勢い、テレビドラマのセットみたいとは言ったものの、だとすれば設定がまるで行き届いていないとも言える……。表面上仕上がってはいるけれど、適当で、雑だ。これではキャラ表を作っているとは思えない。なまじい家具で、お金をかけていそうなのに、その手落ちが引つかかる。

引つかき傷のように。

「強いて言えば、スパイのアジトみたい。父親は探偵ならぬ密偵なのかな。ここからはコンゲームの始まりってわけだ」

「斧乃木ちゃん、真面目に言ってる？」

「ぜんぜん」

匿名性の高さ——なんてものじゃない。

だけど、もしも家住准教授の旦那さんが、匿名ならぬ架空の人物だったとしたら、どうなる？

第二と第三で、部屋の違いはいろいろあるが、しかし娘が架空だったのだ、父親が架空でも、おかしくはない。

いや、おかしいのだが、ここは数学的アプローチで、『よって偽である』と、おかしいことを証明するために、仮におかしくないとして……、家住准教授が僕に話した彼女の来歴の、果たしてどこからが嘘になる？

すべてが嘘っぱちだと切って捨てるのは、この期に及んで気が進まない……、別居中、というのは、とりあえず嘘か。

だって、旦那さんはここで寝てるんだから。人形だとしても。今は刺し殺されていたとしても。三歳の娘に刺し殺されたとしても……、その三歳の娘が人形だったとしても……、家庭内別居も別居のうち、とか、細かい註釈をしたのは僕だったわけ？

でもそんな、『嘘は言っていない』みたいな叙述トリックを、現実世界で大らかに受容しているものかどうか……、ううん。

ベビールームの愛情の残骸。

少なくとも満一歳か、あるいは二歳くらいまでの娘が、隣の部屋で『生活』していた痕跡はある……、斧乃木ちゃんが言っていた通り、その後、彼女がどうなったのかは定かではないし、なんらかの形で死亡しているからこそ、唯々恵ちゃん人形が作られたのだという読みには、そりゃあ正当性がある。



「……ただ、何歳であろうと、生きていようと死んでいようと、娘がいたなら、父親もいるよな？ 生物学的には」

「父親はいるだろうけれど、それが旦那や夫とは限らない」

「リアリスティックな童女だぜ——そりゃまあそうだ。生物学的には。クローンよりはありえる。」

でも、スイス国籍だった家住准教授の場合、日本に移住にするにあたって、邦人の旦那さんと結婚することで、在留資格を得たってことだから……、ああ、でも、その事情が本当とも限らないわけか。

大学教師の失踪が、実は不法滞在がバレて、強制送還されただけなんて裏事情だったら、心から落胆してしまう悲劇的な真相と言うほかないけれど……、でも、もしそうだったなら、彼女を雇っていた大学側は、それをわざわざ公表しようとは思わないだろうな……。

大組織として、内々に処理しそうだ。

「入管が動くような事態になっているなら、この333号室もとくに踏み込まれているでしょ。こんな刺殺人形が寝転がってるってことは、そうじゃないってことだよ」

「ふむ……、確かに、今のところ、踏み込んだのは善良なる市民と死体人形だけだもんな」

しかし、それでも、家住准教授が結婚しておらず、つまり在留資格を有しておらず、不法滞在だったという線は残る——不法滞在がバレる前に逃亡したという線も。

僕も法学部じゃないから、その辺の法律が厳密にはどうなっているのかは知らないけれど――ああ、高校生の頃だったら、そんな法解釈、知恵袋ごと羽川に聞けば一発なのにな。

言える事実としては、ベランダから侵入した際、おっかなびっくり窺った限りでは、駐車場のタイヤ大量パンク事件でさえ、まだ捜査機関は動いていないようだが……。

「死んだ子供のぬいぐるみを作って、いつまでも抱き続けるってストーリーは、ありきたりなお涙頂戴だつて僕は言つたけれど」

「そこまで言つたつけ？ 偽悪的過ぎない、斧乃木ちゃん？」

「いない旦那のぬいぐるみを作って、一緒に生活していたとなると、いつまでも泣き暮らしているわけにもいかないよね。カウンセリングを勧める、では、取るべき手段として、ちよつともう弱いよ」

「確かに……、僕も昔、知恵袋ごと羽川が海外に旅立つたあと、寂しさのあまり、かつて切断したあいつの三つ編みを、あいつ自身に見立てて悩みを相談していた時期があつたけれど、あの頃はちよつと病んでたつて思うもんな」

「二度と僕に話しかけるな。そんな昔の出来事じゃないでしょ、それ。あの頃じゃなくてこの頃でしょ」

見立てていたことより、三つ編みを持つてゐることのほうが怖いよと、斧乃木ちゃんは言った――ん、待てよ、その点はどうだ？

見落としていたことがあった。

と言うか、ここまで考えもしなかったけれど……、唯々恵ちゃん人形にしてもお父さん人形にしても、なんで寝具で作られているんだ？

毛布。掛け布団と敷き布団。

なにせ他の疑問点が多過ぎたし、バルーンアートさながらのその出来映えにぼんやりと説得されていたところもあったけれど、普通、布団でぬいぐるみは作らないよな？

僕は手折正弦と違って人形遣いじゃないので、確実なことは言えないけれど、少なくとも、一般的なスタイルではないはずだ……。

「僕が思い入れの強い三つ編みを羽川に見立てたように、家住准教授にとっても、それらの布団は家族との繋がりとなる、キーアイテムだった……？」

「気持ちの悪い告白から重要な気付きに至るの、やめてくれる？ 鬼のお兄ちゃんが選挙権を持つてゐるって、本当？ ……毛布がベビーベッドに潜んでいたことを思うと、その気付き自体は、あながち的外れじゃないんだろうけど」

思い入れ……、情念。

虐待を受け、そして殺されたから、唯々恵ちゃん人形は動き始めたのだと解釈していたけれど、それ以前に、あの毛布自体に、怪異が誕生する理由があったのだとすれば……、だとすれば、お父さん人形は？

掛け布団と敷き布団は？

「とりあえず、殺しとくか」

斧乃木ちゃんが棒読みでそう言ったので、僕は身構えた——延期されたはずの死刑執行が、新たな罪（気持ち悪さ）の告白によつて、突如おこなわれることになったのかと思ったが、執行の対象は僕ではなかった。

「今のところは、ただのぬいぐるみみたいだけれど……、この刺殺人形まで動き出したら、てんやわんやだもんね。念のために『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』で、果物ナイフごと木っ端微塵にしておこう。異論はある？」

「いや……」

正直に言うと、人間の形をしたものを破壊する決断には、生理的な抵抗があるけれど……、ひらひらの毛布になつても僕に襲いかかってきた唯々恵ちゃん人形のことを思うと、掛け布団と敷き布団をほどけばいいつてもものでもなさそうだしな。

家住家の事情は謎めいたままではあるけれど、だからこそ、ぬいぐるみが怪異化する理由が不明である以上は、お父さん人形に関しては先手を打つておいたほうが間違いない。

さすがに斧乃木ちゃんの超必殺技、僕を酸欠に陥らせた『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』まで使うのはやり過ぎという気がするけれど（室内で使つていいスキルだっけ？）、やるからには徹底的にというのが、ナイスバディのスタンスなのだ。

寝台ごと破壊することにはなるだろうが……、窓を割ったり、古くはドアを蹴倒したり、斧乃木ちゃんの破壊神っぷりがとどまるところを知らない。

「でも、本当に大丈夫か？ ベッドを壊すくらいならまだしも、床を貫いちゃったらさすがにまずいだろ？ 階下にも、誰かが住んでいるだろうし……、ぬいぐるみじゃない誰かが」

「大丈夫。最近考えた新しい技を試そうと思う」

「新しい技？」

「ヴァリエーションだよ。破壊範囲を最小限に抑えるために……、本当は阿良々木月火に使う予定だったけれど、まあ、これも行きがかり上の縁だ」

「そうか……、そんな技があるなら是非……、ちよつと待って斧乃木ちゃん、もしかしてきみ、まだ僕の妹を殺すつもりでいるの？」

質問には答えず、斧乃木ちゃんは自らの拳こぶしを、果物ナイフの刺さったお父さん人形に向けた。

いつもならば、まるで指さし確認でもするかのように、人差し指を立てるその拳だが、このたび立てられているのは、その人差し指よりも短い、小指だった。

アンリミテッド・ルールブック  
「『例外のほうが多い規則』——小指版」

ニューテクというほどではない、そんなシンプルな発想の切り替えで破壊力が抑制できるなら、僕の家玄関を破壊するときも、小指版にしてほしかった——と言いたところだが、最小というほどピンポイントに絞れてはいなかったし、威力もそんなには抑えられてはいなかった……、ベッドはしっかり床面まで破壊された。階下まで貫通しなかったという程度だ。

「手加減は苦手だよ。指加減は苦指と言っべきかな。人差し指だろうと小指だろうと」破壊神は悪びれもしない……、まあ、結果としてお父さん人形は粉々になったので、目的は果たしたと言える。

しかし破壊に際して結構な音も響いたので、僕達はこのマンションからさっさと退散したほうがいいのだが、

「鬼のお兄ちゃん、ちよつとだけこの部屋を見張っておいて。僕は他の場所を見てくるから」と、斧乃木ちゃんと。

「他の場所って？」

「冷蔵庫、ゴミ箱、トイレ、お風呂、インテリのセンセイの寝室」

前はおこなわなかった、本格的な調査つてわけだ……、手がかりのなかったこの第三の部屋を、かくして破壊してしまったので、その代わり文字通り、まだ手（指？）をつけてない箇所を満遍なく調べようという算段らしい。

僕も手伝うべきかと思ったけれど、プロの仕事のプロな部分だ、邪魔になるだけかな。

でも、だからと言って、本当の残骸となったこの部屋を、見張る意味はないと思うが……？

「そうでもない。端切れになった布団が、それでもまだ動き始めるかもしれないし」

「なるほど……、プロはそこまで警戒しなきゃいけないのか」

それこそ、本当に不死身の怪異っぽいが……、吸血鬼だって、バラバラに引き裂かれた状態から再生するのは、簡単ではないと聞くけどな。

「端切れが動いたら、斧乃木ちゃんを呼べばいいんだな？」

「うん。気が向いたら調査を中断して助けにきてあげる」

「もつと高いモチベーションで助けにきて？」

「ところで、難しいでしょ？」

「？ 何が？」

「淑女を助けるの。少女を助けるみたいにはいかないよね」

言い放って、斧乃木ちゃんはてきぱきと、他の部屋の分析に向かってしまった——畜生、言われっぱなしだよ。

少女を助けるのだって難しかったっての……、失敗ばかりだったし……、ただ、相手が大人となると、難しさの種類が違った。

結局のところ、よく知らない人の頼みごとを聞いちゃ駄目だって訓話なのかな、これは……、知らない大人と話しちゃいけませんという親の教えが、まさかここで生きてこようとは。

生きてないけど。

死なせちゃってるけど。

親の教え、ね……、斧乃木ちゃんがいるときは、ピンチのときでも軽快なトークを叩けるタフガイを演じもできたけれど、ひとりになると、ぶつくさ余計なことを考えてしまうな。

語っていた『三歳の愛娘』だけでなく、『別居中の旦那』まで実在しない家族だったかもしれないとなると、ずっしり気が重くなる……、僕がやっている、頼まれごとを完全に逸脱した不法行為も、そんな妄想を構成するかけがえのないピースのようである。

そんな要素に、他ならぬ僕自身がなってしまうなど、顔面を刺されたお父さん人形よりも、よっぽど寒気が走る……、お父さん人形が木っ端微塵になっても、ぜんぜんすつきりしない。

依然として気分には霽もやがかかったままだ——調査に来たことで、より深淵しんえんでより婉曲えんきよくな五里霧中に迷い込んだようである。

まあ、別居中の旦那さんが、元々実在しないということになれば、命の危機が迫っていると、実在しない彼に警告する切迫性も同時になくなるので、それが判明しただけでも、無駄な調査だ



ったわけではないのか——お父さん人形を刺したことで、唯々恵ちゃん人形の復讐が既に成就しているのだとすれば、尚更だ。

だけど……、そう想到したところで、家住准教授の存在だけは、絶対に揺らがないよな？ 研究室でじかに会って話しているし、それ以前に、前期授業の間、僕は彼女から、ずっとスイスドイツ語を受講していたのだから。

スイスが存在するのと同じくらい、家住准教授も存在する。

旦那さんの居場所を突き止めることで、芋蔓式に准教授の居場所が突き止められたらという希望は既に断たれたので、ならば彼女の居場所を突き止められるか否かは、斧乃木ちゃんが現在おこなっている第一の部屋、及びリビングダイニング等々の鑑識作業にかかっているということになるが……、でも、在留資格さえ偽装だったかもしれない人間の位置情報を突き止めるのは、どう強引に解釈しても、もう完全に、不死身の怪異の専門家のやることじゃないよな？

普通に警察の仕事だ。

魑魅魍魎ちみもろうりょうのオーソリティとしては、お父さん人形を、怪異化する前に粉々に破壊しただけで、十分役割を果たしたと言える……、もちろん、逃がしてしまった『空飛ぶ毛布』をどうにかする責任が僕にはあるのだけれど、現実問題、その結末に至るルートが形成できないと言うか……、いやいや、ひとりになったからってネガティブになるな。

何ができないかではなく、何ができるかを考えるんだ。

今僕にできることは？ 童女に命じられた通り、破れた布団が、寝台の破片に紛れて動かないかどうか、じっと見張ることである——僕にしかできない専門性の極めて高い仕事だとは思わなければ、考え過ぎてやる気をなくすよりはマシだ。

僕こそ保て、モチベーションを。

斧乃木ちゃんの全室調査がどれくらいかかるかわからないし、椅子に座って見張ろうかな……、それとも、何かあったときに即応できるよう、立ち番を続けるべきだろうか。

そんな、まあ、別にどっちでもいいと自分でも思うようなことで迷って、気が逸れたときに、

「——っ！」

と。

まさしく端切れのひとつが、微動したように見えた——すわ、立ち続けていて正解かと、僕は腰を落とす。

が、しかし、そのちっぽけな端切れが、僕に向かって飛びかかってくるというようなことはなかった……、かと言って、小心者の見間違いだったわけでもなく、端切れは、わずかにひらひらと、微動し続けている。

よくよく凝視すれば、その周囲の端切れも、中身の羽毛も、なんなら寝台のマットレス内の綿も、閉め切られた遮光カーテンも、ひらひら、ふるふる、ごくごくかすかに揺れている。

はっ……、なんだ。

粉々にされてパーツパーツの質量が軽くなったから、ちよつとした風にでも反応して、揺れてしまっているだけか——ちよつとした風？

風？

屋内なのに？

斧乃木ちゃんが、ガラスを割ったリビングならばいざ知らず——ベビールームと同じく、カーテンも、窓も閉め切られたこの部屋で？

貫通こそされなかったものの、目も当てられない大穴の開いた床面から、気圧の関係か何かで空気が吹き上げているのか？ じゃなきゃ……、床下でネズミとかが走り回っていて、それで生じた空気の動きに反応して……、でも、こんなマンションでネズミなんて……、……、……、空気を動かすのって別にネズミじゃなくても……、僕が椅子に座ろうとしただけでも空気は動くわけだし……、つまり……、つまり床下じゃなくても、室内でもいいよな？

そう天啓を得たときには、遅かった。

粉微塵にされたお父さん人形から、いつときも目を離すことなく構えていた見張り役の僕は、真後ろから襲撃を受けたのだった——さつき暑さに耐えきれずに脱いだ、己の分厚いジャケットに。

毛布に襲われたのと同じ日に、ジャケットに襲われる奴も珍しいだろうが、それを誇りにしている場合ではない——『遅かった』とは言ったものの、それでもぎりぎり気が付いたことは無駄ではなかった。そして、同じ日の数時間前、毛布からの襲撃を受けていたことも。

ジャケットの両袖が首元に巻き付く寸前に、僕はその隙間に片腕を差し込むことに成功した……、もう二度と、布に首を絞められたくないというトラウマが、反射神経として働いたわけだ。

だが、そのパワーはすさまじく、僕はあっさりと、バックドロップ気味に後ろ向きに倒された。正確には、引つ張られる力を感じた時点で『あ、これは無理だな』と思ったので、僕はあえて踏ん張らず、むしろわざと自分から、勢いよく転倒してみせた——柔道とかの受け身の考えかたには反するだろうが、背中全体から落ちることでダメージを平等にわけへだてなく分散し、かつ、大きな音が立てられればと思ったのだ。

その音を聞きつけて、頼れる斧乃木ちゃんが（気が向いたら）助けに来てくれるんじゃないかと期待して——だけど、生憎、期待したような音は出なかった。

僕を引っ張ったジャケットを下敷きにする形になったので、結果、消音されてしまったのである——ダメージもその分軽減されたが、しかしそれでも、こうなると、倒されてしまったのはまずい。

締め上げられるのを巧みに避けたとは言えるが、しかしこの体勢は、片腕を封じられたとも言える……、こんなパワーで絞られ続けたら、僕は腕ごと、首の骨を折られてしまう。

鉄をもひん曲げる力——いや、でもそれは、唯々恵ちゃん人形に属す力だろう？ お父さん人形でさえない。なぜ僕のジャケットが、僕を襲う——僕は自分のジャケットを虐待なんてしていないぞ!?

それともまったく見当外れだったのか？

唯々恵ちゃん人形の毛布が特別だったわけではなく、このマンションの333号室は、すべての布が人を襲う家なのか——考えるのはあとだ、助けを呼ばないと！

このままだと静かに、音もなくきりきりと、くびり殺される……、くびれているのは羽川のウエストだけで十分だと言うのに。リビングどころか、マンション中に響かせるくらいのつもりで救難の声を上げようと、僕は大口を開けた。ジャケットの分厚い両袖が、僕の首を絞めようとする力はとどまるところを知らないが、幸い、まだなんとか喉は開いている——その開いている喉に。

今度は帽子が飛び込んだ。

スキー帽である。

これもさつき暑くて脱いだ奴だ——帽子まで!?

「もがつ……もぐつ……」

嘘だろ、おい。

僕は帽子を喰<sup>く</sup>ったって理由で死ぬのか？

いや、でも、このままだと気管が詰まって窒息死だ——まさかジャケットと帽子に、頸部を内外面から攻められることになるなんて。

僕の衣服が反乱を起こしている。

まさか高々速高々度飛行に耐えるための厚着が、こんな形で裏目に出るなんて……、低酸素症どころじゃない、無酸素状態である。これまで僕もいろんなダメージを受けさせてもらってきたけれど、こんな理不尽な目に遭ったのは間違いなく初めてだ——苦しいのもまずいが、口を封じられ、無力な僕が助けを呼べなくなったのはもつとまずい。

ひとりで勝手に助かるだけならぬ、ひとりで勝手に死ぬだけだ。

こうなると格好悪いとかみつともないとか言っている暇はない、両足と、自由になる片手を、床面にばたばた打ち付けて、斧乃木ちゃんにモールス信号を——いや、ばたばたさせるだけでいい。

しかし、待てど暮らせど助けは来ない。

どうした斧乃木ちゃん。

三つ編みを相談相手とする男を助けるのは、そんなに気が乗らないのか——あるいは、音がぜんぜん出ていないのかもしれない。僕は、僕が思っているよりもずっと早く消耗している……、大太鼓でも叩いているかのように、思いつきり床を蹴っているつもりでいて、実際には僕はすり足で歩いている程度の音しか立てられていないのかも。

そして斧乃木ちゃんはまだしも、忍がぜんぜん助けてくれねえ。確かに僕はまたもバットシグナルを点灯させる機会を逸したかもしれないけれど、忍ちゃん、別に自分のタイミングで助けに来てくれてもいいんだぜ？

この程度の危機は、自分で乗り越えろと？

檻に閉じ込められたときと同じで？

いや、たぶんすやすや寝てるだけだな……、『自分が寝過ぎた』くらいの理由でパートナーが死んだら、あの幼女も、さすがにショックを受けると思うのだが……。

でも、死ぬときって案外こんなもんか？

交通事故で落命した八九寺真宵だって、のちに神様にまでなったから、その事故がまるでドラマチックのように捉えられるだけであって、基本的にその死も、あっけなくて唐突な死だ。

事故も事件も、病気でも寿命でも、人間の死なんて、肩透かしで出し抜けなもの——なのは間違いないさそうだが、けれど、その出し抜けは、僕に限っては、今日、この瞬間じゃなかった。

忍は寝坊を悔いずに済むわけだ。

帽子を喰ったという理由で死ぬのかと思ったが、それは正反対で、僕は帽子を喰ったという理由で助かったのである。

もがもがもぐもぐ、もがき続けているうちに、ムクムク口腔内のスキー帽が、動きを弱めていくのを感じたのだードリルみたいな機動で僕の咽喉部に侵入しようとしていたスキー帽の動きには、いっそスキー板を吞み込んだほうがマシだとさえ思わされていたけれど、そのねじ込むスクリューが、弱まって、弱まって、弱まって……、止まった。

「!? げほっ、ぐふっーかはっ!」

その理由もわからないままーだって、理由がわからないと言えば、そもそも帽子が僕の口を目掛けて飛び込んできた理由からしてわからないのだから、今更だー、僕は口の中のスキー帽をえずいて吐き出す。

まだジャケットに首を絞められているままなので、呼吸が完全に回復するとはいかないが、これで一気に楽になった。

むろん、嘔吐した帽子が、再びディープキスを迫ってくることを恐れずにはいられなかったけれど、唾液まみれの帽子は床の上でぐったりとして、動かないままだーただのスキー帽に戻った、ように見える。

や、やつつけた……?



何もしていないのに？　じたばた、仰向けになってもがいてただけで？　僕が元吸血鬼だから、噛む力が強かったとか……？　それとも……、唾液？　最近使っていないので、その後遺症がまだ維持されているかどうかは確証が得られないけれど、吸血鬼の体液には治癒能力が……、いやいや、治してどうする。

じゃあ、そうじゃなくて。

「み……水か」

水が弱点か、こいつら。

当てずっぽうの山勘でしかないが、布、生地という特性と、その弱点は符合する……、僕を窒息させるために口腔内に飛び込んで、しかし唾液にまみれることで、怪異化したスキー帽は、沈静した。

濡れた帽子なんて、誰も被りたくないもんな。

ならばジャケットにも同じことが言える、ならば試してみる価値はある——かどうかは酸素不足の頭では計りあぐねるけれど、試せるカウンタープランがそれしかない。

まあ、僕も吸血鬼化して、泳げなくなったりしたしな——怪異にとって水というのは、代表的な鬼門なのかもしれない。蟹とかになると、また別だろうけれど……。

なので僕は、ありったけの唾液をジャケットに浴びせ——た、と言いたところだが、残念ながら僕には二リットル分の唾液をはき出すことはできない。不死身性をいいように使っていた頃

なら、自分の指で舌を引っこ抜いて、部屋一面をあふれんばかりの血に染めているところだけだ、今の僕がそれをすれば、無残な自害以外の何でもない。

あと、それはりすかちゃんの兵法だ。

阿良々木暦はもうちよつとダサイ——ジャケットの締め付けに力の限り抵抗しつつ、自由になる片手と両足で、仰向けのままマンションの床をくねくねと這<sup>は</sup>って、バスルームへと向かったのだ。

幸い、間取りは最初の来訪時に把握していた……、水回りというならいつそもうトイレでもいいかという諦観もあつたが、衛生観念が勝った。

僕は意外と潔癖らしい。

サバイバルで死ぬタイプだ。

全身で床掃除をしているかのような動きをしているしな……、蛇の呪いか？

で、蛇行運転の末にお風呂の洗い場に転がり込んだ僕は、入浴の準備をする際にコックをひねり間違えたときのように、服を着たままで全身にシャワーを浴びた——大胆にもアウトターを意識した意匠のマフラーごと。

つまり、もしも読みが違っていたら、僕はさっきのスキー帽と同じように、全身ぐつしよりの濡れ鼠<sup>ねずみ</sup>で窒息死していたわけだ。夏休みに大学生が、所在不明の准教授のマンションに不法侵入

した拳句にバスルームで変死……、死ぬときってこんなものかなと悟ったようなことを言っただけで、訂正する。こんな変な死にかたは御免だ。

と、こうして前言撤回できたことからわかるように、どうやら水が弱点だという、証明可能な僕なりのリーマン予想は的中していたらしく、ぐったりしたのはジャケットだけだった。

呼吸的には、結構きわめだった……、もしもシャワーがミストシャワーだったら、間に合わなかったかもしれない。解放されたというのに、ぜんぜん立ち上がる気にならない……、コックを定位置に戻すのさえ面倒で、水流を浴びるがままである。滝行のごとくだ。

さっぱりする。

いや、さっぱりだ。

「あー……、えーつと……」

えーつと。

今、何やってる最中だっけ？　そうそう、見張りだ……、お父さん人形の端切れが、個々に動き出したり、寄り添って再生したりしないように……、ちゃんと見張らなきゃ……。

「やあ、ここにいたのか、鬼のお兄ちゃん、略して鬼いちゃん。シャワー中に失礼。服が襲ってくるから、ワードローブは絶対に開けちゃ駄目だ——と、注意しに来たよ」と。

気付けば、脱衣所に斧乃木ちゃんが立って、濡れっぱなしの僕を見下ろしていた――感情の読めない無表情は変わらないけれど、マキシ丈ワンプの裾や肩紐が乱れているわ、首や二の腕にくつきり痣<sup>あざ</sup>ができているわ、激しい戦闘を繰り広げたあとであることは、容易に見て取れた。

見て取れたが、何があった。

推測するに、他の部屋の調査中、探し物の際の当然の手順としてワードローブを開けて、袋叩きに遭ったのだろう……。破壊神の彼女なら僕と違って、力業で切り抜けただろうが……。なるほど、道理であれだけ物音を立てても、僕を助けに来られないわけだ。

お互いにお互いのバトル音を、打ち消すようにノイズキャンセリングしていたとは。

「わかった。気をつける」

僕は身を起こした。

休憩終わり。

シャワーを浴びてすっきりしたし、さあ続きだ。

詳しく聞いてみると、斧乃木ちゃんは服のみならず、カーペットにまで襲われたらしい——僕だったらそれでイチコロだったが、さすが破壊神、それすらも、単純なパワーで引き裂いたそう。僕にそのパワーの十分の一でもあれば、あんなに苦戦せずに済んだのだが、それはいくらなんでも無い物ねだりが過ぎよう。

百分の一を望むのもおこがましい。

スキー帽が助けを呼ぼうとした口の中を狙ってくれたことがラッキーだった……、いや、それは単なる幸運ではなく、例の学習能力の高さ、この場合はその時点での低さと言うべきか。生まれたての怪異だったから、向こうから勝手に自滅してくれたようなものだ。

「いやいや、大したものだよ。スキー帽は自滅でも、吸血鬼パワーに頼らず、それを足がかりにジャケットを倒してみせたことには、鬼のお兄ちゃんの成長を感じる。見直した。この件はきちんと臥煙さんに報告しておいてあげる」

「できれば報告するのはやめてほしい。それは報告じゃなくて密告だよ。……斧乃木ちゃん、その痣とか大丈夫なの？」

「痣じゃなくて死斑だね。僕の場合。死体だから。大丈夫だよ、この程度、かすり傷だ」

死斑と聞いたあとにかすり傷と言われても、大丈夫とは思えないな……。

「しかし、僕みたいセンセイの衣服に襲われたのならまだしも、鬼いちゃんは自分の服に襲われてるわけだね。なんだか法則がよくわからなくなってきたな……」

「今着ている服もやばいのかもな。よし、斧乃木ちゃん、互いに裸になろう」

「見直したのを見直そうか？」

「念のためにそのワンピースを濡らして、透けさせておいたほうがよくないか？」

「透けさせようという下心が透けているじゃないか。んー……、たぶん逆で、鬼のお兄ちゃんのスキー帽とジャケットは、鬼いちゃんが暑さに負けて脱いだことで、発動条件を満たしたんだと思う。だから、裸にはならないほうがいい」

「僕が、根性がなくて脱いだみたいな言いかたはやめてくれ。夏なんだよ、今は。負けたんじゃない、対応したのさ」

「温度なんて感じなくしてやろうか」

「怖い怖い怖い。寒気が走る」

でも、言われてみれば、その通りか。

もしも着用しているジーンズやシャツ、下着や靴下までもが無条件で襲ってくるなら、脱ぐ暇なんてなく、あっという間に全身くまなく圧着されてしまう……、あんな蛇みたいな、くねくねした移動さえ許されなかっただろう。

ジャケットとスキー帽に共通する要素があるとすれば、僕が脱ぎ捨てていたということだ――脱ぎ『捨てて』。

……それがキーワードか？

……捨てたことが？

いや、それを『我が子』を『捨てる』ことと、一緒にされても困るけれど……、でも、そう言えば二回目の来訪の際、檻に閉じ込められたとき、僕は大工道具を取り寄せるためにジーンズを利用したけれど、あのときは、脱ぎはしたけれど、ジーンズを手放しはしなかった。ロープとして使うために、裾をしつかり持ち続けていた……。

家住准教授の服やカーペットが斧乃木ちゃんを襲ったことと、無理にでも共通点を探すなら……。

「どうだろうね。その辺はマジで専門外だから……、スーツやカットソー、パーカーが襲ってくるのはまだしも、パンティーやパンティーストッキングに襲われるっていうのは、斬新だったよ。こういうのは鬼のお兄ちゃんの担当だと思いながらの激戦だった」

「お互い、絵にならないバトルに興じていたらしいな」

「鬼いちゃんに質問。昼間に鬼いちゃんを動物用のケージに閉じ込めた毛布が、元々は虐待人形だったっていうのは、間違いない？ ベビーベッドに敷かれていた無印の毛布じゃなくて？」

「それは……、確かだと思う」

「色合いとかが似てただけってことは？　ほら、人間の目って、社告しやこくと杜若かきつばたくらいだと、おんなじように見えるじゃない」

「おいおい、社告と杜若を見間違えるわけ……、そつくりだ！」  
いや、そうじゃなくて。

「『へのへのもへじ』ってサインがあつたし、刺された背中のところの、穴も空いていたし」  
あれもあれで急襲だったので、このたびと同じく全貌を理解できているわけじゃあないけれど、逃がしてしまったあの魔法の毛布が、唯々恵ちゃん人形の構成要素だったことくらいでよければ、断定できる。

それくらいのことはさせてほしい。

他の衣服、布やら生地やらが動き出すのであれば、虐待されていないただの毛布でも動き出すんじゃないかという斧乃木ちゃんの読みだろうが……、そして、確かにその読みには聞くべきところがあるが……、しかし、そこもまた、分割して考えるべきポイントなのかもしれない。

「とすると、僕達を襲った衣服は、怪異化したと言うより、眷族化したのかもね」

「眷族化……？　眷族化ってなんだ？」

「てめえが昔された奴だよ」

要所要所で言葉遣いが乱暴になるな。



今回は完全に僕が斧乃木ちゃんを巻き込んでるので、どう遇されても仕方ないが……、トラブルに巻き込まれて散々だぜ！　みたいなことも、去年、まさしく散々言ってきたけれど、巻き込む側はこんな気持ちか。

「唯々恵ちゃん人形が『仲間』を増やしているってことかい……？　この部屋から逃げるにあたって、手下に追っ手を始末するよう、命令しておいたとか……？」

「あるいは、そういうスキルを所有する怪異なのかも。つまり、布を操るスキル……、その場合は、怪異化したと言うより、自動的なトラップと表現したほうが近い。家中に仕掛けられた地雷みたいなものだ」

脱いだ服を床に置くとか、ワードローブを開けるとか、あるいはガラスを割るとかベッドを壊すとか、不法侵入者のそういう一挙一動が引き金になって、トラバサミが動いたという一連の流れだと？

ふうむ。

確かに、スキー帽やジャケットから食らったシンプルな攻撃は、言われてみれば『自動的なトラップ』っぽかった……、単純な命令にのみ直線的に、ただただ従っているような……、彼の他の行動に対応しようとはしていなかった。

敵にアドバイスをするのもおかしな話だけれど、たとえば、僕がバスルームに向かっているのを察すれば、首を絞めるジャケットの片袖を解いて、廊下のドアストッパーにでも係留していれ

ば、それだけで僕の望みは絶たれていた。

が……、しかしそれよりも、なぜか僕は眷族化という言葉のほうに、シンプルな正当性を感じた——『間違っている』と感じる正当性ではあるが……、かつて、それをされた者として。

「初めてあなたと意見があったね。うん、僕もそう思う」

「それ、よく言うよね」

「僕も、何かの怪異の眷族でこそないけれど、専門家達の道具として蘇生させられたところがあるから。まあ、不気味なこの家自体が、怪異を生みやすい温床になっていることは確かだろう。土足で這入ってよかったね」

靴を脱いでいたら、その靴にも襲われていたのだろうか？ ベランダは『家』の中にあたるのか、『靴』は布にあたるのか、それも検証の必要などころではあるけれど……、正直、積極的に確かめたくはないな。

斧乃木ちゃんがお父さん人形を破壊した判断は、こうなると、大正解だったのかもしれない……、あの巨大な人形に襲われていたら、そうそう切り抜けられはしなかったように思う。

「怪異が増えたことで、『空飛ぶ毛布』を探さなきゃいけない理由が増えたね。虐待人形が、どこかで仲間を作り、無限増殖している危険性があると、とても放ってはおけない。鬼のお兄ちゃん、くじけてない？」

「ちつとも。やる気満々だぜ。なんでもござれの阿良々木暦だ」

「そういう虚勢、嫌いじゃないよ。子供に語って聞かせたい」

「淑女を助けるのは、確かに難しいみたいだが、僕は難しいことにチャレンジしたくなっちゃう奴なのさ」

「そうだっけ……?」

「違いました」

「まあ、心頭滅却すれば火もまた涼しと言えるくらいには、根性がついたのかもね」

「自動的なトラップにしろ、眷族にしろ、そういうのがあちこちに配置されていたってことは、この333号室には、守るべき何かがあるってことじゃないのか? 旦那さんの個人情報なのか、家住准教授の失踪先なのか……、とにかく唯々恵ちゃん人形が隠蔽したかった何かが」

単純に不法侵入者を撃退する自衛システムだったのかもしれないけれど、死にかけて、ずぶ濡れになって、手ぶらでは帰れない。阿良々木暦の沽券こけんに関わる。

「その点については、いい報告ができそうだよ、鬼のお兄ちゃん」

「? どういうこと?」

「まあ、それはここを脱出してから考えよう……、とにかく、これ以上リスクを冒して、この333号室の搜索を続ける必要はないってこと」

「……ひょっとして、もう、必要な情報は手に入れたわけ? 家住准教授のワードローブを開ける前に、既にリビングとかで……」

いや、だったらワードローブは開けないか……、でも、何も手に入れていないのに尻尾を巻いて退散しようというような死体人形ではないはずだ。絶対にない。ありえない。

一見感情のない人形に見えるけれど、その内面は、僕以上に負けず嫌いで、僕以上に根に持つ性格である。手ぶらで帰れないという気持ちだつて、僕以上のはずだ。

「これを言うと、また鬼のお兄ちゃんが僕のことを破壊神破壊神と陰険になじるかもしれないけれど、ほら、インテリのセンセイのパンティーストッキングと戦っているときに、ちよつとだけ周辺被害を出してしまつてね」

破壊神扱いされたことを一番根に持っているらしい斧乃木ちゃんが、もつとも苦戦した相手はパンティーストッキングらしい……、不勉強で、僕はまだ穿<sup>は</sup>いたことがないけれど、意外と強度はあるつていうもんな。

最終的には勝利を収めたのであれば、それはよかったにしても……、周辺被害？  
だと？

「結果としてセンセイの部屋の天井が壊れた」

「結果がそれなら、原因はきみだろう。貫通させてないだろうな？」

「大丈夫。ここは最上階だから、貫通させても屋上だ。立ち入り禁止で人はいない」  
貫通させてるんじゃ、大丈夫じゃないよ。

ここが屋上になつてしまった。

どんどん大ごとになっていく……、ぜんぜんいい報告を聞かせてくれないじゃないか。勘弁してほしい。

「結果として」

原因の斧乃木ちゃんは淡々と繰り返した、暴拳を繰り返した斧乃木ちゃんは。

「開放された新エリアであるその屋上で、僕はこういうものを発見したよ。巧妙な隠し場所だったけれど、怪我の功名とはこのことだね——光明が見えてきた」

「どんなうまいこと言っても、天井を破壊しているからな？ パンチラインが決まらないよ。……何それ？」

天井を吹き抜けにリノベーションしたというのだから、333号室第一の部屋、家住准教授の私室全体の様子は推して知るべしと言ったところだが、それでもまだ、その戦災は室内にとどまっているんじゃないかと思っていた——しかし両隣、つまりリビングとベビールームに、破壊神の被害は及んでいないはずで、なので、たとえこんな苦境であっても、そちらの調査はまだ続行しなければなるまいと。

甘かった。

斧乃木ちゃんは第一の部屋で、両隣の壁も貫通させていた——魔貫光殺砲まかんこうさつぱうの使い手なのかよ、この子は。

天井のみならず、壁まで取っ払って、3LDKを1LDKに改築してしまい、更に言うなら、リビングとダイニングとキッチンの区別も、わやくちゃだった。

台風一過って感じ。

お父さん人形の破片が微動していたのは、僕の背後で怪異化したジャケットが蠢うごめいていたからではなく、家の中で斧乃木ちゃんの攻撃が渦巻いていたからかもしれない……、違法行為の違法性が、俄然高まっていく。

押し込み強盗が来たって、室内はこんな悲惨な様相を呈さない……、あの整っていた333号室が、押し込み強盗が来たら、何も盗らずに帰るくらいに荒れ果ててしまった。

なんだか、クラスメイトとの諍い<sup>いさか</sup>を内々で収めようと頼れる担任教師に相談したら、大々的に学級会を開かれてしまったみたいな気分だ。

まあ、大ごとにしなければ解決しない私事って、あるけどな……、すげー犯罪の共犯者にされてしまった。

否、驚いたことに、僕が主犯だ。

僕、本当に将来警察官になるのか？

なんにしても、こうなると是非もなく、調査は中止である——近隣住民からの通報を恐れてというのもあるけれど、仮に家住准教授や旦那さんの痕跡、唯々恵ちゃん人形搜索のための手がかりがあつたとしても、我々はそれをぐちゃぐちゃにかき混ぜてしまった。ゴミ箱の中まで探すどころか、部屋全体をゴミ箱みたいにしてしまった。

ぼやぼやしていると、別の布が襲ってくるかもしれないし、それとはまったく別の種類のトラップが仕掛けられている危惧もある……、様々なファクターを総合的に勘案すれば、出すべき結論はわかり切っている。

今すぐ逃げろ。

アンリミテッド・ルールブック  
「『例外のほうが多い規則』——離脱版」

なぜか不思議なことに、天井に穴が空いていたので、ベランダに出るまでもなく、僕達の逃走は完了した―濡れたジャケットと濡れた帽子は、それでも極寒の上空では着ていないよりはマシだと思つて着用したのだが、水分は上空では凍るということを忘れていた。

あれだけ低酸素症と低体温症を恐れていたのに、到着後の333号室では無酸素状態を体験し、帰り道では、自ら凍傷になるための努力をしてしまうとは……、僕はいったい何をやってゐるんだ？

自殺か？

ええと、語学の単位をもらうための、ベビーシッターのバイトだっけ？

とは言え、このアドベンチャー、収穫はあつたのだ。

①第三の部屋に旦那さんの痕跡はなし。

②唯々恵ちゃん人形の他にお父さん人形。

③333号室では他の布も動き出す。

④布は水が弱点。

そして―斧乃木ちゃんが何とも計画的なことに、屋上で見つけた、新ヒント。

そう、待望の新ヒントである。

「で、斧乃木ちゃん。何それ？」



着陸後、呼吸を整えたところで（さらつと言っているが、そのリカバリーに五分以上かかっている）、僕は改めて、333号室で『それ』を見せられたときと、寸分狂わず同じ質問をした――対する斧乃木ちゃんも、同じ答を返す。

「人形だよ。ぬいぐるみさ」

「……………」

ちなみに、着陸地点はおなじみの浪白公園である――333号室から逃げられればどこでもよかったのだが、自宅に着陸するのは避けたかった。自宅が無事で済まない可能性を強く感じたので。

その点、この公園は、その昔、よくミーティングをした場所ではある……、ヘリポートの候補としては、他に北白蛇神社の境内というのもあったけれど、万が一社を踏み潰したら、八九寺が怒るかもしれないからな。

久し振りに来たけれど、相変わらず人がいないな、この公園は……、僕の町の少子化はそのまま進行しているのか？

「もっかい見る？」

そう言つて、斧乃木ちゃんは僕にぽいつと、『それ』を投げ渡してきた――ようやく入手した重要な証拠物件なのに、ぜんぜん大事に扱わない。証拠袋に入れて保存しろとは言わないが……。

人形。ぬいぐるみ。

手のひらにすっぽり収まるサイズ……、唯々恵ちゃん人形よりも小さく、ましてお父さん人形とは比べるべくもない、キーホルダーにつけられるような大きさの。

「……ふむ」

人形、という表現は、この証拠物件に関しては正確ではない——『人の形』ではないからだ。クマだった。

手作りでもない、果物ナイフに関しては見る目のなさを遺憾なく発揮した僕だったが、これについては自信をもって言える——ギフトショップで売っているような、大量生産品である。

もちろん、手作りに対して大量生産が劣るわけじゃない、あんなハンドメイドの人形を、二体も見たあとじゃあ、特にそう思う。

デディベアって奴か？

だとすると、ぬいぐるみという表現に関しては、むしろ正確ということになるのかな？ 呪術で成り立っている死体人形とか、バルーンアートじみた布団人形とかのほうが、よっぽど『縫』ってはいないわけだし……。

とにかく、小さなクマのぬいぐるみだ。

デザイン的には、相当古そうに見える……、古めかしいとか時代がかつているとか言うより、ただ単に古い。経年劣化。しかも汚れている……、かなり長期間に亘って、雨ざらしだったよう

な……、屋上から拾ってきたと斧乃木ちゃんは言っただけで、言葉を選ばずに言えば、正直、調査中にゴミ箱の中で見つけたんじゃないかとさえ思ってしまう。

「……このちっちゃなクマの内側に、国際的な重要機密の保存されたUSBメモリが封じられているとか？」

「んなわけないでしょ。そのぬいぐるみが、かつてセンセイの持ち物だったんじゃないかと、思っただけさ」

「？ 屋上に落ちてただけだろ？ 他の誰かが落としたのかも——立ち入り禁止か」

パラボラアンテナを設置する作業員さんか誰かが落としたという可能性はもちろん残るにしても……、333号室の真上だったっていうのは、まあ、気になる点である。

333号室のベランダから、ぽいと屋上へと放り投げたら、およそその辺りに転がるか？ しかし、だとしても、何のためにそんなことを……、『巧妙な隠し場所』と斧乃木ちゃんは言っただけで、その雑さは、『隠した』というより、『捨てた』に近いように感じる。

捨てた。

「捨てたのだとすればなぜ捨てたのかだよ、鬼のお兄ちゃん、略して鬼いちゃん。それを突き止めることが、次なるヒントの発見に繋がるとは思わないかい？」

思わない……、とは言わないが、正直、そんな婉曲なヒントではなく、もっと直接的な手がかりが欲しかった。

そんな頼りない、無関係かもしれないアイテムからでも根気よく手探りを続けるのが、プロのやりかたということなのだろうが……、素人はもどかしい思いに囚われるぜ。

あからさまな攻略法が欲しい。

「このクマのぬいぐるみが、センセイがかつて、不仲だったというご両親から唯一プレゼントしてもらった思い出の一品だって気はしない？」

「ここでそれを言っちゃったら、そうじゃない気のほうがしてくるんだけど……」

「複雑な思いを抱えつつも、ずっと捨てられなかったぬいぐるみを捨てたことが、虐待人形が動き出す原因になったのかも……」

本気で言っているわけではなさそうだ……。まあ、具体的なストーリーをイメージしたところで、それでも因果関係がよくわからないしな。

確かにクマのぬいぐるみというのは、親が子に贈るプレゼントとしては一般的だが……。でも、こんなギフトショップで売っているようなキーホルダーじゃ……。

「だからこそってこともあるんじゃないの？ 鬼のお兄ちゃんに親子関係の何がわかるんだよ」

「急に僕を糾弾するな。新発見に対する僕のリアクションが今いちだったからって、苛々しないで、ここだけは仲良しでいようぜ。ちよつとでもわかっていたら、僕はここにはいないんだよ、親子関係の何かが」

僕が本当に児童虐待の専門家だったら、最初の呼び出しの時点でもっとクレバーな対応をしているはずだ。

相手がたとえ十年教わった恩師でも、あの時点で通報するべきだった……、三歳の娘が死にかけていると思わされてしまった時点で、僕は正気を失っていたのだろう。

「そんなお値打ち価格のキーホルダーしかもらえなかったことを嘆きながらも、手放せずにいた娘の複雑な気持ちなんて、鬼のお兄ちゃんには想像もできないんでしょう？」

「お値打ち価格って言ってる時点で、きみにだって想像できていないだろう……」

「タイヤがパンクしたくらいで親から買ってもらった自動車を捨ててしまう鬼のお兄ちゃんには理解できない気持ちだよな」

「捨てとらん。絶対に取りに行く」

「コレクションに傷がついただけでも許せないタイプなんじゃないの？」

「そんな神経質じゃないし、クルマのコレクションなんてしてないよ。僕は富豪じゃない」  
だからと言って、このデディベアはぼろぼろ過ぎると思うが……。

「……デディベアって、スイスのぬいぐるみだっけ？」

「クマのぬいぐるみは総じてデディベアだよ。国籍は関係ない。それを踏まえて言うと、有名なのはスイスじゃなくてドイツ。ただしデディベアの語源はアメリカの大統領」

専門領域は不死身の怪異のはずだが、さすが、ぬいぐるみに関しては詳しい……、じゃあ、このクマちゃん、特に家住准教授の出身国に關係しているわけじゃないのか。

いや待てよ、教師としての彼女の仕事は、母国語を教えることだった——スイスドイツ語も、そのひとつである。

ドイツ……。

「時計ならわかりやすかったかな？ スイス製の腕時計は、親子三代で使えるっていうもんね」  
「……親からもらったのかもしれないぬいぐるみを屋上に捨てる理由として、どんな仮説が立てられるんだ？」

親子關係の素人は、童女に教えを乞<sup>こ</sup>う。

クマのぬいぐるみを、表を向けたり裏返したり、隈無く觀察しながら。

ああ、なるほど。

何か見えていて据わりが悪いと思っていたが、このクマ、目のパーツが取れちゃってるんだ……、両目ともが揃ってないから、てっきり元からこういうデザインなのかと思ったけれど……、ビーズか何かが縫い付けられていた痕がある。四肢のどれもが、もげずにあることが不思議なくらいだ……、尻尾は——これは、元からないデザインなのか、それとも取れたのか……。

「『巧妙な隠し場所』だよ。愛憎が、あるいはただの憎悪があり過ぎて、見えるところにあるのが嫌で、自分のテリトリーにも置いておきたくなくて、でもゴミ箱に捨てるのは忍びなくて。そ

の場合、屋上っていうのは、ちょうどいいセレクトなんじゃないのかな？ 実際には捨てているようなものなんだけれど、『捨てていない』って、自分に言い訳のできる距離」

「手元に置くのも捨てるのも壊すのも難しい、いわば処分しにくいものを、どう処分するかって気持ちなら、まあ、わかるかな……、僕も、妹達の部屋に参考書を隠したりしたことがある」

「オブジェクション。その参考書って、エロ本のことだろ。妹達の部屋って、てめえ、僕の暮らしてる部屋じゃねえか。そんなんでも気持ちがわかる振りをするな」

「いざ見つかっても、僕のものじゃないとぼけられるから。それは妹のだと言い張る」

「鬼のお兄ちゃんの妹への愛情を、初めて疑ったよ。……鬼のお兄ちゃんと言えば、さっき言ってた三つ編みじゃないの？」

「ふむ……、そういうことか」

羽川の髪だ、屋上に捨てることはないと思うが……、でも、将来的にどうするかというのは、確かに考えあぐねる。

いつまでも永遠に抱え続けるわけにいかないのだとすれば……。

将来の僕は、あの三つ編みをどうほどく？

「あんまり真剣に悩まれるのも気持ち悪いね。ま、捨てるに捨てられないものは、誰にだってあるってことさ。ホールディングって言うのかな。いくら痕跡を残さず失踪しようとしても、いくら過去のすべてと縁を切ろうとしてもね」

「うーん……、まあ、斧乃木ちゃんは専門家だから、このぬいぐるみから、鋭敏に何かを感じ取っているんだろうけれど、でもそれだって、隣の住人の情念かもしれないよな？」

「そうだったとしても、調べればわかる。それとも、鬼のお兄ちゃんは、別の手がかりを見つけたりしたわけ？ 優先すべき分析対象があるなら、もちろんいち早くそちらを調べよう」

別の手がかり……、ない。

わけではない、本当を言うと――実のところ、333号室で分析対象を見つけていたというわけではなく、そのずっと以前に、命日子に頼んだ解読がそれなのだ。

だけど、こうもはつきり怪異が、しかも殺しにくる、寛容ならざるタイプの怪異が絡んできてしまうと、もうあいつに助けを求めることはできない。依頼を忘れているのなら、そのまま忘れさせておきたい。

なかったことにしたい。

そうになると、アテになろうと的外れだろうと、斧乃木ちゃんの方法に頼るしかないわけだ。

「……確認だけど、斧乃木ちゃん。このぬいぐるみは、怪異化したりはしないんだよな？」

部屋の外にあったものだから、スキー帽やジャケットとは違って、条件は満たしていないと思いたい……、でも、唯々恵ちゃん人形がどうして動き出したのかという根本的なところから、僕達はわかっていないのだから。



こんな小さなぬいぐるみでも、喉に詰まれば致命的だと、僕は既に学習している——けれど、斧乃木ちゃんの答は、

「するよ」

だった。

「させるんだ、怪異化を。僕達の手で。そして道案内をしてもらおう、インテリのセンセイのところまで」

意に沿わず……、少なくとも不本意な形で吸血鬼となり、眷族化した履歴を持つ僕からは、絶対に生まれないアイディアだった。

怪異を生み出すなんて発想。

折紙でやつこさんを作ろうとでもいうくらいのノリで言われても、その手があったか！ とは膝を打てない。

どころか、膝を撃ち抜かれたかと思うくらい、ショッキングな提案ではあった……、なにせ、人間に戻るのにあれだけ苦労したのだし、はつきり言えば、一年以上が過ぎた今もその経験の、依存症と後遺症、リハビリに苦しんでいる。

そんな風に見えないかもしれないけれど……。

「で、でも、そんなこととして大丈夫なのか？ 怪異を生み出すって、よっぽどのことなんだろう？ それをさせないために、きみ達専門家がいるわけであって……、てっきり禁じ手だとばかり思っていたけれど」

「そうだね。かなりグレーに近い黒だ」

「黒なんじゃん！」

「うん。まあ、でも禁じ手って言うてみんなビビってるけど、やってみたら案外たいしたことにはならないんじゃない？」

「アホが取り返しのつかないミスをしでかすときのノリ！」

そもそも斧乃木ちゃん自身が、そのタブーによって生み出された——蘇生させられた——怪異なのである。

既に述べた通り、その蘇生に立ち会った、当時大学生だった影縫さんや手折正弦は、相応の呪いを受けた……、らしいのである。

地面を歩けなくなるという呪い。

同じ大学生として、同じ目には遭いたくない。

「いいじゃない。鬼のお兄ちゃんにしてみれば、塀の中の人生と塀の上の人生、どっちを歩むかくらいの違いでしょ？」

「塀の上の人生って。うちのでつかいほうの妹が、よく逆立ちで歩いていたよ」

最近はあまり逆立ちしなくなった。

女子高生になってから、ジャージで出歩かなくなったので。

洒落っ気が出てきたってことなのかね。

「いいか、よく聞け、斧乃木余接。僕と忍はそのノリでタイムスリップして、世界を滅ぼしたことがあるんだよ」

「教訓するには結果が重過ぎてちつとも参考にならないよ。どうせ春休みに死にかけのハートアンダーブレードを助けたときも、似たようなノリだったんでしょ？」

「んなわけあるか！ あときはマジだった、そしてマジのまま失敗した！」

「逆にこっちがよく聞けと言いたいよ。鬼のお兄ちゃんは一回や二回の失敗で懲りちゃうお利口さんなのかい？ そんなことでどうするんだよ、情けないな。昔は一緒に馬鹿やったじゃないか。撫公なんて最近もまたやらかしたけど、あいつはまだそんなに懲りてないよ」

「僕が言えた義理じゃないけれど、お前、千石と何をしてるんだ!? 千石と一緒に馬鹿をやるな！ やるなら僕とにしろ！」

「だから、鬼のお兄ちゃんとするんだって」

平気平気、と斧乃木ちゃんは安請け合いする。

危うさしか感じない。

「怪異化と言っても、あくまで一時的な変化だよ。一時的で限定的な妖怪変化だ……、式神が使い魔を作るだけのことだよ」

「神が魔を作るって、どういう状況なんだよ……、明白に禁断っばいんだけど……」

「さつきバスルームでなんでもござれって言ってたのは嘘？ 僕に嘘をついたの？」

「そんな程度の嘘が許されない間柄だったとも思わないけれど……、それは、『臥煙さんに怒られず、世界が滅びず、無害認定が解けない範囲で』なんでもござれって意味だよ」

「このクマちゃんがセンセイの持ち物だったとするなら、あくまでテリトリーの外に『保管』されていただけであって、怪異化する素質は備えていたと言えるからね。僕はそれを促進するだけだよ。ワクチンを作るときだって、ウイルスを育てるでしょ？ それと同じ」

「説得されそうになるけれど、同じかな……」

育てたウイルスが暴走して人類を滅ぼす、なんてストーリーは、サスペンス小説とかでよく読むけれど……。

「仮にこんなちっちゃいクマちゃんが暴走しても、すぐ倒せるでしょ」

「最初に死ぬ研究員の台詞……」

「文句ばかり言うなあ、鬼のお兄ちゃんは。少しは僕を信頼しなよ。専門家に依頼したんだから、任せなさい」

「任せなさいって、棒読みで言われても……」

333号室であれだけの暴拳を働いたあとで、よく言えたもんだな。

リノベーションの専門家でないことは間違いない。

「だいたい怪異作りもまた、斧乃木ちゃんの専門じゃないでしょ」

「そうでもない。人形作りの腕利きと、一時期寝起きを共にしていたからね」

手折正弦か……、まあ、作った死体人形は斧乃木ちゃんだけでも、人形って範囲なら、他にもいろいろ作ってたらしいからな、あいつは。

「どうしても僕が信じられないって言うのであれば、手折のお兄ちゃんに丸投げしてあげてもいいんだけど？」

「それは困る。あいつに頼むのは、貝木に頼る次に嫌だ」

「嫌って言うか、嫌いなんですよ。鬼のお兄ちゃんにも嫌いな人間がいるっていうのは、安心できる話だね……。別に僕の製作者を庇う気はないけれど、阿良々木月火を吹っ飛ばした僕に頼るのと、妹ふたりを後輩ごと誘拐した手折のお兄ちゃんに頼るのにとって、そんなに違わないと思うよ？」

微差でしょ、微差——と言われると、確かに、その通りではあるのだが、そこは気持ちの問題だ。

扇ちゃんにもさんざ責め立てられた矛盾だが。

「あいつは今も、妹のみならず、無害認定なんて無視して、僕や忍を狙ってるだろ」

「それは僕も同じ。今も隙あらばその全員を殺そうと思っている」

「手折は嫌いだ。斧乃木ちゃんは好きだ。命を狙われた程度でこの気持ちは変わらない。忍も月火も僕が守る、斧乃木ちゃんを好きでい続けるためにも。オーケー、任せよう、きみの判断で自由によってくれ」

「マジ照れる」

思いのほか厚い信頼が返ってきてしまったよ——と、斧乃木ちゃんは両てのひらで顔を隠した。仕草は可愛いけれど、その両手の下、結局は無表情だろうに。

最終的には営業トークに乘せられたと言うか、専門家の口車に乘せられてしまった感はあるけれど……、しかし、現状、僕のほうから出せるプランがない以上は、斧乃木ちゃんに白紙委任だ。

確かに、ここで任せられないなら、最初から頼むべきじゃない。他に選択肢はなかったけれど、でも僕は今回、仕方なく斧乃木ちゃんを頼ったわけじゃないのだ。

選んで、好んで、頼ったのだ。

「で……、具体的にはどうするんだ？ この公園でできるの？ それとも、儀式と言えバの北白蛇神社に移動して……」

「撫公がスクール水着で悶<sup>もた</sup>えたでお馴染みの、北白蛇神社」

「いかがわしい神社みたいに言うな」

「もうあそこは、僕の八面六臂の大活躍もあって、靈的に浄化されているからね。エアポケットでも吹きだまりでもない」

手柄の主張が強いが、それはその通りである……、僕なんて、その大活躍を邪魔したくらいだし。

「なので条件を満たさない。どこでもできるってわけじゃないよ、怪異作りは。そんなぽんぽんぽん、怪異を生み出せてたまるかよ」

「ぽんぽん生み出そうとしているようにしか思えないんだけど……、でも、逆に言えば、今はもう、あそこはちゃんと神さまがおわす神社なんだから、儀式向きなんじゃないのか？」

「その神さまにバレるとやばい」

「ヤバいことやろうとしてんじゃないかねえかよ、やっぱ……、八九寺にバレたらまずいことをしよう  
としないで？」

そう言いたいところだけれど、あのレベルの信頼を表明したあとでは、朝令暮改ちようれいぼかいを旨とする  
さすがの僕でも、前言撤回はしにくい……、でも、八九寺に内緒でやるなら、この浪白公園でやるのもまずかろうな。

どころか、こんな風に小田原評定を続けているのさえまずい、僕と八九寺が初めて会ったこの  
場所は、あいつのテリトリーみたいなものなのだから。

「そう、そのテリトリーという概念だよ」

「ん。何。どういうことだ？」

「333号室がセンセイのテリトリーだったから、虐待人形や衣服が怪異化したと見るなら、ク  
マちゃんの怪異化も、やはり彼女のテリトリーでおこなうべきだろう」

「……あの部屋に戻るってこと？ 今度こそ、騒ぎになっていると思うけれど」



「騒ぎになっただけじゃなくて戻るべきじゃない。ワクチンを作るためのウイルスを、本当のウイルスと同じ毒性で作る奴はいないでしょ」

そりゃそうだ。

インフルエンザの予防接種も、極めて弱いウイルスを育てて、それを注射することで抗体を作るんだよね……。まあ、弱毒化したウイルスでも、多少は体調を崩すことがあるらしいので、油断はならないが。

「つまり、テリトリー性……。プライベート感が自宅よりも薄い場所で作ることが好ましい。鬼のお兄ちゃん、心当たりは？」

「そりゃもちろん、職場ってことになるだろう。僕が家住准教授と最初に話した研究室とか？」  
「研究室って個室でしょ？ それじゃあまだテリトリー性が高いな……。もうちょっと他の人もしばしば使うような、共用の場所がいい。行きつけのレストランみたいな」

「大学の食堂……。を、家住准教授が使っていたかどうかはわからないな。そもそも、人目があったらできないだろ」

「僕は別に見られたっていいけど？ 見せつけてやろうよ、僕らの仲を」

「お忍びデートみたいに言うな。……。教室は？ 僕が家住准教授から、語学を受講している教室」

「それだとテリトリー性が弱過ぎる。他の授業もたくさんおこなわれるだろうし、どちらかと言うと、そこは学生のテリトリーじゃない？」

大学の場合はそうなるな……、きつとこれが高校だったら、教室というエリアは、担任教師のテリトリー性が、ちょうどいい具合なのだろう。

「くそ、僕が留年せずに進学したことが、こんな形で徒<sup>あだ</sup>になるなんて……、僕がまだ直江津高校の生徒だったら！」

「生徒だったら、特に何も起きてないよね。何も起きない人生だっただろうね、おそらく戦場ヶ原ひたぎと別れていたくらいで」

手厳しいぜ。

それにしても、返す返すも、僕は何も知らない相手からの頼みごとを引き受けてしまったのだと痛感する……。家住准教授のテリトリーがまったく思い当たらない。

そんな人だから、屋上のクマちゃん人形くらいの痕跡しか残さず、綺麗に失踪することができたとも言えるのだろうか……。

「そうだよね。普通、どこに失踪するにしても、一度は自宅に帰って身支度したいところだね。職場から直接いなくなるなんて、前々から準備していたとは思えないよ」

と、斧乃木ちゃんと。

彼女にしてみれば、それは何気ない、本当にそう思っているわけでもない程度の表層的な感想だったのだろうが、しかし、その言葉にこそ、僕はぴんと来た。

「斧乃木ちゃん！　今なんて言った!?　違う、その前だ！」

「フライングしてるよ。どれのこと？　職場から直接いなくなるなんて？」

「違う、その前——いや、それだった。ごめんごめん」

「『違う、その前だ』を言いたいだけの奴になってるじゃん。何だよ」

「自家用車の中っていうのは、どうだ？」

僕は言った。

「ドアを閉めてしまえばプライベート感が高いし、共用の場所ではないけれど、本人もずっと乗っているわけじゃないから、そのテリトリー性は、自宅や研究室ほどじゃないんじゃないか？」

「ん……、悪くはないけど、でも、どうかな。それだとマンションに戻ることになるけど、そこはいいの？」

確かに、戻るのはまずい。

駐車場なんて、すべてのクルマのタイヤがパンクさせられている上に、僕のニュービートルまで停まっているという悪条件だ。覆面をせずに近寄る気にはなれない。

だけと……。

「もしも研究室から自宅に帰ることなく、直接失踪したなら、家住准教授の通勤用の自家用車が、大学そばの駐車場に停めっぱなしになってるんじゃないのかな？」

自己申告しておく、家住准教授のことを何も知らない僕は、彼女が自動車通勤をしていたかどうか知らないし、失踪するにあたって、自動車を置いていったかどうか知らない……、むしろ真つ当に考えれば、クルマがあるなら、人はクルマに乗って失踪しそうな気がする。

あれは非常に便利な乗り物なので。

なので、先の発言は、何にも裏打ちされていない迂闊なものだ。

でも、ただ失踪するのではなく、姿を完全にくらましたいなら、ナンバープレートという識別番号を前後に配した自動車に乗るのは、名札をつけて旅をするようなものだ。

自宅と同じで、その手がかりに関する身辺整理さえせずに、放っていくんじゃないだろうか……、アタックしてみる価値はあるのでは？

円滑に進むとは思っていない。

偶然性に期待する以上、手当たり次第の総当たり攻撃も必要だ……、要領よくなんて、とうの昔に諦めた。

そんな無計画で回り道好きな奴を見かねて、風変わりにも運が味方してくれることもあるらしい……、曲直瀬大学のそばに、いわゆる契約駐車場は、僕が普段使っているところも含めて、決

して数は少なくなく、そのすべてをしらみ潰しにあたることは、いくら斧乃木ちゃんに機動力があると言っても、そこまで生易しいことではなかっただろう——あるかどうかわからない家准教授の自家用車が、どんな車種なのかさえ、僕達は知らなかったのだから。

ただ、それでも（いつまでも浪白公園でダベっていると、八九寺に察知される恐れがあったので）まずは活動してみようと、夏休みの曲直瀬大学構内に向かってみると（『アンリミテッド・ルールブック 例外のほ

が多い規則』——凍った帽子と上着は脱いだ）、まったく予想していなかった、けれどそりやそうかというようなことが判明した。

構内には職員用の駐車場があったのだ。

僕の普段の動線からは遠い場所だったし、仮に近くを通ることがあっても、学生である自分には関係のないエリアとして、意識から切り放していたのかもしれない……。何でもは知らないどころか、知らないことばかりだ、自分が通っている大学についてさえ。

しかも夏期休暇中ということもあって、だだっぴろいアスファルトの広場に、オレンジのラインを引いただけのその駐車場に停められているクルマの数は、そんなに多くなかった。

まばらな点である。

これなら限られた時間でも全数調査が可能だし、かつ、なんだったらその必要さえなかった……。と言うのも、一台、明らかに毛色の違う、際だった自動車があったからだ。

毛色が違うと言うか、ただ色が違うと言うか……、要するに、塵埃じんあいにまみれて、薄汚れてしまったクルマである。放置自動車という感じで……、ほんの数日屋根のないところに放っておかれただけで、自動車ってこんなことになるの？

持ち主が失踪し、放っておかれただけで……、元はそれなりに高そうなクルマだったみたいなんだけれど——左ハンドルの外車だし。

「虐待されている自動車って感じだね」

と、斧乃木ちゃんは言った——所有者へのきつい批判ではあるが、しかし、至言である。道具ならではの表現力だ。

家は人が住まないとすぐに傷むというあの言説は、そのまま自動車にも適用できるらしい……、それは僕達が、これからやろうとする儀式にも、好都合なことだった。

「防犯カメラはないな、よしよし」

周辺をうかがったの僕の感想も完全に犯罪者のそれだったが、この自動車が停められているのが契約駐車場ではなかったことは、そういう意味でも一番のラッキーだった……、マンションの駐車場で、毛布がタイヤをパンクさせまくっていた怪奇現象が映像に捉えられていたかどうかは不明だけれど、僕達がこの放置自動車をいじっているのを動画で撮影されたら、完全に車上荒らしである。

ただ、もたもたしていられない。

このまま持ち主が見つからなければ、いずれは撤去されるであろう自動車である……、作業を急ぎたい。そもそも、大学の構内で童女を連れているだけでも、結構人目が気になってしまっただ。

「ドライブレコーダーも装着されていない、と。じゃ、あとは電気系統を直結させるだけか」

「でもしないことを言わないで。鬼のお兄ちゃんにできることは見張りだけだ」

童女に下っ端扱いされている……、まあ、確かに、怪異作りの儀式なんて、協力しようたつてできっこない。

「でも、どうやって中に這入るの？ 斧乃木ちゃん。言っておくけれど、窓をぶち割るってのはなしだよ？」

「僕をどんな荒くれ者だと思っているんだよ。窓ガラスを割ったりはしない」

そう言つて破壊神がばきつと壊したのは、自動車の後部、トランクの鍵だった。僕がポケットに入れていたクマちゃん人形を、僕が言葉を失っているうちにすりりと抜き取つて、

「じゃ、またあとで。半時間くらいの間、見張りをよろしく。鬼のお兄ちゃんにしかできない仕事だよ。頼りにしてるからね」

と、とても広いとは言えないその荷物入れに、身体を器用に折り畳んで、誘拐される少女のようすにすっぽりと収まり、内側から蓋を閉めた。



そうか、別に何も、運転席や助手席に座って儀式をおこなう必要はないもんな……、こうして蓋を閉じてしまえば、外からは様子が見えなくなるので、トランクというエリア選択は、ナイスと言えばナイスだ。

いくら防犯カメラやドライブレコーダーがなくなっても、車内で怪しげな儀式を、半時間に亘っておこなうのは、まあまあのだ胆さが必要になる――斧乃木ちゃんにとつては、トランク内の暗闇なんて、恐るるに足りないものだ。すかすかの檻の中に閉じ込められたくらいで弱音を吐いた僕と違って、まさか閉所恐怖症ということもないだろうし。

いったいトランクの中で、クマちゃんに生命を与えるための、どんな禁断の儀式がおこなわれているのか、気になるところではあるけれど（にゆるにゆるという、奇妙な音だけが聞こえてくる――にゆるにゆる？）、まあ、無知なる僕は知らないほうがいいんだろう。

僕みたいな粗忽な奴は……。

斧乃木ちゃんがクマちゃんに心血を注いでいる最中、邪魔が入らないよう見張れと言われたが、職員でもないのに職員専用駐車場でうろろしている不審人物のほうこそ見張られる対象だろうので、いっそ斧乃木ちゃんと一緒にトランクに入ったほうがよかったかとさえ思ったけれど、斧乃木ちゃんが僕にそうする暇も与えなかったのは、トランク内の窮屈さ以上に、僕に余計な知恵をつけまいという配慮があったものだと思われる。

なんだかんだ言つて、あつちこつちに気を回す童女なのだ……、僕がこれ以上呪われることのないよう、蚊帳の外に置いてくれたのだろう。

確かに僕への呪詛は、幼馴染の分だけで足りている……、今回のことの発端も、あいつだったわけだし。

まったく、あのラブリーは。

一方で、裏返せば、斧乃木ちゃんはそれだけの危険を冒そうとしているとも言える——プロにとつてはそんなの、大した危険ではないのかもしれないけれど、そういう意味では冷や冷やする。

せめて足を引つ張つてはなるまいと、僕は放置されて埃にまみれた恩師のクルマをせつせと清掃する、殊勝な学生を装うことにした——洗浄液もブラシもないので大したことはできないが、手で汚れを払つてあげるくらいのことはできる。例のスキー帽をタオル代わりにしようかと思つたが、一度よだれにまみれたもので他人の自動車を掃除するのはまずいかと、思いとどまつた。

していると、窓から車内が見えるわけだが、特に変わった点はなかった——ステッカーが貼つてあるとか、シートがデコレーションされているとか……、あとは、後部座席にクレイジーゲームで取ったぬいぐるみが並べられているとか、そういうこともなかった。

まあ、よって仮に窓を割るなりなんなりして、この車中に這入ったとしても、襲ってきそうな布地もないということだが……、いやいや、もしかすると、フロアマットが飛びかかってくるってことはあるのかな？

「……ん？」

そこで僕は、窓を拭く手を止めた――手が真っ黒になってきて、掃除の用をなさなくなってきたというのもあるけれど、それだけじゃなく、車内の様子に奇妙な引っかけりを覚えたのだ。

前述のように、周章狼狽するような要素なんてないはずの車内の、どこかに目がとまった……、お父さん人形が寝転がっていたあの第三の部屋のように、セツト感があるということではない。カーディーラーで展示されているクルマのようだとは感じない……、生活感と言うか、使用感はある。

僕は車内のどの要素が気になったんだ？

色んなことがぱつと閃く人間になれば、人生はもっと簡単なのだろうか……、そっちのほうかしんどそうではあるけれど。

閃くボタンがあればいいのに。

そもそも、気になるほど、車内に要素がないんだよな……、ひょっとしてこれは、何かが『ある』のが気になったんじゃないかって、何かが『ない』のが気になったタイプの間違い探しか？

でも、ハンドルはあるし、アクセルもブレーキもあるし……、バックミラーも、シフトレバーも、ハンドブレーキも……、そういう根本的な部品じゃなくて？

左ハンドルが気になるだけか？　でも、僕のニュービートルだって左ハンドルだし、なので左ハンドル自体は、むしろ見慣れている——僕のクルマにあつて、このクルマにないもの……、運転席に限らず、助手席でも——

「……あー。はいはいはいはいはい」

わかったわかった。わかってしまうと、気恥ずかしいくらいのことだった……、正直、記述したくない。だがまあ、ここまであからさまに振った以上、たとえ本筋に無関係であろうと、口をつぐむわけにもいくまい。

やはり助手席だった——チャイルドシートなのである。

僕のニュービートルの助手席には、忍用のチャイルドシートが備え付けられているが、このクルマにはそれが無いってだけのことだった——なまじ左ハンドルが共通していただけに、そこに違和感を感じてしまった。

やれやれ、この課題だらけの最中に、いったいどこに氣を取られているんだ、僕は。チャイルドシートなんてミゼンセーヌ、全体で見ればないクルマのほうが多いのに……、だって、子持ちじゃなければ、まったく必要不可欠な要素ではない——子持ちなのでは？

家住准教授は、三歳の娘の母親で……。

ん？ いや、三歳の娘の唯々恵ちゃんは、唯々恵ちゃん人形だから……、でも、家住准教授が、その人形を本物の『我が子』だと思っていたのであれば……。

虐待の対象だったから、虐待の一環として、チャイルドシートなんて用意しなかった？ まあ、そうなのかもしれない。

檻の中に閉じ込めていたなら、連れて外出する機会もないだろうし——でも、常時閉じ込めていたわけじゃないし、『虐待する前』という時期もあったはずで……。

それに、チャイルドシートの設置は、法律上の義務だよな？ 僕は忍が、あの小さな席にぎゅっと詰まっている感じに座っている姿勢が好きだから、道路交通法に関係なく勝手にセツトしているだけだけど、確か、購入時に調べたところ、六歳未満の子供をクルマに乗せるときには、チャイルドシートの設置は必須だったはず——ちなみに忍の外見は八歳児だ。

安全を考慮し、赤ちゃんはそもそもクルマには乗せないという考えかたもあるだろう……、そんなに拘泥する点ではないと、自分でも思う。法律云々を問うなら、そもそも児童虐待が許される犯罪なわけだし……、ただ、ベビールームから感じた『愛情の残骸』を思い出すと、一度設置したチャイルドシートを、唯々恵ちゃん（人形？）が可愛く思えなくなったから取り外して廃棄するという行動は、あまりそぐわない。

家住准教授の虐待は放置系だ。

だからこそ背中刺さった果物ナイフからは、はつきり矛盾を感じたわけ——じゃあ、チャイルドシートも、誰か別の人物が撤去したと考えてみようか？　しかし、チャイルドシートなんて、大抵の地域で粗大ゴミ扱いになると思う……、処分に困ることは目に見えている。

気付くんじゃなかったという後悔が、別の種類のそれへと変容してくる……、このまま、この考察を進めていくと、とてもろくでもないゴールに辿り着いてしまいそうな予感がしてきた。

さつきは閃くボタンを欲したが、今は閃かないボタンが欲しい——そんな手前勝手な希望は、普通は叶うことがないのだけれど、運はここでも僕の味方をしてくれた。

まだ運を使い切っていなかったのであれば、できればこことは別のシーンで味方をしてほしかったものだが……、ともかく、自分では止められない僕の思考は、外部からの圧力で中断させられた。

気がつけばそれなりに時間が経過していたようで、斧乃木ちゃんが、「お待たせ。鬼のお兄ちゃん」と、トランクから這い出てきたのである。

「喜んで、儀式は成功したよ。ご覧」

ご覧、と言われても。

僕はその結果を、手放して喜ぶことはできなかった——斧乃木ちゃんの手のひらの上に立つクマちゃん人形を見ても、そして、半時間ぶりに斧乃木ちゃんの顔を見ても。

いつでも無表情であり続ける斧乃木ちゃんの顔に、初めての変化が生じていた——これに関して、僕としてはできる限り穏当な表現を選定したところだが、しかし捻<sup>ひね</sup>れば捻<sup>ひね</sup>るほど不穏当にしかならなそうなので、脚飾なく、いつそそのまんま言わせてもらおうと。

斧乃木ちゃんの右の眼球が、えぐれてなくなっていた——ぽっかりと空洞になっていて、そして。

掌上でにゆるにゆると蠢くクマちゃん人形の顔面に、その右目は埋め込まれていたのである。

眷族化、使い魔。

自らの身体の一部を人形に埋め込むことで、己の分身とする手順——平たく言うとそういうことなのだろうが、単に恐い。

驚嘆よりも恐怖が勝つ。

心血どころか血肉を注いでいる。

なにぶんデザインが童女なので、これまで斧乃木ちゃんの見た目が恐いと思ったことはなかったけれど、さすがに片目が空洞になっても無表情のまま語りかけてくるのは、ホラーでしかないかった。

それはもう無表情であって無表情ではなからう。

本来は、操り人形のごとく、斧乃木ちゃんの手のひらの上で奇妙な動きを見せているクマちゃん人形のほうを怖がるべきなのかもしれないけれど……、いや、騙されるな、眼球の埋め込まれたクマちゃん人形も、十分恐怖に値する。

本当ならここで卒倒してもいいくらいだ。



古びていて、クマちゃん人形の顔から両目のパーツが取れていることには気付いていたけれど、まさか斧乃木ちゃんが、その欠落をこんな形で『修理』しようとは……。

バグアイドモンスターを作っちゃってんじゃないか。

「こ、ここに来て、本当にアニメ化できない出で立ちになりやがって……、そりゃ儀式に参加できないよ、僕は」

「眼球マニアだもんね、鬼のお兄ちゃんは。ビビってる振りして、本当はこの空洞にときめいてるんだろ？」

「ロリコンよりもやばい嗜好<sup>しこう</sup>を、僕に植え付けようとするな。え？ それ、本当に目玉じゃなきゃ駄目だったの？ 分身作りつて、普通、髪の毛とかでするもんじゃないの？」

「僕は孫悟空<sup>そんごくう</sup>じゃないからね。まあ、それでもよかったんだけど、使い魔に道案内をしてもらうというのがこの作戦の目玉なんだから、目玉は取り付けておいたほうがいいかなと思って」

「笑えぬギャグを言うな。なんで今の僕から笑いを引き出せると思うんだ」

「目のつけどころが」

「違うのは目のつけどころじゃない。眼鏡だ。きみに一任したのはとんだ眼鏡違いだった」

「目がねー、とか言つて。まあ、五千円の仕事はこんなもんだよ」

あれはてっきりいい台詞だと思っていたのに、まさかギャラに応じて手を抜く宣言だったとは……、こんなバイヤーズリモース、なかなかねえぞ。『目がねー』に関しては、面白ギャグの

手まで抜いてるじゃないか。

まあ、瞳孔っていうくらいだから、孔も目のあなのうちのかな……。

「くそう、こんなことだったら、日本国民全員から一円ずつもらって、一億円のギャラを用意するクラウドファンディングを実施しておけば……」

「小学生の妄想を今時の経営手法みたいに言わないで」

「その……、斧乃木ちゃん。ギャグはギャグとして、ギャラはギャラとして、本当に大丈夫なの？ それ。その空洞。あとでちゃんと直せる奴？」

「心配には及ばないよ。死体だからね、この程度の損壊、痛くもかゆくもない。遠慮なく万雷の拍手を浴びせてくれて構わない。あるいはこの空洞に、キスの雨を浴びせてくれて構わない」

「僕の愛情を試そうとするな」

「そもそも、撫公と遊んだときは、もっと酷い有様になっていたもの」

「だからきみは、千石といった何をやっているんだ」

「元通り嵌め込めば元通りになる。最悪、ならなくっても、そのときは眼帯キャラになるだけだし」

「だから今更キャラ変をするな！ 斧乃木ちゃんは今の斧乃木ちゃんのまま満艦飾なんだよー！」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、今の僕が僕のすべてだと思わないで。戦時中にはしていただよ、眼帯」

「ワールローの戦い？」

「ノン。斧乃木戦争」

「かつてきみの名前がついた戦争があつたの!」

歴史の授業じゃ、教えてもらえそうにないな。

不可逆的な改造じゃないと言うのであれば、ちょっとだけほつとしたけれど、これからは斧乃木ちゃんには、迂闊な頼みごととはできないな。

平気で身を切ってくる。

何を考えている途中だったか、すっかり忘れちゃったぜ……、なんとかシートのなんとかだっけ？ 熱さまシートかな？ 確かに頭を冷やしたい。

まあ、斧乃木ちゃんからはいったん目を離そう……、面白ギャグとして言っているんじゃないで、文字通り目を離そう。

今は、にゆるにゆるとしたおぞましい儀式を経て、魂を吹き込まれたクマちゃん人形のほうだ。

使い魔って言うか、魔除けの人形みたいになっているけれど……、あれ？ いつの間にか、斧乃木ちゃんの手のひらにいない？

見れば、僕達が丁々発止とやり合っている隙に飛び降りたのか、目玉つきクマちゃん人形は、駐車場のアスファルトのライン上を、のたのた歩いていた……、今にも倒れそうだし、そうかと思えば、反つくり返り、バランスを取る。

動きも恐い……。

人類の傲慢が遺伝子実験でゼロから生み出した新しい生命体のようだ……、そりゃ、こんなもん作るのは禁断だよ。これじゃあ臥煙さんにどんなお仕置きをされても逆らえない……、うおっ、こつちに来た。

「名前をつけてあげようかな。愛着が湧くかもしれない。今ぱっと思いついたけれど、暦というのはどうだろう」

「家住准教授絡みの名前か、せめて自分絡みの名前をつけろよ」

「やいのやいのうるさいな、暦二号は」

「僕が二号なの？」

「暦に道を譲れよ、暦二号。でないと三号に格下げするぞ。もうナビゲーションは始まっているんだから」

そうなのか……、当て所なく現世を彷徨さまよっているわけではなく、クマちゃん人形は早くも、元の持ち主の下へ、帰ろうとしているのか……。

初めはどうかと思っただけ、空飛ぶ毛布が虐待の復讐のために、家住准教授のところに向かうなら、このクマちゃん人形にも潜在的にそういう指向性が、元からあってもおかしくはないな……、むしろ、言われた通りの仕事をしているのは、この場でこの人形だけか。

僕と斧乃木ちゃんの体たらくを見よ。

「けど、このうまくいきかた、まずくない？ 目玉つきクマちゃん人形が、血眼になって、人目もはばからずに歩いているんだけど」

「うまく言ってるし、うまくいつているんだから、多少のことには目をえぐろうよ」

「多少のことで目をえぐってたまるか。それを言うなら目を瞑ろ<sup>つむ</sup>うよだ」

「目撃者全員の目をえぐる」

「その発言に目を瞑れない。影縫さんに言いつけるからな」

「お姉ちゃんがよく言う台詞だね。ほら、鬼のお兄ちゃん、ふざけてないでゼペット爺さんの振りをして」

「中でも難易度の高いお芝居を振ってきたな……、要は、ピアノ線でマリオネットを操っている演技ってことだろ？」

「そういうこと。僕達はふたりともサーカスサークルの新入りメンバーって設定。飛び級入学の僕の得意技はブランコ乗り」

「そこら辺の設定に凝るんだったら、最初からもうちよつと綿密に計画を立てようぜ。行き当たりばったり好きが過ぎるよ、僕達は」

「行き当たりばつたりと言え、ほい、これ。トランクの中にあつたミネラルウォーター。災害に備えた非常時用のものだと思うけれど、炭酸水なのが、いかにも欧州出身のセンスイっぽいよね。持っておいて」

「？ 別に喉、渴いてないけど？」

「クマちゃんが暴走したらぶっかけて」

名前を、それも僕の名前をつけておいて、容赦ねえ……、愛着、ぜんぜん湧いてないじゃん。

「もしも首尾よく見つけれられても、インテリのセンセイをクマちゃんに仕留められたら、道義的責任を感じざるを得ないからね」

「無限責任があるだろ」

改めて禁じ手に手を出してしまっているのだと思い知る。

クマちゃん人形のよたよたした動作が、もうそう見えちゃうんだな。

元々このサイズのクマちゃん人形だ、歩行どころか、直立できるようなコンセプトデザインにもなっていないところに、頭部に眼球を取りつけてしまったのだから、極端にバランスが悪くなっているというのもあるだろうが……。

「使い魔を使役するのは動物の世話をするのに似ている。殺処分するところまで含めて、飼い主の責任でしょ？」

「一瞬命に対する責任みたいなものをぴしゃりと説かれたのかと思って『ぐっ』ってなったけど、斧乃木ちゃん、それは違う」

しかしなるほど、『水が弱点』ってのは、さっき僕が突き止めたんだって……、この使い魔も例外じゃないってことか。

もつとも、その弱点は斧乃木ちゃんには無関係なようで、彼女は自分の分のペットボトルの蓋を開け、ごくごく飲み出す――突貫の儀式で疲れたのか。

「ぷはあ。冷えているとは言えないね。ぬるい炭酸水は独特だ」

「あつたのがトランクの中じゃね……、斧乃木ちゃん、お父さん人形を吹き飛ばしたときにも思っただけれど、人形なのに人形に冷たいね」

「冷えているのは僕だとでも？ 冷えていないし、言えていない。人形なのではなく、人形だからだよ。変な感情移入はしない。変じゃない感情移入もしない。ナイーブな同族嫌悪もない。誤解させるような振る舞いがあつたかな？ 人形は人形だよ。人形に感情移入するのは人間の専売特許なんじゃない？ 鬼のお兄ちゃんも、インテリのセンセイも」

「……………」

斧乃木ちゃんの眼窩がんかを見ただけで、こんなにうろたえてしまっている僕だから、反論は難しい。感情移入か……。

「そんな想いこそが、人形の怪異化を招くってことか？」

「さあねえ。僕を蘇らせるのに、お姉ちゃん達が、そんなに思いを込めてくれたとは考えにくいけれど――ほら、ちゃんといかないと、クマちゃんを見失うよ」

「あ」

蹠跟うしむしむしとのたのた跋涉はつしやくしているようでいて、まるで『だるまさんがころんだ』のごとく、気がついたら、先へ先へとよちよち進んでいる目玉つきクマちゃん人形……、よちよちの速度であそこまで進めるわけがないのに、もしかして視線を切った瞬間、駆け足しているのか？

ただ、それくらいのスピードで動いてくれないと、日が暮れてしまうのも確かだ……、歩幅も小さいし、唯々恵ちゃん人形と違って、空を飛ぶこともできないようだし。

「うん、機能は最小限にとどめてある。言ったように、ウィルスの弱毒化――だよ。暴走したり、仲間を増やされたりしたら困るんでしょ？　意思もないし、感覚もない。そう思うことで気が楽なら、ラジコンみたいなものだと思って」

「じゃあ、ただ後ろをついていくだけじゃなく、僕達がちゃんとサポートしつつ、家住准教授の失踪先を特定していくつもりでいたほうがいいのかな」



最新鋭のナビゲーションシステムじゃなくて、方位磁石くらいの基準で考えておいたほうが……、目を逸らしたときに高速機動している説には心引かれるものがあるけれど、それで人工生命を野生に解き放ってしまつては、取り返しがつかない。

ん……、あれ？

でも、どこに向かつてるんだ？

そつちに行つたら、校舎にぶつかつてしまふんだけど……、壁を避けるだけの知能も抑制されているのだろうか？　だとすれば哀れだが、しかしこの同情心が世界を危機に陥れるのだと思うと、苦しまなくてもいいジレンマに苦しむ——と。

そのとき、携帯電話が震えた。

メールの着信だった、それも二通、ほぼ同時に。

ペットボトルを反対の手に持ち替えて、目玉つきクマちゃん人形から目を離さないように配慮しつつ、僕はポケットから携帯電話を取り出し、それぞれのメールの差出人を確認する。いいニュースと悪いニュースがある、という感じだった——即ちメールの送り主は、食飼命日子と阿良々木月火だった。

悪いニュースのほう、つまり月火のほうから確認すると、ハイキングで死体は見つからないまま解散したのでこれから本当に撫子ちゃんの家に遊びに行く、大親友に嘘はつきたくないからという、☆まみれの内容だった。

千石。

お前にはお詫びの言葉もない。

そしていいニュースのほう——いや、内容からすると、こちらが悪いニュースに分類すべきなのかもしれない。

『阿良々木ちゃん、前に頼まれてたの、解読できたよ。手こずっちゃってごめんね。以下全文』

と、文面でも変わらぬいつものゆるいテンションでそう書かれたあとの、

『（※残酷表現が含まれているから覚悟して読んでね）』

なる、命日子には珍しい不穏な一文を見てしまうと、そう思わざるを得ない。

「……………」

「どうしたの？ 鬼のお兄ちゃん。何か変なメールが届いたの？」

こんなときに足を止めた僕に対する、斧乃木ちゃんからの当然の疑問に、

「遺書だよ」

と、率直に答えた。

「届いたのは、先生の遺書だ」

「？ 『あんやこころ』？」

「阿良々木くんへ。」

「私の自慢の教え子であるきみの語学力では翻訳できないと思うので、安心してこの手紙を残します。受け取ってくれると嬉しい。どうかきみに、四カ国語を自由に操る友達がいませんように。」

「さあて、何から話そうかな？ 満載なんだけど。」

「わくわくしちゃうな。」

「でもあんまり本気にしないでね。」

「なにせ私の人生、嘘ばかりだから。迫真の演技で、どうにかこうにか騙し騙し、誤魔化しもって生きてきたんだよ。」

「正直に本当の気持ち、素直になって率直に言うっていうのが、どういう感じなのか、私にはぜんぜんわからない。口を開いて喋るってことは、嘘をつくってことじゃないのかな？」

「なんてね、こんな主張も、別に本気で言ってるわけじゃない——お手紙の出だしとしてそれっぽく言ってみただけで、言ってみれば、寝言みたいなものだ。」

「寝るのは得意なんだよ。これは本当。」

「ずっと寝てるような人生だったし、ずっと死んでるような人生だった——そもそも生きてもいなかった。

「私はお人形さんだから。

「そう……、やっぱりその辺からかしら。告白するとすれば。

「阿良々木くんには短い間にたくさん嘘をついたから、それを許してもらうためにも、まずは同情してもらいたいもんね。

「情状酌量の余地が欲しい。

「私は可哀想で、哀れなもので、だから許してあげようって、思ってもらわなくちゃ……、そんな気遣いめいたことは、正直考えてはいないのだけれど、たぶんそっちのほうで、きみは納得できんじゃないかな。

「おかしな大人に利用されて騙されたんだなんて、思いたくないでしょ？　こんなことを言っても説得力がないけれど、子供には、大人を信じてほしいからねえ。

「私みたいになってほしくない、なんて、言い古された台詞だけど、本当は逆のことを言いたいものだし、言ってほしいものだよね。

「私みたいになれ、人生楽しいぞ。

「そう言ってくれる大人に会いたかった……、おっと、だからって、私の代わりに幸せになつて、なんてほざくつもりはないのでご心配なく。

「そんな心配は無用だよ。」

「阿良々木くんが一番気にしているのは、『どうして自分だったか』だと思うし、それ以外はどうでもいいかもしれないけれど、その答は勿体ぶって、最後に話そう。」

「楽しみは後にとっておこう。」

「阿良々木くんにとっては楽しい答じゃきつとないけど、手紙を最後まで読んでほしいので。」

「ひとつ言っておくと、老倉さんはそんなに関係ないってこと……、あの子のせいじゃないのはわかってあげて。」

「優しくしてあげてね。」

「じゃあ授業を始めます。エンジョイ」

「尊敬する人は父で、愛する人は母です。」

「面接官からの質問に、迷いなくそんな風に答えられる就職活動中の大学四年生こそを、私は尊敬するし、愛するわ。」

「敬愛ってこと。」

「家族愛を素晴らしいと思う感覚は私の中にもある。ただどね、それは私の中にしかなかったの。」

「家の中にはなかったし。」

「檻の中にもなかった。」

「虐待の連鎖、みたいな話をしたよね？ 親に愛されなかったから、子を愛せないって奴……、でも、その意味じゃあ、私の両親は立派な人だった。」

「ご立派なふたりだった。」

「夢見ていた職に就いて、異国で活躍し、国籍まで取得していた……、周囲の人達からも、尊敬されていたし、愛されていたと思う。」

「ご立派なふたりであって、ふたりはご立派な三人にはなれなかったってだけなのよ。」

「パパは小児科医で、ママは子供服のファッションデザイナー……、あんまりそんな風に考えたことはなかったけれど、ある意味で、ふたりとも子供の専門家よね。」

「専門家。」

「腕はよかったんだと思う。パパは私を死なせなかったし、ママは私に、ずっとお洋服を作り続けてくれたもの。」

「羽衣<sup>はね</sup>って、私の世代じゃ、珍しい名前よね？ この名前はママがつけてくれたの。羽<sup>はね</sup>の衣<sup>ころも</sup>。」

「羽衣伝説。」

「あの人達がどういう経緯で渡瑞して、かの地で成功したのか、あるいはふたりにどんな出会いがあったのかっていう武勇伝を、ここで延々と記述してもいいんだけど、うん、よしとおきましよう。」

「親を自慢する気はないからね。そんな恥ずかしいことはしないよ。恥ずかしいから以外の理由で。」

「でもまあ、我が身を振り返ってみれば、ほら、私も似たようなことをして、似たような立場にいるわけだし？」

「あの人も、酷い目に遭ってきたのかしら。だから私を酷い目に遭わせたのかしら。」

「蛙<sup>かえる</sup>の子は蛙。」

「日本の諺<sup>ことわざ</sup>じゃ、そういうのよね。」

「三つ子の魂百までっていうのもあったかしら——この諺は、あとでもう一度引用するから覚えておいて。」

「私が忘れていたら注意してほしいので。」

「授業を始めますとか言ったし、つい、癖で講義をするときと同じような語調になっちゃうけれど、まあ、本来、私にはものを教える資格はない……、癖って言うなら私の癖に、よ。これは比喩で言っているんだけど、同時に、そのまんまな意味でもある。」

「私が正直者だったら、国立大学に勤務することなんてできていない。阿良々木くんがこの手紙を解読できなかったとしても、いずれバレるでしょう。私がニセ教師だってことは。」

「誤解を恐れずに言えば、両親は私を愛してくれたわ。こういう風に考えてしまうことが、一種のストックホルムシンドロームで、親子の共犯関係だって責められるのかもしれないけれど、でも、歪んではいても、あれは愛だったんだと思う。」

「虐待されていようと子にとって親は親って考えかたには、吐き気を催すだけだねえ。」

「少なくとも私は、どんな種類の学校にも、生徒として一日だって通ったことがないけれど、異国の大学で教鞭を執れるくらいの教養は与えられた。学校への憧れが、私を大学教員にしたのだと思うと、ちよつと皮肉でもあるけれど。」

「愛してはくれた。」

「でも、敬意は払ってくれなかった。」



「わかる？ 人間扱いされなかったって意味。

「人形のように、ぬいぐるみのように。」

「玩具みたいにかわいがってくれた。」

「私はふたりのデディベアだったの。」

「クマって可愛いよね。なんであんなに可愛いんだろう？」

「だけど、可愛いのは子グマだけ。」

「親クマは怖い。『ちゃん付け』では呼べないよね、『サー』とか『マダム』とかつけたくなる。」

「成長しても可愛いのはパンダだけ……、と言いたいところだけど、パンダだって、子供時代のほうが可愛いはず。」

「阿良々木くんも、言われたことはない？ 『昔はあんなに可愛かったのに』とか。まあ、親が

思うようには、子供は育たないものだよね。クールジャパンの文化で言うところの、キャラクタ―が勝手に動くって奴かな？」

「で、ウチの親の話。」

「我が家の話、我が檻の話。」

「私はふたりのデディベア……、クマちゃんがすくすく育つことを、あのふたりは嫌がったの。とてもとても嫌がったの——いつまでも愛らしい、手のかかる赤ちゃんでいてほしかった。」

「だから。」

「私を育てようとはしなかった」

「まずふたりは手作りの檻の中に、私を放り込んだわ。ベビーベッドからケージへと、丁寧な手つきで移し替えた。

「金魚はあまり大きな水槽で飼っちゃ駄目っていうでしょう？　水槽の大きさまで、大きくなってしまうから。

「金魚のサイズを維持したいなら、それ以上のサイズの水槽で飼っちゃ駄目って……、まあ、都市伝説みたいなものなんだと思うけれど、あの人たちは、それをやった。

専門家として、両親として。

「我が子に。

「綿密に計算された檻に、私を収監したのは、赤ちゃんがあちこち動き回って家を汚すからとか、まわりついてくるのが鬱陶しいからとかじゃなくて、鉄柵の長さ、檻の縦横高さ以上に、私の背が伸びたり、私の体重が増えたりしないようにだった。

「愛が込められていた。

「願いが込められていた。

「羽衣ちゃんがいつまでも大きくなりませんように、っていう。

「いつまでも可愛い羽衣ちゃんできてねっていう。

「赤子のときの記憶なんてあるわけがないけれど、もちろんそんな不自由、当時の私は泣きわめいたでしょうね。

「甲高い声を上げたでしょう。

「だけど、赤ちゃんは泣くのが仕事だし。

「そんな私を、ふたりはいとおしいって思った——私に対する虐待は、しついでさえなかった。

「あれで甘やかしているつもりだったんだ。

「本当、返す返すも考えちゃうよね。

「いったいどんな育ちかたをしたら、あんな親になっちゃってしまうのか……、親の顔が見たいって思うのは、滑稽こっけいなのかな？

「この国に、四人いるはずのおじいちゃんとおばあちゃんに、今更会いたいとは思わないけれど……、たぶん生きてないだろうね。

「まあ、物心つく前からずっと閉じ込められ続けていると、そのうち、それが当たり前なんだって思っちゃうよ。

「いつからか私は泣かなくなった。

「泣くのは水分の無駄だから。

「水分は大事だよ。生きるために。私が自発的に、生きるためにできる努力は、『泣かないこと』だけだったわけ。」

「で、フォアグラのガチヨウみたいに、身動きできないように閉じ込められた私が、やはりフォアグラのガチヨウみたいに、常時食べ物を詰め込まれ続けた——とは思わないよね？」

「むしろその逆だって、想像はつくよね。」

「パパとママは、私に、栄養を摂らせようとはしなかった。だって、そんなことをしたら、成長しちゃうかもしれないじゃない。」

「母乳なんてもつてのほか。」

「赤ちゃんの頃の記憶なんてないって言ったけれど、キッチンで自分のおっぱいを搾乳して、私が成長するための栄養素を、ばかばか捨ててるママの姿を、なんとなく覚えている。」

「気がする。これは嘘の記憶かもしれない。もったいないからパパが飲んでいたのかもしれないね。大人のジョーク。」

「私が飲むのは、ただの水だった。」

「もつとも、『ただの水』なんて言っても、悪く言うつもりはない……、それで私は、露命を繋いだんだから。」

「ただの露命を。」

「でも、飲み物がそうなんだから、食べ物なんて、推して知るべしだよ。クイズにするから当たってみる？ 九十七パーセントの赤ちゃんが正解する問題だけど。」

「少なくとも離乳食なんて必要ないよね。離れるまでもなく、まず乳を飲んでいないんだから。」

「基本的には何も食べていなかった。」

「食べなければ太らない。『食べないダイエット』って本を出そうかしら。」

「本当、なんて言うのかな、ほぼ乾物みたいな気分だったからね。骨と皮でぺらぺらの木乃伊<sup>ミイラ</sup>みたいな――なめされた革のような。だから、水分で戻してもらっていたようなものだったよ。」

「その水分だって、ずっと際限なく摂取できていたわけじゃないから、飲まず食わずが通常なんだけれど、それでも、三日に一食か、五日に一食か、一週間に一食か、一カ月に一食か、とにかく、たまに果物を食べていたわ。」

「林檎とか、梨とか、バナナとか、ミカンとか、メロンとか、アボカドとか、ドリアンとか。」

「パパがね、果物ナイフで剥いて、口の大きさに合わせて、切ってくれた。小さかったからね、口。おちよぼ口って奴？ 歯だって、ぜんぜん生えてこなかったし。」

「意外と栄養のあるものを食べさせてもらってるって思う？」

「そうだね。」

「私が食べたのは皮だけど。林檎とか、梨とか、バナナとか、ミカンとか、メロンとか、アボカドとか――の、皮。」

「なめされた革のような私が、なめされた皮をぺろぺろなめていた。

早口言葉みたい？

「皮の付近にはフルーツのうま味が凝縮しているって言うけれど、どうなんだろうね？ 少なくともそんなものしか食べていなかった私の、手足がぐんぐん伸びるなんてことはなかった。

「パパとママの願いは完全に成就していた。

「彼らは夢を叶えたわ。

「私は育たない赤ちゃんだったの。

「生まれたばかりの頃の体重を、ずっとキープしていた。

「もちろん、慢性的に栄養不足だったから、病気にはかかりやすくて、普通の赤ちゃん以上に、手にかかる子供だったと思うわ。パパは自宅ではずっと、私を治療しているようなものだった……、小児科医としてのパパの技術は、案外、自宅で磨かれたものだったのかもしれないな。

「ママは私を着せ替え人形にした。

「私の服をいっぱい作ってくれた。愛情いっぱいのお洋服を。私はマネキンみたいなものだった……、身動きできないしね。マネキンよりも微動だにしない私だった。檻の中でもがくくらの動きはできるけれど、そんな無意味なことをして、体力を消耗したくないし。

「スタチューごっこなら、今でもいい線いくと思うわ。

「寝返りを打ったという理由で、死ぬかもしれないって危機感、体験したことある？　はらはらして、やみつきになるよ。」

「そんな虚弱体質だから、ママの服を着るのは、実はしんどかったな……、服のほうが私よりもずっしり重かったんじゃないかしら。」

「まあ、私の名前が羽衣だからね。」

「飛ぶように軽くても、不思議じゃないのかもしれない……、ところで、羽衣伝説って、どういう話なんだっけ？」

「森の中の湖で水浴びをしていた天女を見つけた男が、木の枝にかけられていた羽衣を盗んで、返して欲しなければ結婚しろと彼女に迫ったんだっけ？」

「すごいね、犯罪の要素しかない。」

「天女と、窃視症で窃盗犯で脅迫者の彼の間に、赤ちゃんは儲けられたのかしら。オチは知らないけれど、『一家はいつまでも幸せに暮らしましたとさ』でないことを、心から祈るわ。」

「とにかく、私は親がつけてくれた名前の通りに育ったってわけ……、ぺらぺらで、布みたいに軽く、布みたいに薄い人生。」

「この辺で一回総括すると。」

「私は部屋の隅の檻の中で、ずっと、育つことなく、赤ちゃん人形として、生存し続けたってわけ――約二千年に亘って」



「私は赤ちゃんのまま成人した。」

「正直、よく死ななかつたものだと思うわよ。阿良々木くんのこれまでの人生よりも長い、赤ちゃん歴——だなんて、自分でも信じられない。」

「あれは全部夢だったんじゃないかなって思う……、本当の私は、幸せな家庭で、ぬくぬく育ったんじゃないかって、思いたい。」

「ちなみに、成人したとは言ったけれど、スイスの成人年齢は日本とは違うし、かつ、たぶん私は出生届を出されていなかったはずなので、人として認められていなかったんじゃないかしら。」

「少なくともご近所さんには、私の存在は知られていなかったみたい……、聞こえてきた子供の泣き声を通報しなければ犯罪になるって国もあるらしいけれど、先述の通り、私は泣かない虐待児だったからね。」

「パパとママ、強い絆で結ばれたふたりの協力態勢があつてこそ、できた虐待なんでしょうね。」

「ただ、教育方針に関しては、ふたりの意見は食い違ったみたい——それが結果的に、私を救うことになった。」

「結果的にでしかなく、その過程で、私はぶっすり背中を刺されることになったんだけれど……。」

「パパは私を天才児にしたかったみたい。」

「ママは私に馬鹿な子でいてほしかった。」

「要するに、パパは私の見た目が可愛ければ、中身は賢いほうがいいと思っていただけで、ママは中身まで赤ちゃんのほうがいいって思っていたの……。実際はそんなシンプルに割り切れるものではなく、両方に、どちらの気持ちもあったんでしょけれど、基本姿勢として、ママは私に赤ちゃん言葉で喋りかけ続けたし、パパは私に、ちゃんとしたスイスの四カ国語で、勉強を教えるようにした。」

「お医者さんだから、学歴信仰があったのかしら？　それとも、天才の赤ちゃんってキャラに萌えるパパだったのかしら……。『育てないこと』を徹底していた中の例外として、『教育』だけはおこなっていた。ママの目を盗んでね。」

「その『教育』が、今の私の職に繋がっているわけだけれど、それ以前に、与えられた数少ないもののひとつである語学力は、私を救った。パパはそんなつもりじゃなかったんでしょけれど、親の思う通りに、子は育たない。」

「いくら栄養不足の頭でも、二十年間、ただただぼーっとしていたわけじゃないのよ。いくら檻の中にいるのが当たり前だと思っただけでも、語学学習のための例文をひたすら読み続けていれ

ば、檻の外のこともわかってくるし。

「両親の会話を聞いているだけでも、ヒントはある……、言葉がわかれば会話ができる、会話できれば話し合いができる、話し合いができれば、説得ができる。

「私はパパに狙いを定めたわ。

「思えば最低の娘よね、両親の絆に、亀裂を作ろうとしたんだから……、でも、ふたりの協力態勢が虐待の秘匿を成功させているのなら、その強固なパートナーシップを崩すしかなかったわ。

「虐待を止められるとは思わなかった。

「でも、虐待を終わらせることはできると思った——十五歳くらいの赤ちゃんになったときかな、もうちょっとあとだったかな。私はパパにおねだりしたの。

「『私を殺して』って。

「……本気のつもりはなかった、良心に訴えるつもりだった。

「と、言いたいところなんだけど、まあ、たぶん本気だったんだろうな。あわよくば、パパに殺してもらおうって気持ちはあるに違いないわ。そっちのほうが強かったくらいに。

「『私を愛しているなら殺して』。

「『その果物ナイフで私を刺して』。

「『生きていたくない、死にたい』。

「ママがいないタイミングを見計らって、パパにそう訴え続けた……、説得工作は簡単じゃなかったし、時間がかかったし、成功したとさえ言えない。

「でも、言い始めておよそ五年後。

「パパはようやく私の背中を刺してくれたわ。

「愛は本物だった」

「もつとも、そこで死ぬことはできなかったんだけどね、私は。」

「むしろ死んだのはパパだった。」

「檻の中で、背中に果物ナイフの刺さった私を発見して、半狂乱になったママに顔面を刺されて、パパはあえなく死亡したわ。」

「そしてママは失踪した……、逃亡って言うべきかしら？ パートナーを殺して姿をくらましたんだから。」

「殺されることには失敗したけれど、両親の絆を破壊することには成功したって言えばいいのかな……、で、パパとママ、双方の職場の関係者が、仕事に出てこないふたりを心配して家を訪ねてきて、パパの死体と。」

「死にかけている私を発見したってわけ……、元々常に死にかけているような赤ちゃんだったんだけれど、そのときは背中に果物ナイフが刺さっていたんだから、初心者にもわかりやすい『死にかけて』よねえ。」

「参考までに言うと、助かった理由は、いみじくも私の栄養失調のおかげだったそうよ……、医者であるパパは、正確に心臓を狙ったみたいなんだけれど、その心臓が通常の赤ちゃんより痩せ

てて？　ちっちゃくて？　果物ナイフの刃先がかすりもしていなかったんだって。

「運がいいって言うのかなあ。」

「背中からだったってのも、失敗の要因なんでしょう。もしもパパに、私を正面から見据えて刺す度胸があれば、きっと成就していたわ。」

「パパの狙いも、私の望みも。」

「さっきの羽衣伝説じゃないけれど、ふたりの間に赤ちゃんがいるなんて誰も知らなかったから、そりゃもう大騒ぎに――は、ならなかったわ。」

「私は意識不明の重体だったし、外部からは事情が読み切れない上に、世間に及ぼす悪影響があまりに大きそうって理由で、報道が規制されたんだって。今だったら簡単にネットで表に出ちゃう情報だろうけれど、当時はパソコンさえ、一般的ではなかったからね。」

「ああ、それくらい昔の出来事なのよ。具体的に言うと、私の本当の年齢がバレちゃうけれど……。」

「刺された背中傷よりも、やせっぽっちでちっぽけで、どうして生きているのかよくわからない容体の私は、そのまま入院して、絶対安静の措置が取られたわ。」

「安らかでも静かでもない私にとって、ようやくの安静。」

「私の人生はそこから始まった。周回遅れの、赤ちゃん人形の人生が――二十周くらい遅れているから、もうどうあがいても追いつけないのに、始まつちやったわけ。」

「栄養摂取とリハビリの日々。

「楽じゃなかったけれど、檻の中でみじろぎもしていない日々よりは、よっぽどラグジュアリーだったわ。毎日、こんなにサボってるみたいな気分がいいのかって思ったくらい。

「ケアしてくれた病院のみんなには、心から感謝している……、真面目な話、病院に永住したいと思ったくらい。

「パパとママ以外の人間に会うのは、おそらく初めてだったんだけど、私は人見知りしない赤ちゃんだったわ。ぶっちゃけ、相手の人品骨柄を気にしてられる状況じゃなかったし。

「でもねえ。

「サボってるみたいな気分って言うのは、まあ、九割強がりが混じってるんだけど、でも、それでもくじけず頑張れたのは、『一刻も早く、退院しなくちゃ』って思っていたからなのよ——なぜって？

「そりゃあ、私を殺しそこなったパパは殺されたけれど、パパを殺したママは、逃亡しただけで、まだ生きているからよ。

「だから早く逃げないと。

「逃亡者から逃げないと。

「ママがまた、私を檻に閉じ込めるんじゃないかって思ったの……、ううん、ママの愛に反して、医療施設ですくすく育ちつつある私を、叱るかもしれない。

「変な言いかたになるけれど、殺されるより叱られるほうが恐かったのよ。なにせ、精神年齢が『二十歳の赤ちゃん』だからね。」

「冷静に考えたら、夫殺しの殺人犯として手配されているママが、私が生きていることを知ったからって、私のところに来るわけないんだけど、冷静に考えるって、難しいよねー。」

「でも、意外とシリアスに危険だったのかも。」

「私の生存を含めて、ママによるパパ殺しが公表されなかったのって、私を保護するためだったりしてね。」

「保護者から保護するための情報非公開とか、受け止めかたの難しい仮説だけれど……、いずれにしても私は、ママから逃げるために、せいっぱい成長した。」

「逃亡先も考え続けた。」

「最低限、ヨーロッパから離れることは決めていたけれど、最終的に日本を選んだのは、そこがパパとママの出身地だったから。」

「ノスタルジィじゃなくてね。」

「ふたりの会話を聞いている限り、どうもふたりともそれぞれに、母国にいられなくなって、あるいは母国が嫌になって出国したみたいなので、世界中どこに逃亡したとしても、日本にだけは現れないはずだと考えたからよ。」

「……これも、冷静に考えてみると、思索が浅い。」



「そんな風に飛び出してきた国だろうと、あるいは、そんな風に飛び出してきた国だからこそ、最後のよりどころにするという考えかただってあるんだから。」

「本当は私は、ママにもう一度会いたくて、彼女が母国に逃げてくることを期待して、日本で待ち伏せする作戦だったんじゃないかと、自分で自分を疑いたくなる。」

「パパから殺され損なった私は、今度こそママに殺されたかったのか——それとも、ママに復讐したかったのか。」

「そうすることで真に私の人生が始まるとでも思ったのか、今となっては当時の心境なんて、上書きに上書きが繰り返されて、どういっつもりだったか、不明瞭ね。」

「結局、その真意は謎めいているのだけれど、私は導かれるように、日本行きを決めた。発見後、私に付与された国籍は当然スイスのものだったけれど、もう戻ってくるつもりはなかったし、日本に永住するための在留資格を取得することにした。」

「そのために結婚した。」

「在留資格目当ての結婚って言えば、偽装結婚みたいに聞こえるかもしれないけれど、そうじゃない。私がやったことはもつと酷い。」

「偽装どころか捏造よ。」

「条件を満たした男性の名前を勝手に書いた婚姻届を、役所に提出した——条件というのはいろいろあるけれど、要するに『勝手に婚姻届を出されても気付かない』環境で暮らしている男性で

あること。

「簡単な条件ではないし、下見と調査を繰り返したし、実際、何度もバレかけ、プランからの撤退を余儀なくされたりもしたのだけれど、最終的に私は『家住』という名字の男性と結婚し、資格の取得に成功した。

「重犯罪なんだけれどね。

「それに比べれば、経歴を詐称して、教師として国立大学に潜り込んだことなんて、我ながら可愛いものだわ。

「必死になればできないことってないわね、それが犯罪でも。

「年齢もちろん詐称している。先述の通り。

「若作りのキャリアが違うわ。

「他にも私は、嘘ばかりついている。名前から嘘なんだから、すべての局面で嘘をつくことになるのよ。この国で生きていくために、ただ普通に生きていくために。

「檻の中で生きてきた私の第二の人生は、嘘に囲まれている——嘘の中で生きている。

「正直、今でも生きているって実感はないわ。

「たまに我に返って、『私、何をやってるんだろう？』って思う。マジでこれが『生きていく』って感じなのかしら。

「それとも『死んでいく』って感じなのかしら。

「意味不明で、生死不明よ。」

「檻の中で、どうにかして殺してもらおうと、パパと対話していたときの私は、少なくとも、誠実ではあったわね。」

「それが正体。それが実体。」

「阿良々木くんが半年に亘って授業を受け、お遣いを頼まれた家住准教授の実体——実体なんてなかったのよ。」

「私はただの、幻だった」

「部屋の中を見てくれたと思うけれど、あのままごと遊びはまあ気にしないで、っていつでも無理かしら。

「でも、ここまでの話で、とつくにもう察しはついているでしょ。あれは私の生い立ちの再現って感じなの。

「心配しないで。

「『あれ』を本当に、自分の娘だと思っているわけじゃないし、ましてや人間だと思っているわけでもない。

「不気味で恐怖で気持ち悪いってきつと思うでしょうけれど、あんなのでも一応、試行錯誤の成果なのよ。

「試行錯誤の失敗って言うか……。

「書類上のことで、避けられないことだったとは言え、既婚者の振りをしなくちゃいけなかったから——ファミリー向けマンスションを借りて、日本の一般的な家庭をシミュレーションしようとしたわ。

「したつもりなんだけど……、結果はあまり芳しくなかった。シミュレーションできたのは、私の過去だった。」

「ままごと遊びなのにうまくいかない。」

「両親のほうがよくぽどうまくやったらって言える、二十年どころか、私は三年も持たなかった。」

「ちゃんと愛そうと思って作った『娘』なのに、ほんの二年で、ぜんぜん愛せなくなった。」

「可愛く思えなくなっちゃった。」

「人形のサイズが、赤ちゃんじゃなくなっていく過程で……、その『成長』を見守ることができなくなった。あれよあれよと、『昔は可愛かったのに』としか思えなくなった。」

「パパとママが正しかったのかしら？」

「子供は成長しないほうが可愛いのかしら？」

「それに……、阿良々木くん、隣の部屋までちゃんと見た？ 私と『別居中』の『夫』は発見したかな？」

「駄目だよ、見落としちゃ。これからの時代、言われたことだけじゃなくて、言われた以上のことをしなくちゃ。」

「当然あれも私の作品だと自白しておこう。あの殺人現場の再現も。娘の部屋ほど、セッティングには凝れなかったけれどね。言わせてもらえれば、自分でもあの出来に納得しているわけじゃない。」

「『娘』以上に、私は『夫』を愛することができなかったわけで……、そりゃまあ、パパには殺されかけているし、パパがママに殺されたのは、普通に考えて私のせいだし、『父親』っていう生き物に、なんて言うんだろう……、ほにゃららがあるのよ。

「あれよあれ。なんだつけ。トラウマだ。PTSD。心的外傷。

「心的どころか、私の場合、普通に外傷なんだけれどね。

「してみると、私がやったことはままごと遊びや現場の再現と言うより、箱庭療法みたいなものだっただけかな？

「やらなきゃよかったって思うけれど。

「家に帰るのが嫌になっちゃったもんね——だからと言って、崩壊した家庭のお片付けをしてもらおうと思つて、阿良々木くんを差し向けたわけじゃないの。

「学生に家を掃除させる教師とか、コンプライアンス的にヤバイですよ。

「そうじゃなくて、通報してもらおうと思つてね。目撃者になつてほしかったの。つまり、あれは証拠よ。

「真犯人しか知り得ない情報つて奴。

「それにこのお手紙を合わせれば、十分なエビデンスになるでしょう……、冒頭で意地悪言つてごめんね。あんな挑発するようなことを言つて、その実、私は阿良々木くんがこの手紙が解読できないなんて思つてない。

「今はいいいアプリもあるしね。」

「ただ、時間を稼ぎたかっただけ。私が安全な場所に逃げ切るまで――そのあとで、この手紙を公開してもらおうと思って。」

「我が娘への虐待がバレたから逃げるんじゃないし、手作りの人形を虐待していたのがバレたから逃げるわけでもないよ。そんなドラマチックなストーリー性はなくなつてね。」

「情けないことに、偽装結婚ならぬ捏造結婚から始まる一連の経歴詐称が、ついにバレそうなのよ。私のライフスタイルで、ルーチンワークでもあるいつものセルフチェックをしていると、取り返しのつかない瑕疵<sup>かし</sup>を見つけちゃった。法律や管理態勢もみるみる変わっちゃつてさ。」

「外国人労働者の永住が可能になるって流れは、本当、とてもありがたい話なんだけれど、私にしてみれば数十年遅かったと言うか……、むしろその煽<sup>あお</sup>りで、私の罪が暴かれることになつちやつた。」

「愚痴はよそう、いい話なんだから。」

「これまではルールの抜け穴をうまくついたつもりだったけれど、やっぱ悪いことはできないね。バレたら捕まる。だから逃げるの。」

「これを言うとかヤグみたいになつちゃうから、そういう意味でも嫌なんだけれど、檻の中に入るのは、もう嫌なのよ。」

「ママが今も潜伏しているであろう生まれ故郷に強制送還されるのも真つ平だし、そして何より、私は私に戻りたくない。

「私が育ててきた家住羽衣って人格を、放棄したくない……、どこかで育てかたを間違つたには違いないけれどね。

「愛着があるの、我が子のように、この名前に。

「というわけで蛙の子は蛙。

「三つ子の魂百まで。

「ママが罪を犯して逃亡したように、私も逃亡する——阿良々木くんには、この手紙を警察に届けて、部屋の様子を話してほしい。

「最後に答えてあげるって言ったけれど、もう察しはついたでしょ？ 私が阿良々木くんにお遣いを頼んだ理由。

「あなたが曲直瀬大学の学生きつての児童虐待のプロフェッショナルだって、老倉さんから聞いていたのは、本当に本当なんだけれど、決め手はそれじゃなくって。

「あなたが県警きつての人権派キャリア、阿良々木夫妻の息子だから——そういう言われかたは絶対に嫌いだと思うけれど、立派なご両親は誇りにしなきゃね。

「はつきりとはそう言うてはいなかったけれど、老倉さんもかつて、そういう理由で、きみと接点を持ったことがあるんでしょう？ きみを通じて、煩雑な手続きをすつ飛ばして、横着に警察



の上層部に訴えたくて。

「私も真似しようと思って。

「それだ、って。

「直接出頭する度胸はないから、最強のコネを持つ阿良々木くんに助けてもらおうと思ったのよ。私という嘘つきが、正直者になるための手助けをしてほしくて。

「真実一路の人物に、一度くらいはなりたくて——私の犯罪がバレて、スイスのイメージが悪くなることだけは避けたいっていうのもあるかな。これは国際問題じゃなくって、家庭の問題なんだっていうことを、暴露しておきたかった。

「犯罪者だけど悪人じゃないのよ、私は。

「ただ、可哀想なだけ。

「長々と話してきたけれど、ぬいぐるみの綿みたいなのもややを、きみに押しつけられてすつきりしたわ。最初からそうすればよかったのね。

「あとはよろしく。

「私は誰の手も届かないところに逃げる——だって、羽衣だからね。私自身が天女なわけじゃないけれど、きつと空だって飛べる。布のように、薄っぺらいんだもの。

「ああ、天にも昇る心地だわ」

「天にも昇る心地だわ——なんて、余計な末尾で結んだから、私がここに潜伏しているってバレちゃったのかしら？」

「だとしたらあまりにも不覚で、不憫<sup>ふびん</sup>だわ——と、約一週間ぶりに会う家住准教授は、とても氣<sup>け</sup>怠<sup>だる</sup>そうに言った。

僕は「いえ」とかぶりを振る。

「正直、まだあの手紙は、ちゃんとは読んでないです」

「ちゃんと読めよ。失踪者の置手紙でしょ。それにしたって、この速度で解読されるとは思わなかったけれど」

遺書。

とは、家住准教授は言わなかった。

「アプリを使ったの？」

「いえ……、まあ、そんなようなものです」

まあ、僕も言うまい……、家住准教授が失踪当日、研究室に残していたその手紙は、同行してもらった命日子と一緒に発見したのだということとは。

四カ国語どころか、あいつはたぶん、四十カ国語以上喋れるのだから……、ラテン語を喋れる大学生がいるなんて、僕も意外だったよ。

いくらスイスドイツ語、スイスフランス語、スイスイタリア語、ロマンシェ語の入り交じった暗号文でも、あいつにとっては頭の体操みたいなものだ……。まあ、あいつもサークル活動や何やらで暇じゃないから、自分では多少時間はかかったという認識みただけけど、それでも愚直に僕が挑むより、ずっとスピーディだっただろう。

訳文がやや軽快なのは、ご愛敬だ……。

「僕が置手紙を、そのまま警察か、そうでなくとも大学に提出するとは思わなかったんですか？」

「それができる性格じゃないことくらいは、きみの小テストの結果を見てればわかるわよ。阿良々木くんは、たとえ皆目見当のつかない問題でも、一応は答を埋めるでしょ？ 空欄のまま答案を提出することを好まない。友達やアプリに頼ることはあっても、自分宛の手紙の内容を把握しないまま、手放すとは思わなかったよ」

「……テストからそんなプロファイリングができるなんて、いい先生じゃないですか」

「二セ教師だけだね。質問に答えて？ 手紙を読んでないなら、阿良々木くん、なんでここがわかったの？ 私の、いわゆる失踪先が」

目玉つきクマちゃん人形にガイドしてもらった、とも、やはり言えない——言えっこない。代わりに僕はこう言った。

「家住准教授、知らないものを屋上に捨てる癖があるんじゃないですか？」

「え？」

きよんとする家住准教授——しかし事実、ここは、大学校舎の屋上だった。

ひよこひよこ歩む斧乃木ちゃんの使い魔は、まっすぐ校舎にぶつかったかと思うと、そのまま壁をよじ登り始めたのである……。フリークライミング。最初は、障害物を迂回するだけの知恵も、創造主から与えられていないのかと痛々しく思ったけれど、すぐにわかった——知恵が足りないのは、むしろ僕のほうだった。

僕が一番痛々しい。

その当該校舎の中に、家住准教授の研究室があることには、もっと早く気付いてもよかった——そしてその研究室が、マンションの333号室同様に、最上階であることにも。

忽然と姿を消した大学教師。

研究室はもぬけの殻で、校舎から出た姿も目撃されておらず、自宅に帰った様子もなく、クルマも置きっぱ——けれど、当然のように立ち入り禁止である校舎の屋上は、まだ誰も探していないんじゃないのか？

盲点と言うよりは、一番最初に『それはない』と×印をつける場所である……、実はマンションに引きこもっていたという仮説のほうで、まだ真実味がある。少なくとも自宅なら、生活環境は整っているし、通販なりで、生活必需品を入手することもできるのだから――校舎の屋上には、電気どころか水道さえない。

ライフラインがゼロなのだ。

潜伏先にも逃亡先にも不向きである、が……、生活しようとも、生存しようとも思っていないければ、話は別だ。

ただ逃げようとしているだけなら。

この世から、逃げようとしているだけなら――屋上なんて、むしろベストプレイスじゃないか。

「私が飛び降り自殺でもすると思った？ 私には天に昇りたいの。地に落ちたいんじゃないわ」  
そう言う家住准教授は、げっそりやつれている――立つてもいられないのか、僕が駆けつけたときには、フェンスにもたれかかって、声をかけるまでは、こちらを見ようとしなかった。

正直、僕は間に合わなくて、即身仏になったのかと思ったくらいだ……、けれど、彼女はまだ生きていた。

朦朧もろうとはしていても、意識もあった。

「飲まず食わずは得意なのよ。それしか得意じゃないくらい」

フェンスを背後にそう言われると、落下防止用のその柵も、檻の一部に見えてくる……。彼女はまだ、囚われ続けているのだろうか。両親のしつらえた檻の中に。

しかし確かに、この様子なら、飛び降りの心配はなさそうだ……。校舎下でスタンバイしてらっている斧乃木ちゃんの出番はなしか。

ちなみに、落下物に備えるにあたって、斧乃木ちゃんは目玉つきクマちゃん人形から、目玉を回収している……。遠近感を取り戻しておかないと受け止め損なうかもしれないからなのだが、それはとりもなおさず、クマちゃんが、あまりにも短い命を終えたことも意味する。

追悼することさえ傲慢であるように思うが、しかし、屋上へのナビゲーションもさることながら、あのクマちゃん人形をマンションの屋上で発見したことが、僕が今、ここに理由と直結しているのだから、その出自は、どうしても気になる。

ちゃんと読んでいないととぼけたけれど、実際はちゃんと読んでいる……。デディベアについて触れている箇所はあったけれど、このキーホルダー自体については、特に語られていなかった。

さっきの反応を見ると、家住准教授が捨てたものなのかどうかも、怪しくなってきたけれど……。いや、それよりも何よりも。

「でしたらとりあえず、お水はいかがですか？ 炭酸水ですけど」

「ん？」

目を凝らすようにする家住准教授。

炭酸水の出所が、マイカーのトランクであることに気付いたのかもしれない。けれど、それについては何も言わず、

「やめとく。このくらい空腹のときに水を飲んだら、リフィーディング症候群になるから」

と答えた——水でリフィーディング症候群は起きないはずだが、ほぼ水のみを栄養分としていた経験者の台詞はあまりに重い。しかし、そんなぎりぎりの状態なのか。

事実、それくらいの日数は経過しているのだ……、人間が飲まず食わずでいられるのは、そう、三日が限度——なのだっけ。

しかも、真夏の炎天下だ。

僕は間に合ったとは言えない。

「いやいや、お手柄でしょ。よかったね、きつとご両親に誉めてもらえるよ。大犯罪者を生け捕りにしたんだから」

「……今後のことは今後考えるとして、まずはここから離れませんか？ 危険ですし」

「危険？ なんで？」

あなたに復讐を目論む毛布が襲撃してくるかもしれないから——と、答えようかと思ったが、やめておいた。

こうして家住准教授を存命中に発見できたのだから、絶対に無駄足ではなかったけれど、あの手紙を解読してみると、それは取り越し苦労だったように思うから。

唯々恵ちゃん人形は、きつと逃げただけなのだろう——母親と同じく、母親から。

そうだ。手紙と言えば……。

「すみません。手紙を読んだ限りじゃ、ちょっとわかりづらかったんですけど……、唯々恵ちゃん人形を果物ナイフで刺したのは、家住准教授なんですか？」

「え……？　刺したって、何を？」

再び、家住准教授はきよんとする……、唯々恵ちゃん人形という言葉がぴんと来ないわけではなく、本当に僕が何を言っているのかわからないようだ。

重ねて、お父さん人形を刺したのは誰かも、訊こうと思ったけれど……、今はやめておくか。

手紙の中で家住准教授は、人形を作ったのは自分だと告白していたが、刺したのが自分だとは書いていなかった。

屋上のクマちゃん人形。襲ってきた衣服。

マイカーにチャイルドシートが設置されていなかったのは、そもそも唯々恵ちゃん存在自体が虚偽で、家住准教授の細工は、マイハウス内のみに限られていたからということなのだろうが……、大犯罪者からの赤裸々な自供があったところで、まだまだ多くの謎が残されている。



手紙の内容にしたところで、どこまでが本当なのか……、僕は家住准教授がそこまで嘘つきだとは思わないけれど、到底真実とは思えないような内容も、数多く含まれている。

けれど謎解きは、僕の仕事じゃない。

僕にできるのは、空白を残さず、解答欄を埋めることだけだ。

「阿良々木くんに助けを求めたことが、私の間違いだったのかしら？」

立ち上がることもままならない家住准教授は、手を貸そうとした僕に、ほとんど独り言のようにそう言った。

うん、言えている。

お片付けを頼んだつもりはないと、手紙には記されていたけれど、結果として僕は、整理整頓どころか、家住准教授のマンションも自家用車も、破壊するだけ破壊しただけなのだから……、親愛なる僕の幼馴染から、もうちょっとちゃんと噂を聞いておけば、僕がまったくアテにならないドラ息子であることは判明しただろうに。

だから、そうですねと、心から同意しようと思ったけれど、しかしふと、まるでそうではないことに気付いたので、

「いいえ、死のうとしたことが、あなたの間違いなんです」

と、僕は答えた。

単位のもらえそうにない、埋め合わせの解答だった。

後日談と言うか、今回のオチ。

それから更に、一週間ほど経って。

「それで？　今回は何があつたの？　私でよかつたら話を聞くよ、阿良々木くん」

「失せ……、羽川っ!？」

直江津高校卒業後、海外へと放浪の旅に出た元同級生、羽川翼が、僕の前に座っていた——あれ!？」

オチ担当のヶ原<sup>がはら</sup>さんは!？」

「ひたぎちゃんは、今週、寮のお友達と一緒に釧路<sup>くしろ</sup>旅行に行っているから、そこで僭越ながら、私が代わりに」

「あいつ北海道行ってるの!？　僕とはまだ行っていない北海道に!？　新しい友達と!？」

彼氏が普通に傷つくことするなよ！

いや、あいつが交友関係を広げていくことは、大いに推奨したいんだけど……、もしも蟹を食ってきたらマジの別れ話になるぞ。

「しかも羽川が代わりって……、いつ帰ってきてたの？　いつまでいれるの?？」

「帰ってきたのはついさつき。夏休みだろうからひたぎちゃんと遊ぼうと思ってただけど、振られちゃってねー。阿良々木くんをあてがわれた」

羽川から、本来、僕と会うつもりはなかったみたいと言われるのも何気にショックだな……、まあいいや。

恒例のやり取りのリズムが崩れるのは、本来好ましくないけれど、だからと言って羽川と話せることが、嬉しくないわけもない——たとえテーマが、児童虐待に関する悲喜劇でも。

場所は恒例の、大学構内のカフェテリアである——ひたぎに呼び出されたので、いつもの奴かと思いつつも忠実に駆けつけたのだが、とんだスカシを食らってしまった。

数カ月ぶりに会う羽川翼は、灰色ロングのストレートだった。三つ編みにこそしていないが、初めて会った頃の長さに近い……。ただし、前髪を作っていないので、単に伸ばしっぱなしなだけだと思われる。いったいどこの国から帰国してきたのか、頑丈そうなリュックサックや帽子も含めて、登山帰りみたいなファッションである。

小麦色の肌はビーチで焼いてきたっぽいけれど、まあ、そんなちぐはぐな感じが、今の羽川のありかただけ？

初めて会った頃との近似と言うなら、高校三年生の二学期からコンタクトレンズにしていたはずの彼女は、再び眼鏡に戻していた——それはイメチェンとかキャラ変とかではなく、単純に、旅行中はそっこのほうが便利なのだと思う。

考えてみれば、僕が羽川翼の私服を見るのは、これが初めてか？ 彼女ももう女子高生じゃないのだから、私服姿が見られるのは当たり前なのだが……、心の準備がゼロだったので、登山服でもどぎまぎしてしまう。

友情出演と言うのか、スタントダブルと言うのかわからないが、しかしまあ、今回の件に限れば、ひたぎよりも羽川のほうが、エンディングにはハマり役なのかもしれない。

『羽』繋がりとは言わないが。

まあスタートはそこだったしな。

「あははー、それがもう迂闊だよねー、阿良々木くん。名前に羽なんてついてる奴は、大概ろくでなしなんだから」

「ろくである！ ろくである方々ばかりだ！ お前の自虐に、名前に羽が入っている国民全員を巻き込むな！ 名前に羽が入っている時点で、金持ちで長寿の人格者確定だよ！ 姓名判断で百点だ！」

「阿良々木くんこそ、そんなに守りに入った芸風だったっけ……、経済状況と平均寿命までは、私は言及してないし」

百点って、姓名判断ってそういう点数のつけかたじゃないよ、と、呆れたように指摘する羽川——くそう、久し振りに会ったら、丸くなったことを指摘されてしまった。

姓名判断ねえ。

「お前は何でも知ってるな」

「何でもは知らないわよ、知ってることだけ。それとごめん、もうお互い高校生じゃないんだし、お前って呼ぶの、やめてもらっていいかな」

「噛み合わねえ！」

懐かしのハンドシェイクに失敗みたいな感じになってしまっている——まあ、こういう気まずさも再会の味か。

「丸くなったとは言わないよ。むしろ立派になったなって感心している。まさか先生を救うなんてね。保科先生に聞かせてあげたい」  
ほしな

「まあ、あの担任教師には本当に迷惑をかけたからな……、教師か……、僕は立派になったとして、お前……あなたは、最近どうしてたんだよ、羽川……さん？」

「ぎこちないにもほどがあるでしょ。嘘うそ、お前の羽川でいいって。うん、私はようやく、国境付近の地雷撤去作業が一段落ついたところ」

スケールを合わせてくれ。

してみると、登山服に見える今日のコーディネートは作業服、もつと言えば軍服なのかもしれない……、とことん僕は、羽川の私服が見れない宿命なのか。

僕と斧乃木ちゃんとの冒険活劇が、すぐくちっちゃい些事みたいになっちゃうじゃん。

「人助けに大小はないでしょ。阿良々木君の妹じゃないんだから」

「そう言ってもらえると、斧乃木ちゃんも浮かばれるよ」

「お、斧乃木ちゃん、死んだの!？」

「元から死んでる。まあ、それはあとで話す……、僕にも段取りというものがあるのでね」

「ないでしょ。阿良々木くんには、段取り」

ないかもな。

今回もなかった。

「一段取り、もとい、一段落つてことは、まだ地雷は残っているのか？」

「いえ、撤去は完全に終了。でなきや帰ってこないよ。一段落なのは、これで私は、借金から解放されたって意味」

「借金？ 何の？」

「卒業式の前日に、扇ちゃんを倒すために戦闘機をチャーターしたときの借金だよ」

あつたな、そういうの。

そうか、僕は勝手に終わったみたいない気持ちになっていたけれど、羽川はあれからずっと、借金地獄に苦しんでいたのか……、春休みの地獄どころの騒ぎじゃないな。

それでもさすがと言うか、かなりのスピード返済である。

すげーやこいつは。

「そんなわけで、ここから先は羽川翼の自由行動……、自分の意思で好きな地雷を撤去できる」

「……………」

いいことを言っているようで、なんか恐いな……、僕が羽川の将来を心配するなんて、高校生の頃には考えられないことだったけれど。

「それで？」

と、切り替える彼女。

「今回は何があったの？ 私でよかったら話を聞くと、阿良々木くん」

「お前以上の聞き手はいないよ」

既に報道にも乗ってしまっている案件だ、何でも知っている委員長に、今更僕が付け足すことがあるとも思えないが、僕は時系列に沿って、端折ることなくあらましを語った。

「――ああ、今はもう委員長じゃなかったっけ」

「私は今も委員長だよ。国際地雷撤去U・20委員会の」

「すげえ委員長だ。生涯委員長であり続けるのだらうという僕の予言が、まさかこんな形で結ばれることになるうとは」

「でも、なるほど、ふうん。そういうことか。大変だったね、阿良々木くん。だいたいわかったよ」

「えらく簡単に、だいたいわかってくれるじゃねえか。僕が何度となく死にかけた、怪異なる事件の真相を」



「死にかけてたっけ？」

「少なく見積もっても、二十回は」

「話を盛らないで。怪異譚で。伝播<sup>でんぱ</sup>しちゃうから」

「少なくとも見積もったら一回だった——自分の衣服に窒息死させられそうになったとき。多く見積もっても二回か……、檻の中に閉じ込められたとき。」

アンリミテッド・ルールブック

『例外のほうが多い規則』によるフライト×2は含むまい、あれはギャグみたいなものだ。

そういう意味では、僕はこの夏、さほどの大冒険を経験したというわけではないのかもしれない……、地獄のような春休みや、悪夢のようなゴールデンウィークと並ぶ、魔界のような夏期休暇とはいかなかった。

そう。

結局のところ、これが現実だった。

「本当、お前だったらよかったのかもな。家住准教授が助けを求める相手が。お前だったら、最初に研究室に呼び出された時点で、『取り替えっ子』なんて誤解はせずに、あの人の自殺衝動なんて、吹っ飛ばしてみせたんじゃないのか？」

「ん。ん。今の私だったら、そのまま死なせちゃったかも」

「……………」

「昔の私でも、無理だったかな。大人を助けるなんて発想が出てこなかったかもね……、まして、虐待する大人を前に、冷静でいられたとは思えない。覚えてるでしょ？ 私が育ての親に、何をしたか。私は忘れてたけど……、だから、阿良々木くんはすごいよ」

そう言われても、あんまり誉められている気はしないな。

むしろ、どうしてそんな冷静でいられたんだと、裏切り者扱いされている気分だ。

「四角四面に最初の時点で通報して、ことをややこしくするのが関の山じゃないかしら。だから、老倉さんの推薦に従って、阿良々木くんを選んだ家主さんは正しかったんだよ。老倉さんも、そう思ったからこそ、家主さんに阿良々木くんの話をしたんじゃないの？」

「老倉は誰にでも僕の悪口を言っただよ」

あいつの話がきっかけになったのは間違いないにしても……、老倉のとき同様に、僕はとても、お役に立てたとは言えない。

立てたどころか、頹くたれた。

そう思っていたけれど。

「逆に、阿良々木くんはどこまでわかっているの？ 現時点で」

「ほとんど何もわかってねーよ。いつもと同じで、もっと上手くやる方法があったに違いないって悔やんでいるだけさ」

実際、三歳の娘を虐待していると聞かされた時点で通報するという、『昔の羽川のやりかた』は、そう悪いものではない……、少なくとも家住准教授は、この飽食の国において、栄養失調で警察病院に入院する羽目にはならなかったはずだ。

屋上の時点でも、既に朦朧としていた彼女の意識は、現在失われている……、意識不明の重体どころか、どうして生きているのかわからないというのが、医師の見立てだ。  
どうして生きているのか。

それは彼女自身が、一番わかつちやいない。

僕は彼女の命を救ったけれど、それは命を救っただけなのだ……、それ以外は何一つとして、救えていない。

衣食住——そのすべてを与えられなかった、あの人のこれからの人生を思うと、気分は落ち込むなんてものじゃない。

「道理で今回、忍がぜんぜん助けてくれねーわけだぜ。僕のやってることは、あのときと何も変わつちやいない。死にそうになっている誰かがいたら、手を伸ばさずにはいられない」

忍には忍の言い分があるだろう……、少なくとも、『ぜんぜん』というのはフェアではない。駐車場が騒ぎになるのには間に合わなかったが、日が暮れて以降は、彼女の時間だった——33号室の修理、及び浄化については、忍が八面六臂の大活躍を見せてくれたのだから。

「家住さんも、本当は助けを求めてたんじゃないの？　子供相手に、そんな風に言えなかったただけで」

「ツンデレって奴か？　いい大人が？　僕は児童虐待の専門家ではないし、怪異の専門家でもないが、ツンデレの専門家だぜ。まあ、束の間でもそんな風に思えば、少しは気が晴れるんだがな」

どうなんだろう。

かつて僕も死にたいと思い、かつ、そのとき、羽川からかけられたその言葉に生かされたからこそ悩んでしまうのだが、辛い目にあつて、苦しんでいる人間に対して、『自殺は罪深い』と諭すことは、ただの残酷だったんじゃないか？

ズタボロになった末に、死にたいと思ったことさえ責められるって――罪深いのはどちらだ？　助けを求めていたなんて、とても思えない……、あの人は、死にたかったただけなんだ。

「じゃあ、置き去りにされた不思議を解きほぐせば、少しは阿良々木くんの気分も晴れるかな？」

「そりゃまあ、幾許いくへかは」

「では出過ぎた真似ではありますけれど、この委員長めが、お手伝いをば」  
につこりと笑う羽川。

そのために来たわけか——関係者以外立ち入り禁止の大学の構内に、堂々と。ひよつとするとそれは、今頃釧路をお楽しみの僕の彼女の計らいなのかもしれない。

だからと言って簡単には許さんが……。

「簡単などころから片付けていくと、まずは屋上のクマちゃん人形かな？」

「か、簡単などころなのかよ、そこが」

「だって、キーホルダーにつけるようなサイズのクマちゃんでしょ？　だったら、元々はキーについていたって考えるのが妥当なんじゃないの？」

「キー……」

この一連の出来事に登場したキーと言えば……、家住准教授のテリトリーだった333号室の鍵……、僕があの日、屋上でようやく返却できた、あの鍵のことか？

「ノンノン」

「ぱ、パリジエンヌ？」

「もうひとつあるでしょ。阿良々木くんの言うところの、第二の扉に装着されていた、廊下側からしか開かない鍵」

「ああ……、斧乃木ちゃんが蹴倒したあの扉の」

そうか、僕はあの扉のヒンジを修理しようとしたのだけれど、鍵そのものがどこにあるかを、検索はしていない——その後の（途中で終了した）検索でも、発見されなかった。

「デディベアってセレクトからしても、ベビールームの鍵についていた公算は高いんじゃないかな？　そして――屋上に放り投げた公算も」

家住准教授と両親の捨てられなかった思い出、みたいな想像を、斧乃木ちゃんと共にたくましくしていたけれど、家住准教授と唯々恵ちゃん人形の思い出だったと考えることもできるわけだ。

……それを屋上に投げ捨てたのだとも。

地ではなく、天へのポイ捨て。

「可愛く感じなくなって――ね。そこは斧乃木ちゃんの言う通り、投げ捨てたと言うより、捨て切れなかったって感じなんだろうけれど。クマちゃんの傷みかたから考えて、一年くらい前のことなんじゃない？」

「……………」

『我が子』に対するのと同じ気持ちだが、キーホルダーに対しても生じたと……、取り外したキーは、その後は玄関の鍵と同じように、キーホルダーなしで使い続けたってことになるのだろうか、でないと、開け閉めができなくなる。

最終的には、唯々恵ちゃん人形を監禁して、第二の扉の鍵を閉めっぱなしにしていたことを思うと、キーもまた、屋上に捨てられたのかもしれないけれど……、斧乃木ちゃんが破壊した瓦礫の下あたりから、ひょっこり見つかるのかもしれない。

あのボロボロのクマちゃんは。

ある意味で、ベビールームのインテリアと並ぶ、愛情の残骸だったというわけか。

「非常事態だったとは言え、両親との苦い思い出を怪異化させたんだったら心苦しかったけれど、まあ、家住准教授が自分で買った人形だったなら……」

「両親からの贈り物だったなら、気持ちの問題じゃなくヤバかったと思うよ。手作りでもまずかったでしょうね——斧乃木ちゃんはプロだから、その加減を見誤ったりはしないんだろうけれど」  
私もかつて、怪異を生み出したことがあるからね——と、羽川は、それこそ思い出深そうに、そう言った。

ブラック羽川のことだろうか？

いや——苛虎<sup>かこ</sup>のことか。

僕が不在の間の出来事だったので、詳細を知っているわけではないけれど……、しかし、いい悪いじゃなくて、専門家でもないのに怪異を生み出したこいつは、マジでとんでもない奴だな。

委員長としての格を際限なく上げていく彼女と、僕はいつまでこんな風に、同じテーブルでお茶なんて飲めるんだろう？

「斧乃木ちゃんに関して言えば、こたびのあの子は、見誤りまくりだったと思うんだけど……、本人いわく、『阿良々木月火と暮らすようになってから僕のポンコツ化はとどまるところを知ら

ない』だそうだ」

「ふむ。じゃあ次は……」

「僕から訊いていいか？ 細かいことではあるんだけど……」

「あれでしょ？ 細かいことって言えば、どうして阿良々木くんや斧乃木ちゃんを襲った衣類布類の弱点が、水だったのか、でしょ？」

心得ているという風に言う羽川。

「でも、それは家住さんの手記と照らし合わせれば一目瞭然じゃないかな？」

「ん。いや……、僕の質問はそれじゃなかったけど、まあいいや」

『細かいこと』の定義が、僕と羽川ではまるで違うようだった……。僕はそんなこと、もう気にしてもなかった。怪異は基本、水に弱いんじゃないかとか、そんな雑なまとめをしていたけれど……。

「『水』を『主食』とする生育歴を持つ家住准教授が生んだ怪異だから、水が弱点ってことか？ でも、だったらむしろ、水を浴びたらより活発になりそうだけど……」

乾物を戻すように、だっけ？

いや、屋上での発見時、家住准教授は僕が勧めた水を辞退した……。飲まず食わずのところにいきなり水を飲んだら命に関わるとか……。しかし、だったらいったいどういう処置こそが正しいのかって話だ。



「リフィーディング症候群よりも、水で満たされることを、家住さんは拒んだのかもね――」

「満たされる」

「スキー帽やジャケットは、ずぶ濡れになって、ぐったりして動かなくなったんじゃないの？ おっぱいを飲んで、おなかいっぱいになった赤ちゃんみたいに」

「……………」

弱点じゃなくて――主食。

満たされるのを拒むって気持ちは、まあ、理解できるかな……、ハンガーストライキの吸血鬼、デストピア・ヴィルトウオーゾ・スーサイドマスターなら、ここでもっと深い、含蓄のあることを述懐するのかもしれない。

「おっぱいか……、図らずも僕は、イクメンになっていたわけか。確かに、男性も育児に積極的になるべきだと、常々思ってはいるが」

「阿良々木くんがおっぱいってしみじみ言っていると、別の意味に聞こえるよね」

「『死にかけてたっけ？』って質問は、そういう意味だったのか？ 僕のピンチは、飢えた赤子がすがりついてきたようなもので、命の危険はなかったと……」

「いえ、攻撃だったのは確かだと思う。恐らくは自己防衛的な……、そうでなくとも、私だったら絶対、一度自分を殺しかけたジャケットとスキー帽を、着用しようだなんて思わないけれ

ど……、どれだけ低体温症に怯<sup>おび</sup>えているのよ、懲り過ぎでしょ」

そう言われると言葉がない。

だけど、マジで恐いんだ、『例外のほうが多い規則』<sup>アンリミテッド・ルールブック</sup>に、安全ベルトもなしでひつついていくの……。

「阿良々木くんの注意がバラバラになったお父さん人形に向いているときを狙って背後から、阿良々木くんの着衣で交戦してきたあたり、意外と体系的、組織的に襲ってきたと思うよ？ でないと、プロの斧乃木ちゃんが苦戦はしないでしょう。クローゼットを開けることが発動条件と言うより、開けるにあたって、斧乃木ちゃんの両手が塞がるタイミングを狙っただけって気もする。で、阿良々木くんの訊きたかったことって何？」

羽川が僕のレベルまで降りてきてくれた……、勉強を教えられていた頃を思い出すやり取りだ。

僕が赤ちゃんだな、ばぶばぶだ。

「やれやれだみたいな感じで言わないで。どんな赤ちゃんなのよ」

「僕と言うより、扇……くんの疑問点なんだ。唯々恵ちゃん人形とお父さん人形の、造形の出来と、描写の出来の違い……、バルーンアートじみたテクニクと、『へのへのもへじ』の落書きのバランスの悪さから、扇くんは、ぬいぐるみ作りにはふたりの人間が関与しているんじゃないかと、『別居中の旦那さん』を事件の俎<sup>そじょう</sup>上に載せたわけだ」

唯々恵ちゃん人形を閉じ込めたのは家住准教授でも、人形の背中を果物ナイフで刺したのは旦那——という推理の根拠……、いや、補足だった。

まあ、扇ちゃんの推理と違って、扇くんの推理は適当度が高いというか、話し相手を混乱させ、場を荒らすためのものという性格が強いので、てんで外れていてもおかしくはないのだけれど、しかし、そうになると、再び造形力と描写力の食い違いが気になってくる。

手紙を読む限り、唯々恵ちゃん人形もお父さん人形も、家住准教授ひとりで作ったようだけれど……、順当に、『家住准教授は器用だけれど、絵の才能はなかった』でいいんだろうか？

「なあんだ、そんな簡単なこ……、それは確かに不思議だね、よし、ふたりで一緒に考えよう」

「僕へのフォローが下手になってるぞ。手取り足取りの家庭教師時代を思い出せ」

「扇ちゃん、じゃなくて、扇くん？　は、その時点でお父さん人形の存在を知らなかったんでしょう？　だったらそう考えるのは仕方ないけれど、もしも隣の部屋の寝台の上を先に見ていたら、きっとこう思っていたはずよ。『この娘、お父さんとそっくりだ』って」

「……あー」

作者が同じ、と考えるんじゃないかって……、親子だから似通っている、と考えれば、『へのへのもへじ』の共通そのものは、むしろ自然なわけか……、女の子は男親に似る、なんてのは、俗信だとしても。

自分の子供に見立てるぬいぐるみに『へのへのもへじ』は、あまりに腕か、愛情かのどちらかがなさ過ぎると思ったが、父親代わりの人形を真似たのであれば——だが、そうになると、お父さん人形の顔が『へのへのもへじ』だった理由を解き明かさねばならない。

腕か、愛情か。

足りなかったのは——

「——愛情でいいんだな、この場合は」

在留資格のための捏造結婚。

金目当て、名声目当ての結婚どころか、国籍目当ての、書類上の結婚だ——独力でそれを成し遂げた家住准教授は、たぶん、配偶者の顔なんて知らないだろう。

少なくとも二年間は、育てようとしてみせた唯々恵ちゃん人形と違って、お父さん人形には、名前さえつけていない。

欲しかったのは、戸籍だけか。

「絵を上手に描くことはできなくとも、下手に描くことはできる——なんてのは、所詮絵心のない奴の逆説でしかないんだろうが……、理想の男性の顔を描く、とかじゃ駄目だったのか？」

「理想なんてなかったんでしょ。持ちたく」

所持持ちを装うためのシミュレーションだと、手紙には書いていたけれど……、当然、それ以上の意味があるんだと思っていた。

思い入れとか、ノスタルジイとか、そうせずにはいられなかったなにがしかの特別な理由が——だけど、本当にそれが、犯罪行為のための作業だったとするなら、確かに、そこに理想はいらない。

邪魔と言っている。

そんなシミュレーションにさえ、彼女は失敗したことになるが——

「娘を愛せなくなる以前に、夫を愛せなかったってことになるのかしらね。深読みするなら、ご両親を反面教師にしたってことなのかもしれない……。お父様とお母様に強固な絆があつたからこそ、長年の監禁は成立したのだとすれば」

「……唯々恵ちゃん人形を愛するために、お父さん人形とは家庭内別居をした？　なにせ相手が人形だから、本当の別居はできないにしても……」

クマちゃん人形と違って、屋上に投げ捨てられるサイズでもない……。ずっと檻の中で育て、『家の外』を知らなかった家住准教授にとって、あの333号室がテリトリーのすべてだったことは、必然なのかもしれない。

かつての北白蛇神社なみの、吹きだまりと化した自宅——情念渦巻く3LDK。

家庭内別居中というのは決してミステリーじみた叙述トリックではなく、両親の絆しか知らない彼女にとっては、それが考え得る最大の別居だったのだとしたら——途方もなく、途方に暮れる。

「そうするしかなかったとは言え、そんな絆を檻の中から壊したことが、家住准教授のその後の人生を決定づけたのかな。スイスから国外に出たのは、母親から逃げるためと言うより、罪悪感から逃げるためだったりして」

父親に背中を刺させたことが、本当に五年越しの大願成就だったとしてもだ……、その後、母親に父親を殺させたり、母親を逃亡犯にしたかったわけではあるまい。

「……ああ、そうか。まずそれを訊くべきだったな。屋上で家住准教授に訊いて、はっきりとした答がもらえなかった謎なんだけれど」

二十年どころか二年も持たなかったシミュレーション——唯々恵ちゃん人形を愛し続けることが難しくなり、家庭内別居に至り、果てはネグレクトにまで至ったというのは、現実とは別の形のバッドエンドだったとしよう。ただし、『再現現場』と、現実との違いとして——

「お父さん人形の顔を刺したのは誰なんだ？ 唯々恵ちゃん人形を刺したのは……、家住准教授でいいのか？」

人形作りが、共同作業ではなく彼女単独での製作だったとするなら、虐待と刺殺に関しても、扇くんの推理は大外れで、同一犯だったと推察するべきなのか？

あの後輩と話したことがきっかけとなって、僕はその後の行動を起こしたのだから、真偽や正誤は今となってはどうでもいいと言えはどうでもいいのだが……。

「そこは普通に考えればいいんじゃないかしら。阿良々木くんが最初に考えた通りに」

と、羽川。

「つまり、お父さん人形が唯々恵ちゃん人形の背中を刺して、唯々恵ちゃん人形が、お父さん人形の顔を刺し返したって」

「……ぜんぜん普通じゃなくないか？」

考えた通りも何も、僕の考えとことごとく擦れ違っているようだが……、それじゃあ、スイスの再現にもなっていないのでは？

唯々恵ちゃん人形を刺したのが家住准教授ではないと考えたのは、あくまで『別居中の旦那』が実在すると思っていた頃の話だし、動き出した唯々恵ちゃん人形がお父さん人形を刺したのだと考えたことも確かにあったが、あの手紙を読んで、333号室が事件現場の再現だったと解釈するなら、顔を刺したのは家住准教授だと推測するべきだ。

お父さん人形が動き、唯々恵ちゃん人形を刺したというのは、まあ、こじつけられなくはない……、斧乃木ちゃんがお父さん人形をベッドごと破壊したのは、あの人形が動き出すことを警戒しての『念のため』だった。

あのとき、お父さん人形はとくに『動いた』あとだったと考えることに無理はない……、むしろ果物ナイフを顔面に刺されたことで、あのぬいぐるみは『動かなくなった』とも考えられる……。

しかし、更に考えを進めれば、家住准教授が再現のために（？）顔面を刺したとするなら、その時点で、唯々恵ちゃん人形は背中を刺されてなくてはならない。

時系列が狂う。

バルーンアートのようにねじれる。

僕は背中を刺された唯々恵ちゃん人形を見た——つまり、果物ナイフを見た。あの時点で、果物ナイフはベビールームにあったわけだ。

家住准教授がずっと大学校舎の屋上で、檻に閉じ込められたかのように身動きすることもなく、迂遠な自殺を遂げようとしていた以上、その果物ナイフを抜いて、隣の部屋のお父さん人形を刺すみたいなことは、できなかったはずである。

遠隔操作トリック？

布の怪異を利用すれば、できなくはないのか……、だが、僕のジャケットやスキー帽はむしろのこと、クローゼット内に吊してあった自身の衣服やカーペットはもちろん、唯々恵ちゃん人形でさえ、家住准教授のコントロール下にあったとは、とても思えない。

攻撃も極めて原始的だった。

確かに羽川の言う通り、唯一、高度な学習能力を見せた唯々恵ちゃん人形が、怪しいと言えば怪しいことにはなるが……、それじゃあ、正確な再現にはならなくなる。



正確に再現する必要なんてないと言われれば、言葉はないが……、そもそもお国柄が違う時点で、再現にはならないわけだし……。

「そう複雑に考えなくていいんだよ。ひとまず、再現があくまで正しいと仮定しよう。すると、何が正しくないことになる？」

「……そりゃあ」

この状況で正しい正しくないを論じることが既に正しくないと言うのは、さすがに揚げ足の取り過ぎか。

「手紙の内容のほうか、違ってるって言うのか？ でも、地の文で書いてあるんだぞ？」

「推理小説の読み巧者みたいなことを言わないで。ついでに、被害者の意見はすべて信用できるなんてことも」

それは口が裂けても言えない。

地の文も何も、元々、手紙の内容ははなはだ疑わしいのだ——事実無根ではないにしても、あれは天に昇るための文章なのだから。

元より霄シキリ壤シキリは逆転している。

虐待している唯々恵ちゃん人形を、本当に我が子だと思いついでいるわけじゃない、みたいなことも書いてあったけれど、本当の本当の本当に、家住准教授がそう思い込んでいなかったかどうかは、極めて疑わしい。

否認の病、でもあるまいが。

もつと言え、わかつてる日とわかっていない日があっただろう……、そりやそうだ、僕みたいな奴にだって、調子のいい日もあれば調子の悪い日もある。

手紙を草した日が、たまたま一年に一度の絶好調の日だったとしても、檻に閉じ込めたままぬいぐるみを放置したその三日前が、それと同じテンションだった保証なんてなからう。

「四カ国語の解読時に、文意に齟齬そごが生じることもあるだろうしね」

「それはない。命日子は決して誤訳しない」

「おお、すごい信頼じゃない。紹介してよ、その命日子さん」

「え？ ああ、うん、まあ、そのうち、機会があればね」

「ひたぎちゃんからだけじゃなく、私からも守るんだ、命日子さんを……、大学でできた新しい友だちを守り過ぎでしょ。過保護だよ」

だが、再現された事件現場が正しいのだとすれば、手紙の内容はどう修正されることになる？ 檻から出た唯々恵ちゃん人形が、お父さん人形を殺したとしか思えないあの333号室が正解なのだとすれば――

「小児科医の父親を殺したのは、背中を刺されることで檻から出た家住准教授、本人だって言うのか？ 正当防衛――」

否。

正しく――復讐か。

「――でも、ぬいぐるみがぬいぐるみをつていうならまだしも、責任能力もない三歳児が、大の大人を殺せるわけないだろ？」

「ぬいぐるみがぬいぐるみをでも無理でしょ。それに、責任能力もない三歳児じゃないでしょ」  
二十歳の大人よ。

と、羽川は言い切った――そうだった。

手紙の中では、二十年間赤ん坊のままだったような書きかたがされていたけれど、そんなわけがないんだ……。さながら纏足てんそくのように、狭い檻の中で育てられたからと言って、成長が完全に停止するわけがない。

生きている以上、成長はするのだ。

僕がそうであるように。

「でも……、羽川……、これだけは言わせてもらっけどな……」

喋りながら反論を考えるも、しかしどうしても、腑に落ちてしまう。

父親から教えられた言葉で、父親を籠絡もろうくし、五年に亘って『殺して』と願いつづけた一人娘――

その最終目的が、背中を刺されることではなかったとしたら？

背、中、を、刺、さ、れ、る、こ、と、は、途、中、経、過、で、

そうすることで、刃物を入手することこそが目的だったとしたら——こんなにじっくりくることはない。

もしも他に、これ以上のしつくりがあるとするとしたら、母親が逃亡したのは……、父親を殺した犯人だからではなく——娘の復讐から逃れるためだとしたらという仮説くらいのものだ。

娘に殺された父親を見て、逃げ出した……、二十年間つきつきりで続けた娘の育児を、ようやく放棄した。

「お母様の動向については、別の見方もあるね。逃げ続けているのは、娘が犯した罪を庇っため……、自分が殺人犯として逃亡を続けているうちは、娘に疑いは向かないわけだから」

「……まだ愛があるとでも？」

「愛はなくても子は育つよ。私みたいに」

いつそ開き直すようにそう言うてから、

「三歳だろうと二十歳だろうと、そのときの家住さんに、責任能力なんてないけどね」

羽川はそう続けた。

そりゃあ、たとえ正当防衛でなくとも、スイスの法律でも日本の法律でも、その件に関しては裁きようがない。

たとえば彼女が違法に国立大学に潜り込んだ二セ教師で、執行猶予なしで収監されるであろう重罪人でも、その件に関しては無罪だ。二十年間監禁されて、誰がまともでいられるものか——僕

なんて、半時間で音を上げた。

まして家住准教授は、その『まとも』を、生まれてこのかた、一度も与えられていないのだ……、嘘をついてでも、獲得し、習得するしかなかった。

まともをなくす喪失感なら、僕も幾度となく味わったけれど……、最初からまともがないっていうのは、どんな心境になる？

二十年間監禁されて――

「……で、最後にそこだよな。一番の謎は」

「一番訊きたいことを最後に持つてくるのは、阿良々木くんの高校生の頃からの癖だよな」

「ああ、臆病者だから。答を聞くのが恐いんだ」

「訊く前に、もう答がわかってるからなんじゃない？　でも、どうぞ。阿良々木くに質問されるの、好きだもん」

「阿良々木くん、好きだもん？　そこまで言われちゃあ仕方がない。最後の質問をするしかなかった」

「そのジョークは現在の距離感を越えてると思う。今のはひたぎちゃんにメールします」  
うーむ。距離感が難しい。

ひたぎとはどんな感じで話してるんだろうな、羽川さん。

では、軽快な掛け合いで、場も温まったところで……。

「根本的に、人間を赤ん坊の頃から二十年間、飲ませず食わせずで監禁することなんて——できるのか？」

児童虐待に詳しくない僕は、もちろん育児にも詳しくない……、イクメンなんておこがましい。けれど、どんなに無知でも、赤ん坊なんて生き物が、ほんの些細な手ばかりで……、手ばかりなんてなくても、すぐに死んでしまうほどか弱い存在であることくらいは知っている。

その状態を二十年間維持する？

父親が小児科医だったからというだけでは、さすがに説明がつかない……、と言うより、あえて父親の職業を記すことで、その疑問点を押し切ろうとしているような雰囲気も、あの手紙からは感じる。

心臓が痩せていたから大事な血管に刃物が刺さらなかったという説明も、なんだかコミック的と言うか……、そんなコンディションだったのなら、むしろ、かすり傷による出血程度でも死ぬのでは？

どこまで意図的に、どこから無意識に、家住准教授があの手紙を脚色しているのかは不鮮明だが……、父親が小児科医で母親が子供服のファッションデザイナーというのも、嘘かもしれないとさえ思う。その職業は、祖父母がバルーンアーティストトつてくらい、出来過ぎだ。

「そこまで疑い始めたなら、何も信用できなくなるけれど——でも、その点については、私も阿良々木くんと同じ考えだよ。斧乃木ちゃん風に言うなら、『初めてあなたと意見が合ったね』だ

ね」

斧乃木ちゃんの場合と違って、ひよっとすると、それは本当に初めてかもしれない……、距離感のミスでここまで食い違い続けているし、案外ここでも意見は合わないんじゃないかと身構えた僕だったけれど、

「うん。怪異化してると思う。家住さん本人が」

と、羽川が言ったので、ほっとした……、いいや、その内容自体は、とてもほっとできるようなものではない。

怪異化。

唯々恵ちゃん人形が怪異化したように。

お父さん人形や僕の防寒具、家住准教授の衣服やカーペットが怪異化したように——僕達がクマちゃん人形を、目玉つきで怪異化させたように。

家住准教授自身が、両親によって怪異化させられていたとするなら——二十歳まで赤ちゃんでい続けることはできる。

できるとも。

なにせ僕は六百歳の幼女を知っている。

二十一歳の少女だって、百年使われた童女だって知っている——だから、二十歳の赤ちゃんがいても、辻褄が合わないとは思わない。

彼女自身が怪異だったとするなら、そのテリトリーである333号室で、不可思議な怪異化が続発しないほうが不可思議だ——自己防衛本能に基づく免疫細胞のように、二名の不法侵入者に襲いかかって来なければ、むしろサボタージュしていると思うだろう。

それは当然のプロテクトだ。

のろまな僕が、それでも間に合ったこと——つまり、家住准教授が大学の屋上で一週間近く、飲まず食わずでいても死ななかったことにも、それで説明がつく。

彼女が半ば怪異なら。

そのやりかたでは、天には昇れない。

怪異には、天国も地獄もないのだ。

「両親に監禁され、檻の中で着せ替え人形扱いされ続けた——つてのは、十分過ぎるほど怪異化の要件を満たしている。どこまで嘘なのかわからないけれど——こればかりは絶対、本人に自覚はないんだろうな。檻の外へ出たあとは、能力を使う機会なんてなかっただろうし……、自由にスキルが使えるなら、重罪を犯す必要はなかったはずだ。その罪が露見しそうになったことで、防衛本能があつちこつちで暴走したって感じで……」

しかし……、僕や斧乃木ちゃんがたびたびおこなう不法侵入が最たる例だが、犯罪つてのは基本的に、正当な手続きをすつ飛ばして、ズルして楽をするためのものなんじゃないのか？ 本



来、当たり前に得られるべき、そう、人権とかを獲得するために、家住准教授の血の滲むような努力が、犯罪に注がれたのだと思うと、やるせない。

両親だけじゃない——世間も、法律も、倫理観も、決まりごと、みんなが彼女をないがしろにしたんだ。

よってたかつて、虐待した。

もちろん全員が悪いなんて分散は、連帯責任に見せかけた責任回避だ……、当然、力になつてくれる味方もいただろう。リハビリに関してはもちろんのこと、犯罪行為についても、親身になつてくれる誰かがいなければ成り立たない。だけど、こうして同情的なことを縷々述べている僕だつて、きつとどこかで、努力している誰かを虐待している。

無自覚に。

関わりかたが違えば、関わるタイミングが違えば、相手が目上の人物じゃなければ、友達と喧嘩をして機嫌が悪かったり、おなががすいて苛々いらがしていたりすれば——たとえ責任能力がなくとも親を手につけた罪は道義的に償うべきだとか、変な思い込みで国外にまで逃げるのはやり過ぎだとか、時間はかかるうともまっとうなやりかたで労働ビザを取得すればよかったんだとか、言っちゃうんだろう。

無自覚に。

「うん。無自覚。こればかりって言うか……、やっぱり全部、無自覚だよ。たとえば彼女が父親を殺した犯人で、母親が本当は殺人犯でないことがわかっていたとしても、彼女はそれを認めないと思う……。自我を保つために、自我を放棄する——屋上に投棄するように。自分への嘘がうまく過ぎて、完全に騙されているんだもの」

羽川が言うのと重みが違う。

羽川から羽衣への、羽のように重い言葉だ。

怪異化することで生き延びたとも言えるわけだが、しかし、生きた人間を怪異化させるその情念の、出所がご両親の愛情だったというのは、救えない。彼女を死なせかけた原因が、彼女を生かした——自殺もできないほどに。

それを言うなら、研究室で最初に話したとき、娘を虐待しているなんてにわかには信じられないほど、ちゃんとした、しっかりとした大人に見えたのは、その立場に後ろめたいところがあったから、いつそ過度なほどに、しっかりしている風に見せなければならなかったから——どこもかしこも、僕の嫌いな『不幸をバネに』か。

「布の怪異——反木綿いつたんもめんとか白うねりとか肉襦袢じくごばんみたいな妖怪かしら。ファブリックな概念を操作するパワーは、ファッションデザイナーの母親から継承した才能なのかもね。スコットランドでは、タータンチェックの柄が、イコールで家柄を表すなんて言うわよね。まあ私だって、自分

が障り猫になっていたとかは、夢にも、悪夢にも思わなかったわけだけれど、それでも本人がそれを認識していないのは厄介だよな」

「厄介じゃないよ。唯一の救いだろ」

檻から出て、やっと人間になれたと思っただろうに、そうじゃなかったと知れば——そのときこそ、家住准教授は生きることをやめるだろう。

それを止める自信は、僕にはない。

「一周回って本格的に、専門家の出番ってわけだよ……、臥煙さんなら、能力だけをうまく封印してくれるだろう」

まったく、最高だ。

あの人当たりのいいおねーさんと首尾良く縁が切れたと思ったのに、ただただ借りだけが増えていく……、借りを返す機会を失ったことで、とんでもない利息だけが積み重なり続けておるわ。

このままでは大学を卒業後、巨額の返済を迫られることになる。嵌められたことに今更気付いても後の祭りだ……、しかし、四年待てるってのは、やっぱり大人だよな。あんな格好をしているも。

しっかりとした大人、か。

「専門家と言えば、阿良々木くんが今回、最初から斧乃木ちゃんとのペアでことに臨んでいたことは、意外とベストマッチだったわけだね。ナイスバディ——『取り替えっ子』とか『動く人形』とかだったら、確かに斧乃木ちゃんの専門外だったんでしようけれど、不死身の怪異は、その子のストライクゾーンのだ真ん中なんでしょう？」

その着眼点は新しい。

家住准教授を不死身の怪異と表現するのはやや乱暴な気もするけれど、でも、二十年に亘って『成長することなく』『死ななかった』実績は、不老不死と言っても、確かにまるで、過言ではないのかもしれない。

だとしたらなおのこと、影縫さんに知られる前に、始末をつけないと——正義の暴力陰陽師は、父親殺しの罪でさえ、家住准教授を裁きかねない唯一の人だ。

いったい過去に何があれば、あそこまで不死身の怪異を嫌いになれるんだろう……、僕がそれを知る日は来るのかな。斧乃木ちゃんを作って受けた呪いに、関係しているのだっけ？

「ところで、阿良々木くん。うまく斧乃木ちゃんの話題になったところで、そろそろ教えてくれる？　さらつとあと回しにされたけど、斧乃木ちゃんに何かあったの？」

うまく斧乃木ちゃんの話題になったも何も、羽川が若干強引に、死体人形のルールにトロッコを乗せただけなのだが……、高校時代はいろいろあったけれど、なんだかんだで羽川と斧乃木ちゃんに、直接的な接点はないはずなのに。

会ったこともない童女の心配とは、人間のできた委員長だ。

それに比べて僕は出来損ないである。

段取りがあるからとは言ったが、実際のところ、ただ言いにくいから先送りにしただけである……。彼女が受けた処遇については、依頼人として責任を痛感しているから。

「目玉つきクマちゃん人形……。怪異を勝手に作ったかどで、斧乃木ちゃんってば、想像以上に怒られたっぽくってさ。本当にもう、無表情の斧乃木ちゃんがすり泣くんじゃないかってくらい怒られたそうだ。想像以上って言うか、僕には想像もつかないんだけど、臥煙さんがマジ切れしたって」

「あ、あの臥煙さんが!？」

斧乃木ちゃんとはなくとも、臥煙さんとは面識のある羽川は、面食らったように身を乗り出した――僕はようやく、羽川を驚かすことに成功したわけである。

サプライズ。

できれば僕の成長ぶりで、驚かせたかったものだけれど――まあ、気持ちわかる。

僕もあのおねーさんに、怒られたり叱られたりしたことはあるけれど、キレさせたことはない。

「臥煙さん似的熟女が掲載された参考書を見られたときでも、僕を怒鳴りつけなかったのに」

「その事実を知った私が阿良々木くんを怒鳴りつけそうだけれど、今の私にその権限はないから、座して続きを聞こうかしら。斧乃木ちゃん、どうなったの？ まさか……、処分されたとか？」

半笑いで、冗談めかして言う羽川だったが、正直、そうされていてもおかしくなかったのだらう——と言うより、その『処分』を避けるために、臥煙さんはらしくもなく、かんかんに激怒して見せたのだとも読み解ける。

もしも先に影縫さんがその事実をつかんでいれば、『所有者』として、彼女は自分の式神を処分しなければならなかったかもしれないのだ……、いみじくも斧乃木ちゃんが言っていた通り、殺処分まで含めての責任を、影縫さんは負っている。

大袈裟なパフォーマンスとしてブチキレたのだとすれば、それは臥煙さんの『らしい』優しさだとも言えるが……、優しさも怒りも、コミュニケーションの道具とするあの人のスタイルは、やっぱり僕とは相容れないものがある。

とは言え臥煙さんは斧乃木ちゃんのみならず、そんな僕のことまで擁護してくれたのだろうか、今回はそのやり口に賛同せざるを得ない……、かてて加えて、家住准教授の無害化の手配まで、頼まねばならないとなれば。

百億円くらいかな？

僕が臥煙さんに負ってる借金総額。

まるで返済を終えた羽川から、借金王のバトンを受け取ったかのようだ……、なすすべもないリレーである。

「……じゃあ、斧乃木ちゃんは、こっぴどく説教されて、それで無罪放免のお咎めなし？」

「まさか。当然、目に見える処罰は必要ってことで、しばらくの間、問題の片目を取り上げられることになった」

まさか本当に眼帯キャラになっちゃうとは……、目に見え過ぎだぜ、臥煙さん。

そして、それだけではない。

ほとぼりが冷めればいずれ返してもらえるであろう片目の没収よりも、僕にしてみれば、そちらのほうが大きな『処分』だ。

「阿良々木家からの撤退命令が出た」

「ん。んん。んんん？」

「僕と忍への接近禁止命令……、現在与えられていた任務からすみやかに降りろって処分さ。つまり、長きに亘る死体人形の居候生活も、これでおしまいってわけだ」

寂しくなる、と言わなきゃ嘘になる。

けれど、元々予定外の長期滞在だったのだ……、今年の二月からだったから、約半年か？

そこがまた臥煙さんの巧みなところで、罰することで、斧乃木ちゃんを現任務から解放したのだろう……。ペナルティボックス送りではなく、おそらく彼女は次の仕事に向かうに違いない。

あれだけ有能な式神を、いつまでも僕のところなんぞに派遣していられまい。

なんの問題もない、僕のところなんぞに。

「ふうん……、処分されたんじゃないかってほっとしたけれど、接近禁止命令ってことは、もしかしたら臥煙さん、周囲から影響を受けやすい怪異である斧乃木ちゃんを阿良々木家に配置し続ける危険性を、今回のことだと思い知ったのかしら」

「そんなことは最初から知ってるさ。なんでも知ってるおねーさんなんだから……、僕の家を危険地帯みたいに言われても」

「危険地帯でしょ、阿良々木くんの家は。地雷だらけで、地雷委員長としては本来、放っておけないよ」

地雷委員長って呼ばれてるの？

僕としては、ようやく僕と忍の執行猶予期間が終わったのかなと、いい風に解釈してもいたけれど……、司令塔の智謀策謀は不明である。

きつと真意は、三つも四つも……、百や二百も、あるのだろう。

「そんなわけで、斧乃木ちゃんとはハグしてさよならさ」

「ハグはしてないでしょ」

してない。



さよならもしていない……、別れの台詞が苦手な忍野メメの性格を受け継いでいるわけではないのだろうが、今言ったような事情を説明したあと、長談義の小休止に、ちよいと近所へアイスクリームを買いに行くくらいのノリで、死体人形は退去した。別に『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』で、派手に出て行ってほしかったわけじゃないけれど——まあ、そもそも、派手にでも地味にでも、斧乃木ちゃんに出て行ってほしかったわけじゃないしな。

なのでいいでしょう。

別に今生の別れじゃない。

どうせ僕への監視が完全に解かれるはずもないのだし、斧乃木ちゃんとは、お互い不死身みたいなもんだ。

百年後に、どこかでばったり会うこともあるさ。

「とは言え、任務を解かれた斧乃木ちゃんは、今後、片目を失った上で、阿良々木家以上に過酷な任務を課されることになるんだろうし……、まったく、ここまで誰も幸せにならない結末も珍しいぜ」

「残念。謎解きはさほど気晴らしにならなかったみたいね。私は落ち込んだ阿良々木くんを見るために、帰国したわけじゃないんだけどね」

じゃあ私が幸せにしてあげようか？

と、悪戯っぽく微笑する羽川。

猫のように。

「……悪質なジョークだな。お前のほうから距離感を誤ることなんてあるのかよ？ 片目を没収された斧乃木ちゃんに感化されたにせよ、僕が地雷なら、今のでどかなだぜ。なんなら、僕がひたぎにメールしようか？」

「ジョークだなんてシロツクだなあ。何を隠そう、私は阿良々木くんを助ける専門家だよ？」

「僕を助ける専門家って……、とんだ専門職もあつたもんだ。お前は僕の子守かよ。そこまで言うなら、ようし、ご厚意に甘えて、助けてもらおうじゃないか」

「考えてみて？ 阿良々木くんを檻に閉じ込めて、飛び出していった空飛ぶ毛布が、その後、どこへ行ってしまったのか」

「さあ……、怪異化していたのが家住准教授で、ぬいぐるみはあくまで眷族だったなら、いずれタイムアップでただの毛布に戻るはずだけど——現実を再現するんだとすれば、逆に、今頃はスィスなんじゃないのか？ 母親から逃げるように日本に來た母親のように、母親から逃げて」

「それか、警察病院に入院する家住さんの下に辿り着き、死んだように眠る彼女の——」

「首を絞める？」

「——胸元に、毛布がかけられているとか。まるで赤ちゃんが、お母さんに寄り添うように」

「……羽川、それは」

今日出てきた中で、もつとも是とできない仮説だった——仮説と呼ぶのも、思いつきと呼ぶのとさえ、是とできない。

嫌悪感すら生じる。

そんな強引に作り上げたような、取ってつけた『めでたしめでたし』に、どこの誰が共感できるというのだ？ 『子供を愛さない親なんていない』が愛のない言葉なら、『子供にとっては親がすべて』も、愛のない言葉である。たとえ、母親に追い縋るのが、赤子の本能だとしても——まだしも、真綿で首を絞めるように、毛布が首を絞めるほうが、教科書に載せたいくらい、ずっと健全な幕引きだ。

「ありえない。ベッドサイドストーリーにはほど遠い僕達が、かつて一度でも、そうも有意義なハッピーエンドを目にしたことがあったかよ？」

「だからこそ、そろそろそういうことがあってもいいじゃない。シミュレーションでは理想を追わなきゃ、現実が酷くなる一方だよ？」

それはそうだ。

シミュレーションに自らの知る現実を徹底した家住准教授は、それゆえに、夫婦生活にも子育てにも失敗したのだから。現実から学ぶ限り、現実しか生まれない……、際限なき再現の繰り返しだ。

なくても、持ちたくなくても、持たなくてはならないのが理想である。

たとえ最善を目指して最低になるのが世の常だとしても——最善を目指さない限りは、次善にすらならない。

「しかし、だからと言って、あまりにも——」

「いやいや、私は本気で言っているんだよ。そういう世界に貢献しているんだって思いたいの。虐待が虐待を生む負の連鎖を、唯々恵ちゃん人形には止めてほしい。受け容れられない現実には、はつきり嫌だって言ってほしい。家住さんが願った通りに」

翼と名付けられた私には、それはできなかったことだから——そう言って羽川は、高校時代、僕の家庭教師を務めていた頃の使命感を今になって、

「じゃあ、ここで選択問題です。阿良々木くんが正解だって思うほうを選んでね」と、思い出したかのように出題した。

あるいは放課後の教室の、大真面目な委員長のように。

「チョイスA。ひたぎちゃんの不在時に、私とこっそり、後腐れのないデートをする。チョイスB。これから一緒に家住准教授のお見舞いにいって、毛布の有無を確認する。どっちが正しい？」

「……何かと思えば、難易度はCだな」  
助かったよ。

そんな二択は、さすがの僕でも間違えようがない。

第五話

よつぎシャドウ



斧乃木余接との付き合いはまだまだ始まったばかりなのですが、それでも彼女のことは、だいぶんわかつてきました。

見た目は十二歳の童女。

その実体は百年使われた死体の付喪神。

無表情で棒読み、しかし雄弁。

アイスクリームなどの冷菓がお好き。

ドライアイスも好んで食べそう。

不死身のゾンビにして、不死身の怪異の専門家。

性格は気まぐれ、皮肉屋、上から目線。

必殺技は『例外のほうが多い規則』アンリミテッド・ルールブック。

式神として仕える主人は陰陽師の影縫余弦さん。

もしくはその先輩にあたる臥煙伊豆湖さん。

いきなり窓から不法侵入してきたときはそりゃあ面食らいましたけれど、こわごわ接してみると、下馬評ほど意味不明な子でもないというのが、今のところの私の感想です——『わけがわか

らない』ことが彼女のアイデンティティであるなら、あえてそれを崩そうとは思いませんけれど、もしもそうなるのであれば、彼女が私にとってそうであるように、私が彼女の理解者になりたいな、なんて、最近は思ったりもします。

そんなことを言う<sup>ひょうへん</sup>と豹変して、わかったつもりにならないでと、アイスのように、あるいは死体のように、冷たく突き放されるかもしれませんが、なんてことはありません、蛇って生き物は執念深いんですよ。

呪いのようにね。

阿良々木家を出ることになった彼女は、必然的に私の部屋で過ごす時間が多くなりましたけれど、はてさて、これからいったいどうなりますことやら、乞うご期待。



察するに世間は夏休みと称される期間へと移行したようですが、元より不登校で、長らく引きこもり生活を送っている私にはまるでかわりのないことです。偉いもので、中学校に通うというのがどういう感覚なのか、もうすっかり忘れてしまいました——これでは将来、学園モノのラブコメ漫画は描けませんね。

困った困った。

しかしそれは漫画家になるという夢が叶ったと仮定した将来の展望であって、今の困りごとは、スランプという贅沢なゴールに到達するための道路工事です。

せつせつせつ。

端的に言うと、（書類上の）中学校卒業と同時に生まれ育ったマイホームを追い出される事が確定している私がリアルタイムに直面している『現実』は、あろうことか住まい探しなのでした。

高校に進学しないのであれば卒業後は働きに出て、自分の食い扶持<sup>ぶち</sup>くらいは自分で稼ぎなさいと、ご両親から宣告を受けた私は、どうにかこうにかその当たりをつけたのですが（『撫物語』）、私が私なりのマネープランを確立したことに勘づいたらしいご両親は、卒業後は当然独

り暮らしを始めるべきだと、今まで一度も聞いてなかった、新しいクリア条件を出現させました。

連帯保証人も自分で見つけなさいというオマケつきですーいえ、それはもう、十五歳の娘に付していい条件じゃありませんよね？

手のひらを返し過ぎです。

確かに私は漫画家志望の引きこもりでまあまあの穀潰しこくつぶですけど、四十歳を過ぎてても働くことなく、実家で日がなごろごろしているわけじゃないんですよ？

懲戒権の発動のさせかたがおかしいでしょう。

と言うか、卒業後は働けはまだしも、十五歳の子供に対して『卒業後は出ていけ』は、民法ならぬ刑法でも、たぶん違法だと思います。

「だからさ、無理難題を言ってお前が泣きついてくるのを待ってるんだと思うよ。待ちに待っているんだと思うよ。お前のご両親は」

斧乃木ちゃんの分析はこうです。

なぜか最近、マキシ丈ワンプの眼帯キャラになった彼女の言うことに間違いはありません。

「こうなると出される条件をクリアしても、次々ケチをつけられ続けるだけって気がするよね。

お前が音を上げて、すぐさご中学校に登校するようになって、高校への進学を決意するのを、手ぐすねひいて待ってるんじゃないのかな」

「きつついね……、甘やかしの反動がすごいや」

合法違法はともかくとして、しかしまあ、今までスポイルしていた分を取り戻そうとしている努力に関しては、一人娘として、認めてあげないわけにはいかないでしょう……、たとえば私が親でも、自分の子供が学歴を捨てて画業に邁進まいしんしたいと夢見がちなことを言い出したら、あの手この手を繰り出さないとは言えません。

「そうやって半端に理解を示すところが、撫公のご両親をつけあがらせるんだと思うけどな。ぶちめせよ」

「家庭内暴力！ 末期だよ」

「お前は阿良々木月火の自分勝手さを、そういう意味では見習うべきだ」

かく言う斧乃木ちゃんも、わけあって先日、阿良々木家を追い出されたりらしいです——そのまま直で私の家に来ました。

嬉しいですけど、懷かれ過ぎですよね、私。

「月火ちゃんは例外だよ。あの子、小学生のとき、『はい、ふたり組作ってー』っていう、例の恐怖のクリア条件を先生から出されたとき、『ひとりのほうがうまくできます』って反論したことがあるんだよ」

「闇工ピソードに事欠かないな、あの不死鳥」

ちなみに斧乃木ちゃんは、名目上、デッサンのモデルとして（今のところは）我が家を訪れていますので、現在も絶賛ポーシング中です……、名画シリーズということで、『グランド・オダリスク』のポーズです。

背中が大きく開いたワンピースから覗く、せきつい脊椎のねじれかたが、もうそのもの！

「で、どうするの？ 白旗を上げるの？ 僕はお前に『仕事』を仲介してあげることとはできるけれど、確かにお金だけじゃあ、どうにもならない問題はあるよね」

「まさか。諦めないよ。漫画家志望のシェアハウスみたいなのも、あるみたいだし」

「人見知りの引きこもりが、どうやってシェアハウスに住むんだよ」

「夜な夜な漫画喫茶を渡り歩くという手もある」

「補導されるで済んだらまだいいほうだよ。忘れるな。お前の可愛さは犯罪を誘発するんだ」

可愛いと言われるのは、昔は……、今でも好きじゃありませんけれど、斧乃木ちゃんに言われるのは、不思議と嫌じゃありませんね……、たぶん、無表情で棒読みだからでしょう。

あとは、それでも本気で心配してくれているらしいことが伝わってくるからでしょうか……、被害者に犯罪の原因があるみたいないかたは基本的には心無いわけですが、明白な危険に自ら踏み出す必要は、確かにありませんね。

囃捜査になってしまいます。

「最悪の場合に備えた考えもあるよ……、もしも卒業までに、行く当てを見つけられなかったそのときは」

「そのときは？」

「月火ちゃんに泣きついて、阿良々木家に居候する。聞いたところによると、育のお姉ちゃんが、昔、そうしてたんだって」

「最悪過ぎる。阿良々木家をシエルターにするなんて、明白な危険どころか暗黒の危険だ」

斧乃木ちゃんが立ち上がりました。ポーシングをやめて、テーブルの上に仁王立ちです……、マキシ丈ワンプの仁王立ち、格好いいですね。

これも絵に残したいです。

「阿良々木月火に借りを作るなんて、破滅願望があると思えない。大体、鬼のお兄ちゃんの顔なんて、撫公はもう見たくもないはずだろ」

親より私の心配してくれてますよ。

いい子ですね。

ねじくれてはいますけれど。

「あー、うん。でもまあ、もういいって言うか、そんなこだわらなくても大丈夫かなって。なんとかなるでしょ。会っちゃったら会っちゃったで、適当にやり過ぎせば」

「淡泊だな。女の子だね」

その見え見えの見栄の張りかたは好感が持てるよーと、斧乃木ちゃん。

「ただし、阿良々木家を出たとは言え、僕は一応、鬼のお兄ちゃんとも友達なのでね。僕と入れ違いでお前が居候になると、あの児童虐待の専門家が居心地の悪い思いを思うと思うと、胸がすく……、もとい、胸が痛い」

「児童虐待の専門家？」

最近はその風に言われてるんですか。  
相変わらずご活躍なようで。

「オーケー。ご両親の厄介な思惑は、とりあえず先送りするとして、住まいの問題については、僕がなんとかしてあげよう。条件クリアで時間を稼いでいるうちに、親子対決の対策もなにがしか思いつくだろう」

「本当に斧乃木ちゃんって、私への尽力を惜しまないね……」  
尽くしてくれます、なぜか。

「勘違いしないでよね。お前のためなんかじゃない。もしもお前がマジで阿良々木家に移住したら、かの家に接近禁止命令が出ている僕が、もうお前と遊べなくなっちゃうから、尽くしてやるだけなんだからね」

「ツンデレのツンもデレてる」  
ただのデレデレです。

「もちろん、樂をさせるつもりはない。僕はお前の親と同じミスはしない。撫公にひと働きしてもらうよ——お金も家も得られれば、一石二鳥みたいなものだ」

「漫画の取材にもなるかな？」

「それはお前次第。お出かけの準備をしな、引きこもり」

「やあ、初めまして、千石撫子さん。私は臥煙伊豆湖、専門家の元締め、なんでも知ってるおねーさんだ。せんちゃんって呼んでいいかな？」

お出かけの準備と言われても、私は引きこもり生活を始めて以来、ほとんど常にジャージで生活しておりますので、特に身なりを整える必要もなく、そのまま出掛けられます。

私を縛るドレスコードは存在しないのです。

加えて、私は外出が苦手なタイプの引きこもりではないので、お出かけ自体に特に抵抗はありません……。なので、斧乃木ちゃんが私をどこに連れて行くつもりなのだろうと、ちよつとだけわくわくしていたのですが、心の準備なしで臥煙さんに会わされました。

あの臥煙さんですよ。

前回、満を持していいいよご対面かと身構えていたところをス力されましたので、もうしばらくは会う機会はないのだろうと油断していたところに、この急展開です。

斧乃木ちゃんは私を驚かせることに余念がありませんね——ちなみに、連れてこられたのは首都でした。



首都と言っても東京ではありません。県庁所在地を私がそう呼んでいるだけです。小学生の頃、ニユースや新聞を読んで、都会のことを首都と呼ぶんだと勘違いしていた名残ですね―外国という国があると思ひ込んでいたのと同じです。

移動手段は『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』。

斧乃木ちゃんの腰にしがみついたの高度高速移動です。

「鬼のお兄ちゃんと違ってガッツあるよね、お前。あのロリコン、移動直後はへたり込んで使い物にならなかったぜ」

私に優しい分、あちらに厳しいですね。

一応、いつとき神様だったこともある私ですし、最近はあるこれ鍛えられているので、斧乃木ちゃんの移動にしがみつくくらいのことはできるようになりました。

交通費が浮いて大助かりです。

しかし、移動先にいきなり臥煙さんが単身、待ち構えていたところを見ると、この『面接』は、斧乃木ちゃんがあの場で、独断で思いついたわけではなく、どうやら下準備はとつくに整っていたようですね―なぜ待ち合わせ場所が現代アート美術館の前なのかは不明ですが。

さておき、臥煙伊豆湖さん。

なんでも知ってるおねーさん。

忍野さんの先輩で、貝木さんの先輩で、影縫さんの先輩——のはずなのですが、はっきり言うと、あの三人より年下なくらいに見えますね。長身の三人に比べて小柄で、その上でオーバーサイズのファッションのせいでしょうか？

実際以上に自分を小さく見せようとしているくらいがあります。

忍野さんは確か三十路を越えていたはずですけど、しかしその先輩であり上長であるこの臥煙さんは、二十代、それも二十代前半で通りそうに見えますね。

生来のベビーフェイスなのかもしれませんが、一方で、ひよつとするとその『若さ』は、以前斧乃木ちゃんが言っていた、『知恵の呪い』と関係があるのかもしれないと思いました——まあ、不躰な分析はこの辺で。

この席で値踏みされるのは、まず私のほうですしね。

ただし、

「せんちゃんはやめてください……、昔のニックネームなので、それ」とだけは、私は言いました。

「あはは、昔を思い出すかい？ 暦お兄ちゃんに首つ丈だった昔を」にこやかにえぐつてきましたね。

ちよつと月火ちゃんっぽいですが——ただ、月火ちゃんと違うのは、この人はたぶん、わかってやっています。

確信犯なのでしょう、二重の意味で。

……個人的にはわからずにやっている月火ちゃんのほうが悪質だと思います。

「ではなでつこと呼ぼう」

二回目は選択の余地がもらえなかったところを見ると、一回目のは振りで、最初からそう呼称しようと、臥煙さんは決めていたようです——会話に組み立てがありますね。

なでつこと？

「私のことは臥煙さんと。呼んでみて？ どうぞ？ 恥ずかしがらずに」

「が——臥煙さん」

「よし、これで私達は友達だ。過去のわだかまりは捨てて、仲良くやろうじゃないか」  
友達承認が一瞬でした。

過去のわだかまりは捨てて……、ここでは語り尽くせないほどのわだかまりが、私とこのかたの間にはあるはずなんですけれど。

私の引きこもりは私が好きでやっていることなので、あえて他人様のせいにするつもりはありませんけれど、しかしその原因の大半、とは言わないまでも、二割はこの元締めさんだと思うんです……。

いや、まあ、お互いさまですか。

斧乃木ちゃんによれば、私も臥煙さんの計画を台無しにしたわけですし、私のせいで臥煙さんは後輩と絶縁するはめになったそうです。

それをあっさり水に流してくれるというのですから、清々しいです——何か企んでいるとしか思えないほどに。

「早速だけど助けてもらえるかな、マイベストフレンド。きみの能力の高さは影縫の折紙つきだし、人となりは余接が保証している——今更試そうとは思わない。輝いてくれ」

やり手のアイドルプロデューサーみたいな振りですね……、影縫さんとはかく、斧乃木ちゃんは、私の何を保証してくれているのでしょうか。

あの子、さつきから姿を消しているんですが。

「あはは、ちよつとこないだ叱り過ぎてね。私への接近禁止命令は出していないのに、近付いてこなくなっちゃった。嫌われるのは好きじゃないんだけどねえ。しかし元々、そんな人なつっこい式神じゃあないのに、それをあも手懐けたなでっこは、それだけでも大したものだよ。是非、その才腕を貸していただきたい。もちろんお礼はするよ、ギブアンドテイクだ」

「お、お礼って——」

うまく喋れてますかね、私。

ただでさえ会話が苦手なのに、長らく引きこもっていますから、『初対面の相手と会話すること自体が新鮮です……、前髪で視線を隠していた頃と違って、まっすぐにこちらを見てくる臥

煙さんから、逃れる方法ありませんし。

「住む場所に困ってるんだろ？ 手配するよ。職業柄、不動産業界の友人が多くてね——力になれると思う」

職業柄、というのが気になりました。

臥煙さんの職業と言えば、当然、専門家ですよ——妖怪変化のオーソリティ。

「私の友人はこの県内に二十棟以上の集合住宅を所有していて、何を隠そう、この建物も、彼が経営しているマンションだから余接に、きみをここに連れてきてもらったってわけさ」

にこやかにそう言って臥煙さんは、現代アート美術館を指さしました——え？ マンション？ 現代アート美術館じゃなくて？

思わず二度見してしまいます。

これが首都感覚……！

「ま、まさか、ここを紹介してくれるって言うんですか？」

「いやいや、そうじゃない。このマンション、見てくれは変わっちゃあいるが、中身は大層立派な住まいで、なでっこの今の稼ぎじゃ、まだ住んでいい家賃じゃないよ」

ほっとしました。

家賃云々もありますけれど、建築基準法を守っているとは思えないこの建物に、住みたいという気持ちは今のところゼロです。たとえ将来的に、百万部作家になったとしても。

「で、この非常識なマンションに関して、友人は現在、ちよつとした悩みを抱えていてね——」  
熱中症には気をつけてね、と臥煙さんは斜めにかぶっていた野球帽を脱いで、そのまま私のベ  
リーショートにかぶせました。

人たらしですね。

「……それをぱつと解消してやってくれ。そうすれば、友人が所有している中でも比較的常識  
的なアパートを、格安で斡旋<sup>あっせん</sup>してあげるって手筈<sup>てはず</sup>なのさ」

試すつもりはないみたいなことを言っていましたけれど、思いっきりテストだと思えます、これ——引きこもりなのになぜこうも立て続けに、千石撫子は条件や試験を、各方面から課せられ続けるのでしょうか。

問題の一室は、住人が引越していった直後という感じでした——なるほど、中に這入ってみると臥煙さんの仰っていた通り、内装はまともなマンションです。

現代アートならぬ、デザイナーズマンションと言ったところでしょうか……。中でもこの部屋はラグジュアリーな一室らしいのですが、ただ、入室前に臥煙さんから伺った事情を加味して噛み締めると、空っぽの部屋からは別の味わいが生じます。

なんでもこの一室。

住人が三人連続で首を吊っているそうです。

……なるほど、取材になるかどうかは、確かに私次第ですね。ここで私が怖がって逃げ出してしまえば取材にはなりませんし、一石二鳥にもならないのでしょうか。

一石を投じておしまいです——改めて覚悟しなくてはなりません。

生活の糧を得るために私が選んだセカンドワークの現場は、怪談の世界です——そりゃあ、恐い現場に遭遇しますとも。

試用期間だけあって加減されているほうです、首を吊ったと言っても、今のところまだ、死人は出ていませんから。

とことん気遣いの人なのですね、臥煙さんは——と、そう思いつつ、私は高い天井を見上げます。そこにはシャンデリアがぶら下がっていて、そのシャンデリアに更に三人、ぶら下がったそうです。

幸いどのかたも、家族、もしくは同居人に発見され、ことなきを得たらしいのですが……、三人連続、というところが味噌です。

最初に住んでいたA家のアルファさんが首を吊って、次に入居したB家のブラボーさんが首を吊って、その次に入居したC家のチャーリーさんが首を吊った——という流れで、今はこの部屋、空き部屋だそうです。

どの世帯も、一家のひとりが首を吊った直後に、引っ越しています——まるで何かから遠くに逃げるように。

ふむ。

誰かが首を吊るということは、あるでしょう。



たとえ自殺の名所でなくとも、偶然、他の誰かがそれに続くことも……、でも、三人連続となると、奇妙ですよ。

奇妙であり、奇怪です。

それに、今のところ死人は出ていませんが、『次』もそうとは限りません……、実際、三人目なんてかなり危ないところだったそうなので。一時は心肺停止状態にまでなったらしく……。

「あわや事故物件になるところだったわけだ。で、入居する人間が次々自殺未遂を果たす部屋に困り果てたオーナーは、専門家に相談を持ちかけたというわけさ」

自殺未遂を果たすというのも、変な言いかたですけど……、入居者が次々首吊りを図るなんて、確かに怪異現象です。

呪いの部屋ですね。

手に余ると言いますか……、まだ専門家の世界に片足を踏み入れたばかりの私には、かように人命のかかった仕事を手がけるのは早過ぎると思いましたし、実際、臥煙さんにはそう言いました。私は自分の夢のために、周囲を不当に傷つけたり、危険に晒すつもりはないのだと。

「お利口さんだねえ、なでっこは。反省の色が見えるのはいいことだよ——でも、私も友達に無茶を押しつけないわけじゃない」

あなたはこの私に神様の座を押しつけましたけれど……、いえいえ、言いますまい。あれは決して、臥煙さんの理想図ではなかったのですから。

臥煙さんは言います。

「この事件がなでつこに相応ふさわしいと思うからこそ、私はお願いするんだよ。未成年で初心者のきみを見込んでね——不適切な依頼には、適切な理由があるんだ」

察しの悪い私は、そう言われてもきよんとするばかりでしたが、具体的にその理由を聞いて、「確かに」と得心しました。

既に述べたように、アルファさん、ブラボーさん、チャーリーさんの三人は、シャンデリアから首を吊られたわけですが……、住んだ部屋が同じというだけで、無関係のこの三名には、しかし共通点がありました。

ロープなり、タオルなり、電気コードなりで首を吊った結果、からがら命は助かろうとも、当然、首回りにくつきり、その痕跡が刻まれることになるわけですけど——その痕跡は。

鱗うろこのような痣しずだったそうです。

まるで、蛇に巻き憑よかれたような。

「蛇切縄——お前にとつちや、懐かしくも忌々しい記憶だね、撫公」

臥煙さんが、言うだけ言って、問題の部屋から帰ってしまったので、どこぞに隠れていた斧乃木ちゃんが、ひよっこり姿を現しました。

疾風野をゆくがごときフットワークの軽さですね……、その軽さを苦手な上司を避けるために、悪用している節があります。

ただし、言っていることはその通りです。

蛇切縄。

懐かしくも忌々しい。

かつて私の身体に巻き憑いた怪異——私の場合は首回りだけではなく、全身をぐるぐるにされましたね。

見えない蛇に雁字搦めがんにじがらにされて。

全身が鱗の痣だらけになりました。

「そうだったね。思い出すよ、ブルマに手ブラのお前の姿を」

「斧乃木ちゃん、その頃まだいなかったでしょ」

言いながら、私は問題の部屋の一角に腰掛けて、スケッチブックと鉛筆を取り出します―何をするのかと言うと、シャンドリアのあるこの部屋全体をスケッチするのです。

煽りの構図ですね。

「それにしても隔世の感だよね。もうブルマって言っても、ぜんぜん通じなくなった。今や漫画でもすっかり見なくなったよ」

「保護活動を早期に始めていた神原さんは、正しかったわけだね」

そういうお馬鹿な思い出は、まあ微笑ましく想起できますが、蛇切縄に関しては、そんなわけにはいきませんね。

それこそ、死んでいてもおかしくありませんでした。

思えばあそこで、私の人生はぐりと引つ繰り返ったわけですし……、いろいろ経緯がありますし、私を呪った当時の『友達』を、殊更責めるつもりはないのですけれど……、笑って話すのは、まだ無理ですね。

すらすらと。

「へー、お前、人物だけじゃなく、ちゃんと背景も描けるんだね、フリーハンドで。立派立派」  
斧乃木ちゃんが私のスケッチブックを覗き込んできます―元々、絵を描いているところを見られるのは苦手だったのですが、デリカシーゼ口の月火ちゃんに手伝ってもらっているうちに、慣れました。

この場合、部屋を主役として描いていますので、背景というのは正確ではないのですが、まあ、漫画的には背景ですかね。

「とりあえず、呪いの部屋を図面化してみようと思って……、もしも蛇がいるなら、絵にすることで、見えてくるものもあるのかなって」

問題を解決してあげてほしいと言われても、漠然として、どう手をつけたらいいのかわかりませんでしたので、ひとまず、持ち味を活かすことにしました……、学校に行くことをやめた私に、もしも一芸秀でているところがあるとすれば、画力くらいしかありませんので。

「呪いの部屋か。つい最近、体験したよ。鬼のお兄ちゃんと。僕は余裕で乗り切ったけれど、あのロリコンは死にかけた」

「あの、斧乃木ちゃん？ あえて私の前で、あの人の悪口を言わなくてもいいんだよ？ あちらとの友情も、どうか大切にしてい」

「『あの人』だなんて、やっぱりまだ引きずってない？」

「言葉のあらです」

「だったらあら探しもされちゃうよ」

正しくは綾ですね。

それはさておき。

「参考までに聞かせて。斧乃木ちゃんが体験した呪いの部屋って、どんな感じで、どう乗り切ったの？ 斧乃木余裕で」

「そこら中の布類が襲いかかってくるという部屋だった。どうと言われると……、そこら中を破壊することとしか言えないな。『アンリミテッド・ルールブック例外のほうが多い規則』も一回使って、天井を貫いた」

「参考にならないね……」

真似できません。

私の身体は肥大化しません。

「そうでもないでしょ。成長期だし。僕がこの片目で見たところ、お前のバストは日に日に肥大化している」

「片目でどこを見ているの。背も伸びたよ」

「よかったね、鬼のお兄ちゃんのストライクゾーンからぐんぐん外れていって。しかし、お前を呪ったお友達の気持ちもわかるよ。甘いものをたらふく食べて、ろくに運動もしていないのに、ぜんぜんおなか**は**肥大化しないんだね」

どう致しまして。

そういう体質みたいですね。

神原さんなんてもつと極端で、意識的に食べないとがんが**ん**痩せていくタイプだそうですが。

「神原駿河の運動量は半端じゃないでしょ。だからと言って、お前は逆に、痩せさらばえてもいけないし……、残酷だな。その特典を、お前がまったく必要としていないとは。人生はお金じゃないんだよって心から信じているお金持ちを見ている気分だ」

そのお金持ちは、じゃあお金をくださいって言われても、くれないんでしょうね。お金じゃないって信じているから、別にいらないでしょって。

「どうなんだろうね。アスリート向けの体型とか、体質とかってあるとは思うけれど、その特典があつたがために、漫画家になれなくなったメダリストもいるんだと思うと、考えちゃうな」

ちなみに私は運動が苦手です。

絵なら何時間でも描いていられますが。

「いずれにしても、あの頃と変わらず、今の私に自衛能力はほとんどないんだけど……、この瞬間に蛇切縄に襲われたら、斧乃木ちゃんが守ってくれるの？」

「そのために僕はここにいる」

男前な答ですね。

惚れちゃいそうです。

「お前をシャンデリアにぶら下がらせたりはしない。たとえここが蛇の巣だとしてもね」  
心強いです。

蛇神様だった頃なら、蛇切縄なんて怪異は、むしろ眷族みたいなものだったと思うんですけれど……、またあの苦悶を味わうのは、いくら仕事でも勘弁です。

まだ私にプロ意識は育っていません。

被害者意識がなくなった程度です。

前もって聞かされていれば、あのとき、儀式で使ったお守りをあらかじめ準備しておいたんですけれどね……。忍野さんに返しそびれたままなので、まだ家にあるでしょう。家のどこかにクローゼットの中ですかね。お守りには有効期限があるそうなので、まだ効果があるかどうかは不明ですが……。

「儀式を再現してみると言うのなら、お前もそんなダサイジャージを着ていないで、スクール水着にドレスチェンジしたほうがいいんじゃないの？」

「あれは神原さんに騙されたんだってことがわかるくらいには、私も大人になってるよ？ いいじゃない、ダサイジャージで。どちらにしろ、体育の時間で」

「座して動かず、よく言うよ」

手は動かしてますよー。

とりあえずは部屋の全貌をつかむための早描きなので、もうすぐ一段落です……。ロフト付きのだった広い、空っぽのお部屋。家具がないので絵にはしやすいです……。デッサンとしてはいささか物足りません。



カーテンでもあれば、技巧の見せどころだったのですけれど、それありません……。せめて窓ガラスの透明感を出すために、なけなしの腕を振るいましょう。

他にも部屋はありますが、三人はいずれもこのシャンデリアルームで首を吊ったそうなので、まずはここを精査するのが手順でしょう。

「首吊りがこの部屋に集中しているのは、他の部屋じゃ、首を吊るだけの天井の高さがないってこともかもしれないね」

「……」応訊しておくけれど、三人にはそれぞれ、自殺する理由ってあったの？　たとえば遺書とか……」

「なかった。生きているって最高だと、三人とも我が世の春を謳歌していた」

我が世の春というのは斧乃木節で、あえて大袈裟に言っているのでしょうか……。揃って遺書のたぐいはなかったようですね。

「どころか、なぜ自分が首を吊ったのかわからないって、三人とも首を傾げていたそうだよ。鱗の痣がついた首を」

「……呪われたって自覚は？」

「それもなし。ないない尽くし。清廉潔白な自分が人から恨まれるはずもないと言わんばかりの態度らしい」

私にだけ優しいんでしょうか、斧乃木ちゃんは。

蛇切縄の呪いによって首を吊らされたかもしれない人達に、無意味に手厳しいです——しかし、自覚がないとなると、私のケースとはやや趣を異にしますね。

「もつとも、首吊りがあつた直後に、どの住人もすぐさま引越しているところを見ると、察するところはあるのかもね。ああ、でも、私のときは、ご立腹したお友達からじかに言われたんだっけ。『あんたに呪いをかけてやったわ』とか。てへへ、言われちゃったな——」

「笑つて話せてるじゃん。図太くなつたね。そのとき、そんなリアクションができていたら——もつと酷い目に遭つていたかな」

「はい。できた」

素描完了です。

下描きみたいなものですが、ペン入れの必要はないでしょう……、と言うか、そのための道具を持つてきていません。

我ながらなかなか悪くない出来映えですが、しかし、あくまで平面の絵としては、ですね……、現状の主目的には適わないと言いますか、私の手が勝手に、スケッチの中に蛇を描き込んでいるというようなことはありませんでした。

窓ガラスの透明感を出すことには成功しましたがけれど、しかし透明の蛇は、この絵の中には存在しません……、ふうむ。

まあ研修中……、修行中の身ですのでね。

いきなりすべてが上首尾に運ぶとも思っていないません……、私の画力不足なのか、それとも蛇の隠れかたが巧みなのか、ファーストアプローチは、まず失敗、と。

よしよし。

「失敗してよしよしとは、なかなかのガッツだね、撫公。感心したよ。じゃあ、セカンドアプローチはどうするの？」

「とりあえず被害者の真似をして、あのシャンデリアから首を吊ってみようかな」

「『例外のほうが多い――』」

「およそ突っ込みに使う技じゃない！」

冗談冗談！

後追い自殺なんてしませんって、しかも知らない方々の！

「冗談じゃ済まないよ。自殺の名所は、多くの人間が亡くなったことで、死を誘因するパワースポット化していることもあるからね。実際、ひとり目、ふたり目、三人目と、呪いの被害は肥大化している、お前のバストのように」

「比喻が柔らかいね」

「バストだけにね」

私が怯えないようにという配慮はありがたいですが、それでも笑えませんか……、私も年頃の女の子ですので、おっぱいジョークが嫌いなわけじゃないんですが、要するに、部屋の住人によ

る四人目の首吊りがあれば、今度こそ命が危ういということなのですから。

命……、落命、ならぬ吊命。

「死なないにしても、脳に酸素が一定以上の時間届かなければ、後遺症が残ることになるからね。なんて言うのかな……、練習を重ねれば絵がうまくなっていくように、この蛇切縄は、呪いを重ねることによって、住人に首を吊らせるのがうまくなりつつある」

「四人目の被害は絶対に阻止しなくちゃってことだね。でも、実際に首を吊るっていうのはないにしても、この私を蛇の餌にするっていうのは、ありだと思っただよ」

「巻きつく蛇の撒き餌に？　なんで？」

「ほら、私は一度蛇切縄に呪われているわけだし、耐性がついていると思っただよ。免疫って言うのかな」

「お前、アナフィラキシーショックを知らないのか？」

蜂で聞く奴ですけど、蛇毒でもそういうの、あるんですかね？　蛇切縄の毒は、吸血鬼にも効果的でしたけれど……。

「とにかく、死人が出る前に解決したいっていうのがクライアントの意向だから、お前はそれに従うんだ。お前自身の命を危険に晒すなんて、もってのほか」

「はい」

では、サードアプローチを閃きましょうか。

私はいったんスケッチブックの次のページをめくりました。

A家（居住歴三年）

父（アルファ） 母（発見者）  
娘

首吊りに使用したのはタオル。

B家（居住歴二カ月）

彼氏（発見者） 彼女（ブラボー）  
首吊りに使用したのは電気コード。

C家（居住歴三週間）

父 母（チャーリー）

息子（発見者）

首吊りに使用したのは荒縄。

スケッチブックの二ページ目に、いつも漫画のキャラ設定なんかでそうするように、現時点でわかっていることを箇条書きにしてみました——見習いの私には当事者のプライバシーを知る権限がないようで、臥煙さんが教えてくれた情報はほぼ、あつてないようなものですね。

ただ、わかっているようでいても、こうして書き出してみても、簡素なイラストを添えてみたりすると、新たに痛感することもあります。

私は『経験者』として、蛇切縄に首を絞められたのだとすれば、被害者のアルファさん、ブラボーさん、チャーリーさんはどれほど苦しかっただろうと、その痛みをリアルに想像することはできていましたが、それだけでは認識が足りませんでした……、被害者のご家族の、特に発見者の気持ちというものを、ちゃんと考えてはいませんでした。

特にC家……、母親が首を吊っている姿を発見し、救助することになった息子さんの気持ちは、いかばかりでしょう。個人情報保護の観点から、臥煙さんは年齢までは教えてくれませんでしたけれど、もしも小学生とかだったら、一生もののPTSDですよ。

中高生でも厳しいでしょう。

「私も最近は親に死ねって思うようになったけれど、そんな当たり前のこともその子は、もう思えなくなるんだよね」

「親に死ねって思うのは、そこまで当たり前のことじゃないけれどね……、まあ、今受けている仕打ちを鑑<sup>かんが</sup>みると、殺すって言い出さないだけ、まだ健全かな。反抗期突入おめでとう、撫公」  
あまり適切な倫理教育を受けたとはいいがたい私なのですが、しかし、その子のためにも、次の悲劇を起こしてはならないと、決意を新たにします——まあ、息子としか書いていないので、ひよつとしたら私よりも遥か年上の、三十代の息子なのかもしれませんが、しかしたとえそうでも、家族が首を吊るという経験が、平気な人がそうそういるわけがありません。

「でも、正直、もうちよつと個々の案件のあらましが欲しいところだけれどね。新人であるばかりか、いろいろやらかした私がまだまだ臥煙さんに信用されてないのはわかるけれど、それでも、戸籍謄本を提出してって言うてるわけじゃないんだから。忍野さんなんて、結構ずけずけ、根掘り葉掘り依頼者の事情を聞いてたそうだよ？」

「それはあくまで忍野のお兄ちゃんのやりかただからね。僕のお姉ちゃんは、人の話なんてぜんぜん聞かないよ。臥煙さんは、聞くまでもなく、知ってるし」

「ふうん……」

「知った上で、あえてそれを無視する手法もある。個人の事情を聞いちゃうと、情に流されて正しい対処が取れなくなるだけならまだしも、その事情に取り込まれてしまうケースもあるから



ね。木乃伊取りが木乃伊になることを避けるなら、怖い物知らずでいたほうが無難ってことさ」

「靈感がある人のほうが、却<sup>かえ</sup>って心霊スポットでは弱る、みたいな話？」

「そんな感じ——情報をできる限り欲するというのは、いかなるときも、いかなる相手でも、中立に立てる忍野のお兄ちゃんだからこそ歩める王道だよ。それを真似ようとして、鬼のお兄ちゃんはいつも失敗しているのさ」

失敗だっと思ってしているなら、教えてあげればいいのに……、でも、確かにあの人は、事情と情に流されがちですね。

「どういうタイプの専門家になりたいか、そういうヴィジョンを持っておくのも大切かもね。ちなみに、そうやってノートにあれこれ描きながらものを考えるのは、貝木のお兄ちゃんタイプだ」

「そうなの？」

「あんな不吉な顔して、絵心があるんだよ」

不吉さは画力に関係ないと思いますが……、しかしなるほど？　だからあのとき、あの詐欺師さんは、私の夢に理解を示してくれたという考えかたもできるのでしょうか？　ひょっとして、十代の頃は、漫画家を目指していたりして……。

「そら恐ろしくて、僕は貝木のお兄ちゃんには、そんな質問を投げかけたことはないけれど、案外、ありうるかも。詐欺の計画を描くっていうのは、言うならストーリーを描くことだからね。

取材を怠らず、想像力を巡らし、登場人物の台詞を用意し、絵図面を引く――お前を騙したときも、大体そんな感じだろ？」

「そうだね……、あの人が、私を……」

一瞬、うつかり懐かしく回想しそうになりましたけれど、よく考えたら、私が蛇切縄に全身を締めつけられる原因を作ったのは、まさにその詐欺師さんなのでした。

それも今更、ねちねちと蒸し返すつもりもありませんけれど、しかし、とすると疑念も過り<sup>すぎ</sup>ます。この蛇の巢も、もしかして貝木さんのコンゲームなのでは……？

「ありえるね。いい着眼点だ」

擁護しませんね。

お兄ちゃんって呼んでるのに。

「お前だってお兄ちゃんって呼んでた憧れの人をぶっ殺しかけただろ。曆お兄ちゃんのこと、貝木のお兄ちゃんのこと」

「私は貝木さんのことを、お兄ちゃんなんて呼ばないよ……？」

「でもまあ、あの詐欺師は、詐欺師であって殺人鬼じゃないからね……、ただ呪い殺すみたいなこと、するかどうか」

ですね。

住人に首を吊らせても、一銭の得にもなりません——保険金目当ての殺人（未遂）の可能性は、自殺じゃあ低そうですね。

「自殺でも下りる保険金もあるそうだけれど、この部屋で暮らした住人同士に関連性がないのに三連続ってというのは、異様だよな」

「三連続——」

数少ない情報に、ありましたね。

厳密な時期まではわかりませんが、居住歴は三年、二カ月、三週間——いつからこの部屋が蛇の巣と化したのかは不明ですけど、住み始めてから首吊りまでの期間が短くなっているような印象は受けますよね。

A家にしあって、呪いが一日で成就した可能性もありますので、確かなことは言えませんが、回を重ねるにつれて呪うのがうまくなっている傍証にはなりそうです。

四回目は死人が出るかも……。

私なんぞの落書きに、人の生死がかかってくるかと思うと、腕が震えます……、武者震いでなく。いやまあ、実際には、私がトチツたときのために斧乃木ちゃんがいてくれるわけですし、それでも駄目なら、臥煙さんがフォローしてくれる態勢は整っているのでしょうか……、それをアテにするのは違いますよね。

自ら首を吊ってみるというテストを封じられた以上、私は臥煙さんに暗示された通り、自分が被害者だった頃の経験に照らし合わせて、蛇の巣の仕組みを推測するしかありません。

蛇の道は蛇。

王道ではなく、蛇道を振り返りましょう。

そう、まずは私の住む町にやってきた詐欺師の貝木さんが、私の元友達に呪い——お呪いまじなを売って……。

「あれ？ でもそれ自体には効果はなかったんだっけ？ 呪いそのものが詐術だったんだから。じゃあ、貝木さんがこの件に噛んでいるってことは、ないんじゃないの？」

「いい着眼点だね」

この子、さつきと同じことを。

ヒントを与えないよう気を配っている試験官のようです——もしかして貝木さんと再会する展開になるのかとも思っていただけに拍子抜けですが、しかし、あの人が絡んでいないのなら、正直、そのほうがいいです。

肩書きが詐欺師ですから無理なお願いでしょうけれど、それでもお世話になったかたに、あんまり悪いことはしてほしくないですからね。

スケッチブックに『貝木さんⅡ無関係』と付け足して（その横に貝木さんのイラストを描き込んで）、私はページを一枚目に戻しました。

「ん。何。描き直すの？」

「じゃなくて、描き足そうと思って。実際に首を吊るのはなしでも、首を吊った私を、絵に描くのはありでしょ？ そうすれば、何かわかるかも」

「いい着眼点だね」

ヒントはくれなくてもいいので、台詞のヴァリエーションを増やしてください。

「ただし、描くのは僕にしておけ。お前の画力でお前の首吊りを描いたら、それが呪いになってしまう恐れがある。その点、僕なら既に死んでいるから、首を吊った程度では死なない」

「……いい着眼点だね」

友達が首を吊った絵なんて、あまり描きたくないんですけど……、でも、だからと言って無関係の第三者を描いてしまえばそれこそ呪いですし、ここは斧乃木ちゃんに甘えておきますか。

これくらい低いモチベーションで描けば、首吊りが実現することはないでしょうし……、ダウナーに描いたことで絵の中に、見えない蛇が現れてくれたらしめたものです。

「首が絞まってしめたものか。受ける」

「受けないでしょ」

「首吊りの蛇を釣る餌は、生き餌じゃなくてルアーってわけだね。注文をつけてもいいかな？ もがき苦しんでいる表情で描いてみて。残ってる片目が飛び出している感じで。それをアニメ版の版權絵にするから」

「その版權絵の賣<sup>せき</sup>でアニメ化が中止になるよ」

臨場感はなくなりますけれど、首吊りの斧乃木ちゃんは、閉眼状態の、穏やかな顔で描くことにしましょう。死んでいるかどうかわからないくらい……、いえ、死体ですから、もちろん死んでるんですけれど。

表情（無表情）はともかく、斧乃木ちゃんはもう、3Dプリンターにデータを入力できるくらい、あらゆるポーズをすべての角度から百万回くらい描いたので、ぶら下がっている姿も、さらさらっとすぐに描けちゃいます。それこそ目を閉じたままでも描けます。マキシ丈ワンピは、前のドロワーズスカートに比べて、格段に描きやすいですね。

描きながら考えます。

私が体験した蛇切縄は、言うなら暴走状態でした……、本来効果がなかったはずのお呪いを、北白蛇神社という吹きだまりで、私が顕現させてしまったようなものです。

そんな愚かな私の轍を、アルファさんとブラボーさんとチャーリーさんが、三連続で踏んだとはとても思えません……。つまり、正当なる蛇切縄の呪いが、この部屋で発動しているのだと思うと、やはりその理由が気になります。

「A家以前の住人は、どうなの？ Z家のズールーさんは、首を吊ってないんだよね？」

「うん。前の住人も、その前の住人も、円満無事に引っ越していったそうだ」

「……ふうん」

築年数の読めないデザインのマンションでしたので、ともするとA家がこの部屋最初の住人なのではとも思っていました、だからそんな返事が戻ってきたのは意外でした。

つまりこの部屋には、蛇の巣だった頃と、そうでなかった頃があるわけです……、んーつと？  
じゃあ、A家のアルファさんが、蛇に恨まれるようなことをして？ その呪いが部屋に残存してしまつて、次なる住人のB家、C家にも呪いが——いえ、一見説得力のある仮説に見えて、呪いの速度が段階的に上昇していることへの説明がありませんね。

起きている出来事だけを先入観なく捉えたと、A家よりもB家のほうが、B家よりもC家のほうが、強く呪われているように感じます——待ってくださいよ？

逆に言うと、なぜアルファさん、ブラボーさん、チャーリーさん以外のかたがたは、首を吊つていないのでしょうか？ 子供が親の首吊りの発見者になったことがどれだけショッキングだったかを考えるなら、同時に、なぜ、子供の首吊りを親が発見するという配役ではなかったのかも、抜け目なく考えるべきです。

ここが真実呪いの部屋で、蛇の巣であるならば、対象は問答無用であるべきです——家族関係か同棲関係かはさておいても、被害者の属性が『父』『彼女』『母』と散っているのは、やや疑問で、すつきりしないものがあります。

呪いの動機が、『誰でもよかった』からと言うより、『わざと散らした』かのような、違和感を覚えます。音楽プレイヤーのランダム再生は、ランダムっぽく聞こえるように、故意に曲順を

散らしているのだという都市伝説を、ネットで見たことがありますけれど……。

「いい着眼点だね。だけど、『ネットで見た』って言うと、ただそれだけで信憑性を懐疑的に捉えられる不本意な事態も起こりうるから、念のためにこう言い直したほうがいい。『ウェブで確認したところ』」

おおお。

ナイス添削です。

急にIT部門みたいになりました。

「更に説得力を増したいなら、『確度は不明ですが、複数の情報源をデータマイニングした結果、現時点で推測可能な事実があります』とさえいい」

「すごい……、すごいけどただネットサーフィンしただけだ……」

「半信半疑の噂話こそ、怪異譚の出所でもあるから、実のところ信憑性は必須条件ではないんだけれど、確かに、この部屋が本当に呪われた蛇の巣なら、一家全員、もしくはカップル両者が、こぞつて首を吊ってなきゃ異常だよな」

異常まで言ったら、まるで首を吊ってほしかったみたいに聞こえますけれど……、首吊りが失敗したのは発見者がいたからで、その発見者は、なぜ呪いの部屋でも呪われなかったのか。

呪いが一家につき先着一名ってことは、あるんでしょうか？ スーパーの特売じゃないんですから……。



「……はい。できた。題して『首を吊る童女』。ロープはベーシックに、ビニールテープにしてみたよ」

「図にすると、思ったよりえぐいね。穏やかな顔が、本当に死んでいるみたいだ。本当に死んでいるんだけど。……ビニールテープって、ベーシックかな？ 日用品を使うことで、より印象がグルーサムに……、一応確認させてもらうけれど、これ、僕に対する悪意とかないよね？」

「ないないないない。斧乃木ちゃんのこと、好きだよ」

一瞬センチティブなところを見せた斧乃木ちゃんを、慌ててフオローする私です——うっかり画力を発揮してしまいました。モチベーションは低かったつもりですけど、やっぱり描き始めると、利き手が勝手に動いちゃいますね。

「もしも僕に何かあるんだったらちゃんと言ってね？ 直せるから」

「だから何もなくて。愛しくない、斧乃木ちゃんには」

ここまで来ると、懷かれていると言うより取り憑かれているようですね……、この部屋に蛇が取り憑いているように——本当に取り憑いているんでしょうか？

『首を吊る童女』の出来自体は、満足のいくものになりましたけれど、しかしやはり心靈写真のように、見えない蛇が写り込むということはありません——このフォースアップローチも、どうやら空振りのようです。

三振ならぬ四振です。

何もないと言っなら、ここまで何もないと、ただの偶然なんじゃないかという気もしてきます……、呪いじゃないからこそ、専門家の視点からは不自然な箇所が散見するのでは？

それぞれの首吊りに関連性はなく、私には伏せられている個々の事情で、独立して自死を図ったと考えたときに、不自然な点はどのくらいあるでしょうか……、それなら一家心中にならなかったことに、とりあえずの説明がつくようにも感じます。

「被害者三名に共通する首回りの鱗痕は？」

「あ、そっか。それがあつた——でも、見間違いつてこともあるんじゃないの？　そういう風に見ようと思えば、そう見えるつて言うか……、ロールシャッハテストみたいな」

言いながら、我田引水だなど自分でも思いました。私のような粗忽者ならばあるかもしれませんけれど、臥煙さんのような大物が噛んでいるのに、そんな初歩的なボーンヘッドがあるとしても考えられません。

一方で、この件に蛇切縄が、文字通り絡んでいるという直接的な証拠は、その首元の痣しかないのも事実です。

北白蛇神社をいただく山を含めた、私の住む町ならばまだしも、こんな首都に、蛇がうじゃうじゃいるようには到底見受けられませんし……。

「蛇取り名人としてのお前の勘か。そりゃ信じるに足るね」

「……この案件が臥煙さんの、私へのテストだつてことに文句を言おうつてわけじゃないんだけれど、ひよつとして、これが意地悪クイズだつて説はない？」

「意地悪クイズ？」

「怪異現象じゃありませんでしたつてというのが正解のケース。学校の試験でも、『①から④の中から正しいものをすべて選びなさい』なんて問いで、①④が、全部間違いだつて引っかけ問題があるでしょう？」

「なるほど、言われてみれば、いかにも臥煙さんの仕掛けそうな意地悪ではある。いい着眼点だね」

ひよつとして、それ、眼帯キャラとしてのフレーズにするつもりで、執拗に繰り返しているんでしょうか……。

だとしたらいい着眼点じゃないですけど。

「決してはぐらかしているわけではなく、新しいフレーズでもなく、そう言った目利きも専門家には必要だからね。なんでもかんでも怪異現象として取り扱うのは危険である以上に、無責任でもある」

忍野さんがいつか仰っていた、すべてを怪異のせいにするべきじゃないみたいな言葉は、そういう意味も含んでいたのでしょうか。

ならば早計な判断もできません。

出題者の意図を深読みするような姿勢は、生意気で好ましくないでしょうけれど、私も人生がかかっていますので……、ここで誤答すれば、仕事を失い、家を追い出され、路頭に迷う羽目になります。

正答した場合と雲泥の差です。

……これ以上被害者を出さないためにとか、発見者のPTSDを思えばとか、それっぽいことを言っても、結局のところ卒業後の住居を確保したいという私利私欲が私の原動力なのだと思うと、落ち込みますね。

「それでいいんだよ。お前はもう神様じゃないんだから。鬼のお兄ちゃん、略して鬼いちゃんのふた心ない無私の献身は、そりゃあご立派だけれど、全員があだつたら困るんだよ。とどのつまり、鬼いちゃんのあいつた姿勢を、臥煙さんは落第と判定したわけだし」

「落第したんだ」

「今のところはね。大学を卒業する頃には、あの献身も、もうちよつと大人になってるんじゃないかな——まあ、あの鬼いちゃんこそ、まず家を出るべきなんだけれどね」

「それは言えてる」

そうすれば、私も阿良々木家に転がり込みやすくなるのに——と、これは冗談。

「だからお前は、勝手なくらいでいいんだよ。臥煙さんの意図を読んでもいいし、臥煙さんの意図を汲まなくてもいい。クライアントの意向に従えとは言ったけれど、究極的にはそれもどうで

もいい」

「そ、それは言い過ぎじゃないかな……」

言われるまでもなく、学校に行かなかつたり家を出ようとしたり、現時点で私が相当勝手気ままに振る舞っていることは承知していますけれど、それでも『死人を出したくない』という、マシヨンオーナーの人道的な意向まで無視することは、さすがにできません。

「人道的ねえ。それもあることは否定しないけれど、オーナーという立場を考えると、必ずしもそれだけじゃないだろうから、僕はいいと思うけどなあ」

「? どういうこと?」

「どういうことだと思う?」

なぜ私は斧乃木ちゃんと、恋人同士みたいなやり取りを……、しかも私が男役です。壁ドンしてみましょうか、クチナワさんバージョンで。

「どういうことだって訊いてんのはこっちなんだよ、ああん!？」

……DVですね。

くわばらくわばら。

「マシヨンのオーナーは、部屋で死人が出るととても困るんだよ。事故物件になるから」と、斧乃木ちゃんと。

事故物件……、ああ、最初に言っていましたね、そんなこと。首を吊った被害者がお亡くなりになつていたら、事故物件になつていたとか……。

「事故物件ってわかる？」

馬鹿にし過ぎでしょ。千石撫子を。

知ってますよ、何でもは知らない私でも。

自殺者に限らず、変死者が出た不動産には、マンションであれ一戸建てであれ、賃貸であれ販売であれ、告知義務があるんですよね？　ここでは以前、これこれこういう事件が起きましたという但し書きを、隠し立てすることなくしなくちゃいけないから、不動産が捌きにくくなるんだとか……。

この部屋が蛇の巣だなんて告知義務はもちろんありませんが、おかしい感じで人が死んだら、どうあれオーナーはその事実を記載しなければなりません。

いや、まあ、だから死人を出さないでくれと、それだけの理由で、専門家の臥煙さんに解決を依頼したのだとは思いませんけれど、商取引なのですから、そういう単純な損得みたいな計算も、そりゃありますよね。

「つまり、A家のアルファさんが首を吊っても、命は助かったから、B家の同棲カップルはそれを知らずに入居したわけだし、同じくB家のブラボーさんも首を吊っても、やはり一命を取りとめたから、C家の親子はそれを知らずに入居した……って流れなんだね」

「そう。アルファが落命していれば、その後の悲劇はなかったかもしれない」

すごくシビアなことを言いますね。でも、確かに、前の入居者の自殺の成功を告知されていれば、カップルや一家が入居しようとしたかどうかはなはだ怪しいです……。いくらこの部屋が、当該デザイナーズマンション内で一番いい部屋だからと言って、蛇の巣だとは知らなくとも、自殺者が出ていると聞かされていたら――聞かされていたら？

「……………」

「ん？ どうしたの？ 撫公。昔みたいに俯いて。前髪がないから、ぜんぜん顔は隠れてないよ？ 人間に対する理解の浅さを突きつけられた自分を恥じているの？」

「ううん、そうじゃなくて……。人間に対する理解の浅さを突きつけられてたんだ、私」

理解の浅さよりも、知らないうちにそんな結構なものを突きつけられていたことのほうがショックですけど、それは置いておいて。

「わかったかもしれない、犯人。蛇の呪いの仕掛け人」

「へえ？ じゃ、呪いはあったでいいんだ。臥煙さんの意地悪クイズじゃなくて。教えてよ、犯人は誰？」

変わらぬ棒読みではありますが、しかし興味深そうに、斧乃木ちゃんに合いの手を入れられて、

「意地悪クイズだよ。ううん……。極悪かも」

と、私は答えます。

「犯人は——私だよ」

「……ああ。いつもの奴ね？」

「いつもの奴って言わないで」



後日談と言うか、今回のオチです。

犯人は私でした。

と言つても、ブラック羽川さんや苛虎さん、忍野扇さんのような、いつもの奴ではありません――まして、クチナワさんバージョンでもありません、ああん？ 四人の撫子との対決は、やり尽くしましたよね？

それでも犯人は私なのです。

より正確に言つと、犯人は私であり、あなたであり、彼であり、彼女であり、人々であり、全人類でした――いえ、大仰なレトリックおおきやうを駆使して、論点をずらそうとしているわけじゃ、決してなくて……、こうしている今も、世界では戦争で多くの命が失われているというのに、こんな一室の事件を解決することにかほどの意味があるのか――なんて言い出しません。

言いたいのは、衣食住こそ、すべての人間に通じる営みであるということです……、奇しくも斧乃木ちゃんは、阿良々木家から出奔するきっかけとなった事件で、そのうち特に『衣』について、考察する機会を得たそうですけれど……、こちらのケースでは特に『住』なのです。

居候でもないのに斧乃木ちゃん同様、家から追い出される運びになっっている私が、こうして専門家稼業に手を出しているのは私利私欲——つまり住居を得るためなのですが、しかし、雨風がしのげればどこでもいいというわけにはいきません。

譲れない最低条件は、そりやありますし、たとえ贅沢だと誹られようとも、叶えたい希望もあります。夢を追うならストイックに鍵のかからない築八十年風呂なし四畳半に住めと言われましても——斧乃木ちゃんに手厳しく指摘された通り、シェアハウスでの共同生活すら、私には無理でしょう。

実際にはね。

漫画家として売れっ子になって、将来はお城で暮らしたいとまでは言いませんが、居心地のいい家に住みたいという欲はあります——今のところ、千石家がそういう家じゃないことが残念でなりません、それはそれとして。

そんな欲望と、予算との折り合いがつけば理想的なのですが、現実には『もっと家賃が低ければな』と思うことばかりです。奇跡的に折り合う部屋があつたとしても、連絡をしたときにはもう入居者が決まっていたりとか——で。

格安での斡旋を期待した私みたいに、『もっと家賃が低ければな』と思った誰かが、どこかにいたとして、どこにでもいたとして……、理想そのもののお部屋に出会つたとして、私と同じように、がっくり落胆したとしましょう。

でも。

私と違って、そこで諦めなかったとしたら？

お眼鏡に適った不動産の家賃を下げる方法を思いつき、ないしは、その不動産を空き物件にするための手段を実行したとしたら？

……変死者が出たことを明記する義務のある、いわゆる事故物件に、好んで住みたがる人も一定数います。なぜなら、多くの人が敬遠するがゆえに、オーナーは多くの場合、家賃を下げざるを得なくなるからです。

つまり、裏を返せば、事故物件化さえすれば、本来手の届かないような理想のお部屋でも、価格が下落するのです。

「蛇切縄は放たれたけれど、ここが蛇の巣だったわけじゃない——呪われはしたけれど、被害者は恨まれていたわけじゃない。ただ、この部屋を心霊スポットにしたかった誰かがいたんだよ。この部屋で変死者が出てほしかった誰かが」

クライアントと、まるで真逆の意向を持つ誰かが、あろうことか蛇切縄の呪いを利用した——そんなことのために。

現代アート美術館のごとき外装は、私の趣味とは言えませんが、内装のレベルは認めざるを得ませんし、ここが人気物件だと言われれば頷きます——何が何でも住みたいという入居希望者がいても不思議ではないでしょう。

気持ち悪いだけで。

それで一家につきひとりしか首を吊っていない疑問点にも説明がつかます——変死者はひとり出れば十分なわけですから。

怪異譚を生むためにも、目撃者は必要だったのです。

幸いなことに、今のところその試みはすべて失敗しています……、でも、呪いかたは回を重ねるにつれて上達していますし、数カ月以上に亘る、三回連続の失敗を受けて、母数を増やすために、いつそのこと次は家族全員に首を吊らせようなんて暴挙に出ないとも限りません。

止めなければ、死人が出るまで続きます。

心霊スポットじゃないからこそ、心霊スポットになるまで、あの部屋には蛇が送られ続けるのです、次々と。

「ふむ。なでっこの見解は受け止めた。その推理が正解かどうか、おねーさんがどういう感想を持ったかはさておくとして、じゃあ、恨んでもない住人を呪える恐るべき犯人に、どう対策を打つ？　そこまで考えて初めてプロだよ」

以上のようなことをたどたく報告した私に、臥煙さんはそう言いました——提出した答に對してまったく別の新しいクリア条件を出してきたご両親とは違って、これはまあ、正当なトリアールと言えましょう。

問題点を提起した以上、解決策も提示しなければ——ええと。

「犯人は入居希望者なんですから、A家が引越したあと、B家が引越したあとに、それぞれ、オーナーさんなのか、仲介業者さんなのかに、問い合わせをしているんじゃないのかな……、お財布と折り合う希望価格まで家賃が下がってないかどうか」

その逆算で、容疑者をひとりにまで特定できるとは思いませんけれど、それでもかなり人数は絞れるんじゃないでしょうか。

手間にはなるかもしれませんが、あとは絞った容疑者をひとりずつ面談すれば……、たぶん、こんな大胆不敵な犯行、バレると思ってやってないはずですから、問い詰めればすぐボロを出すことでしょう。

「ふむふむ。まずはそんなところだろう、及第点だね。他のすべての合理的な疑いを削除できているとは言いがたいが、スケッチブックの中に蛇が一匹も現れなかったことを重視する自信を大切にしたいから、オマケして合格にしよう。誉めてあげるよ、よしよし」

頭を撫でられました、撫子だけに。

髪に触られるの、あんまり好きじゃないんですけど……、このときはなぜか、気恥ずかしくこそありましたけれど、嫌な感じはしませんでした。

臥煙さんの、こういう簡単に懐に入っちゃうところが、元締めであり、先輩なのでしょうか。

「クライアントのオーナーにはそう伝えておこう。たぶん、当該人物はあっさり見つかるはずだ……、ただし、その入居希望者は呪いを発した張本人ではないだろうがね」

「え？　そうなんですか？」

「入居希望者は入居希望者で、オーナー同様のクライアントだということだよ——残酷な呪いをプロフェッショナルに外部委託したのさ。そうでないと、恨んでもない人間を呪うなんて大それた真似は、普通できない」

「じゃ、じゃあ……、真の黒幕は貝木さん……、だったり？」

「否。なでっこの推察通り、あの不肖の後輩なら、仕掛ける蛇切縄は偽物だ——玩具の蛇でビビらず手法ではなく、本物の毒蛇を一般家庭に投げ込むなんて外法は、およそ詐欺師の技じゃない。悩みをほぐす専門家の真逆、欲を満たす洗人あらうんどの仕業だ」

「あらうんど——」

どこかで聞いたその単語を、どこで聞いたのだったのか思い出そうとしているうちに、臥煙ふい煙さんは改まった口調で、

「欲は誰でも持つ、そのこと自体は責められない。けれど、その欲を叶える蛇は、責めなければならぬ——なでっこ。約束通り、卒業後のアパートは紹介してあげる……、多少の条件は呑んであげられると思うよ。どうぞ欲をかいてくれ。おねーさんには一言言はあっても二言はない。ただし、この事件が完全には解決していない以上、もうちょっとだけ付き合ってもらおうよ」

そう言いました。

「やってくれるかな、蛇退治。蛇の巣ならぬ蛇の総本山を探し出し、蛇の親玉をとつ捕まえる仕事を、手伝ってほしい」

「……それが私にできることなら」

やらせてください。

と、なんと私は即答しました——こちらからお願いしました。それが自分の声だとは信じられないくらいの積極性は、やはり私自身、思うところがあったからでしょう。

私自身を思うところがあつたからでしょう。

あまりにも自分本位で、他者の迷惑を顧みない呪いの動機に、誰あろう、私自身を見てしまつたからでしょう——犯人は私。

呪い呪われし千石撫子にも、とうとう挑むときが来たのかもしれないです。

あの人達が現在挑戦中の、いつも以上の奴を。

なればこそ、そんな見たくもない私からの依頼を抜け抜けと引き受けた、総本山の蛇の親玉——『あらうんど』を、見て見ぬ振りには、絶対にできないのです。

「言つてください、臥煙さん。私は何をすればいいんですか」

「ナイスな心構えだ。安心したまえ、おねーさんはいたいけななでつこに過重労働をさせるつもりなんてない。笑顔の絶えない職場環境において、やってもらうのはほんの軽作業だ。まずは何も訊かずに、かつてきみを呪つた昔のお友達に会つて、旧交を温めてきて頂戴な」

「ほほう」

わあ、かるーい。軽業くらいかるーい。

どういう所以あつての振りなのか謎めいていますが、それじゃあ、まあ……、またもや呪われた  
たときのために、神原さんのところへ、コスチュームでも借りに行きますかね。

トゥー・ヘヴィ・オア・ノット・トゥ・ヘビィ。

生きる蛇か、死ぬ蛇か！



## あとがき

創作者と創作物は別であるという論旨に対しては、賛否両論あるところですが、シンプルかつ論理的に考えるなら、少なくとも創作者と創作物がまるで一緒、完璧に一致するというようなことはあり得ず、『創作物は創作者の一部』というのが、正解のように思えます。しかしおかしなお話、その一部が全体を凌駕する例もあり、しかも多々あり、それが創作の醍醐味であるとも言えそうです。『創作者が創作物の一部』って感じてでしょうか？ 構成要素であることは間違いないとも、その割合と、果たす役割はまちまちなのは。となると、もしも創作者が、この創作物はプロットとはまるで違う形に結実したと所感を述べれば、イコールで失敗作ということになるのかと言えさにあらず、失敗ではあっても、失敗作とは限らないのではないのでしょうか。『こんなつもりじゃなかった』という言い訳が、創作物に対してどれくらい通じるかもいろいろ意見を募れそうですけれど、当初の計画と比べてよりよくなることも、より悪くなることと同様くらいにはあるのではないのでしょうか。もちろん、よかろうと悪かろうと、それが自分の一部であるがゆえに、創作者の達成感はずいぶん満たされないかもしれませんけれど、まあその点を指してこそ、創作者と創作物は別なのではないか。親はなくても子は育つ。

以上の考察とはまったく関係ありませんけれど、元々本書は、阿良々木くんと斧乃木ちゃんが、大学一年生の夏休みを利用して、魔界に冒険に行くというあらすじのお話でした。それがプロット段階のことで、いざ書き始め、こうして書き終わってみると、それとはちよつと違う内容になってしまいましたけれど、僕としては不満は一切ないです。逆に、最初から綿密に計画を立案していたらこうはならなかっただろうと思うと、そっちのほうが怖かったりしますかね。後半の千石撫子のストーリーラインも、パートナーが斧乃木ちゃんなので、結果死体人形尽くしの一冊に仕上がったことも予想外なのですが、僕に限って言うと、計画通りに書けた小説は一冊もないです。にもかかわらず、次の小説が百冊目らしいですよ？　ここまで書き続けられたことが既に予想外なので、計画通りにならなくて本当によかったと言うしかありませんとも。そんな感じで本書は百パーセント趣味で書かれた<sup>っくもかみ</sup>九十九神、『余物語』、『第四話　よつぎバディ』と『第五話　よつぎシャドウ』でした。

ご覧いただいた通り表紙は斧乃木余接ちゃんのニューファッションヴァージョンです。VOF ANさん、ありがとうございます。何気にトップクラスの表紙登場率で、いつの間にかすっかりメインキャラクターになりましたね。モンスターシーズンもこれで後半になりましたので、これから先の三冊もよろしく願います。無計画な計画に、お付き合いいただければ。

初 出

本作品は、書き下ろしです。

著者：西尾維新（にしおいしん）

1981年生まれ。第23回メフィスト賞受賞作『クビキリサイクル』

（講談社ノベルス）で2002年デビュー。同作に始まる「戯言シリーざれごとズ」、初のアニメ化作品となった『化物語』（講談社BOX）に始まる〈物語〉シリーズなど、著作多数。

Illustration : VOFAN (ヴォーフアン)

1980年生まれ。代表作に詩画集『Colorful Dreams』シリーズ（台湾・全力出版）がある。台湾版『ファミ通』で表紙を担当。2005年冬『ファウスト Vol.6』（講談社）で日本デビュー。2006年より本作〈物語〉シリーズのイラストを担当。

協力／全力出版

本作品は、二〇一九年四月、小社より講談社BOXとして刊行されたものを電子書籍化したものです。

◎ 本電子書籍内の外部リンクに関して

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先のwebサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。

アマリモノガタリ

## 余物語

二〇一九年四月一日発行

著者…西尾維新  
にしお いしん

©NISIOISIN 2019

発行者 渡瀬昌彦

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二

〒112-8001

◎本電子書籍は、購入者個人の閲覧の目的のためにのみ、ファイルの閲覧が許諾されています。私的利用の範囲をこえる行為は著作権法上、禁じられています。

19A0401E

01